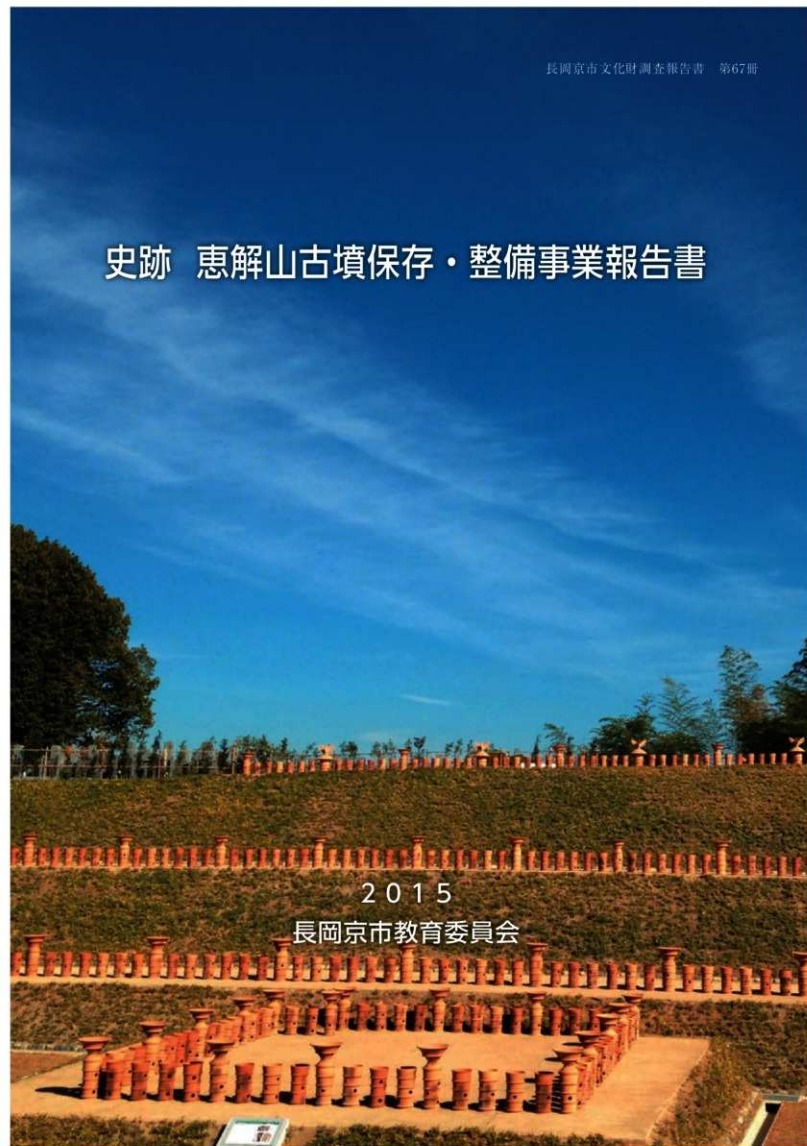


# 史跡 恵解山古墳保存・整備事業報告書

2015

長岡京市教育委員会



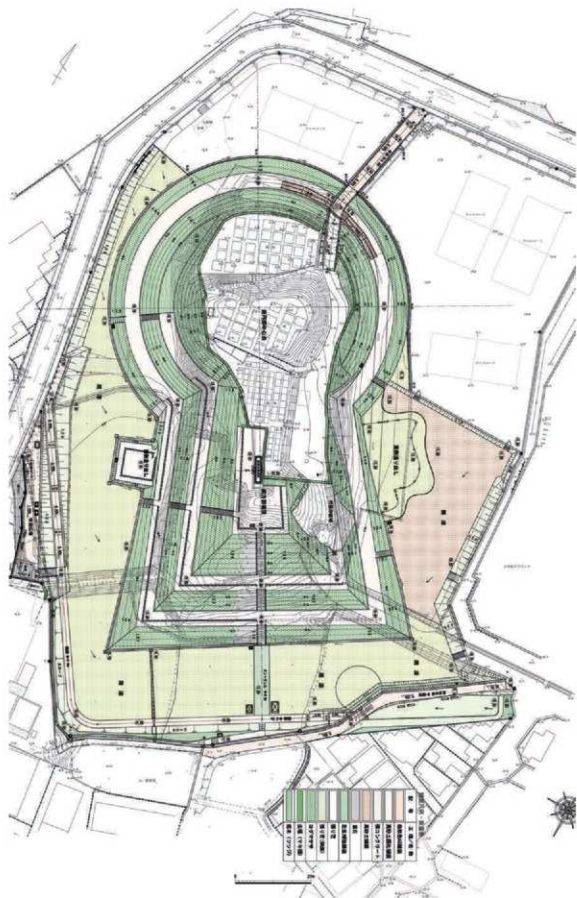
# 史跡 恵解山古墳保存・整備事業報告書

2015

長岡京市教育委員会



平成 19 (2007) 年 惠解山古墳全景航空写真 (整備前)



保存・整備計画平面図 (1/1000)





(1) 保存整備工事完成バス（南西から）



(2) 前方面の整備状況（南東から）



平成 26 (2014) 年 惠解山古墳全景航空写真 (整備後)

## 序 文

長岡京市は京都府南西部にあり、西山の緑がはぐくむ豊かな清水と、山陰・山陽・東海・北陸をつなぐ交通網により栄えてきました。市内には、旧石器時代からの歴史をつづる遺跡や歴史的建造物、貴重な遺物や古文書、また古くから受け継がれてきた風習や民具などが残されています。

長岡京市内には、200基を超える古墳が存在していますが、恵解山古墳は、その規模や鉄製品の出土量などから、乙訓地域を代表する古墳であるといえます。本書は、この恵解山古墳を後世に伝え、有効的に活用するために実施した保存・整備事業についてまとめたものです。

長岡京市南部にある史跡恵解山古墳には、小・中学校や高等学校などの教育施設が隣接し、古代都城長岡京の实在を立証した中山修一氏の記念館、西国街道沿いの民家を保存した神足ふれあい町家などの文化施設も近くにあり、さらに、平安時代創建と伝える勝龍寺、山崎合戦や細川ガラシャ関連で名高い勝龍寺城跡やその外郭施設の土塁・空堀を表現した神足公園などの史跡もあります。阪急西山天王山駅とJR長岡京駅があり、交通の大変至便なところでは、

このように、恵解山古墳周辺は、長岡京市南部の文化教育ゾーンとして、ますますの発展が期待される場所です。市民と共に考え、協力いただいでここに完成した史跡恵解山古墳公園は、その中核的役割を担っていくに違いありません。

最後になりましたが、恵解山古墳の保存整備事業に多大なご理解、ご協力、ご指導いただきました関係各機関及び協力者に心から感謝の意を表します。この古墳公園が、「緑豊かな 人の集う 史跡公園」としてご活用いただければ幸いです。

平成27年3月

長岡京市教育委員会  
教育長 山本和紀



## 例 言

- 1 本報告は、「国史跡 惠解山古墳保存・整備事業」に関するものである。
- 2 当事業は、「史跡惠解山古墳 地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業」の国宝重要文化財等保存整備費の国庫補助事業として長岡京市教育委員会が実施した。
- 3 当事業は、「基本構想検討会（平成14～15年度）」「基本計画策定委員会（平成16～17年度）」「保存・整備委員会（平成18～25年度）」「基本計画策定委員会専門部会（平成17年度）」「保存・整備委員会専門部会（平成20～25年度）」の指導のもと実施した（注1）。平成15年度の基本構想策定、平成17年度の基本計画策定、平成20年度の基本計画見直し、平成22年度の基本設計策定、平成23年度の実施設計策定を経て、平成23年度に工事に着手し、平成26年度に工事を完了した。設計及び工事については、教育部生涯学習課が事業を、建設交通部公園緑地課が工事を担当した（注2）。そして、平成26年10月26日に、惠解山古墳公園として開園した。本報告では以上の経過のうち、保存整備工事に関する内容および、工事に伴う文化財調査に重きを置いた。
- 4 平成16年～17年度には、基本計画庁内検討委員会を置いた。構成は以下のとおり。  
会長 教員委員会 小幡浩也 教育次長、副会長 教育委員会 生涯学習課 鈴木田栄 課長（平成16年度）、西小路清文 課長（平成17年度）  
企画部政策推進課 辻井仁史 課長、環境経済部 環境政策推進課 長谷川貢 課長補佐、環境経済部商工観光課 林利夫 課長、建設部都市計画課 志水忠弘 係長、建設部都市管理課 八木篤己 主査、建設部土木課 山内好 主幹、教育委員会総務課 上村敏雄 課長補佐（平成16年度）、八木和史 課長補佐（平成17年度）
- 5 保存整備工事は、「その1」から「その8」に分けて実施した。
- 6 当事業は、以下の業者の協力を得た。

基本構想および基本計画	株式会社 総合計画機構
基本設計と実施設計および施工管理	株式会社 キタイ設計
保存整備工事その1の工事請負	有限会社 丁花園
保存整備工事その2の工事請負	鴻池・山品特定建設工事共同企業体
保存整備工事その3の工事請負	有限会社 五島電気
保存整備工事その4の工事請負	有限会社 福島晴芳園
保存整備工事その5の工事請負	有限会社 永原造園
保存整備工事その6の工事請負	有限会社 植幸田中造園
保存整備工事その7の工事請負	橋井電気商会
保存整備工事その8の工事請負	有限会社 植幸田中造園
工事関係業者	

- 説明板・解説板などサイン関係 プロジェクト岡見
- 植輪模型と地形模型作製 岩尾磁器工業株式会社
- 墳丘模型作製 アダビス
- 鉄製武器類類納模型作製 フラワー企画

また、整備計画の基礎資料として、株式会社柳土木設計事務所が、現状地形測量を実施した。墳形復元などの基礎資料を得る目的で、財団法人（現 公益財団法人）長岡京市埋蔵文化財センターが範囲確認調査および保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施した。その成果については、「長岡京市文化財調査報告書」第62冊（2012年）に掲載している。

- 7 保存整備工事に伴う文化財調査は、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターと文化財サービス株式会社の協力を得た。出土土輪の復元は、花園大学考古学研究室の協力を得た。
- 8 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」[長岡京市史]資料編一(1991年)による。
- 9 本書掲載の土層名標記は、基本的に「新版標準土色帳」(1997年)によったが、記号番号の無いものは、土層観察者の主観の色調名で表した。
- 10 本書の執筆は、第9章で「国史跡 惠解山古墳保存・整備委員会」中尾芳治委員長が執筆し、他を教育委員会教育部生涯学習課文化財係専門員岩崎誠が執筆した。
- 11 保存整備基本構想策定から本書作成までに、多くの方々および機関の協力を得た。

文化庁、奈良国立文化財研究所、京都府教育委員会、乙訓教育局、京都府乙訓土木事務所、京都府立総合資料館、京都府立山城郷土資料館、京都市文化観光局文化財保護課、向日市教育委員会、大山崎町教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、財団法人（現 公益財団法人）京都市埋蔵文化財研究所、乙訓の首長懇談会、NPO法人長岡京市ふるさとガイドの会、高槻市教育委員会、今城塚古代歴史館、八尾市教育委員会、八尾市立埋蔵文化財センター、公益財団法人八尾市文化財調査研究会、豊中市教育委員会、桜井市教育委員会、公益財団法人桜井市埋蔵文化財センター、財団法人元興寺文化財研究所、岐阜市教育委員会、三原町教育委員会、勝竜寺自治会、勝竜寺農家組合、勝竜寺墓地管理委員会、久貝自治会、久貝農家組合、社会人テニスサークル、グラウンドゴルフサークル、長岡第三中学校、長岡第八小学校、立命館中学校、高田クリスタルミュージアム、惠解山古墳を愛する人

浅野啓介、安藤愛、泉拓良、伊藤孝、植村善博、内田和伸、浦園佳、榎本剛、大上博之、小川初吾、小田桐淳、小野健吉、鐘ヶ江一郎、岸岡貴英、木村泰彦、金宇大、金鏡味、小林美土里、国武貞克、佐藤陽子、杉原和雄、高田雅介、坪井清足、富所弘樹、中井佐智子、中井均、仲井陽子、欄宜田佳男、橋本清一、林正憲、林田信子、原秀樹、肥後弘幸、福永伸哉、藤井整、藤原敬、細川康晴、水野正好、森下祐一、山口博、山下信一郎、山口睦美、和田晴吾

上記以外にも、多くの方々や機関の協力を得た。明記できなかったことを詫言るとともに、心から感謝したい。

- (注1) 委員名は19ページに明記した。各委員会の事務局は生涯学習課で、平成14～21年度に次の職員が担当した。
- 村上健三課長（平成14年度）、鈴木田栄主幹（平成14～16年度）、西小路清文課長（平成17～18年度）、大江隆一課長（平成19～21年度）、中尾秀正、岡喜多（平成14・15年度）、高野翔一（平成15～19年度）、宇都宮平（平成16～21年度）、中島晋夫（平成18～20年度）、山本輝雄（平成21年度）、能勢忠太（平成21年度）
- (注2) 平成22年度（基本設計策定）からの事業・工事では、次の職員が担当した。
- 建設部都市整備課（平成22年度）八木伸明次長、公園緑地係 向井善夫、八木篤己  
建設部公園緑地課（平成23年度）八木伸明次長、公園緑地係 向井善夫、下澤和道  
建設交通部公園緑地課（平成24～26年度）小山博之課長、公園緑地係 向井善夫、山本清（平成25年度）、松永勇気  
教育委員会生涯学習課（平成22～26年度）中尾秀正課長、文化財係 清水徹課長補佐（平成22年度）、岡喜多主幹（平成23～25年度）、載内豊課長補佐（平成26年度）、藤井香世子（平成22～24年度）、能勢忠太（平成22年度）、井手竜太（平成23年度）、宇都宮平（平成22年度）、山本輝雄（平成22年度）、樋口智佳（平成25～26年度）、福家恭（平成24～26年度）、岩崎誠



## 本 文 目 次

第1章 位置と環境 .....	1
第1節 地理的位置と立地環境 .....	1
第2節 惠解山古墳周辺遺跡と歴史変遷 .....	3
1 旧石器から弥生時代 .....	3
2 飛鳥から鎌倉時代 .....	3
3 室町時代 .....	3
4 江戸時代 .....	4
5 近代から現代 .....	5
6 長岡京期 .....	8
7 古墳時代 .....	8
第2章 史跡指定にいたる経過 .....	14
第3章 保存・整備事業の経過 .....	18
第1節 保存・整備構想から実施設計策定 .....	18
第2節 保存・整備工事内容 .....	28
第4章 保存・整備工事に伴う埋蔵文化財調査 .....	29
第1節 整備工事に伴う埋蔵文化財調査位置 .....	29
第2節 検出遺構と土層 .....	31
1 崖面調査（B～J地区の調査） .....	31
2 西堤撤去に伴う調査 .....	39
3 東堤撤去ともたれ擁壁撤去に伴う調査（L・M地区の調査） .....	40
4 前方部確認調査（南1～3、前面1～6の調査） .....	43
5 嘉参道重力擁壁設置工に伴う調査（K地区の調査） .....	44
6 埴輪列復元基礎掘削工に伴う調査（O地区の調査） .....	47
7 西辺水路改修工事に伴う周濠南西隅調査（N地区の調査） .....	48
8 その他の工事に伴う調査 .....	49
第3節 出土遺物 .....	51
第4節 調査成果 .....	71
第5章 埴形復元の検討 .....	72
第1節 大王墓との比較 .....	72
第2節 造り出しの検討 .....	73
1 西造り出し .....	73
2 東造り出し .....	74
第3節 模型作製 .....	75
1 埴輪模型 .....	75
2 古墳模型 .....	78

3	地形模型	82
4	埋納施設模型	84
第6章	保存・整備工事	86
第1節	竹・樹木伐採除根と既存施設撤去	86
1	竹木の伐採・除根	86
2	堤の撤去工	89
3	その他	91
第2節	墳丘復元整備	95
1	墳丘復元工	95
2	テラス面整備	95
3	法面工法（ジオウエップとジオファイバー）	97
4	バンパーバリアとスリムエッジの施工	104
第3節	計画施設の設置	105
1	葺石復元施工	105
2	墳輪列復元施工	113
3	植栽	117
4	オンサイト貯留式（現地貯留式）調整池とオリフィス	120
5	サイン施設	122
6	電気・照明施設と水道栓	140
7	園路	142
8	休憩広場と東屋、周濠南東部休憩施設	142
9	階段・スロープの設置	144
第4節	整備高	147
第7章	発掘調査成果と保存整備完成状況	152
1	空からの景観	152
2	主な発掘調査成果と整備前後の景観	153
第8章	まとめ	206
第9章	恵解山古墳公園の運営管理と活用	208
1	恵解山古墳公園の運営管理	208
2	恵解山古墳公園の活用遺跡－遺跡コンソーシアム（地域連携）－	209
付載	UAV（無人航空機）を利用した恵解山古墳公園上空撮影 上島 涼太（株式会社かんこう）	221

## 付録（DVD）

- 1 史跡恵解山古墳の整備写真（JPG）
- 2 史跡恵解山古墳開園記念式典及び見学会の様子（WMV、JPG）
- 3 史跡恵解山古墳パンフレット（PDF）
- 4 恵解山古墳公園紹介動画（MP4）
- 5 恵解山古墳公園オルソフォトデータ（TIFF）
- 6 恵解山古墳公園三次元モデル（MP4、JPG）

## ※注意事項

- 報告書及び付録の図面・画像・動画は、長岡京市・長岡京市教育委員会が著作権をもちます。
- このDVDを無断で複製・改竄・放送（有線・無線）・配信などに使用することは、法律で禁じられています。

## 図 版 目 次

### 巻頭図版

- 巻頭図版1 平成19（2007）年 恵解山古墳全景航空写真（整備前）
- 巻頭図版2 保存・整備計画平面図（1/1000）
- 巻頭図版3 （1）保存整備工事完成パース（南西から）  
（2）前方部前面の整備状況（南東から）
- 巻頭図版4 平成26（2014）年 恵解山古墳全景航空写真（整備後）

### 図 版

- 図版1 （1）昭和15年京府都市計画航空測量写真「長岡」「新神足」合成（京都府総合資料館所蔵）  
（2）平成26年保存・整備完成状況（南西から）
- 図版2 （1）平成21（2009）年第10次調査中の整備工事前恵解山古墳全景（南西から）  
（2）平成24（2012）年整備工事その1完了状況（南東から）
- 図版3 （1）平成24年恵解山古墳保存整備工事その2竹樹木伐採状況全景（南西から）  
（2）平成24年恵解山古墳保存整備工事その2竹樹木伐採状況全景（南東から）  
（3）平成24年恵解山古墳保存整備工事その2竹樹木伐採状況全景（北から）
- 図版4 （1）墳丘西辺の保存整備完成状況（南西から）  
（2）墳丘東辺の保存整備完成状況（南東から）
- 図版5 （1）保存整備工事その1 B地区調査全景（南東から）  
（2）保存整備工事その1 C地区調査全景（南東から）
- 図版6 （1）保存整備工事その2 K地区 埴輪列検出状況（南東から）  
（2）保存整備工事その2 K地区 埴輪列検出状況（南西から）
- 図版7 （1）保存整備工事その2 L地区前方部東辺埴輪石検出状況（東から）  
（2）保存整備工事その2 M地区前方部南東隅埴輪石検出状況（東から）
- 図版8 （1）水鳥形埴輪（東造り出し出土）  
（2）家形埴輪（前方部前面出土）
- 図版9 円筒埴輪
- 図版10 家形埴輪
- 図版11 家形埴輪など
- 図版12 家形埴輪
- 図版13 甲冑形埴輪など

- 図版14 甲冑形埴輪  
 図版15 鶏形埴輪、盾形埴輪など  
 図版16 蓋形埴輪など  
 図版17 形象埴輪  
 図版18 (1) 結晶片岩（青色系）  
           (2) 結晶片岩（少し赤味があるもの）  
 図版19 凝灰岩、石英斑岩、砂岩など  
 図版20 惠解山古墳後の遺物

## 挿 図 目 次

第1図	惠解山古墳所在位置と長岡京条坊復元図 (1/40000)	xv
第2図	惠解山古墳付近の立地環境 (1/20000)	1
第3図	惠解山古墳所在地位置図 (1/5000)	2
第4図	調査位置配置図 (1/1500)	6
第5図	惠解山古墳付近の開発変遷図 (地図1/8000・墳丘図1/5000)	7
第6図	乙調の主な古墳と集落遺跡分布図 (1/40000)	11
第7図	乙調の首長墓系譜図 (古墳規模1/2000)	13
第8図	鉄製武器類出土状況 (南東から)	14
第9図	惠解山古墳説明板	15
第10図	周濠説明板と注意板	15
第11図	副葬品埋納施設検出位置の仮整備状況 (北西から)	16
第12図	整備前地形と史跡指定範囲図 (1/1000)	17
第13図	バース検討の変遷図	18
第14図	基本構想から基本設計の報告書	19
第15図	基本構想のための上位計画とフローチャート	20
第16図	基本構想の概要	20
第17図	基本計画の目的と体制	20
第18図	長岡京市総合計画と関連部局の基本計画	21
第19図	基本計画の見直し確認事項	21
第20図	基本計画の見直し内容	22
第21図	整備工事に伴う調査位置と遺物採集地点配置図 (1/1000)	29
第22図	B地区調査実測図 (1/100)	32
第23図	C地区調査実測図 (1/100)	33
第24図	D地区調査実測図 (1/100)	34

第25図	E地区調査実測図 (1/100)	35
第26図	F地区調査実測図 (1/100)	36
第27図	G・H地区調査実測図 (1/200)	37
第28図	I・J地区調査実測図 (1/100)	38
第29図	西堤既存状況 (北から)	39
第30図	西堤中央断面 (北東から)	39
第31図	西堤西端断面 (北東から)	39
第32図	西堤撤去状況 (南から)	39
第33図	L地区調査実測図 (1/100)	40
第34図	M地区調査実測図 (1/100)	41
第35図	前面2調査区実測図 (1/50)	42
第36図	前面3調査区実測図 (1/50)	43
第37図	前面5調査区実測図 (1/50)	43
第38図	南1～3調査区全景 (西から)	43
第39図	左一南1調査区土層、中一南2調査区土層、右一南3調査区土層 (西から)	43
第40図	K地区調査平面図 (1/150)	44
第41図	K地区調査 東擁壁西壁面土層図 (1/100)	45
第42図	K地区調査 西擁壁東壁面土層図 (1/100)	45
第43図	K地区調査 第一テラス面堆輪列検出状況実測図 (1/40)	46
第44図	O地区検出堆輪列 (1/20)	47
第45図	N地区調査実測図 (1/50)	48
第46図	ジオファイバー基礎工断面土層	49
第47図	ジオファイバー基礎工北壁面中世礫層	49
第48図	ジオファイバー基礎工西壁面中世礫層	49
第49図	ジオファイバー基礎工中世礫層の一部	49
第50図	西2調査区土層図 (1/20)	50
第51図	工専用排水路掘削工土層図 (1/100)	50
第52図	南排水溝改修掘削断面土層図 (1/40)	50
第53図	家形堆輪実測図—1 (1/4)	52
第54図	家形堆輪実測図—2 (1/4)	53
第55図	家形堆輪実測図—3 (1/4)	54
第56図	家形、蓋形、普通円筒堆輪など実測図 (1/4)	55
第57図	家形、盾形堆輪など実測図 (1/4)	56
第58図	鶏形、甲冑形堆輪実測図 (1/4)	57
第59図	恵解山古墳関係以外の遺物実測図 (1/2・1/4・1/8)	58

第60図	家形埴輪と甲冑形埴輪復元想定略図	59
第61図	コナベ古墳との比較検討図	72
第62図	コナベ・墓山との埴形比較図	72
第63図	西造り出し計画変遷図	73
第64図	東造り出し検討資料	74
第65図	埴輪模型	75
第66図	乙調の埴輪 (1/12)	76
第67図	志解山古墳出土埴輪復元図 (1/15)	77
第68図	埴輪模型設計図	77
第69図	埴丘模型	78
第70図	埴丘模型計画図	79
第71図	紙粘土による埴形確認のための500分の1模型	80
第72図	埴丘復元模型作製工程	81
第73図	地形模型	82
第74図	地形模型作製工程	83
第75図	埋納施設設置状況	84
第76図	埋納施設の表現検討図	85
第77図	保存整備工事その1 前方部の竹木伐採除根作業風景	86
第78図	保存整備工事その1 前方部の竹木伐採除根工	87
第79図	保存整備工事その2 竹木伐採除根工	88
第80図	西堤撤去工	89
第81図	東堤撤去工	90
第82図	埴丘裾水路設置工	91
第83図	西辺・南辺排水路改修工	92
第84図	南排水溝改修工	93
第85図	長岡第八小学校サブグラウンド掘り下げ	94
第86図	盛土撤き出し厚・転圧回数	95
第87図	埴丘復元工の転圧	96
第88図	ジオウエップ施工	98
第89図	ジオファイバー工法による遺跡残存面への影響を検討した図 (1/250)	99
第90図	ジオファイバー工法施工-1	100
第91図	ジオファイバー工法施工-2	101
第92図	ジオファイバー工法施工-3	102
第93図	ジオファイバー工法施工-4	103
第94図	ジオファイバー法面の植栽変更計画図	103



第95図	バンブーバリア設置工	104
第96図	スリムエッジ設置工	105
第97図	葺石の積み方概念図	106
第98図	葺石復元範囲と表現方法の検討図	107
第99図	葺石復元試験施工—1	108
第100図	葺石復元試験施工—2	109
第101図	葺石復元施工法決定図	110
第102図	前方部前面の葺石復元工	111
第103図	西くびれ部の葺石復元工	112
第104図	葺石石材の選定	112
第105図	埴輪列復元配置	113
第106図	恵解山古墳樹立埴輪数推定集計図	114
第107図	復元埴輪列の範囲と樹立埴輪集計図	115
第108図	埴輪設置工	116
第109図	芝張り工	117
第110図	コクマザサ植栽	118
第111図	イスマキ植栽	119
第112図	サツキツツジ植栽	119
第113図	オリフィス設置状況	120
第114図	平成26（2014）年8月10日の大雨後の様子	121
第115図	サイン施設設置位置図	122
第116図	各種サイン施設一覧	123
第117図	各種サイン施設—1	124
第118図	各種サイン施設—2	125
第119図	各種サイン施設—3	126
第120図	各種サイン施設—4	127
第121図	各種サイン施設—5	128
第122図	各種サイン施設—6	129
第123図	各種サイン施設—7	130
第124図	各種サイン施設—8	131
第125図	説明板 版面	132
第126図	解説板①版面	132
第127図	解説板②版面	133
第128図	解説板③版面	133
第129図	解説板④版面	134

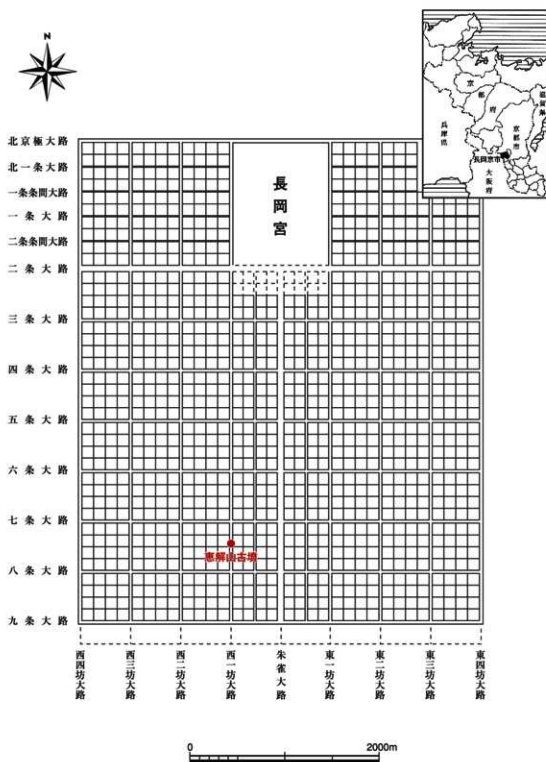
第130図	解説板⑤版面	134
第131図	解説板⑥版面	135
第132図	解説板⑦版面	135
第133図	解説板⑧版面	136
第134図	解説板⑨版面	137
第135図	解説板⑩版面	137
第136図	解説板⑪版面	137
第137図	注意札①版面	138
第138図	注意札②③版面	138
第139図	注意札④版面	138
第140図	注意札⑤版面	139
第141図	史跡名称板設置状況（北西から）	139
第142図	史跡境界標と境界プレート	139
第143図	史跡境界に設置した標柱と境界プレート	139
第144図	照明灯	140
第145図	照明施設配置図	140
第146図	分電盤と足下灯設置状況	141
第147図	東屋、休憩広場整備状況（南東から）	142
第148図	東屋、休憩広場	143
第149図	石階段設置工（前方部南面中央階段の施工）	144
第150図	掘木階段、コンクリート階段・石階段の設置	145
第151図	木道スロープ設置工	146
第152図	古墳周辺の旧地形標高	147
第153図	発掘調査時点での地表面標高と遺構残存面標高	148
第154図	コナベ古墳と恵解山古墳の比較図	149
第155図	コナベ古墳を参考に恵解山古墳を復元した場合の縦断面と副葬施設位置	149
第156図	向山1号墳参考復元	150
第157図	恵解山古墳鉄製武器類埋納施設検出位置付近の地形	151
第158図	鉄製武器類埋納施設検出面より70cmから1m上を墳頂部とした場合の復元	151
第159図	勝龍寺城上空から天王山を望む	152
第160図	天王山から恵解山古墳を望む	152
第161図	保存・整備バースと恵解山古墳所在地付近の整備前景観	153
第162図	これまでの調査と発掘調査以前の様子	154
第163図	鉄製武器類埋納施設の調査	155
第164図	鉄製品の種類と埋納施設検出地点の展示	156

第165回	武器類埋納状況の復元と鉄製品石製品出土量	157
第166回	西くびれ部第三傾斜面葺石検出状況	158
第167回	西くびれ部第三傾斜面裾部での葺石検出状況	159
第168回	くびれ部の葺石検出位置と施工法	160
第169回	葺石復元整備状況	161
第170回	前方部前面の南東裾部葺石	162
第171回	前方部前面の裾部調査	163
第172回	前方部前面墳丘裾の葺石	164
第173回	前方部南西部の墳丘裾葺石	165
第174回	前方部西辺南半の墳丘裾葺石	166
第175回	前方部東辺南半の墳丘裾葺石	167
第176回	前方部西側面の埴輪列	168
第177回	前方部西側面の埴輪列と古墳構築盛土工法	169
第178回	前方部墳頂部と土取り用崖面調査	170
第179回	前方部東側面の葺石と埴輪列	171
第180回	前方部の形状と西造り出し南辺	172
第181回	西造り出しの前方部取り付き部	173
第182回	西造り出し北辺から後門部	174
第183回	西造り出しの整備状況と東造り出しの発見	175
第184回	東造り出しの形状	176
第185回	東造り出しの整備状況と後門部墳丘裾	177
第186回	後門部墳丘西裾	178
第187回	後門部北縁の墳丘裾部	179
第188回	後門部東側の墳丘裾葺石	180
第189回	後門部第一テラス面埴輪列	181
第190回	東くびれ部の埴輪列	182
第191回	後門部の墳丘盛土	183
第192回	出土石材	184
第193回	後門部の形状復元と外周部の調査	185
第194回	周濠南西隅部の調査	186
第195回	周濠西辺と北辺の調査	187
第196回	恵解山古墳と大王墓との比較検討	188
第197回	発掘調査成果と恵解山古墳の復元	189
第198回	乙訓の古墳群と関連遺跡	190
第199回	恵解山古墳墳丘模型	191

第200図	保存整備が完成した惠解山古墳	192
第201図	休憩広場の整備	193
第202図	東屋	194
第203図	墳丘西辺の整備	195
第204図	墳丘西斜面の墳丘復元	196
第205図	後門部	197
第206図	墳丘東側面	198
第207図	東部の墳丘から周濠	199
第208図	周濠南部の整備	200
第209図	周濠南東隅の整備	201
第210図	墓参道の整備	202
第211図	惠解山古墳と山崎の戦い	203
第212図	惠解山古墳出土埴輪の復元	204
第213図	復元埴輪模型の展示状況	205
第214図	実施設計平面図 (1/600)	215
第215図	惠解山古墳調査区配置図 (1/500)	217
第216図	惠解山古墳墳丘復元着色図 (1/500)	219

## 付 表 目 次

付表—1	現在の墓地に残る江戸時代墓碑	4
付表—2	乙調の主な古墳と集落遺跡一覧表	12
付表—3	基本構想検討会から保存・整備委員会までの委員会及び専門部会開催内容一覧表	23
付表—4	惠解山古墳特別講演会開催内容一覧表	25
付表—5	惠解山古墳を愛する人・ワークショップなど活動記録	26
付表—6	保存整備事業費一覧表	28
付表—7	整備工事に伴う調査出土遺物一覧表	60
付表—8	報告書抄録	巻末



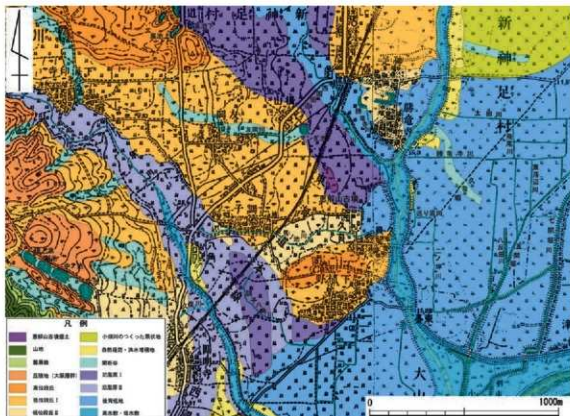
第1图 惠解山古墳所在位置と長岡京条坊復元図 (1/40000)

## 第1章 位置と環境

### 第1節 地理的位置と立地環境

長岡京市は、京都市の大部分を含む京都盆地の西南部にある。京都府宇治市・城陽市・向日市・長岡京市・八幡市・京田辺市・木津川市・大山崎町・久御山町・井手町・宇治田原町・笠置町・和東町・精華町・南山城村の7市7町1村からなる山城地域の北部南西域に位置し、京都市、向日市、大山崎町、大阪府三島郡島本町に隣接する（第1図）。面積は東西約6.5km、南北約4.5kmの約19km<sup>2</sup>を測り、人口は約8万人を有する地方都市である。西辺部には、標高約600mを超える小塩山やボンボン山を有する北拱山地を抱える。東部には、主に低地から段丘で構成された平野が広がる。山城地域西南部では、北から京都盆地西辺を南流する桂川、東から京都盆地南辺を西流する宇治川、南から南山城地域を北流する木津川が、大山崎天王山と八幡男山に挟まれた狭小な平野部に集まり、淀川となって大阪平野に向かう。乙訓地域は、桂川右岸の大部分を占める。惠解山古墳は乙訓地域にあり、桂川右岸で最大の前方後円墳である（第135図）。

桂川右岸南部には、南流する小畑川と、北西から南東方向に流れる犬川と小泉川があり、犬川は小畑川に注ぎこみ、小畑川と小泉川は、桂川に合流する。桂川は、天王山の南西麓で宇治川、木津川と合流し、淀川となって大阪平野を流れる。第2図は、惠解山古墳付近について、長岡京市史資料編一の付図2市域地形分類図の一部分を大日本陸地測量部の明治42年測図仮製図の地形



第2図 惠解山古墳付近の立地環境 (1/20000)

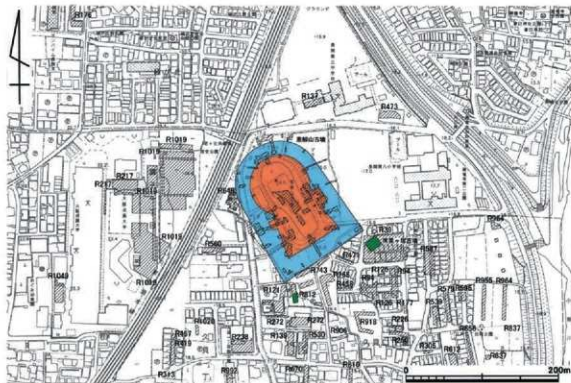


に合わせて加筆修正した図である。この図を基に立地環境を概観する。犬川と小泉川に挟まれた区域には、段丘があり、いくつかの開析谷が刻まれている。

惠解山古墳は、犬川と小泉川の間に形成された低位段丘Iと、犬川右岸に広がる氾濫原Iとの境に所在する。今までの発掘調査から、惠解山古墳の主軸が低位段丘の東辺方向に近いことが知られている。また、古墳北西部で段丘礫およびそれを被覆する土層および古墳構築期の旧表土と見られる黒色土が墳丘構築の基盤になっているが、墳丘南東部では墳丘盛土下に旧表土が見られないなど、墳丘北西部と南東部の墳丘構築基盤に違いがみられる。これらのことから、低位段丘の東辺を切断するように構築されたと考えられる。

惠解山古墳は、小畑川と犬川との合流地点の西約200mに所在する（第3図）。惠解山古墳の北東部には、JR東海道本線が北東から南西方向に走る。東海道本線を北東方向（京都駅方向）に約1kmで、JR長岡京駅に至る。当古墳の北辺から西辺にかけては、昭和50（1975）年に新設された市道585号線（通称惠解山通り）が通る。また、当古墳所在地の北側に長岡第三中学校が、東側には長岡第八小学校が、1976年に建設され、JR東海道線の西側には、平成26（2014）年に立命館中学校・高等学校長岡京キャンパスが開校した。惠解山古墳の保存整備により、近隣教育施設の身近な教材として、これまで以上の活用が期待される。南側は、1980年頃から宅地開発が繰り返され、久貝集落が北に膨らみ、当古墳に迫る勢いを見せている。当古墳の北東約150mには、犬川と小畑川に挟まれた勝竜寺集落がある。

勝竜寺集落は、平安時代創建寺院の惠解山勝龍寺を核として営まれてきた集落と考えられる。



第3図 惠解山古墳所在地位置図 (1/5000)

この勝竜寺地区の墓所が、当古墳の後円部墳頂部に築かれ、勝龍寺の山号から、当古墳を恵解山と呼ぶようになったと考えられる。しかし、勝龍寺の山号の読みが「えげさん」であるのに対し、当古墳は「いげのやま」と読む。この違いのいきさつは全く分からない。旧地名では、「勝竜寺北栗ヶ塚」であり、「恵解山」という地名はない。勝龍寺の墓地として地元の人たちの関わりを深めていく過程で、その墓地を親しみある寺の山号で呼び始めた通称が根付き、いつしか「えげさん」が「いげのやま」に、そして「いげのやま」に変化したのではないと思われる。

## 第2節 恵解山古墳周辺遺跡と歴史変遷

### 1 旧石器から弥生時代

恵解山古墳が所在する桂川右岸では、旧石器時代からの歴史を連続と辿ることが出来る。恵解山古墳周辺部の調査だけでも、長岡京跡右京第473次調査（第3図ではR137と略記、以下調査名称を同様に表現）と右京第39次調査でナイフ形石器が出土しており、長岡京跡右京第955次調査では縄文時代前期の竪穴住居が検出されている。長岡京跡右京第955次調査では弥生時代前期後半の土器が出土し、これに相前後する弥生時代前期の土器は右京第473次調査でも多く出土している。また長岡京跡右京第39次調査では、弥生時代中期初頭と考えられる方形周溝墓群が検出されている。古墳時代については、恵解山古墳との関連が強いので、乙調地域を視野に入れて後述する。

### 2 飛鳥から鎌倉時代

飛鳥から奈良時代にかけては、遺物の細片が散在的に少量出土しているものの、際立った遺跡は近在しない。長岡京期については、条坊と古墳とのかかわりが問題になるところであることから、後述する。平安時代から鎌倉時代にかけては、恵解山古墳の南東方向での長岡京跡右京第126次調査周辺部の数多く実施されている調査において、遺物がまとまって出土する傾向が見られる。恵解山古墳の墳丘調査でも出土している。さらに南の調査では、第2図の馬ノ池川両岸に沿って、低位段丘Ⅱを削り込む中近世の湿地堆積層が厚く見られる。平安時代で注目されるのは、恵解山古墳の南西側での調査成果で、長岡京跡右京第812次調査から緑軸陶器がまとまって出土し、右京第121次、第272次、第139次、第530次調査で、大小の掘立柱建物や櫓などが検出されており、木村泰彦氏（公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター）や中川和哉氏（公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）等によって、第3次山城国府所在地説が提唱されている。

### 3 室町時代

室町時代以後では、長岡京跡右京第1019次調査で、戦国時代とされる堀が検出されている。同調査区内で検出された周辺部の遺構などから、鉛製銃弾が出土していることや、恵解山古墳の調査でも前方部で堀が検出されていること、墓地になっている同古墳後円部が棚田状に改変を受けていること、同古墳の調査でも鉛製銃弾が出土していることなどから、天正10（1582）年の山崎の戦いに関連する遺構の可能性が指摘されている。これに関し、馬部隆弘氏（長岡京市教育委員

会)は、永祿9(1566)年の三好三人衆方に対抗する勝龍寺城との戦いに起因する遺構群(付城関係)の可能性もあり得ると指摘している。

長岡京跡右京第1091次調査検出の堀の年代は、16世紀の範疇から絞りきれないが、恵解山古墳出土の土師器や陶磁器は、16世紀第4四半期と考えられ、永祿9年の16世紀第3四半期まで遡らせることは難しいと思われる。また、恵解山古墳出土鉛製弾丸は西斜面(西くびれ部)からのみ出土し、土師器や陶磁器は東斜面から後円部北斜面にかけて出土し、この分布傾向から、恵解山古墳の西斜面での銃撃戦を想定するのが合理的と思われることなどから、恵解山古墳後円部の棚田状地形や前方部の掘り込みなどは、山崎の戦いの光秀軍方の陣跡と解したい。また、大山崎町境野古墳群所在丘陵も、丘陵西裾で実施された長岡京跡右京第15次調査で堀が検出されている事実がある限り、光秀軍方の陣跡を完全否定はできないと思われる。どこが光秀軍の本陣かということや、その本陣を御坊塚と呼んだかということも棚上げし、今後のさらなる検討を必要とする。

#### 4 江戸時代

江戸時代については、掘立柱建物や櫓、井戸、井戸底間をつなぐ土管暗渠などが、長岡京跡右京第1019次調査で検出されている。これら遺構の構築には相当の労力と経費を消費したことは間違いないが、その目的は明確でない。恵解山古墳の調査(調査位置は第4図参照)では、前方部前面の第二平坦面推定位置(整備工事に伴う調査C地区崖面東端)や前方部西側第二テラス面の埴輪列内(5-1調査区)から座棺墓と思われる円形埋葬施設が、前方部東斜面の7-2調査区では円形や楕円形または隅丸長方形の土葬墓群が検出されている。これらの土葬墓には、六道銭と考えられる寛永通宝や渡来銭を有するものがあり、出土土師器や陶磁器からは16世紀末葉から17世紀代まで継続されたと考えられる。また前方部東側第二テラス面8-3調査区では、テラス面を被覆する江戸時代の黒色炭交じり土層には、細片化した火葬人骨や焼けて変形または融着した六道銭と思われる寛永通宝や渡来銭が出土した。このような調査成果からは、恵解山古墳の前方部側では16世紀末頃に墓地となり始め、17世紀後半にはかなりの埋葬数になったと考えられる。

現在の墓地は後円部の3段からなる棚田状地形に営まれており、その最も高い中央の墓地に江戸時代の墓碑が代々受け継がれているものがある。現在の墓地にある江戸時代の墓碑には、付表一に示したものがある。この表から、墓碑のもっとも古い年号が17世紀末の元禄2(1689)年であり、ほとんどは18世紀代であることがわかる。つまり、今に残る江戸時代の墓碑は、発掘調査

付表-1 現在の墓地に残る江戸時代墓碑

位置	年号	西暦	備考
中央上段	元禄2己巳年	1689年	墓地内最古
	宝永6己丑年	1709年	久貝家
	正徳2辰年	1712年	久貝家
南下段 無縁集積区	元禄3年	1690年	信女
	正徳2年	1712年	童子
	正徳4年	1714年	童子
	延享4年	1747年	久貝家
	明和6年	1769年	久貝六右衛門
	安永元辰年	1772年	
	安永2己巳年	1773年	
	安永3年	1774年	
文化2年	1805年	久貝六兵衛	
前方部出土	正徳3己巳年	1713年	童子 久貝権兵衛

で検出された墓群の後に続くものであり、おそらく後円部を中心に建てられたもので、大きく移動されていないと考えられる。

## 5 近代から現代

近代以後の恵解山古墳周辺部の変遷は、第5図に示した。明治22年の段階では、恵解山古墳の墳丘はヒョウタン形に表現されている。また南西側は墳丘を囲むように狭い水田があり、墳丘より東は、広い水田地帯として開墾されている。恵解山古墳の西方には竹林が広がっており、その範囲は、第2図の低位段丘とはほぼ一致する。東にある小畑川の堤防にも竹林の表現が見られる。墳丘上では、後円部に墓地の表現があり、他はすでに竹林となっている。当地域の竹林は、孟宗竹を主とするタケノコ生産が盛んで、稲わらなどを竹林全体に敷き詰め、崖面をつくりながら土を掘り、竹林全体に敷き詰めた栄養源植物の上を覆う「土入れ」が、毎年秋から冬の間に行われる。恵解山古墳の墳丘の竹林も例外でなく、この農作業により、少しずつの地形変化が積み重ねられてきた。北西部の鉄道敷は、神戸鉄道と表現している。明治42年には、同鉄道を東海道本線と表現されている。明治期の地図では、恵解山古墳周辺に家屋の表現は見られない。

大正一昭和初期になると、恵解山古墳南東約120mに家屋がみられる。また、小字名が掲載されており、恵解山古墳の前方部墳丘南端から北側が「北栗ヶ塚」、前方部南面周濠から北東方向に「南栗ヶ塚」とされている。南東の低位段丘に広がる竹林地域には「西ノ山」と「西ノ口」の地名がある。「西ノ口」の東約140mの位置に「姥ヶ海道」、そのさらに東側に「久貝ノ後」とあり、南約80mに位置する久貝旧集落との関係が興味深い。小字名の位置関係は、京都府立総合資料館所蔵行政文書「官有地籍図」085乙訓郡10勝竜寺村（明治18年～19年頃「官有地一筆限帳簿」）などの絵図からも知ることが出来る。氾濫原や後背低地などの水田地帯は変わらない。

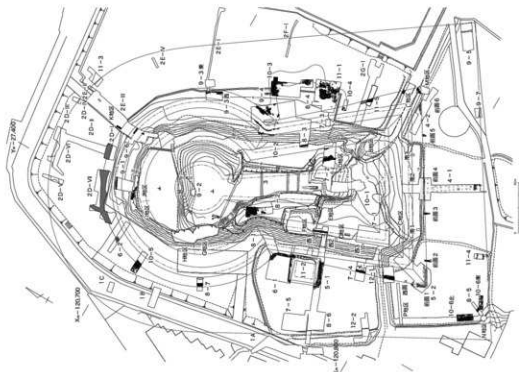
昭和11年の地図では、恵解山古墳の前方部南西隅には南からの進入路が、後円部の北側には、北からの進入路が表現されている。墳丘上には、後円部墳頂部に、2段の柵田状になった墓地の表現がある。北からの進入路は、この墓地で止まっている。西くびれ部付近には、崖面が表現されている。後円部の墓地縁辺部から前方部にかけては、竹林で覆われていて、南からの進入路は、前方部墳頂南端で止まっている。昭和15年の様子は、京都府の都市計画航空測量写真から、具体的にイメージできる。一目で、恵解山古墳の墳丘を囲む周濠痕跡が把握できる。際立った変化としては、東の大川が整備され、恵解山古墳前方部の南東隅から大川方向に、ほぼ真西に向かう幅広い道路が敷設されている点があげられる。昭和36年の地図では、大川の改修や新設道路が完成している。そして、新設道路は、路面が周辺水田面よりかなり高く、土手状に築かれていることがわかる。また、この地図からは、前方部西側周濠西辺部北半に、周濠に沿った細長い池の表現があり、この池の南端から、周濠縁辺に沿った排水溝が表現されている。昭和36年以後は、古墳の南西側にある段丘上の竹林が切り開かれて、開発が進んでいる。昭和36年の写真では、周濠西辺に沿った細長い池の南から前方部西辺の南端近くに向かう水田畦畔が、堤状に水田面よりかなり高くなっていることが読み取れる。これは、昭和29年に台風12号（ジェーン台風）の影響で豪雨が降り、大川が氾濫して久貝集落に甚大な被害をおよぼしたため、その後の防災対策としてこ

の畦畔を高く頑強にしたと伝わる。

昭和40年の地図では、前方部南東隅から直線的に東に向かう新設道路東部の北辺斜面が、コンクリート擁壁になっている。また、この道路は、前方部南東隅から墳丘を登り、後円部の墓地まで達している。その状況は、昭和52年の地図にもみられるが、昭和42年に京都府教育委員会が測量した墳丘測量図には見られない。この墳丘測量図からは、前方部西側周濠西辺に沿って、昭和36年の地図に見られた細長い池の南側にも、昭和36年の写真に見られる墳丘前方部南西部に取り付け堤状畦畔を挟んで、周濠西辺に沿った細長い池があったことが知られる。なお、墳丘の竹林内には、先に述べた「土入れ」のための土採掘により、各所に崖面が観察されている。

昭和50年には惠解山古墳北辺から西辺に沿って市道585号線の敷設に伴う発掘調査、平成51年に後円部の北から前方部の東をめぐる周濠部に長岡第三中学校と長岡第八小学校のサブグラウンド新設に伴う発掘調査が実施され、昭和52年の地図には、市道と両校の校舎およびサブグラウンドの整備の完了した状況が表現されている。この市道敷設と学校新設は、惠解山古墳に直接影響を与える最初の土木開発事業であった。また、古墳北縁を東西に走る市道585号線の西端部には、東海道本線をまたぐ歩道橋が設置されている。この歩道橋は「老ヶ辻歩道橋」として親しまれ、歩道橋より北西部には緑が丘住宅街として開発が進んでいる。また、緑が丘に南接した歩道橋南側の鉄道沿いには、テニスコートが置かれている。

昭和55年には、後円部墳頂部の墓地が、前方部墳頂部に拡張され、その工事の際に前方部墳頂中央部から鉄製武器類埋納施設が発見された（惠解山古墳第3次調査）。この発見は、国の史跡に指定される契機となった。



第4図 調査位置配置図 (1/1500)



(昭和15年の航空写真は、京都府総合資料館所蔵「京都市都市計画航空測量写真」[「新神足」と「長園」]を組み合わせてトリミングしたもので、画質調整及び部分改変を加えている。昭和42年の墳丘測量図は、京都府教育委員会測量図に加筆。)

第5図 惠解山古墳付近の開発変遷図(地図1/8000・墳丘図1/5000)

平成15年の地図では、昭和55年頃からの開発により、惠解山古墳周濠南辺にまで宅地化が進んでいる様子がわかる。また、惠解山古墳の残存状況や規模・形態などの詳細なデータを得るため、平成15年度以後、保存・整備工事開始までの期間、埋蔵文化財発掘調査が継続された（惠解山古墳第4次～第12次調査）。平成23年度には保存整備工事が開始され、遺跡面保護を目的とした工事に伴う埋蔵文化財調査も随時おこなった。各調査の位置は、第4図に示した。

## 6 長岡京期

このような歴史的経過の中にあつて、最も大きな画期の一つに、第1図に示した長岡京造営がある。惠解山古墳は、長岡京の条坊復元では、右京八条一坊から同二坊にまたがる西一坊大路が南北に貫く位置に当たる。しかし、惠解山古墳から長岡京期と思われる遺物が出土しているとはいえ、条坊施工に伴う土木工事の跡は見られず、古墳封土を良好に残したまま現在まで残されてきた。惠解山古墳周辺部の発掘調査状況を、第3図を基に長岡京関係に限って概観すると、惠解山古墳に北接する長岡第三中学校内では、長岡京跡右京第137次調査と第473次調査が実施され、ともに長岡京期の掘立柱建物が検出されている。西側のJR東海道本線を西に超えた立命館中学校・高等学校長岡京キャンパス内では、長岡京跡右京第217次、第1019次調査などが実施され、糞掘え付け穴を持つ掘立柱建物などが検出されている。しかし、JR東海道本線と惠解山古墳の間にある西隣接地での調査（長岡京跡右京第648次や右京第590次および惠解山古墳第1次調査A・B・C地区調査）では、遺構は検出されていない。当古墳の東に隣接した区域では、調査事例が無く、長岡京期の土地利用状況は不明である。南東部では、長岡京右京第39次調査や右京第94次調査で掘立柱建物が検出され、右京第126次調査では、西一坊坊間西小路の東側溝と考えられる南北溝が検出されている。さらに、右京第94次調査では長岡京期と考えられる解説不能の木簡断片が出土し、右京第177次調査では遺構こそ検出されなかったが大型踏脚硯や墨書土器が出土し、官司の所在地に近いと想定されている。

## 7 古墳時代

ここでは、乙調の古墳群の中の惠解山古墳築造意義を概感する。第6図には、天皇の杜古墳以南に所在する主な集落遺跡と古墳および古墳群の位置を表している。第7図には、大和政権中核部の大王墓系譜と山城地域の主な首長墓系譜を図化した。各古墳の形態や系譜については、岸本直文氏の教示を得ながら検討し、小地域区分と系列については、都出比呂志氏の教示を得ながら検討し、まとめたものである。全体の流れとしては、盟主墳とされる前方後円（方）墳は向日丘陵に連綿と築かれはじめ、その後段階に檜原、長法寺、山崎でも築造される。その始まりは、箸墓類似墳丘と思われる埴輪を持たない向日市五塚原古墳と考えられる。その後築かれた元稲荷古墳は、西殿塚や西求女塚と類似墳形を持つ前方後方墳と考えられている。また前方部墳頂に特殊器台形埴輪を持ち、河内産の大型複合口縁壺が後方部墳頂で使われているという。後方部には、竪穴式石室の主体部がある。五塚原が箸墓系列の墳形で、元稲荷が西殿塚の系列とすれば、両者とも岸本直文氏の王陵主系列の系譜と思われる。しかし、一方が前方後円墳で、もう一方は前方後方墳である。この違いは、前者の被葬者が中央から派遣された首長で、後者の被葬者が在

地出身の首長が地域支配体制の後継者となったが故に、その表現として在地墳墓形の方墳の系譜を採用したのであろうか。この後、有力主長は、北山、寺戸、妙見山へと移る。その間、檜原地域と勢力が錯綜するかのようになり、一本松塚が築造されている。同じころ、野山山塊の先端部山頂に、やや小規模な長法寺南原前方後方墳が築かれる。この古墳は、葦石を持たず、前方部3段、後方部4段の、前方部が短い墳形に復元されている。中心主体部は後方部の堅穴式石室であるが、前方部にも石棺系石室とされる小石室がある。福永伸哉氏は、その分布圏や埋葬頭位などから、小石室被葬者を但馬地方周辺の出身者の可能性があると指摘している。都出比呂氏は、小石室被葬者が福永氏の推察どおり近畿北部地域の出自であるとすれば、後方部の中心主体部被葬者は近畿北部地域と密接な関係を結んでいた首長の可能性があると指摘している。葦石を持たず、前方部の短い南原前方後方墳の被葬者は、北部近畿との関連を背景として中央政権と密接なつながりを持つ在地出身の首長として、向日グループや檜原地域と勢力を競っていたのかもしれない。

この後、向日グループから前方後円（方）墳が姿を消し、山崎地域に境野1号と鳥居前、檜原地域に天皇の杜が築造される。山崎地域の境野1号は、大川・小畑川と小泉川の間の、長法寺南原が所在する野山山塊から南東にのびる丘陵先端部に立地している。そこは、北東の桂川右岸の平野部を北に臨むことができる。前方部は、天王山と八幡男山に挟まれて、山城地域の主要河川が集まり、摂津から山城への狭小な交通の要害地を向いている。次に築かれた鳥居前古墳は、背後に天王山を控えた尾根筋先端にあり、桂川右岸の平野部のみならず、野山山塊を背後に控える長法寺南原や向日丘陵、さらには京都盆地までも見渡せる。いずれも長法寺南原と同様に、桂川右岸に広がる平野部と、交通の要害地としての桂川、宇治川、木津川の三川合流地を意識して築かれた古墳と考えられる。今里地域、長法寺地域、山崎地域の古墳は、古墳間の距離は離れているが、長岡・山崎グループとして同じ支配域の首長墓と捉えられる。これに対して、天皇の杜古墳は、向日丘陵の付け根の北東裾平野部に築かれており、桂川右岸の北半部にある広い平野部を意識して築かれたものと考えられる。その南半部は、前期古墳が連続と築かれた向日丘陵と桂川に挟まれた地域である。大原野や野山山塊から天王山に連なる向日丘陵の南西方向にある平野部は、遠い存在に感じる位置にある。一本松塚や百々池大円墳も同様な立地で、檜原地域のこれらの古墳は、丹波と山城地域をつなぐ山陰道の出入り口にある。向日グループの勢力が衰えると同時に檜原地域が桂川右岸の主権を握り、山崎地域と勢力を競っていたと考えられる。檜原地域では、天皇の杜を最後に、前方後円墳は作られなくなり、以後、長岡・山崎グループに前方後円墳の築造中心地が移る。まず今里車塚が築かれ、そのあと、桂川右岸最大の恵解山前方後円墳が築かれる。今里車塚は、乙訓地域で最初に、明確な周濠を備えて築造されたが、周濠の形が四角いという特徴を持つ。檜原地域に築造された天皇の杜は周濠を備えていないと考えられているが、墳丘を囲む周濠の輪郭を思わす地割の形状が今里車塚古墳の四角い周濠に類似する点、非常に興味深い。また今里車塚古墳は、高橋美久二氏によって、木製埴輪を墳丘裾近くに巡らすことが明らかにされた。墳丘裾に埴輪を巡らす最後の古墳といえよう。今里車塚の後に築かれた恵解山古墳は、前項で触れたように、南に三川合流地を望み、北に桂川右岸の平野が開ける位置にある。



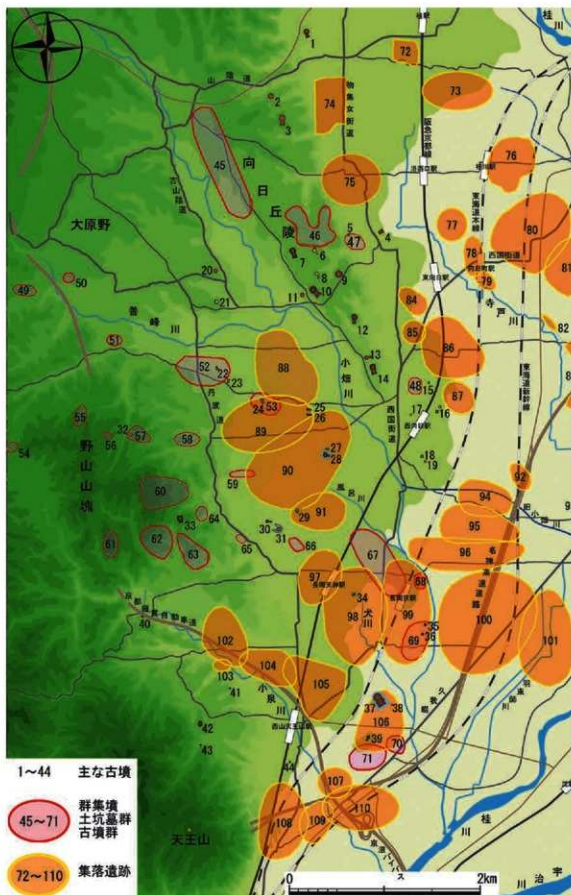
乙訓地域最大の惠解山古墳は、淀川下流や木津川・宇治川の上流地域とつながる交通の要害地を押し、背後に控える統率域の広さとその権力の強さを知らしめるために、当地を築造位置に選地したと考えられる。惠解山古墳は、墳丘と周濠形状を含めてコナベ古墳、墓山古墳などの相似形と考えられ、この墳形規格は、岸本直文氏による誉田御廟山型の築造規格で、王陵の副系列規格に含まれる。

惠解山古墳の後、第7図では首長墓系譜は途切れている。しかし、元禄11(1698)年の「藤司様御領分乙訓郡井内村之図」に、全長70～80mにもなろうかと思われる前方後円墳らしき「親王御塚」(親王御塚古墳)と「塚」(下東ノ口古墳)が表現されており、神足地域では三期から五期の埴輪が出土する地点(勝龍寺城本丸付近)があるなど、今後6世紀までの首長墓系譜を埋めることができるかもしれない。現在把握できる範囲内では、櫻原・山田グループの山田地域に巡礼塚、山田桜谷2号と続く前方後円墳が築かれており、山田桜谷1号、穀塚、清水塚にいたるまで、桂川右岸での優位を得ていたと考えられる。とはいえ、規模からは、周濠を巡らす穀塚を除いて小地域の首長墓級を超えない。この後、桂川右岸では、前方後円墳の小規模化が一気に進むが、桂川左岸の嵯峨野地域と宇治川右岸の木輪地域に、桂川右岸にまして大きな前方後円墳が築かれる。桂川右岸では、舞塚、丸敷、塚本に続き、これと並行して芝1号、井ノ内車塚、井ノ内稲荷塚が築かれる。この変遷の後半段階には、向日丘陵東裾に、物集女車塚が築かれる。物集女車塚は、巨大な横穴式石室に石棺で埋葬される主体部構造で、造り出しを持ち、周濠を巡らせており、副葬品の内容からも、この時期の桂川右岸で最も優位に立った被葬者と言える。巨大化した主体部構造と周濠は、今里車塚に引き継がれ、桂川右岸の中でも今里地域の優位性を察することができる。

このように桂川右岸の中にあつて優位な地位を手中に取めた被葬者の古墳を概観すると、惠解山古墳が構築されて以後、あるいはその数代後に、中央政権との絆の強さを背景として、桂川右岸の地域グループ単位の競争から小地域勢力の競争へとという大きな画期が想定できる。これは、乙訓地域首長層が中央権力から没落したことを意味している。また、古墳築造位置についても、惠解山古墳築造以前は、出自の小地域にとらわれず、支配下の生産基盤近郊の眺望がきく立地(主に前期)や交通の要害地近くの平野部(主に中期)から、出自の集落またはその集落の生産基盤地近郊へと移り変わったとみられる。

視点を变えて、惠解山古墳周辺での第3図掲載範囲の古墳時代の調査成果について概観する。惠解山古墳南東端から約50mの地点で実施された長岡京跡右京第39次調査では、短辺14m、長辺17mの方墳が検出されている。検出地点の旧小字名から、南栗ヶ塚古墳と呼ばれている。四周に幅約1m前後の周溝を巡らせ、周溝内から普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪など、第四期の須恵質埴輪が出土した。その特徴から、惠解山古墳より新しいと考えられるが、惠解山古墳の周濠に近接していることや、単独検出であることなどから、陪塚である可能性が指摘されている。

惠解山古墳の前方部周濠南辺から約70m南東で実施された長岡京跡右京第94次調査では、旧流路の湿地堆積層から、長岡京期遺物に交じって初期須恵器が出土している。陶邑編年のTK-73



第6図 乙洲の主な古墳と集落遺跡分布図 (1/40000)

型式の杯蓋と考えられる。このほか、この調査地点付近からは、6～7世紀の須恵器細片が少量出土することがある。しかし、これらに関連する遺構は未検出である。

惠解山古墳の南西隅から南西約30mの地点で実施された長岡京跡右京第812次調査では、平安時代の落ち込みから大量の緑軸陶器などに交じって、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪などが出土している。これらの埴輪は三期の特徴をもち、惠解山古墳とおおきな時期差は見られない。平安時代の項でみたように、一括して大量に出土した緑軸陶器は、第3次山城国府に関連する遺物である可能性がある。そうだとすると、第3次山城国府の整地土として、惠解山古墳の墳丘土を使った可能性がある。また、惠解山古墳との関係を考えず、素直に、惠解山古墳と同時期、あるいは相前後する時期に、埴輪を有する古墳が存在した可能性も捨てきれない。その場合、惠解山古墳と至近距離にあることから、陪塚と考えてよいかもしれない。

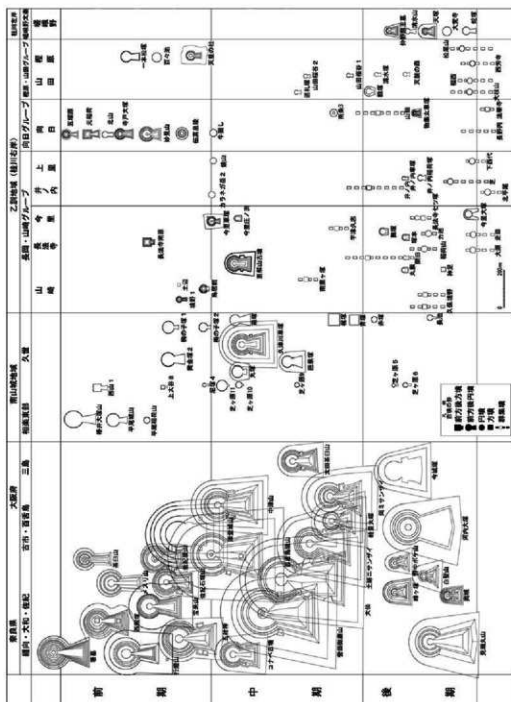
これらのほか、惠解山古墳の調査においても、9-6調査区などから、6世紀の須恵器杯蓋などが出土している。当整備工事に伴う調査においても、6世紀の須恵器細片が少量出土したが、惠解山古墳に持ち込まれた原因はよくわからない。

付表-2 乙調の主な古墳と集落遺跡一覧表

1 天皇の杜古墳	23 井ノ内車塚古墳	45 福西古墳群	67 岡田古墳群	89 井ノ内遺跡
2 百ヶ池古墳	24 井ノ内稲荷塚古墳	46 長野西古墳群	68 神足土坑墓群(仮称)	90 今里遺跡
3 一本松塚古墳	25 下東ノ口古墳	47 南条古墳群	69 神足古墳群(仮称)	91 陶器町遺跡
4 物業女車塚古墳	26 鏡王御塚古墳	48 山畑古墳群	70 久保古墳群	92 芝ヶ元遺跡
5 南条3号墳	27 今里庄ノ岡古墳	49 勝持寺古墳群	71 境野古墳群	93 羽束師遺跡
6 芝山2号墳	28 今里車塚古墳	50 下西代古墳群	72 幸嶋館跡下層遺跡	94 中福知遺跡
7 寺戸大塚古墳	29 舞塚古墳	51 灰方古墳群	73 下津林遺跡	95 鴨田遺跡
8 芝山4号墳	30 細塚古墳	52 芝古墳群	74 樫原遺跡	96 馬場遺跡
9 伝高丘陵古墳	31 今里大塚古墳	53 井ノ内古墳群	75 中海遺遺跡	97 岡田城ノ内遺跡
10 妙見山古墳	32 カラネガ丘古墳	54 狐籠古墳群	76 上久世遺跡	98 岡田遺跡
11 牛廻り古墳	33 長法寺南原古墳	55 南跡伏古墳群	77 修理式遺跡	99 神足遺跡
12 五塚原古墳	34 塚本古墳	56 中山古墳群	78 久ヶ相遺跡	100 雲宮遺跡
13 北山古墳	35 丸敷古墳	57 カラネガ丘古墳群	79 野田遺跡	101 水車遺跡
14 元稲荷古墳	36 神足古墳	58 光明寺古墳群	80 中久世遺跡	102 下海印寺遺跡
15 大塚殿古墳	37 惠解山古墳	59 七ツ塚古墳群	81 大藪遺跡	103 西山田遺跡
16 南間1・2号墳	38 南栗ヶ塚古墳	60 南原古墳群	82 東土川西遺跡	104 伊賀寺遺跡
17 御塔道古墳	39 地野1号墳	61 野山古墳群	83 東土川遺跡	105 友岡遺跡
18 法華寺古墳	40 鈴谷遺跡古墳	62 大塚古墳群	84 殿長遺跡	106 南栗ヶ塚遺跡
19 西小淵古墳	41 西明寺古墳	63 稲荷山古墳群	85 岸ノ下遺跡	107 松田遺跡
20 殿山古墳	42 鳥居前古墳	64 南原東古墳群	86 森本遺跡	108 百ヶ遺跡
21 上里南ノ町堂の上古墳	43 小倉古墳	65 力産古墳群	87 内裏下層遺跡	109 南川田遺跡
22 芝1号墳	44 里の後古墳	66 宇津久志古墳群	88 上里遺跡	110 下植野南遺跡

以上、桂川右岸地域における古墳時代首長墓系譜の中の惠解山古墳の位置づけと、惠解山古墳所在地近隣の発掘調査成果について概観した。桂川右岸の首長墓系譜全体を通観してみれば、桂川右岸地域で優位な地位を獲得したグループは、古墳出現期から前期は向日グループで、中期には長岡・山崎グループに移動したことは明らかであり、この墓所の異動時期が中央政権の墓所が大和盆地から河内平野に移動していることと連動することが指摘されている。

ここでは、史跡惠解山古墳の保存・整備事業に取り組み重要性を示せたとする。さらに、このような保存・整備が、惠解山古墳のみで完結できる問題でないことも痛感した。



第7図 乙訓の首長墓系譜図 (古墳規模 1/2000)

## 第2章 史跡指定にいたる経過

惠解山古墳は、大正13（1924）年に、京都府史蹟勝地調査会の梅原未治氏が中山長次郎氏の案内で現地を訪れ、その踏査成果を大正14年の「京都府史蹟勝地調査会報告」第6冊に報告したことにより、埴輪や葺石の存在が明らかになるとともに、中心主体部が竪穴式石室であることが推測され、研究者に注目されることとなった。当時、後円部墳頂付近は墓地、その周縁部と前方部の墳丘部は孟宗竹林で、前方部を中心にタケノコ生産のための土の採掘と採掘土の散布が繰り返されていた。

その後も、タケノコ生産のための「土入れ」により、毎年わずかず墳丘形状を変えていったと考えられる。その状況は、昭和42年に京都府教育委員会が作成した墳丘測量図に表れている。この図は、翌年の「埋蔵文化財発掘調査報告書」に掲載され、昭和47年の「京都府遺跡地図」にも周知の遺跡として掲載され、広く知られるようになった。同時に、墳丘や周濠の残存状況やおよその規模が把握された。

昭和50年には、周濠北辺から西辺にかけて市道585号線の敷設、昭和51年に、周濠の北から西にかけて長岡第三中学校と長岡第八小学校のサブグラウンドが新設された。この2件の開発では、事前発掘調査が実施され、惠解山古墳に初めて考古学のメスが入れられた。

昭和54年には、後円部西側の周濠部分で、民間の開発計画が持ち上がり、京都府の指導を受けて、国史跡指定の申請の準備が始まった。また同年、墓地を前方部墳頂に拡張する整地掘削工事があり、広い面積の墳頂部削平箇所から埴輪片が採集され、京都府の指導を仰いだ。工事の進行とともに、重機による整地掘削が前方部墳頂中央部におよび、鉄製品が掘削面に露出し、周辺部には重機に引きずられた鉄製品が散乱する事態に至った。急速、工事は中断され、墓地を管理する財産区と京都府教育委員会、長岡京市教育委員会の3者で協議し、整地掘削箇所を緊急調査することになった。この調査で、第三傾斜面西くびれ部に、葺石が構築された状況で広範囲に見事に残っていることを確認し、また、重機で削平を受けた鉄製品出土地点は、鉄製武器類を中心として大量埋納された遺構であることが突き止められた。

亡骸を埋葬する中心主体部に副葬されるのとは別に、鉄製武器武



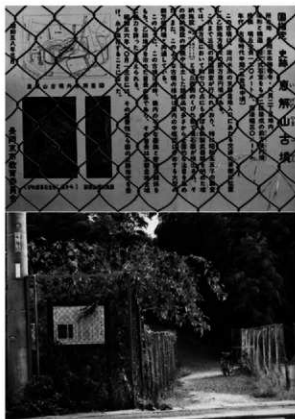
第8図 鉄製武器類  
出土状況（南東から）

具類の大量埋納施設が発見された例は、百舌鳥大塚山古墳、アリ山古墳、西墓山古墳、野中古墳、黒姫山古墳など、古市古墳群や百舌鳥古墳群の、大王墓集中地域に多い。このことから、鉄製品の大量一括埋納は、被葬者の支配力の強さを表現する葬送儀礼の一端として、大王墓を中心に導入されたものと考えられる。

恵解山古墳の前方部中央部で検出された鉄製副葬品埋納施設には、700点を超える鉄製武器類（鉄刀146、鉄検11、鉄槍57以上、鉄族472以上、蕨手刀子10、ヤス状鉄製品5）が納められていた。このような大量の鉄製武器類埋納施設存在は、恵解山古墳被葬者の支配力を物語るとともに、古市・百舌鳥古墳群との関連、すなわち中央政権との関わりを深さを知らしめている。

また、西くびれ部で保存状態の良い葺石が検出されたことは、墳丘測量図からの墳形復元が困難なほど激しい削平を受けていたと思われていたことに対し、竹藪の土入れによる被覆土で良好に保護されている部分もあることが明らかになった。

このような大きな調査成果を得て、広く市民の理解を得る必要から、鉄製武器類の埋納施設発見と、葺石が良好な残存状態で検出したことの意義について、2回に分けて現地説明会を実施した。一方で、長岡京市は京都府の指導・助力を受けるとともに、土地所有者をはじめ関係各機関へ保存の必要性に理解を求め、協議・調整に尽力した。その結果、鉄製武器類埋納施設が発見された箇所については、墓地拡張範囲から外すことが決定し、遺構検出面保護層を被覆して埋め戻したのち、発見位置を明示



第9図 恵解山古墳説明板



第10図 周濠説明板と注意板

する整備を行った。一方で、惠解山古墳が京都府下でも有数の規模を誇る前方後円墳であり、鉄製武器類埋納施設の発見は、惠解山古墳の被葬者が乙訓の首長墓の中で最も優位な社会的地位に立った支配者であることを裏付けるだけでなく、京都府下をはじめ、全国的にも非常に貴重であること、また墳丘の残存状況も、予想以上に良好であることを踏まえ、惠解山古墳を破壊から守り、永く後世に伝えるため、長岡京市長を先頭に国の史跡指定に向けて取り組んだ。

このような直面する開発の危惧とこれに対処してきた経過および発掘調査成果を受けて、昭和56（1981）年10月13日に国の史跡に指定されるにいたった。史跡指定範囲は、第12図に示した。

この間、後円部周濠西側の民間開発についても理解を得ることが出来たことから、昭和56（1981）年度に土地を買収、昭和61（1986）年度に盛土整地し、平成元（1989）年度に表装を芝張として古墳見学者に開放した。平成10（1998）年度には、西隣接道路との境の囲柵を修理し、景観をととのえた。この部分には、平成11（1989）年度に展示室兼仮設収蔵庫を設置し、希望見学者に入室して展示品を公開した。展示室には、鉄製武器類埋納施設の俯瞰写真を原寸大に引き伸ばしたパネル展示や、惠解山古墳をはじめとする周辺遺跡出土遺物などを展示し、惠解山古墳の概要を解説した配布チラシを常設していた。

また、墳丘東側面は、昭和61（1986）年度に古墳見学用の遊歩道と休憩用のベンチを設けた公園として仮整備し、広く一般に公開した。平成10年度には、囲柵老朽化のため、修理した。

平成9（1997）年度には、南東隅周濠部分を盛土整地して、部分整備を行った。

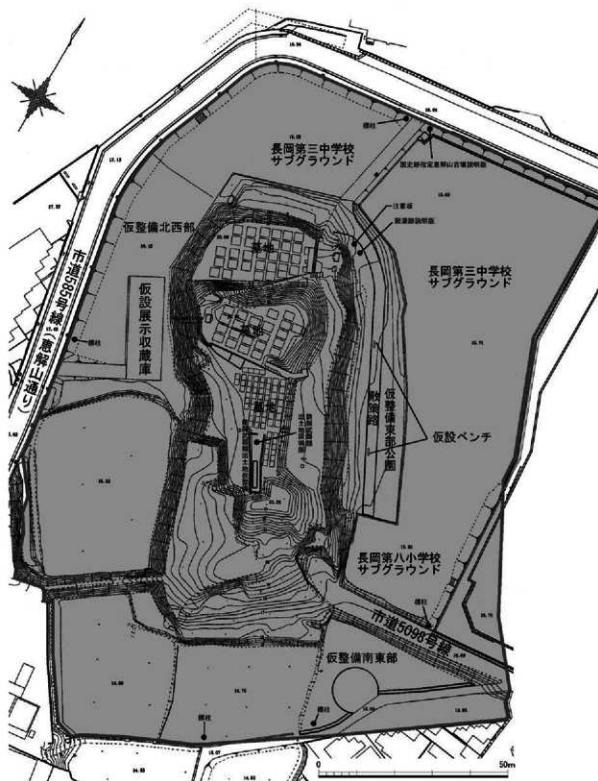
現地説明板などは、昭和57年度に、「国指定 史跡 惠解山古墳」、平成7年度に「国指定史跡 惠解山古墳 周濠跡」の説明板などを設置し、来訪者への啓発や古墳見学者の便宜を図るとともに注意札も設置した。

また、昭和57（1982）年度に、鉄製武器類出土地の説明板を設置し、平成3（1991）年に増補改訂した説明板に改修し、見学者の期待にこたえた。

このような史跡指定への経過を経て、土地の公有化に取り組みつつ、買収済みの土地の有効利用をはかりながら、本格的な保存・整備方法を模索してきた。



第11図 副葬品埋納施設検出位置の仮整備状況（北西から）



第12図 整備前地形と史跡指定範囲図 (1/1000)



### 第3章 保存・整備事業の経過

#### 第1節 保存・整備構想から実施設計策定

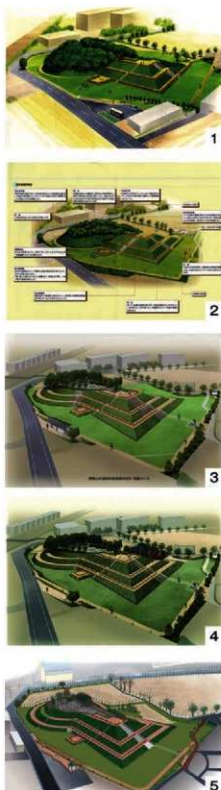
国史跡惠解山古墳の保存整備事業は、平成15年度から平成26年度にかけて、36回の検討会および委員会を重ねてなした（付表-3）。

保存整備基本構想は、国史跡惠解山古墳基本構想検討会で検討され、平成15年度にまとめられた。長岡京市は、都市の将来の空間構成について検討し、平成13年に長岡京市第3次総合計画が策定され、「住みつけたい みどりと歴史のまち 長岡京」を将来都市像に位置付けた。これと合わせて、都市計画マスタープランが策定され、その都市整備方針から導き出された地域別まちづくりの方針（第15図）に惠解山古墳の役割が位置付けられた。つまり、惠解山古墳と勝竜寺城公園周辺などの歴史・文化に親しむ環境づくりが、基本方針に盛り込まれることになった。これらの方針のもと、基本構想検討会では、国史跡惠解山古墳の保存・整備の基本理念と基本方針が示された（第16図）。

基本計画策定委員会では、基本構想検討会で導き出された保存整備についての基本構想を基に、基本計画の目的と体制を整え（第17図）、関連部局との調整をはかりながら保存整備計画について検討され（第18図）、保存整備パスを示して具体的な整備計画が示された（第13図-1）。

平成17年度に保存整備基本計画が策定されて以後、保存・整備に必要なデータを得るための発掘調査により新たな成果を取り入れる必要が生じた。また、便益施設の設置が困難になるなど、基本計画の見直しが必要となった。このため、平成20年度には、基本理念などを再確認した（第19図）うえで、基本計画を見直し、一部修正が加えられた（第20図）。修正点はパスにも表現された（第13図-2）。

その後も、完成予想パスは部分的に少しずつ改定



第13図 パス検討の変遷図

され（第13図～3・4）ることになった。これらの部分的な修正を加えながら、平成20年度に見直した基本計画を基に、平成22年度に基本設計が策定された。

基本構想策定から基本設計策定に至るまでの大きな変更点を見ると、史跡外に用地確保が困難となり、大規模なガイダンス施設や便益施設および駐車場が確保できなかったこと、発掘調査で西造り出しと東造り出しが発見され、その表現が必要になったこと、後門部の墓地を囲む樹木を伐採し、古墳の表現できる復元範囲が広がったこと、墳丘を覆っていた竹藪の一部を保存竹林として残し、整備前の景観を後世に伝えるとともに、近隣小学校などの竹に関する学習に資することになったことなどがあげられる。このような経過を経て、墳丘の規模形状の再確認と整備表現方法、サイン関係の具体化、構造物の位置や形状などを再確認しながら、平成23年度に実施設計が策定された。

また、市民参加で保存整備を進めるため、講演会や「恵解山古墳を愛する人」、ワークショップ、古墳見学会などの取組を行った（付表5～6）。

基本構想から実施設計に至る検討会および委員会の委員は、以下のとおりである（敬称略）。

基本構想検討会（平成14～15年度）

委員長 中尾芳治、委員長代理 小幡浩也教育次長、

委員 都出比呂志、高瀬要一、北井喜一、北井清、坪内博（平成14年度）、島田忠一（平成14年度）、小林久男（平成15年度）、山本和紀（平成15年度）、井上政明

基本計画策定委員会（平成16～17年度）

委員長 中尾芳治、副委員長 北井清

委員 都出比呂志、増淵徹、北井喜一、小林久男、西村直子、佐藤兼司、中田晃一、宮本純二、山本和紀、井上政明、小幡浩也、高瀬要一

専門委員 高橋克壽、金田明大

保存・整備委員会（平成18～26年度）

委員長 中尾芳治、副委員長 北井清（平成18～19年度）、奈佐保（平成20～26年度）

委員 都出比呂志、高瀬要一、増淵徹、水谷厚之（平成18～22年度）、小林久男（平成18年度）、小林治季（平成19～21年度）、野村文夫（平成22～24年度）、福本謙三（平成23～26年度）、小畑秀夫（平成22～26年度）、西村（上住）直子（平成18～23年度）、石湯俊子（平成24～26年度）、佐藤兼司、中田晃一、宮本純二、山本和紀（平成18・23・24年度）、丹羽正次（平成19～23年度）、森義男（平成24～26年度）、山本昇（平成18年度）、佐々谷明光（平成19～26年度）、小林松雄（平成18～19年度）、角田幸一（平成20～22年度）、中村修（平成24～26年度）

専門委員 高橋克壽、岸本直文



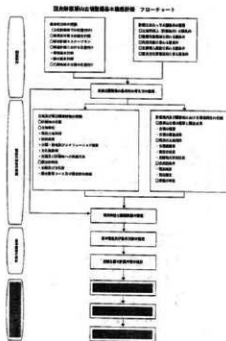
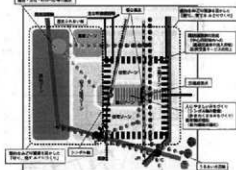
第14図 基本構想から基本設計の報告書

### 都市の将来の空間構成

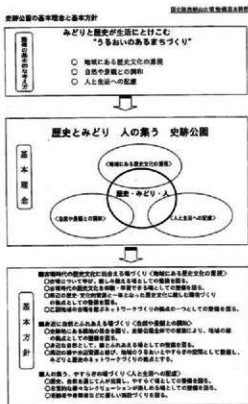
都市計画の将来像を示す。以下のように都市空間の空間構成を、図つてご説明いたします。

- 【基礎構想】
- 都市計画の将来像を示す。以下のように都市空間の空間構成を、図つてご説明いたします。
  - 都市計画の将来像を示す。以下のように都市空間の空間構成を、図つてご説明いたします。
  - 都市計画の将来像を示す。以下のように都市空間の空間構成を、図つてご説明いたします。

### 【都市の将来の空間構成】



第15図 基本構想のための上位計画とフローチャート



第16図 基本構想の概要

### 1. 計画の目的と進め方

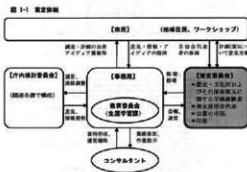
#### 1.1. 目的

都市計画の目的は、市民の生活の向上と、都市の発展を促進することにある。

#### 1.2. 体制

都市計画の目的は、市民の生活の向上と、都市の発展を促進することにある。

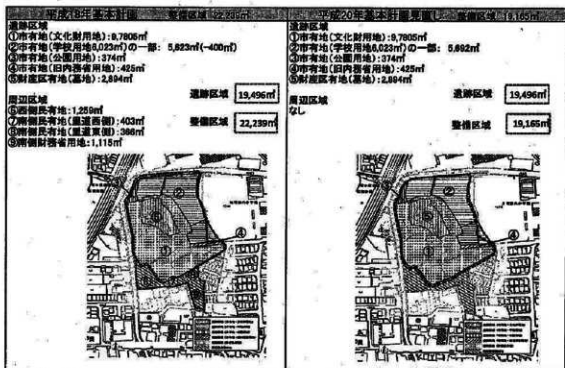
都市計画の目的は、市民の生活の向上と、都市の発展を促進することにある。



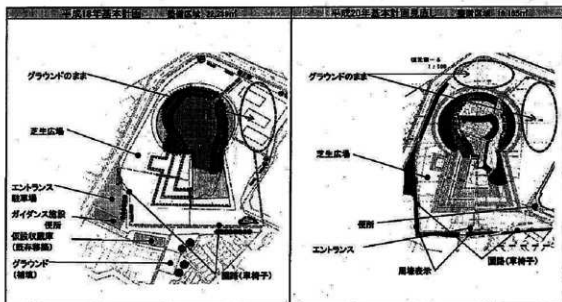
第17図 基本計画の目的と体制



## 前提条件の見直し



## 周辺土地利用の見直し



第20図 基本計画の見直し内容

付表-3 基本構想検討会から保存・整備委員会までの委員会及び専門部会開催内容一覧表

## 基本構想検討会

開催年度	回	開催年	月	日	検討内容	備考
平成14年度	第1回	平成15年	3月	19日	恵解山古墳現地視察 整備条件・構想の検討	委員 9名 (地元自治会3名)
平成15年度	第2回	平成15年	8月	6日	黒船山・心合寺山古墳視察 基本構想案の検討	
	第3回	平成16年	3月	5日	第4次調査の検討 基本構想の策定	基本構想策定

## 基本計画策定委員会

開催年度	回	開催年	月	日	検討内容	備考
平成16年度	第1回	平成17年	1月	28日	現状把握と方針の検討	委員 14名 (地元自治会3名 市民公募4名)
	第2回	平成17年	3月	28日	恵解山古墳現地視察と整備条件 の把握 整備活用事例からの検討	
平成17年度	外部視察	平成17年	5月	20日	高槻市今城塚古墳・新池ハニワ 工場、豊中市桜塚古墳群視察	
	第3回	平成17年	7月	1日	基本計画策定方針の検討 整備計画の検討	
	第4回	平成17年	11月	22日	整備基本計画の検討 管理運営計画の検討	
第5回	平成18年	3月	28日	基本計画報告書案の検討	基本計画策定	

## 保存・整備委員会

開催年度	回	開催年	月	日	検討内容	備考	
平成18年度	第1回	平成18年	11月	21日	発掘調査計画の検討 都市公園化事業化の検討	委員 14名 (地元自治会3名 市民公募4名)	
	第2回	平成19年	2月	14日	第7次調査現地視察と調査成果 の検討 整備計画の検討		
平成19年度	第3回	平成20年	2月	7日	発掘調査成果と整備計画の検討		
平成20年度	第4回	平成20年	11月	28日	第8次調査現地視察と調査成果 の検討		基本計画見直し
	第5回	平成21年	3月	4日	第9次調査現地視察と調査成果 の検討 発掘調査成果と整備計画の検討		
平成21年度	第6回	平成22年	2月	17日	第10次調査現地視察と調査成果 の検討 整備計画の検討 調査計画の検討	基本設計策定	
平成22年度	第7回	平成22年	7月	27日	第11次調査現地視察と調査成果 の検討		
	第8回	平成22年	10月	8日	基本設計案の検討		
平成23年度	第9回	平成23年	2月	18日	基本設計報告書案の検討	基本設計策定	
	第10回	平成23年	7月	22日	保存整備計画の検討		
	第11回	平成24年	2月	10日	恵解山古墳原型復元の検討 保存整備実施設計の検討	実施設計策定	
平成24年度	第12回	平成24年	7月	20日	実施設計と整備事業スケジュー ルの検討・保存整備事業の検討 サイン施設の検討	実施設計策定	
	第13回	平成25年	3月	27日	保存整備工事に伴う調査成果の 検討 サイン施設関係の検討		

平成25年度	第14回	平成25年	11月	15日	保存整備工事に伴う調査成果の検討 サイン施設関係の検討 保存・活用の検討
平成26年度	第15回	平成26年	7月	28日	恵解山古墳現地視察 保存整備工事の進捗状況報告 開園式典について 第12回 専門部会と合同開催

## 基本計画策定委員会・基本計画庁内検討委員会

開催年度	回	開催年	月	日	検討内容	備考
平成16～17年度	第1回	平成17年	1月	21日	基本計画の素案作成、関係機関との連絡調整ほか	管外視察地 今城塚古墳、新池 ハニワ工場公園、 桜塚古墳群復元整備・活用状況視察
	第2回		3月	28日		
	管外視察	5月	20日			
	第3回	6月	29日			
	第4回	11月	21日			
第5回	平成18年	3月	23日			

## 基本計画策定委員会専門部会

開催年度	回	開催年	月	日	検討内容	備考
平成17年度		平成17年	10月	21日	第6次調査現地視察と成果の検討 基本計画の検討（整備範囲と表現方法）	委員 6名 （専門委員2名）

## 保存整備委員会専門部会

開催年度	回	開催年	月	日	検討内容	備考
平成20年度	第1回	平成21年	3月	3日	第9次調査成果の検討 墳丘と周濠の整備手法の検討	委員 6名 （専門委員2名）
平成21年度	第2回	平成22年	2月	15日	第10次調査現地視察と調査成果の検討 平成22年度の発掘調査計画	
平成22年度	第3回	平成22年	7月	23日	第11次調査現地視察と調査成果の検討	
	第4回	平成22年	10月	4日	恵解山古墳基本設計案の検討	
平成23年度	第5回	平成23年	2月	10日	第11次補足調査成果の検討 基本設計案の検討	
	第6回	平成23年	10月	24日	第12次調査現地視察の検討 東造り出しの形状復元再検討 恵解山古墳実施設計の検討	
平成24年度	第7回	平成23年	12月	12日	古墳構築時の墳丘復元再検討 実施設計の検討	
	第8回	平成24年	12月	25日	整備工事に伴う調査成果の検討 復元整備高・葺石の復元範囲と 形状・埴輪レプリカ・墓参道整備 の検討 サイン施設について	
平成25年度	第9回	平成25年	5月	23日	整備工事に伴う調査成果の検討 葺石復元・埴輪列復元・ジオファイバー植栽・サイン施設の検討	
	第10回	平成25年	8月	8日	整備工事に伴う調査成果の検討 サイン施設の検討	
平成26年度	第11回	平成26年	4月	17日	整備工事に伴う調査成果の検討 サイン施設について	
	第12回	平成26年	7月	28日	恵解山古墳現地視察 保存整備工事の進捗状況報告 開園式典について 第15回保存・整備委員会と合同 開催	

付表—4 惠解山古墳特別講演会開催内容一覧表

開催年度	開催月日	時 間	内 容	備 考
平成18年度	8月26日(土)	13時半～14時30分	基調報告 公園整備の基本構想 講師 株式会社計画機構 恵谷 真 氏	受講者数 250名
		14時40分～16時10分	特別講演 「古墳時代史の中の惠解山古墳」 講師 大阪大学大学院文学研究科教授 福永 伸哉 氏	
平成19年度	8月26日(日)	13時半～14時30分	基調報告 「惠解山古墳の調査成果」 講師 昭長岡京市埋蔵文化財センター 山本 輝雄	受講者数 250名
		14時40分～16時10分	特別講演 「日本に発信する惠解山古墳」 講師 奈良大学名誉教授 水野 正好 氏	
平成20年度	8月31日(日)	13時半～14時30分	基調報告 「第8次調査の成果」 講師 昭長岡京市埋蔵文化財センター 岩崎 誠	受講者数 250名
		14時40分～16時10分	特別講演 「埴輪の世界－惠解山古墳を中心に」 講師 花園大学文学部准教授 高橋 克壽 氏	
平成21年度	8月30日(日)	13時半～14時30分	基調報告 「第9次調査の成果」 講師 昭長岡京市埋蔵文化財センター 木村 泰彦	受講者数 250名
		14時40分～16時10分	特別講演 「5世紀の王墓と惠解山古墳」 講師 大阪市立大学文学部准教授 岸本 直文 氏	
平成22年度	8月29日(日)	13時半～14時30分	基調報告 「第10次調査の成果」 講師 昭長岡京市埋蔵文化財センター 原 秀樹	受講者数 230名
		14時40分～16時10分	特別講演 「古墳時代の乙調と惠解山古墳」 講師 立命館大学文学部教授 和田 晴吉 氏	
平成23年度	8月27日(日)	13時半～14時30分	基調報告 「第11次調査の成果」 講師 昭長岡京市埋蔵文化財センター 中島啓夫	受講者数 180名
		14時40分～16時10分	特別講演 「史跡整備の原点五色塚古墳1960～1975」 講師 昭元興寺文化財研究所 所長 坪井 清足 氏	
平成24年度	8月26日(日)	13時半～14時30分	基調報告 「整備工事に伴う調査成果」 講師 長岡京市教育委員会 岩崎 誠	受講者数 170名
		14時40分～16時10分	特別講演 「京都の古墳文化 北の王国・南の王国」 講師 大阪国際大学教授 杉原 和雄 氏	
平成25年度	8月25日(日)	13時半～14時30分	基調報告 「整備工事に伴う調査成果」 講師 長岡京市教育委員会 岩崎 誠	受講者数 180名
		14時40分～16時10分	特別講演 「日本の遺跡整備の歩みと惠解山古墳」 講師 元奈良文化財研究所文化遺産部長 高瀬 要一 氏	



平成26年度	8月24日(日)	13時10分～13時40分	基調講演 「もうすぐ開園を迎えて」 講師 恵解山古墳保存整備委員会委員長 中尾 芳治 氏	長岡京(230 歴史大学2 限目「恵解 山古墳整備 記念シンポ ジウム」  受講者数 230名
		13時50分～14時05分	基調報告 「開けば納得☆恵解山古墳のここがスゴイ!」 講師 花園大学教授 高橋 克壽 氏	
		14時05分～14時20分	基調報告 「乙訓における恵解山古墳のもつ意義」 講師 大阪大学名誉教授 都出 比呂志 氏	
		14時20分～14時35分	基調報告 「恵解山古墳の整備」 講師 元奈良文化財研究所文化遺産部長 高瀬 要一 氏	
		14時35分～14時50分	基調報告 「子供たちとどう取り組んできたか」 講師 前長岡第八小学校長 安部 俊次 氏	
		15時15分～16時30分	パネル ディス カッシ ョン 「恵解山古墳を楽しもう!」 コーディネーター：中尾 パネリスト：高橋、都出、高瀬、安部、 長三中生徒	

付表—5 恵解山古墳を愛する人・ワークショップなど活動記録

## 「恵解山古墳を愛する人」だより」発刊年度一覧

発刊年度	発刊号・月						
平成18年度			1号 9月	2号 10月	3号 1月	4号 3月	
平成19年度	5号 4月	6号 6月	7号 8月	8号 10月	9号 1月	10号 3月	
平成20年度		11号 5月	12号 7月	13号 10月			
平成21年度	14号 4月	15号 5月	16号 7月	17号 10月	18号 1月		
平成22年度		19・20号 5月	21号 7月				
平成23年度		22号 5月	23号 7月			24号 2月	
平成24年度	25号 4月		26号 8月			27号 2月	
平成25年度			28号 8月			29号 2月	
平成26年度		30号 6月					

## ワークショップ開催一覧

開催年度	回数	開催年月日	課題など	参加人数
平成17年度	第1回	平成17年 2月 27日	古墳のこと、地域のことを知ろう	42名
	第2回	平成17年 5月 22日	こんな史跡公園が欲しい	
	保存整備先進事例見学会	平成17年 7月 10日	高槻市今城塚古墳、新池ハニワ工場公園、神戸市五色塚古墳	37名
	第3回	平成17年 8月 21日	こんなまちにしたい	
	第4回	平成18年 2月 12日	今後の取り組みについて	
平成20年度	第1回	平成20年 6月 29日	恵解山古墳整備・活用について	14名
	第2回	平成20年 7月 13日	長岡京市今里大塚・舞塚・今里車塚・七ツ塚・井内稲荷塚古墳見学	12名
	第3回	平成20年 8月 3日	恵解山古墳を愛する人の会づくりについて	7名
	第4回	平成20年 9月 7日	恵解山古墳の整備について	8名
	第5回	平成20年 9月 28日	整備・活用への期待	7名
平成22年度	第1回	平成22年 9月 12日	恵解山古墳を知って楽しみ方を考えよう	17名
	第2回	平成22年 9月 20日	恵解山古墳の楽しみ方をまとめよう	15名
	第3回	平成22年 11月 21日	恵解山古墳の楽しみ方を広めよう	13名
平成26年度	第1回	平成26年 4月 19日	開園イベントを考えよう	23名
	第2回	平成26年 6月 21日	開園イベント企画をつくらう！	25名
	第3回	平成26年 8月 23日	開園イベントを盛り上げよう！	22名

## 恵解山古墳関係古墳見学会開催一覧

開催年度	開催年月日	見学地	参加人数
平成20年度	平成20年 7月 13日	長岡京市今里大塚・舞塚・今里車塚・長法寺七ツ塚・井内稲荷塚などの古墳	14名
	平成20年 11月 16日	鞍部市私市門山古墳・丹後資料館	40名
平成21年度	平成21年 6月 7日	向日市元稲荷・五塚原・物集女車塚などの古墳	16名
平成22年度	平成22年 6月 13日	高槻市今城塚・圓籠山古墳、新池ハニワ工場公園	15名
平成23年度	平成23年 6月 19日	高槻市今城塚古墳、今城塚古代歴史館	17名
平成24年度	平成24年 6月 17日	桜井市大神神社、桜井市埋蔵文化財センター、著嘉・ホケノ山・藤岡石塚古墳、藤岡遺跡	16名
平成25年度	平成26年 3月 1日	恵解山古墳	25名

## コスモス栽培事業

実施年度	実施年月日	実施内容	参加人数	
平成20年度	平成20年	8月 10日	耕作・種まき	33名
		8月 11～14日	水やり	10名
		8月 25日	追加種まき	8名
		9月 10日	草引き	8名
		10月 31日	草引き（美化クラブ協力）	
		11月 9日	コスモス見学会 ガラシャ祭協賛展示室公開（ガイドの会協力）	
平成21年度	平成21年	8月 19日	耕作・種まき	40名
		9月 2日	追加種まき	8名
		10月 19日	草引き（ガイドの会協力）	
		11月 8日	コスモス見学会	900名

## 第2節 保存・整備工事内容

当保存整備工事は、平成23年度に現場工事を着手し、平成26年度に完成をみた。その間、保存整備工事その1は、平成23年度工事で、仮設工事用進入路設置工、南西堤撤去工、前方形竹・樹木伐採除根工などを中心に実施した。保存整備工事その2は、平成24～25年度工事で、整備対象地内の竹や樹木の伐採除根工、古墳復元工（盛土工・葺石復元工・埴輪列復元工などを含む）、設備工（擁壁施工・フェンス設置工・階段工・植栽工などを含む）、周辺整備工（雨水排水工などを含む）を中心に実施した。保存整備工事その3・その4は、平成25年度工事である。保存整備工事その3は、南部足下灯やコンセントなど電気関連施設工事（配線、分電盤設置などを含む）を中心に実施した。保存整備工事その4は、東屋やベンチ施設などの設置を中心に実施した。保存整備工事その5・その6は、平成25・26年度工事である。保存整備工事その5は、史跡等説明施設関係のうち、古墳模型（解説板⑨を含む模型（2））、乙訓の古墳群模型（解説板⑩を含む模型（3））、標識、説明板（史跡恵解山古墳－説明板、公園案内板（注意札④・⑤））の作成と設置を中心に実施した。保存整備工事その7・その8は、平成26年度工事である。保存整備工事その6は、鉄製武器類埋納模型（模型（1））、史跡名称板、標柱、整備工事その5以外の解説板の作成と設置を中心に実施した。保存整備工事その7は北辺部と前方形中央階段の足元灯の設置を中心に実施した。保存整備工事その8は、北辺部フェンス設置工を中心に実施した。

平成23年度から平成26年度の事業費は、付表-6に示した。

付表-6 保存整備事業費一覧表

歳入表（千円）

年度	国庫補助金	長岡京市負担金	合計
平成23年度	14,185千	16,344千	30,529千
平成24年度	18,793千	27,264千	46,057千
平成25年度	108,396千	154,725千	263,121千
平成26年度	19,350千	38,228千	57,578千
合計	160,724千	236,561千	397,285千

（百円単位以下四捨五入）

歳出表（千円）

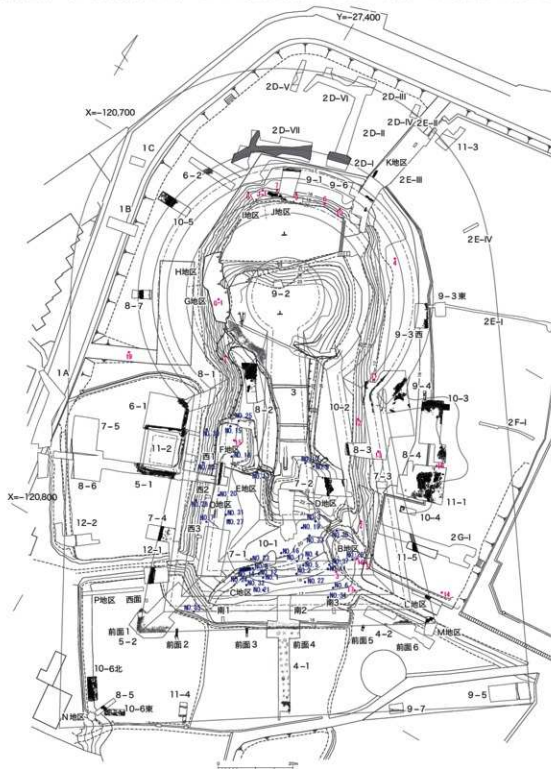
年度	主たる事業費	埋蔵文化財調査費	設計監理費	事務費	合計
平成23年度	11,419千	6,892千	11,186千	1,032千	30,529千
平成24年度	36,460千	2,018千	7,509千	70千	46,057千
平成25年度	245,467千	2,033千	15,596千	25千	263,121千
平成26年度	53,522千	1,670千	984千	1,402千	57,578千
合計	346,868千	12,613千	35,275千	2,529千	397,285千

（百円単位以下四捨五入）

## 第4章 保存・整備工事に伴う埋蔵文化財調査

### 第1節 整備工事に伴う埋蔵文化財調査位置

保存整備工事に伴う保存を目的とした埋蔵文化財調査は、竹木の除根工や、堤撤去工、墳丘復



第21図 整備工事に伴う調査位置と遺物採集地点配置図 (1/1000)

元掘削工、擁壁設置基礎掘削工、側溝や埴輪列復元の基礎掘削工などすべての掘削工事について実施した。主な調査位置については、第21図に示した。

除根工に伴う調査は、墳丘整備範囲すべてにおよび、広い面積を対象とした。第21図のB～J地区は、竹木除根に伴い、タケノコ栽培の土入れ土採掘崖面を調査した箇所である。他の箇所では、除根に伴う掘削深度が土入れによる竹藪客土内にとどまっており、古墳残存面に達していないことを確認した。また、客土に包含されていた遺物は、出土地点の記録を取りながら採集した。遺物採集地点と採集遺物は、第21図と付表-7で表示した。A地区と命名した崖面は、竹藪保存林の中にあり、整備工事において掘削されない部分であることから、現状確認のみを行い、欠番調査地区とした。また実測図標高値は、発掘調査基準点標高値で示した。

K地区は、後円部北縁の墓参道擁壁設置掘削工に伴う調査箇所である。ここでは、掘削深度が墳丘復元推定面に極めて近いことから、墳丘残存面を確認するための掘削工に伴う調査と、重力擁壁基礎掘削工に伴う調査を実施した。

L・M地区は、周濠南東部にある市道5098号線の堤撤去に伴う調査箇所である。L地区は、市道下に埋没していたコンクリート製もたれ擁壁の撤去に伴う調査である。M地区は、周濠整備のための市道の堤部分掘り下げに伴う調査である。

N地区は周濠西辺の側溝改修に伴い、周濠南西隅部分の傾斜面で実施した調査である。周濠西辺から南辺にかけての水路改修に伴う掘削工についても、残存遺構に影響しないことを確認した。

O地区は、埴輪列基礎工の掘削に伴い、埴輪列が検出された部分の調査である。埴輪列復元基礎掘削工では、この部分を除いて埴輪列が露頭する部分はなかった。

P地区は、整備範囲内の一時的な工所用簡易排水溝掘削工に伴う調査である。

このほか、メッシュフェンス、仮整備の恵解山古墳既設説明板などの撤去や改修に伴う掘削、南辺擁壁、電気・水道配管敷設に伴う掘削などについても、遺跡残存面に影響がないことを確認した。また南部域の水路側溝改修工事などの史跡外工事については、工事箇所が長岡京跡と南栗ヶ塚遺跡に該当する位置であるが、面積狭小または線掘り工事であることから、立会調査とした。

南東周濠部の復元整備に伴う長岡第八小学校サブグラウンドの掘り下げは、約50～70cmの掘削深度で行われた(第85図)。サブグラウンド掘り下げに伴う調査では、グラウンド真砂土下から、造成整地砕石を掘りこんで、南に開く葉脈状の透水管が埋設されていた。砕石層の下は、北に向かって薄くなる造成土が敷かれていた。その上面に幅約90cmの板材(コンクリートパネル)をつないで、小学校グラウンドから前方部にかけて直線的に置かれていた。板の両側には、丸太材が置かれ、杭で固定されていた。その位置と方向は、長岡第三中学校サブグラウンドと長岡第八小学校サブグラウンドの境に近く、昭和55年の航空写真(第163図)に写る両サブグラウンドを分かつ植込みに関係する構築物かもしれない。この植込みは、サブグラウンド整備以前には水田界の畦畔が築かれた地境を踏襲しているようである。このように、サブグラウンド掘り下げにおいては、近現代の構築物が検出されたが、長岡第八小学校サブグラウンド整地盛土内に取まり、掘削深度は周濠堆積層まで達しなかった。

## 第2節 検出遺構と土層

### 1 崖面調査（B～J地区の調査）

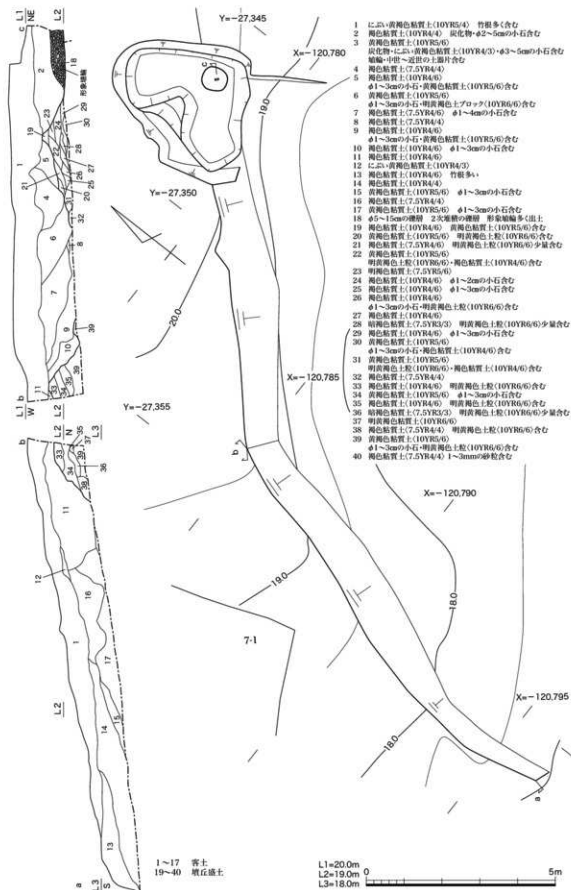
竹木の伐採により墳丘残存形状が観察しやすくなり、土取り崖面に墳丘構築層が露頭している部分のあることが明らかになった。このため、あらわになった崖面にAからJの地区名を付け、そのうちA地区は竹藪保存区域内のため現況観察にとどめた。B～J地区の崖面については、精査して土層の堆積状況を把握するとともに、保存整備工事による影響の有無を検討してきた墳丘復元の推定と矛盾しないか調べることが目的とした。

B地区は、長岡第八小学校の南にある市道5098号線が恵解山古墳の前部南東隅斜面に取り付いたところで、現存墳丘南東隅にある。土探掘坑は、約10mの幅で、北東方向の前部墳頂に向かって、奥行き約10mの範囲で、奥壁は、高さ約3mの崖面になっていた。(第22図、図版5(1))。北東壁面は土入れによる厚い竹藪客土の堆積が主であったが、北西から南にかけての壁面には、古墳構築時の墳丘土が観察された。第22図の土層図の墳丘構築土と考えられる第15層以下について観察すると、以下のことがわかる。まず、前部前端から後円部方向に近い方向の南西崖面では、前部前端に近い第63層以下が先行して構築され、次に墳丘の内側に第45層から第62層までが加えられ、さらに第19層から第44層が積み上げられ、その上面を第17・18層で被覆している。このことから、前部前端側に土手状盛土を施し、順次後円部側に盛土しているように見受けられる。また、前部中軸から前部東辺方向に近い北西崖面では、前部前面から構築されてきた盛土(第19層以下)の東斜面に、第15・16層を構築している。この2層は、前部前端から構築されてきた土層が第17層を例外として10cm前後の厚さの盛土を積み重ねているのに比べて、かなり厚い土層の重なりであり、第19層以下の構築土と様相が異なる。第17・18層は、第15・16層盛土の下地として盛られた土層の可能性もある。

C地区の調査は、前部前面の東半部にある崖面で、南西―北東方向に約20mあった。崖面の比高は約1～1.5mある(第23図、図版5(2))。崖面に露頭した土層は、大部分が竹藪客土であったが、部分的に墳丘構築盛土が観察できた。墳丘構築盛土の第19～40層は、幅約70～100cm、最大厚さ約10～30cm前後のレンズ状堆積の重なりであり、第7次調査7-1調査区で観察された墳丘盛土の様相と極めて類似する。検出標高も7-1調査区に近いことから、少なくとも前部南西側の墳丘盛土の上層構築が、非常に少ない土量の運び込みを繰り返して築く工法であったことがわかる。これは、B地区の土層に見られた前部東半部の墳丘構築土、特に東辺部の墳丘構築土層の在り方と大きな違いである。

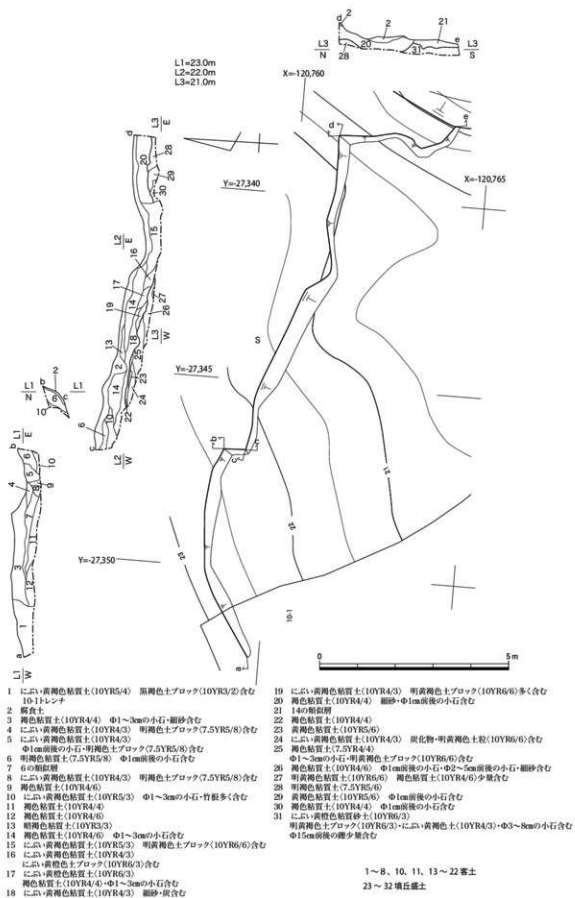
C地区の調査では、ほかに近世の掘り込みと近世墓が検出された。崖面東端部で検出されたもので、不正形な掘り込みは、南北4m以上、東西約3.5m、深さ約80cmを測る。埋土は2層に分けられ、下層は拳大の大きさを主とする礫で埋められていた。この礫層には、少量の近世遺物とともに大量の埴輪片が含まれていた。埴輪片のほとんどは家形埴輪を主とする形象埴輪で、円筒埴輪は小片が少量含まれるに過ぎなかった。近世墓は、近世の掘り込み下層の礫層を除去した面で検出さ



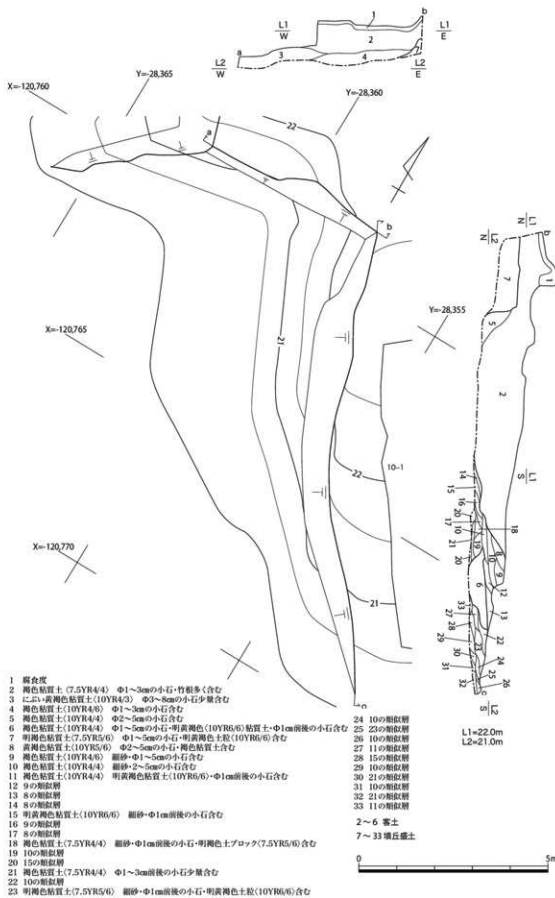


第23図 C地区調査実測図 (1/100)

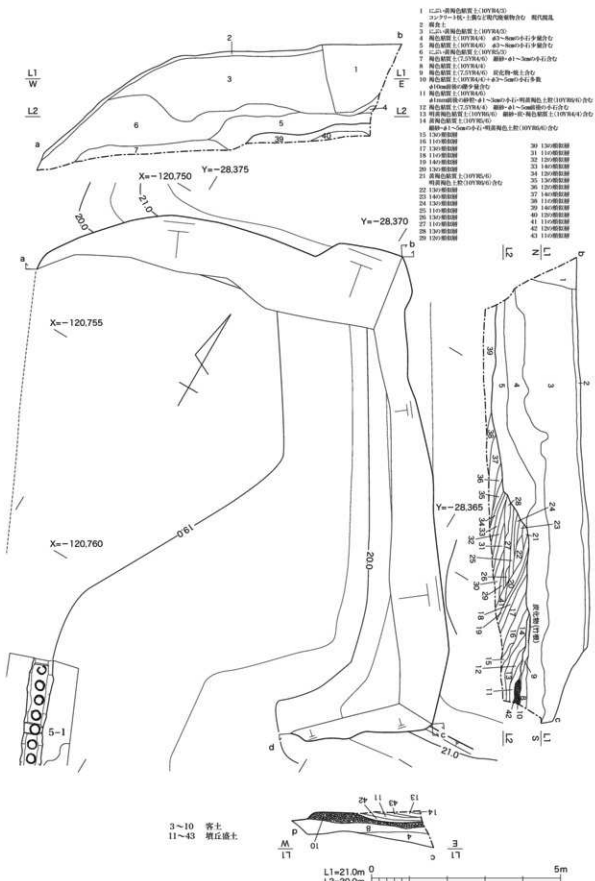




第24図 D 地区調査実測図 (1/100)



第25図 E地区調査実測図 (L1/10)



第26図 F地区調査実測図 (1/100)

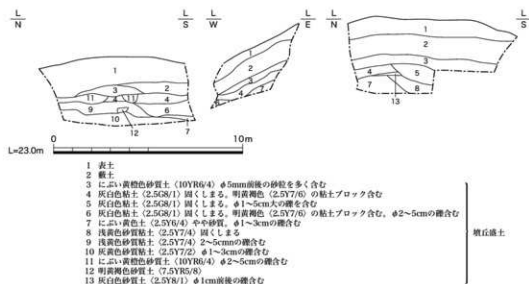
れた。直径約70cmの円形平面で、埋土に骨片を含み、塚墓と考えられる。

D地区は、前方部現状墳頂先端の南傾斜面にある崖面で、東西約15m、比高約70cmを測る（第24図）。この崖面で観察した土層は、ほとんどが竹藪客土で、墳丘構築盛土が検出された範囲は、当地区中央部付近の幅約4m間と東端屈曲部の約1.5m間で、厚さ約30cmと狭かった。墳丘構築盛土は、厚さ約10～20cmのほぼ水平な積み重ねであった。

E地区は、前方部現状墳頂先端の東傾斜面にある崖面で、傾斜方向の東西崖面から現状墳頂東辺に平行する南北崖面に折れ曲がる。総延長約17mで、最大比高約1mを測る（第25図）。この地区でも、大部分は竹藪客土で、南北崖面の屈曲部から南約2m間と、南端の約6m間に、墳丘構築土が検出された。屈曲部で検出した墳丘盛土は、厚さ約50cmと厚いが、南端で検出した墳丘盛土は、幅約60cmから1m、厚さ約30cm未満のレンズ状断面が重なっている。南端の様相は、7-1調査区やC地区の墳丘構築土の在り方と類似する。

F地区は、前方部中央の東側面にある崖面で、傾斜方向に長さ約10m、最大比高約2.5mの北面と、前方部東側辺方向に長さ約12m、最大比高約2.5mの東面と、傾斜方向に約4m、最大比高約1mの南面からなる（第26図）。崖面の比高は大きい、土層の大部分は竹藪客土で、北面の東部約3.5m間から東面の北半約3m間の崖面下端に厚さ約30cm、東面の南半7m間の下部に北面からつながらうように厚さ約0.3～1m、南面の東半約2m間の下部に東面からつながらう厚さ約30cmの古墳構築盛土が検出された。北面から東面北半部の古墳構築盛土からは、厚さ約20cmの土層が水平に盛られた様相はみられるが、墳丘構築法の推測は困難である。東面南半分から南面にかけての土層からは、厚さ10～20cm前後の土層が北から南（後円部側から前方部側）に向かって傾斜しており、後円部側から前方部側に向かって順次盛られていることがわかる。B地区での構築盛土方向と逆であり、どのように折り合いをつけて前方部を構築したのかわからない。

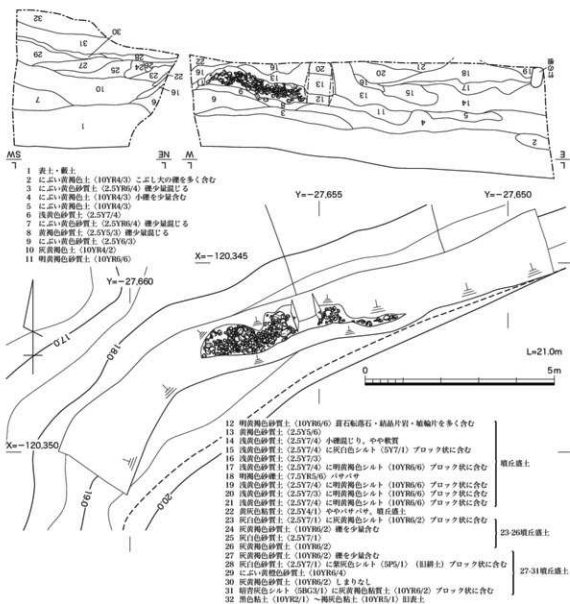
G・H地区は、後円部の西側面にある崖面である。ここでは、表土下の約1mの竹藪客土下に、厚さ約2mもの厚い古墳構築盛土が検出された（第27図）。ここで検出された白色粘土は、前方



第27図 G・H地区調査実測図 (1/200)

部南東部の分厚い白色系埴丘構築盛土と酷似し、興味深い。

I・J地区は、後円部北側にある崖面である。崖面規模は、長さは東西約14mあり、比高約3mを測る(第28図)。この崖面の土層は複雑な堆積を示し、埴丘構築盛土かどうかの識別が困難であった。第28図では、土層図第12層以下を埴丘構築盛土としている。第12層を被覆する土層の第11層上面には、葺石石材礫が面的に集積する部分が見られた。その検出位置から、後円部第二斜面の葺石の可能性が考えられたが、礫内に埴輪片を含み、第3次調査と第8次調査での西ぐびれ部後円部側の葺石の構築状況と様相が異なることから、葺石崩落礫と判断した。埴丘構築盛土と考えられる土層は、崖面西端部の第28・30～32層までが一つのまとまりとしてとらえられ、また崖面東部の第17～21層も一つのまとまりに捉えられる。この両者の間がほとんど埋められ、そこに埋められた第12・13・16・22層が埴丘構築土かどうか判断しかねる。このくぼみを埋めるように堆積した第6・8・9・11層の下位に、葺石崩落礫が堆積または廃棄されたものと考えられる。



第28図 I・J地区調査実測図 (1/100)

## 2 西堤撤去に伴う調査

西堤は、市道585号線から東の民有地を通り、恵解山古墳前方部の南西隅西側面に取り付くように、周濠を渡る堤である（第29図）。地元の言い伝えでは、昭和29年の大雨による被害経験から築かれた堤という。この堤は、周濠を復元するため、撤去することとなった。

堤の規模は、基底幅約5m、頂部幅約1m、高さ約1.4mを測る。

堤撤去に際し、前方部の西側面が堤の中にとどのように残されているかを確認するため、第12次調査が実施された。この調査では、第5次調査5-1調査区で明らかにされた前方部西側面の状況と大きく変わらないことが確かめられた。また、堤構築面は、水田耕作土上面であることも明らかにされた。そこで、重機により堤構築土を慎重に掘削して撤去し、堤構築土は墳丘復元土として利用することとした。

堤の掘削に際しては、掘削土層の観察に注意を払い、前方部との取り付き部、周濠内東半部、周濠内中央部、周濠内西半部、堤撤去西端部の各所で堤全体の横断面を精査・観察した。

堤構築土は、基本的ににぶい黄褐色粘質土で、礫や小石をほとんど含んでいなかった。構築時期を実証する近現代の遺物も皆無であった。また、堤構築工法を類推する土層の重なりも明瞭でなかった。

堤構築の基盤層は、第12次調査で明らかにされた水田耕作土上面であることは、堤構築土下の全体で確認できた。堤構築以前には、同所に水田畦畔があったことが、地図や写真からうかがえるが、その痕跡は観察できなかった。しかし、堤下の水田耕作土は、堤のほぼ中軸に沿って南側が約10cm低くなっており、堤より北側の旧水田が、堤より南の旧水田より約10cm高い耕作面であったことがわかる。旧水田の畦畔は、その北側水田の南辺に築かれていたものと考えられる。

このように、東堤撤去工においては、出土遺物がなく堤構築時期の確認はできなかったが、恵解山古墳の墳丘構築土や周濠堆積層、並びに周濠西辺にかかわる土層への影響は全くなかった。



第29図 西堤既存状況（北から）



第30図 西堤中央断面（北東から）



第31図 西堤西端断面（北東から）



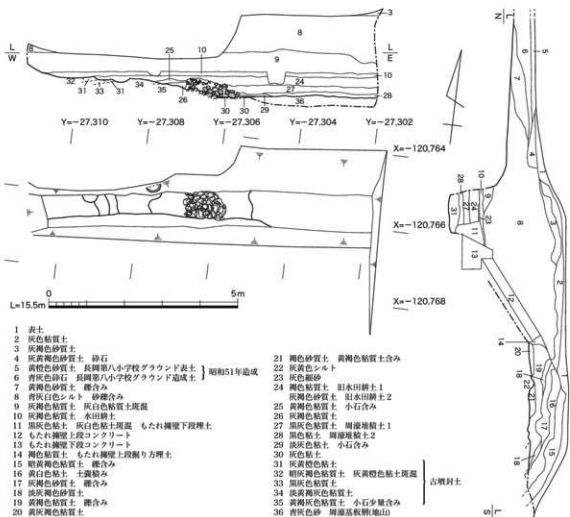
第32図 西堤撤去状況（南から）

### 3 東堤撤去ともたれ擁壁撤去に伴う調査 (L・M地区の調査)

東堤は、前方部南東部東側面に取り付く市道5098号線の堤である。堤は、裾幅約8m、上面幅約5m、高さ約1.5mを測り、撤去範囲は堤の長さ約20m間である。堤の北側は、長岡第八小学校サブグラウンドで、南側は周濠南東部仮整備区域である。両者には高低差があり、仮整備面の方が約1m低い。

堤撤去の掘削中にコンクリート製もたれ擁壁が埋没していることが明らかになった。この擁壁は、周濠復元整備高より上までであるため、復元整備に影響する部分を撤去する必要が生じた。これを撤去するにあたり、もたれ擁壁の規模と構造を把握するための試掘坑がもうけられた。この掘削坑により、もたれ擁壁の基礎部分が、古墳残存面を削り込んでいることが明らかになり、もたれ擁壁撤去のために必要な範囲と、掘削可能な深さのデータを得るための発掘調査を実施することになった。調査範囲は、墳丘東側面の第一傾斜面から東約10m間、深さは、堤の南にある仮整備面より約1.5m、堤上面の路面より約3m、旧水田耕作土上面より約1mをはかる(第33図、図版7(1))。堤構築盛土は、上中下の3層に大区分できる。

最初に築かれた堤は、第17～22層を積み上げた裾幅約5m、高さ約1m、上面幅約2mの規模で、



第33図 L地区調査実測図 (1/100)

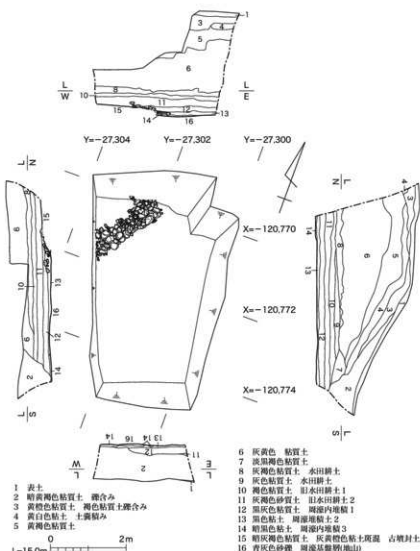
各層上面には凹凸が見られる。現状堤の南半部に埋没している。

次に築かれた第二期堤は、初期の堤上面を土養積みで覆い（第16層）、その上に厚さ約10～20cmの第15層を重ねて築かれている。構築基盤層は初期構築堤上面であり、位置は動いていない。上面幅も、約2mで、変わらない。高さだけを増している。

この2期にわたる堤の北斜面を削ってもたれ擁壁（第33図土層図第12・13層）が築かれている。市道5098号線北側面のもたれ擁壁は昭和40年の京都市都市計画図にみることができる（第5図右列2段目）。この地図では、当L調査区から東約100mの地点から犬川と小畑川が合流する西堤防まで築かれていることがわかる。このもたれ擁壁が、その後調査地区まで延ばされたものと思われる。調査区内では、もたれ擁壁基礎掘削形埋め土（同図土層図第11層）から、王冠栓（スガート）の付いたトリスウスキー640m1瓶（図版20-153・154）が出土した。このことから、当堤の第1段階から第2段階までの構築が、昭和40数年頃であることがわかる。

昭和52年には、長岡第八小学校の建設、昭和58年には小学校グラウンドの南側の宅地開発などにより、もたれ擁壁の北側に市道が拡張され、現状に至ったと考えられる。当調査では、堤構築第三期として、幅約2mの第二期堤上面幅を北に約5m広げていることがわかる（同図第8層）。堤北側の長岡第八小学校サブグラウンド造成土は、第8層より上であることから、道路拡張後にサブグラウンドの造成が行われている。

調査区内では、前方部墳丘東裾の葦石と墳丘盛土及び周濠底面を検出した。もたれ擁壁の基礎は、これとほぼ同一面でおさまっていたが、基礎掘り形は、葦石や墳丘盛土を掘り込んでいた。



第34図 M地区調査実測図(1/100)

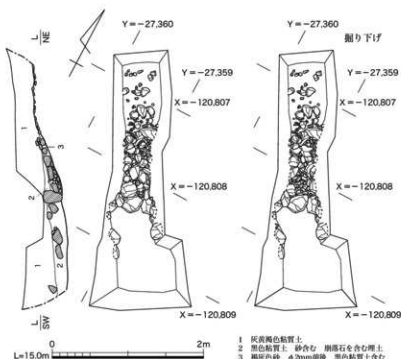


葦石検出位置は、第11次調査11-5調査区の前部東裾葦石基底石延長上にはならず、前部西辺裾の屈曲を前部中軸で東に反転した位置に合致する。このことから、前部西辺の第5次調査5-1調査区、第7次調査7-4調査区、第12次調査12-1南調査区、第5次調査5-2調査区のそれぞれの前部西裾基底石位置から推定した前部先端に向かう裾部の屈曲が、填丘盛土の土圧などの影響によるものでなく、築造計画に基づく計画的なもので、左右対称の形状であることが確認できた。

また、このL地区の調査目標の課題であったもたれ擁壁撤去工による遺構面への影響は、非常に危険な状況にあることが判明し、葦石や填丘構築盛土検出範囲を土囊で被覆し、もたれ擁壁削岩粉砕時にコンクリート片が落下しても安全対策を講じて、重機の爪先が遺跡面に達しないように指示しながら、擁壁撤去工を進めた。

M地区の調査(第34回)は、もたれ擁壁の南側での周濠復元整備工による掘削深度が、遺跡面に達しないかどうかを確認するために、遺跡面の深さを確認する調査として実施した。調査範囲は、東西幅約3m、南北長約5mで、深さ確認位置を前部南東隅復元整備位置付近とした。この位置に設定すると、遺跡面の深さが確認できるとともに、前部復元整備が妥当な形状と位置であるかということも確認できるからである。

この調査では、最も新しい土層として、調査区南西隅に第4次調査4-2調査区掘り込みの埋め土が検出された(第2層の一部)。この層は周濠南東部の仮整備盛土を切り込んだ掘り込みに埋められたものである。これらをまとめて第2層としたが、その下に、東堤構築土があり、その第8層はL地区第22層に対応し、第一期堤構築層の中で最も厚く、西堤構築土と類似する。この盛土の下には数層の水田耕作土(第8~11層)があり、以下に中世周濠堆積土の第12層、周濠内水中堆積層(第13層)と続く。調査区北西部には、填丘構築盛土(第15層)が残り、填丘裾部には第一傾斜面下端部の葦石が2~3段程度元位置を保って検出された(図版7(2))。前部前面の傾斜面葦石には、幅30cm前後の大きめの石が縦方向に並ぶ区画石列がみられる。葦石検出範囲の東端は、屈曲して北にのびる。この屈曲は、前部南東隅の屈曲部になると考えられる。



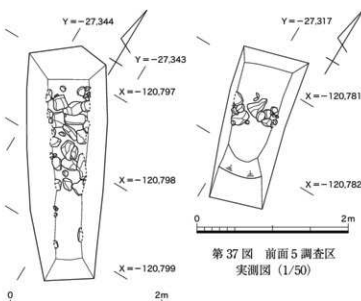
第35回 前面2調査区実測図(1/50)

## 4 前方部確認調査（南1～3、前面1～6の調査）

前方部前面部では、第一テラス面の整備に伴う墳丘構築土残存面の深さ確認として、南1から南3の墳丘部の調査と、裾部に設置する排水溝および集水樹の設置に伴う墳丘裾部や墳丘残存面の状況確認及び周濠内堆積層を状況把握する目的で、前面1から前面6の墳丘裾部の調査を行った。

南1～3の調査では、各所とも掘削計画深度以上に竹藪客土があり、計画通りの工事進行ができることを確認した（第38・39図）。

前面1～6の調査区では、各所で墳丘裾の葦石を検出し、葦石の崩落範囲が周濠側に広がっている状況がうかがえた（第35～37図）。また周濠内堆積の深さも各所で把握し、墳丘裾に設置予定の排水溝基礎掘削による影響がないことを確認した。集水樹設置予定位置では、墳丘裾や周濠底面などの残存面に影響はないが、葦石崩落礫や周濠内堆積の一部にかかる掘削予定深度であったため、これらの記録を取り、土囊積みで遺構残存面を保護して工事にかかった。



第36図 前面3調査区  
実測図 (1/50)

第37図 前面5調査区  
実測図 (1/50)



第38図 南1～3調査区全景(西から)

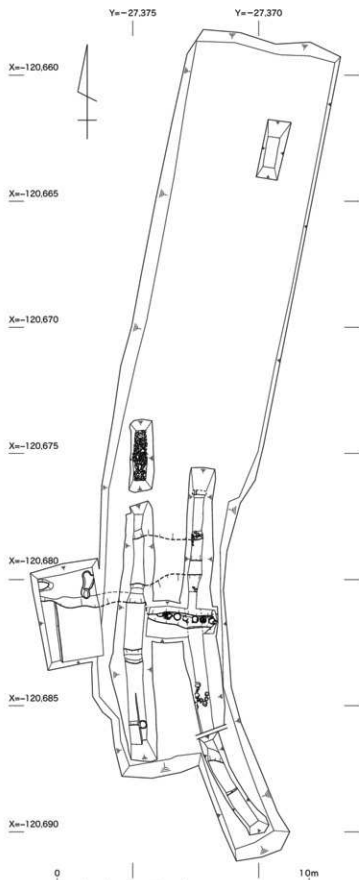


第39図 左-南1調査区土層、中-南2調査区土層、右-南3調査区土層(西から)

### 5 墓参道重力擁壁設置工に伴う調査 (K地区の調査)

K地区の調査は、墓参道の両側に重力擁壁を設置するに当たり、墳丘残存面を傷めないためのデータを得る目的で実施した。まず、東西両擁壁基礎掘削深度が、古墳残存面に達するかどうかを確認する目的で、墓参道両側に溝掘り調査区を設定した。この調査で、第一テラス面埴輪列と第一傾斜面葺石などが検出された。この調査記録をもとに、検出遺構が保護できる重力擁壁の構築計画が検討された。しかし、重力擁壁の基礎掘削において、埴輪列の樹立埴輪残存部上端が、残存状況によっては削平を受ける可能性が捨てきれなかった。そこで、重力擁壁の基礎掘削に際して、埴輪列付近の調査を行い、これを土囊で被覆保護し、慎重に施工した。

K調査区南部の墳丘側を中心に行った調査区の土層は、葺石検出調査区で水平堆積がみられるほか、墓参道面の傾斜に沿った土層堆積がほとんどであった。また、墓参道傾斜区域には、均等な厚さの土層がほとんどなく、複雑な堆積状況をなしていた。これらのほとんどは、過去の墓参道整備に伴う盛土層と考えられる。この盛土層には、棧瓦などが含まれていた。



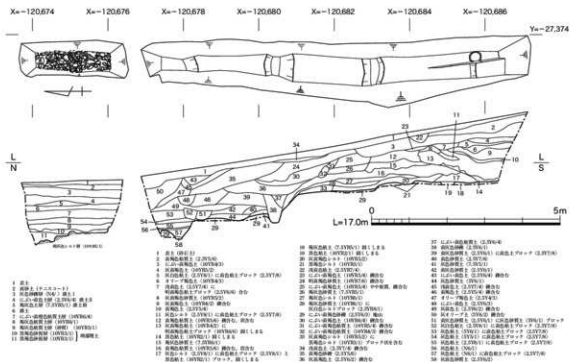
第40図 K地区調査平面図 (1/150)

K地区の調査では、墳丘構築土の残存状況を把握し、第一テラス面の埴輪列と第一傾斜面の構築原位置をとどめる葎石を確認した(第40～43図、図版6)。

埴輪列は、北西部で中世溝により削平を受けていた。樹立埴輪は、7個体が、直線的に並べ置かれていた。設置方法は、布掘りの埴輪設置溝に第1段タ付近まで埋めて固定しており、既調査検出の埴輪列の観察結果と共通する。



第41図 K地区調査 東擁壁西壁面土層図(1/100)



第42図 K地区調査 西擁壁東壁面土層図(1/100)

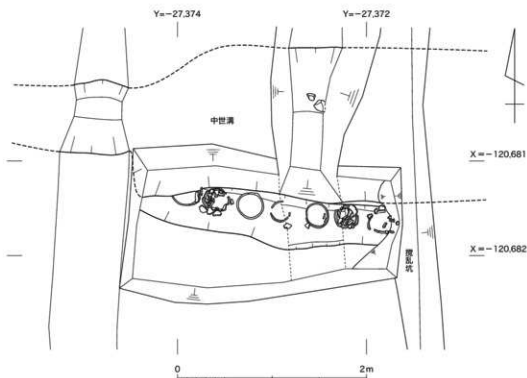
検出した樹立埴輪の各個体を示すのに、東からNo.0、1、2、3と命名した。

埴輪の樹立間隔は、出土状況芯々間で30cmから40cmを測るが、各間隔に均等性は見られなかった。埴輪の大きさは、第1段タガ付近の直径が20数cmの個体がほとんどであり、既調査出土円筒埴輪基底部に類似するが、埴輪列No5は、30cm近くあり、形象埴輪の基底部の可能性がある。ただし、各埴輪は、散乱破片は採集したが、原位置を保つ個体は埋め戻しており、出土状況の平面観察からの考察であることから、詳細は明確でない。

葺石検出区の北端は、葺石面の傾斜よりかなり緩やかになり、しかも礫がほとんどないことから、周濠底面と考えられる。第一傾斜面の葺石は、今までの後円部第一傾斜面葺石の中で、最も残存状況が良かったにもかかわらず、葺石の途切れる北端には、明確な基底石は見られなかった。この状況は、今まで確認されている後円部墳丘裾や第三傾斜面裾の葺石の在り方と共通している。

このほか、第二傾斜面の葺石崩落礫と思われる礫の散在個所が、東擁壁中央調査区南部で検出された。また東擁壁北端調査区では、周濠堆積が厚く見られたが、他所の調査で明らかになっている黒色系の古墳構築時の周濠内堆積は見られず、ほとんどは中世以後の堆積層と考えられる。

当調査区の埴輪列検出位置の西側では、第9次調査（9-6調査区）が行われているが、そこでは、北辺部に近代攪乱坑が穿たれており、埴輪列は確認されなかった。おそらく今回検出した埴輪列の北辺を東西に掘られ、埴輪列西部を削平していた中世溝は、第9次調査区9-6調査区北辺部の近代攪乱に向かい重なるものと思われる。



第43図 K地区調査 第1テラス面埴輪列検出状況実測図(1/40)

## 6 埴輪列復元基礎掘削工に伴う調査 (O地区の調査)

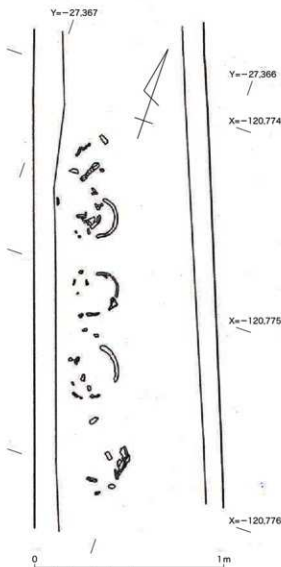
O地区の調査は、埴輪列復元の基礎掘削中に埴輪列が検出されたため、これを現地保存する目的で実施した調査である。埴丘復元整備高は、第6章第4節で詳しく掲載しているように、古墳構築時の整形面より70cmの復元整備保護層を設定している。このため、埴輪列復元基礎掘削工で、遺跡面に削平を受ける危険は及ばない。しかし、残存状況の良い埴輪が樹立した状態で埋没していれば、樹立埋没埴輪の上部が削平を受ける可能性があった。そこで、埴輪列復元基礎工については、基礎掘削の及ぶ範囲全体を対象に調査した。

埴輪列復元基礎掘削工は、西造り出し、第一テラス面西くびれ部から前方部前面中央階段まで、第二テラス面西くびれ部から前方部前面東端まで、前方部墳頂西辺の墓地境から先端を巡って前方部東辺墓地境までの4区域である。そのうち第一テラス面のくびれ部から前方部南西隅にかけて、第二テラス面の南東隅部については、埴丘が大きく削平を受けている部分であることから厚い盛土で埴丘復元しており、埴輪列の残存率は低いと推察できた。そこで、残る部分について慎重に掘削することとした。この掘削工が、前方部西側第二テラス面南半部に進んだ折、樹立した埴輪列が検出された。

検出した埴輪列は、5個体の埴輪が直線的に並んでいる状況であった(第44図)。それぞれの埴輪は、樹立残存する上部がわずかに現れたものと思われた。なぜなら、埴輪列検出面の土層が、テラス面を被覆する埴輪片包含層で、古墳構築時のテラス面にまで達していなかったからである。したがって、他所の埴輪列で観察されている埴輪樹立用布掘り溝の輪郭も、見ることができなかった。

埴輪列復元基礎掘削工との位置関係では、基礎掘削工中軸より埴輪列検出位置中軸が約10cm西に寄っているが、復元整備の埴輪列復元位置がほぼ正しかったことを裏付けた。

この埴輪列については、平面的な検出位置や出土状況、検出高などを記録した後で、土囊で被覆して保護し、その上に保護層を敷いて埴輪設置用のコンクリート基礎を構築した。埴丘復元整備高を古墳構築面より70cm上に設定していたのが幸いした。



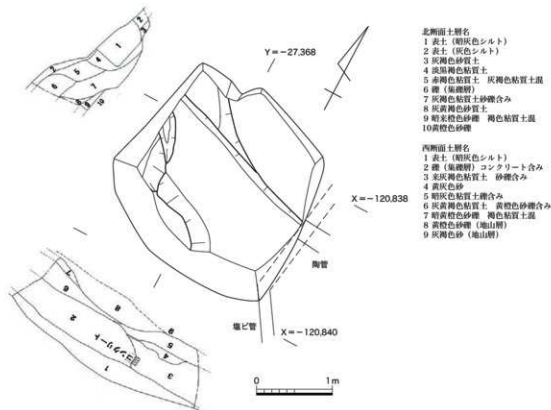
第44図 O地区検出埴輪列 (1/20)

## 7 西辺水路改修事に伴う周濠南西隅調査 (N地区の調査)

N地区の調査は、周濠西辺水路の南端部分で、ここから東に折れ曲がる部分である。この水路は部分的に埋まり、また破損していることから、改修することになった。この位置は、周濠南西隅に推定されている重要な地点の一つであり、西側の低位段丘から下る崖面裾部に当たる。現況でも、周濠内から南西に高くなる傾斜がみられる。周濠西辺水路がこの傾斜面角度を変えることから、現況の地形に見られる傾斜が古墳周濠にかわりがあるのか、また周濠外縁の傾斜面とすれば、水路改修にともなう掘削を行っても遺跡面の保護ができるかという課題のもとに、水路の基礎掘削に際して調査した。

調査区は、南西の低位段丘から北東の古墳周濠に向かって傾斜する地形部分で、南北約2.5m、東西約2.5mを調査した(第45図)。西辺既存水路の集水溝所在位置であり、ここから南の水路まで陶管による暗渠となっていた。

調査の結果、現況の傾斜面は近代の周辺整備により形成されたものであることが明らかになった。また、周濠からの地盤層のなだらかな上がりはあるものの、既存U字溝や集水溝、陶管暗渠の設置に伴う基礎掘削でかなり削平を受けていることが明らかになった。したがって、既存水路位置に重ねて水路改修するのに問題ないことが明らかになった。また、周濠南東隅の位置と現況地形の形成時期については、昭和42年の京都府教育委員会が記録した患解山古墳の地形図が手掛かりになる(第5図)。この図では、周濠西辺の既存水路や水路沿いのコンクリート擁壁のさらに西側に、南北に長い池がみられる。おそらくこの池が、周濠西辺になるものと考えられる。



第45図 N地区調査実測図 (1/50)

## 8 その他の工事に伴う調査

保存整備工事に伴う埋蔵文化財調査は、ジオファイバー基礎掘削工、工事用仮設排水溝掘削工、前方部西辺墳丘復元整備掘削工、西くびれ部墳丘復元掘削工、墓参道御溝基礎掘削工、史跡外南水路改修掘削工、電気・水道施設設置掘削工、メッシュフェンス設置掘削工、サイン施設土台基礎掘削工などについても実施した。

ジオファイバー施工に伴う調査区は、墓地の東斜面、古墳の復元では、第二傾斜面の東くびれ部から前方部方向にかけての長さ約25m範囲である（第46～49図）。この調査では、第10次調査10-2調査区の土層図が役立った。最も埴輪片を多く含み、中世遺物も共存する土層は、掘削面の最下層堆積の礫層であった。この礫層は、10-2調査区の20～22層に対比できる。この礫層は、前方部第二傾斜面崩落礫と考えられる。礫層内には14世紀と思われる瓦器碗が含まれており、中世以後の堆積と考えられる。他所でも、墳丘構築土残存面を被覆する土層から、中世や長岡京期、また古墳時代後期の遺物が包含されていることがある。周濠内堆積からそれら各時期の遺物が出土する場合は、さほど不思議はないが、近世近代遺物の無い、中世包含層からこれらの遺物が出土することをどのようにとらえるか、検討する必要がある。

前方部西側面では、第二テラス面整備高さまでの掘削で、遺跡残存面に届かないかどうかを確認する調査として、西1～3の調査区を設けた。その結果、いずれの地点においても、畑作耕作土と竹藪客土内に取まることを確認した（第50図）。この付近は、保存整備工事着手前まで栗畑であり（図版2（1））、それ以前は、畑地であった（第163図上）。さらに以前は、周辺部同様の竹藪であった（図版1（1））。その土地利用のあり方が、土層に表れたものである。

仮設工事用排水溝は、前方部西周濠南半部で撤去した西堤の南に設置された。この掘削は、表土の耕作土



第46図 ジオファイバー基礎工  
断面土層



第47図 ジオファイバー基礎工  
北壁面中世礫層



第48図 ジオファイバー基礎工  
西壁面中世礫層



第49図 ジオファイバー基礎工  
中世礫層の一部





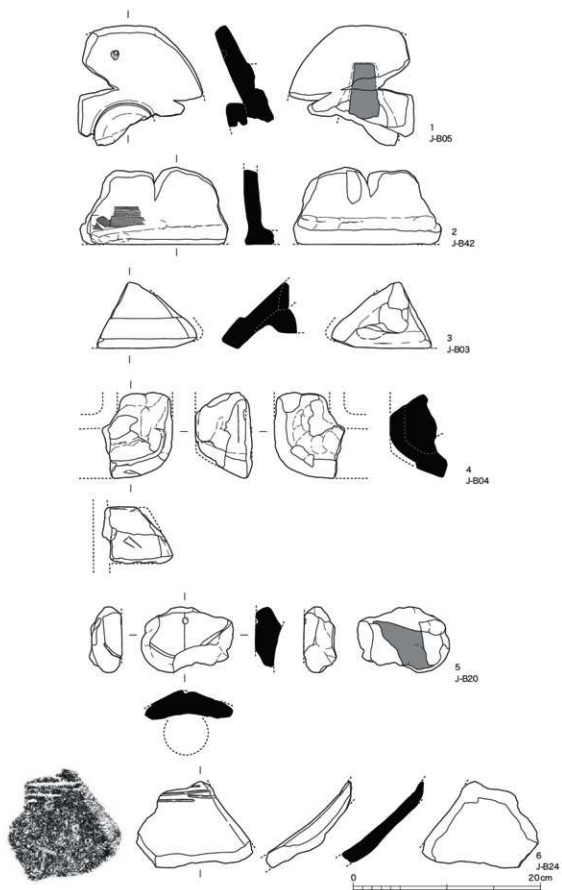
### 第3節 出土遺物

整備工事に伴う調査で出土した遺物には、惠解山古墳関係の埴輪や構造物石材があるほか、惠解山古墳構築期以前の石器や土器、古墳構築以後の土器や陶磁器、金属製品などがある。出土地点と出土器種器形および出土量は、付表―7にまとめた。この表の遺物名の項目で、円筒埴輪としたものは、形象埴輪の円筒部なども含まれていると思われる。遺物の総出土量は4832点あり、その内、惠解山古墳期の遺物は4521点で、総出土量の約93%が惠解山古墳関係遺物であった。出土遺物の個体ごとの特徴は示せなかったが、実測図は第53～60図、写真は図版8～20に掲載した。

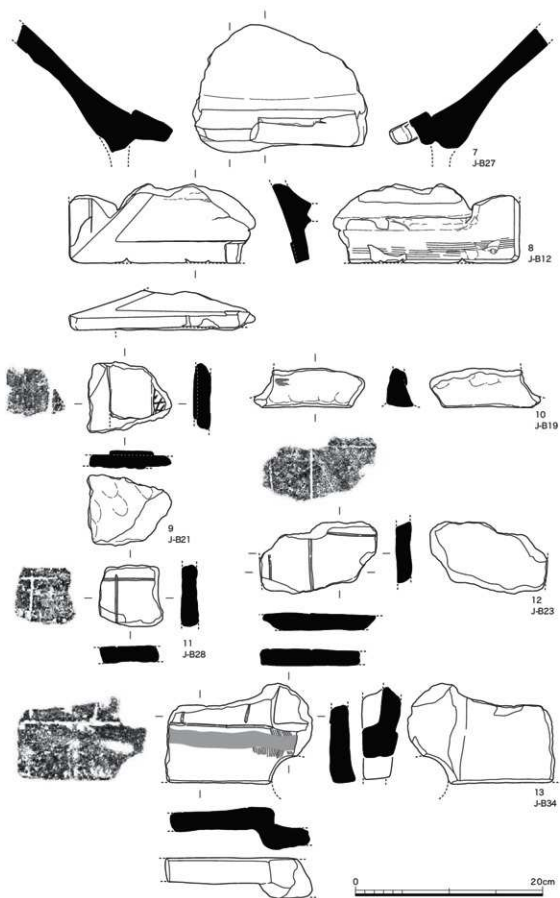
惠解山古墳関係遺物では、埴輪が大多数を占め（第53～59、図版8～17）、ほかに堅穴式石室石材を中心とした他地域からの搬入石材（図版18・19）がある。埴輪には、円筒埴輪（29・30・59・60・62）、家形埴輪（1～24・37・63～96・111～113）、蓋形埴輪（25・27・28・35・106～108）、盾形埴輪（31・38・39・99～101）、甲冑形埴輪（32・42～45・98）、鶏形埴輪（41）などがある。40、61は鱗付円筒埴輪の可能性があるが、これ以外に鱗付埴輪と思われるものの出土が無いので、盾形埴輪などの形象埴輪になるかもしれない。60は円筒埴輪としたが、赤色顔料が塗布されており、形象埴輪の円筒部である可能性がある。30は円筒埴輪最上段に小円孔を2孔穿たれた個体で、出土状況から、K地区埴輪列No1の口縁部片と考えられる。図版8（2）の家形埴輪は、花園大学高橋克壽氏指導のもと、花園大学考古学研究室の協力を得て復元した家形埴輪で、前方面部のC地区東端近世土坑堆積礫層から出土した。第60図の家形埴輪復元想定略図は、復元に用いた破片の位置を示し、番号は実測図掲載番号を示している。屋根の軒先近くには、接合痕が巡るが、図版8（2）の復元では、あえて復元していないので、黒い帯が巡る。第60図では、72・74の接合面に屋根部接合痕と同様のヘラ書き線刻があることと、接合幅が類似することから、これを乗せた想定で図化した。第11次調査出土の水鳥形埴輪（図版8（1））も、花園大学の協力により復元できた。甲冑形埴輪の胴と草摺の破片（44・45・98）は、胎土、焼成状況、器厚などがきわめて共通し、上下一体型に想定し、第60図に示した。高廻り2号墳出土資料のような胴と草摺間の鈎状突帯の有無は不明。42・43は、第60図で袖としたが、よくわからない。

惠解山古墳に關係する構造物石材としては、堅穴式石室石材と考えられる結晶片岩（114～134）や石英斑岩（137）などがある。結晶片岩には、青みを帯びた石材（図版18（1））と、わずかに赤みを帯びた石材（同図版（2））がある。このうち129の側面には、赤色顔料の可能性がある付着物がある。ほかに、扁平な砂岩（136・139）や、加工痕のある安山岩（ヒン岩）～輝綠岩（135）がある。石室石材または石棺石材と思われる凝灰岩片（50）も採取している。

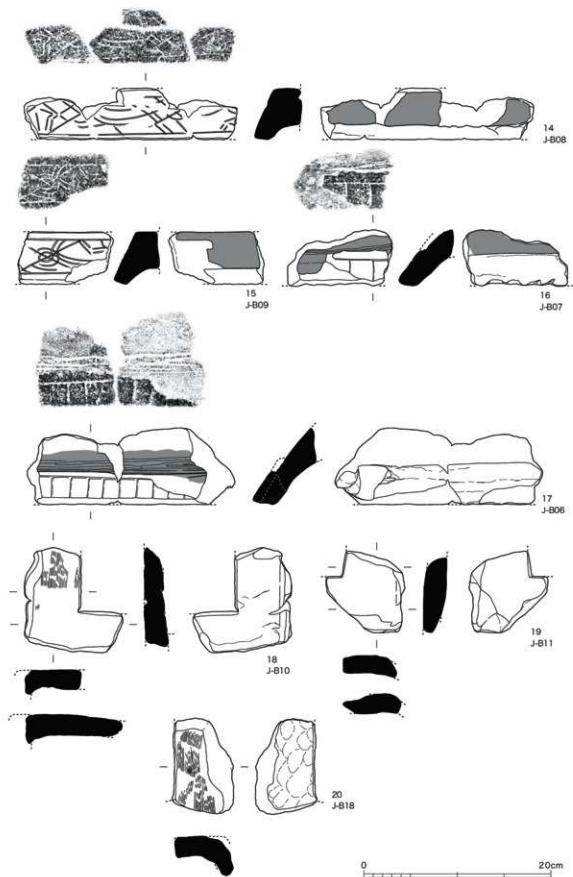
惠解山古墳構築期以前の遺物には、弥生土器やササカイト片（49）がある。惠解山古墳構築後の遺物には、古墳時代後期の須恵器杯類（56・57）、長岡京期から平安時代の瓦（155）や土器類（54・55）、中世の土器類や陶磁器類（53・140）や滑石製石鍋（51）、近世から近代の土器類（52）や陶磁器類（141～152）、金属製品（47・48・153）土製品（46・144～152）、石製品（58）、ガラス製品（154）などがある。



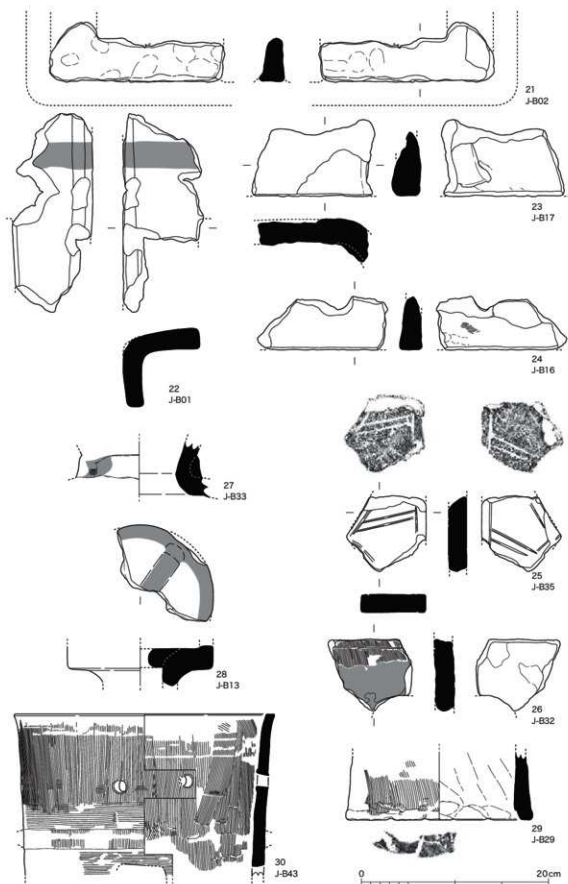
第53图 家形埴輪実測图—1 (1/4)



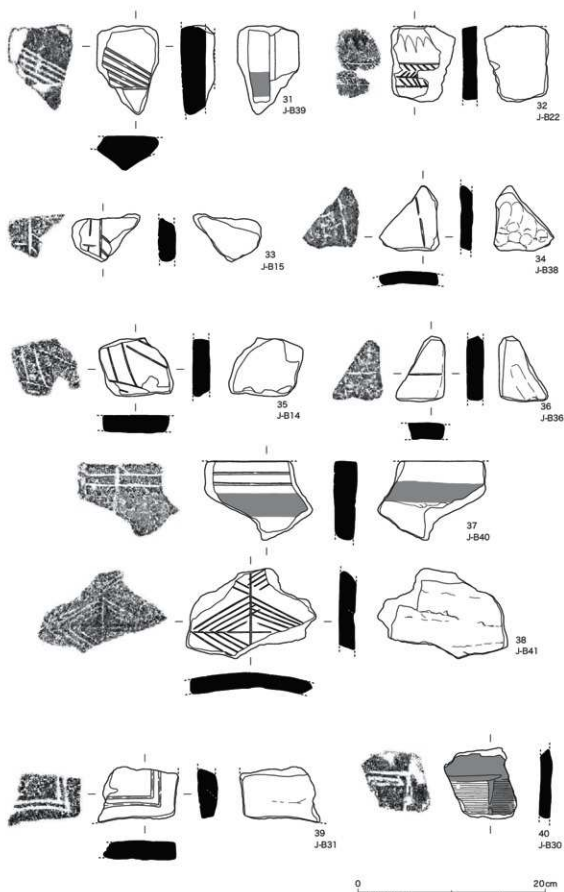
第54図 家形埴輪実測図-2 (1/4)



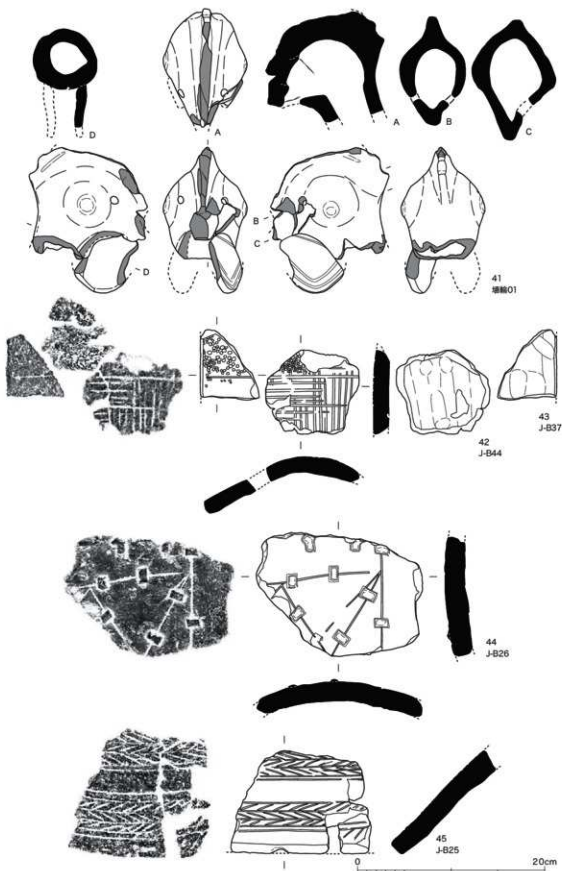
第55図 家形埴輪実測図—3 (1/4)



第56図 家形、釜形、普通円筒埴輪など実測図 (1/4)

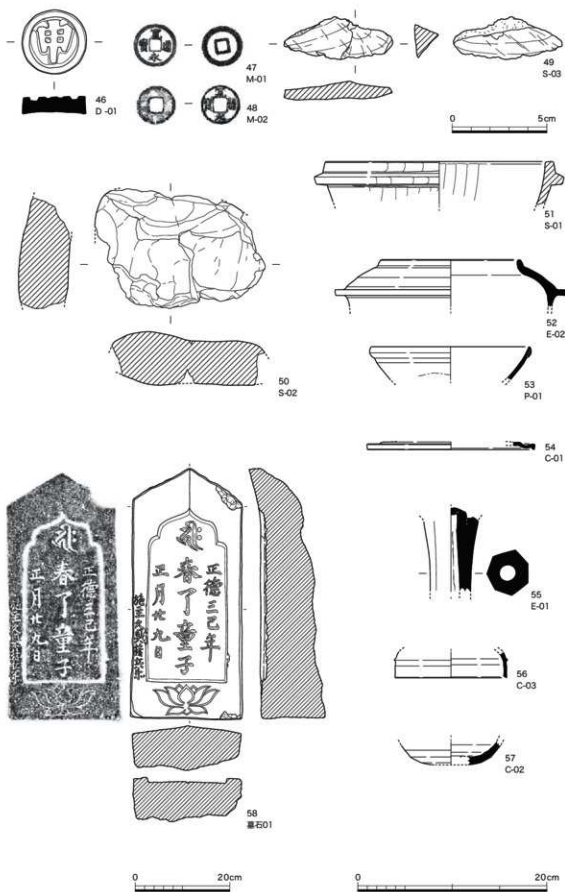


第57図 家形、盾形埴輪など実測図 (1/4)

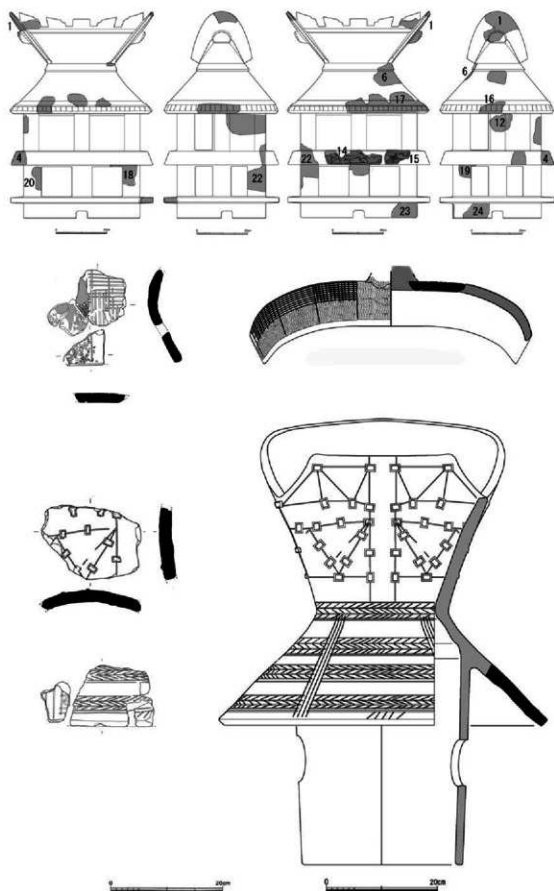


第58图 鳥形、甲冑形埴輪実測図 (1/4)





第59図 恵解山古墳関係以外の遺物実測図 (1/2・1/4・1/8)



第60図 家形埴輪と甲冑形埴輪復元想定略図



出土位置	地点・土層・整理番号	遺物時代 時期	遺物名	量	備考	取り上げ 年月日	工事名 工事内容	採取・整理番号 採区・調査番号		
	中庭	不明時期	瓦	2			南位置換掘工			
前方部東	第1テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	13008	整備工事その2	図-写真なし		
	竹藪古土	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	13043	整備工事その2	図-写真なし		
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	13043	整備工事その2	図-写真なし		
	南位置換土	不明時期	不明	4	1個一単位	13019	整備工事その1	図-写真なし		
前方部東	墳頂部	志願山古墳期	不明埴輪	不明			整備工事その1	図-写真なし		
	399 竹藪古土	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	基底部	12728	整備工事その2	図-写真なし		
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	不明埴輪	不明		2	1個一単位	図-写真なし		
	362 竹藪古土	不明時期	不明	1			南位置換掘工			
前方部東	第2テラス面	長閑期	土師器	壺	1口部	12726	整備工事その2	図-写真なし		
	365 竹藪古土	2心		1	検出群	1	南位置換掘工			
前方部東	第2テラス面	平安時代	須恵系	1口部	1	13022	整備工事その2	図-写真なし		
	361 基壇造成盛土	鎌倉時代	青磁	柄	体部	1	南位置換掘工			
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	13029	整備工事その2	図-写真なし		
	362 基壇造成盛土	平安時代	須恵系	1	6組配	1	南位置換掘工			
前方部東	第1テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	13022	整備工事その2	図-写真なし		
	343 8-3調査区(埋戻し)	不明時期	不明	1			南位置換掘工			
前方部東	第1テラス面	奈良時代	須恵系	壺	体部	1	13022	整備工事その2	図-写真なし	
	343 基壇造成盛土	平安時代	須恵系	壺	体部	1	13022	整備工事その2	図-写真なし	
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	13020	整備工事その2	図-写真なし		
	346 墳位置換土	不明時期	不明	8	4個体		南位置換掘工			
	346 墳位置換土	奈良時代	不明埴輪	不明	体部					
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	不明埴輪	不明		13020	整備工事その2	図-写真なし		
	346 墳位置換土	不明時期	不明	1			ジオファイバー基礎掘工			
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	6	13041	整備工事その2	図-写真なし	
	346 墳位置換土	不明時期	不明	1			ジオファイバー基礎掘工			
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	7	13049			
	346 墳位置換土	不明時期	不明	1						
前方部東	第2テラス面	平安時代	須恵系	壺	体部	2	14組配	13042	整備工事その2	図-写真なし
	346 墳位置換土	鎌倉時代	瓦器	柄					ジオファイバー基礎掘工	
	346 墳位置換土	近代	レンガ	1						
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	6	13043	整備工事その2	図-写真なし	
	9-4調査区(西)	不明時期	不明	3					ジオファイバー基礎掘工	
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	6	13047	整備工事その2	図-写真なし	
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	2						
	10-2調査区(西前部)	形象埴輪	家か	扁平状	3					
	10-2調査区(西前部)	不明埴輪	不明	意形埴輪	柄部	1				
	10-2調査区(西前部)	不明埴輪	不明	不明	21					
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	形象埴輪	家か	立ち盛り	1	13047	整備工事その2	実測図なし	
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	17					ジオファイバー基礎掘工 図面16-106	
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	1	13046	整備工事その2	図-写真なし	
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	1					ジオファイバー基礎掘工 図面17-106	
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	2	13046	整備工事その2	図-写真なし	
	10-2調査区(西前部)第6層	形象埴輪	家か	基底部	3				ジオファイバー基礎掘工	
	10-2調査区(西前部)第6層	不明埴輪	不明	円筒部	1					
	10-2調査区(西前部)第6層	不明埴輪	不明	不明	17					
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 15	基底部	13046	整備工事その2	図-写真なし		
	9-6掘以下	不明時期	不明	9					ジオファイバー基礎掘工	
	9-6掘以下	志願山古墳期	形象埴輪	壺	立ち盛り受け部	1				
	9-6掘以下	不明時期	不明	1						
	9-6掘以下	形象埴輪	家か	意形埴輪	柄部	2				
	9-6掘以下	不明埴輪	不明	不明	120					
	9-6掘以下	奈良時代	須恵系	壺	体部	1				
	9-6掘以下	平安時代	須恵系	壺	体部	1				
	9-6掘以下	近代	陶器	不明	1					
	9-6掘以下	近代	レンガ	不明	1					
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 19	ナ字部	13047	整備工事その2	図-写真なし		
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	2					ジオファイバー基礎掘工 図面17-111	
	10-2調査区(西前部)	形象埴輪	家か	検尺	1	13048	整備工事その2	実測図なし		
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	1					ジオファイバー基礎掘工 図面17-113	
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	形象埴輪	家か	立ち盛り	1	13047	整備工事その2	実測図なし	
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	1					ジオファイバー基礎掘工 図面17-108	
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	形象埴輪	壺	立ち盛り	1	13047	整備工事その2	実測図なし	
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	1					ジオファイバー基礎掘工 図面17-110	
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	形象埴輪	家か	検尺	1	13047	整備工事その2	実測図なし	
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	1					ジオファイバー基礎掘工 図面17-112	
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	形象埴輪	家か	検尺	1	13047	整備工事その2	実測図なし	
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	1					ジオファイバー基礎掘工 図面17-106	
前方部東	第2テラス面	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か 1	ナ字部	2	13047	整備工事その2	図-写真なし	
	10-2調査区(西前部)	不明時期	不明	5					ジオファイバー基礎掘工	
	10-2調査区(西前部)	不明埴輪	不明	円筒部	25					
	10-2調査区(西前部)	奈良時代	瓦器	茶蓋	柄部	2	1個一単位			

## 62 出土遺物

出土位置	遺点・土層・整理番号	遺物時代 時期	遺物名	品	備考	取り上げ 年月日	主要な 工事の詳	実測・整理番号 棟図・位置番号	
		平安時代 江田時代	磁器 土師器	壺 2					
前方部	第2アラス面 10-2調査区西辺	志願山古墳群	円筒埴輪 不明埴輪	普通円筒か 不明	高直部	5	130417	整備工事その2 ジョウフバー基礎掘削工	図・写真なし
前方部	第2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪 不明埴輪	普通円筒か 不明	タラ部 高直部	1 6	130422 130624	整備工事その2 ジョウフバー基礎掘削工	図・写真なし
前方部	第1脚柱面 堀	志願山古墳群	円筒埴輪 平安時代 磁器	普通円筒か 壺	タラ部 堀部	1 1	130425 130415	整備工事その2 墳丘復元地上工	図・写真なし
前方部	第1脚柱面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪 不明埴輪	普通円筒埴輪	タラ部	1	131028	整備工事その2 墳丘復元掘削工	図・写真なし
前方部	第1脚柱面 堀	志願山古墳群	円筒埴輪 不明埴輪	普通円筒か 不明	タラ部	5	131003	整備工事その2 墳丘復元掘削工	図・写真なし
前方部	第1脚柱面 堀	志願山古墳群	円筒埴輪 不明埴輪	普通円筒か 不明	タラ部	1	130701	整備工事その2 墳丘復元掘削工	図・写真なし
前方部	第1アラス面 現存地形形成作業 残存形面表層	古墳時代前期	磁器器 土師器	杯	底部か大直部	1 6	130003	整備工事その2 C-02 因縁20 除根掘削工	C-02 因縁20 05508 57
前方部	第2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪 形埴輪	小片 不明		2 2	140128	整備工事その2 墳丘復元掘削工	図・写真なし
前方部	第2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪 不明埴輪	普通円筒か 普通円筒か	タラ部	2	同一棟体 120127	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	図・写真なし
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 土師器	家形埴輪か 土師器		1 1	120104	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	図・写真なし
前方部	第1脚柱面 曲敷築 遺土塊物体内	志願山古墳群	不明埴輪 不明	不明		4	130322	整備工事その2 墳丘復元に伴う調査	図・写真なし
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	不明埴輪 不明	不明		13 小片	131031	整備工事その2 墳丘復元掘削工	図・写真なし
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	円筒埴輪 不明埴輪	普通円筒か 不明	円筒部	3 2	120216	整備工事その1 除根工に伴う調査	図・写真なし
前方部	第2アラス面 曲敷 残存形面表層	志願山古墳群	形埴輪 形埴輪	蓋形埴輪 家形埴輪か	立入部 タラ部	1 1	130003 120209	整備工事その1 J-16 因縁16 除根掘削工	J-16 因縁16 05508 25
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪か		1	120209	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 37
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪か	扁平凸凸 筒形小碗	1 1	140416 120213	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 9 8と惣括筋土
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	扁平凸凸	1	140416	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 11 同図に290 8と惣括筋土
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	筒形椀	18 1	140416 120213	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 8・87 -85
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	4.884一箇体	1	120213	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 2 8と惣括筋土
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	織	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 1
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	麻笥笠筒	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 4
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	人足下層椀 土器	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 6
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	2段皿 埴(待経型)	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 12
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	麻笥笠筒	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 14
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	麻笥笠筒	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 15
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	人足下層椀 軒	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 写真なし 05508 16
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	人足下層椀 軒	7	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 17・65 -63
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	1段皿 深鉢	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 18
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	1段皿	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 因縁16 05508 19
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	1段皿 深鉢	1	復元発掘 120210	整備工事その1 除根工に伴う仮掘調査	J-16 写真なし 05508 20
前方部	第2脚柱面 堀	志願山古墳群	形埴輪 不明	家形埴輪	2段皿	1	復元発掘 120210	整備工事その1	J-16 因縁16



## 64 出土遺物

出土場所	地点・土層・整理番号	遺物時代 時期	遺物名	品	備考	取り上げ 年月日	主要な 工事名	実測・整理番号 検出・回収番号	
前方部 側面	築3期I面調査 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒埴輪	タガ部 高底部	8 3 25	12025	整備工事その1 除根工に伴う全面調査	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面調査 竹藪赤土	志願山古墳群	赤染埴輪	筒形埴輪か? 扁平板状		1	12010	整備工事その1 除根工に伴う全面調査	1-015 図説 33
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒か	タガ部	2 6	12027	整備工事その1 除根工に伴う全面調査	図・写真なし
前方部 側面	築1期跡面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒埴輪	タガ部	1	13106	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築1期跡面調査区平 竹藪赤土	平安寺時代	瓦	平瓦	円筒瓦目 凸縁瓦目	24 4個体	14029	整備工事その2 北面面心土 排水溝設置並敷地加工	北面面心土 図説 26.155
前方部 側面	築2アラス面 埴輪埋積特定位置 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒か?		15	14027	整備工事その2 基礎埋戻土基礎掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 埴輪埋積特定位置 土層	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒か	タガ部	4 27	13106	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒か	タガ部	1	12006	整備工事その1 除根工に伴う調査	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		1			
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か		1	12001	整備工事その1 除根工に伴う調査	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か		1	12025	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒か	タガ部	1	12008	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		1			
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か		1	12018	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	タガ部	1	12019	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	タガ部	2			
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	タガ部	1	12017	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	タガ部	3	12026	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築1アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒か	高底部	1	12008	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か		1	12023	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か		1	12018	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	高底部	1	12026	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	タガ部	1	12025	整備工事その1 掘削工に伴う調査	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		1	12018	整備工事その1 掘削工に伴う調査	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	高底部	2			
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	高底部	1	12025	整備工事その1 掘削工に伴う調査	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		3	12030	整備工事その1 掘削工に伴う調査	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		9	13028	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒か	タガ部	3	13028	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		29			
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	円筒埴輪	普通円筒か	タガ部	1	13028	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	タガ部	17	13005	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	高底部	9			
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明	山陽部	1	13006		
前方部 側面	築2アラス面 埴輪埋積特定位置 埴豆復元土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		172			
前方部 側面	築2アラス面 埴輪埋積特定位置 埴豆復元土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		9	13106	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		3	13029	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明	住居	1			
前方部 側面	築2アラス面 竹藪赤土上7L	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	高底部	1	12128	整備工事その1 掘削工に伴う調査	図・写真なし
前方部 側面	築1期跡面 埴豆復元土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		1	13005	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	タガ部	2	13005	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		4			
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	高底部	9	13004	整備工事その2 埴豆復元掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明		1			
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	タガ部	1	13025	整備工事その1 掘削工	図・写真なし
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	不明	埴豆	1	6世紀		
前方部 側面	築3期I面 竹藪赤土	志願山古墳群	不明埴輪	普通円筒か	タガ部	1	13012	整備工事その2 掘削工	図・写真なし

出土遺跡	地点・土層・整理番号	遺物時代 分類	遺物名	量	備考	取り上げ 年月日	工事名 工事内容	採取・整備資料 採戻・調査番号	
前面	埋存遺土上	不明	基礎瓦	4	同一個体	13120	基石夜光土基礎掘削工		
前方部	第1層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	2		131112	整備工事②⑦	図・写真なし	
前方部	竹藪赤土	不明	不明	8			基石夜光土基礎掘削工		
前方部	第1層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	4		131010	整備工事②⑦	図・写真なし	
前面	前段調査区	形象埴輪	不明	編甲板状	1	高辺あり	130503	築土側水溝設置掘削工	
	葦石積層埋蔵層	不明	不明	6					
		土師器	不明	2					
		長岡式期	不明	2					
		平安時代	須恵器	壺	1	6月埋埋			
			瓦	瓦	1	8個体			
		鎌倉時代	土師器	皿	1				
		室町時代	常土土器	皿	1				
		不明	土師器	不明	1				
			自然遺物	散片	2				
前方部	第1層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	2		130701	整備工事②⑦	図・写真なし	
前面	前段調査区	不明	基礎瓦	1			葦石積層埋蔵掘削工		
前方部	第1層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	8		130702	整備工事②⑦	図・写真なし	
前面	前段調査区	不明	不明	1		130702	葦石積層埋蔵掘削工		
		不明	不明	75		3個体			
前方部	第1-3層前面	志摩山古墳期 形象埴輪	嵌合蓋小	編甲板状	1	130329	整備工事②⑦	図・写真なし	
前面	第1テラス面	志摩山古墳期 不明埴輪	不明	不明	12	131000	整備工事②⑦	図・写真なし	
		平安時代	土師器	杯蓋類	1		埋込瓦敷掘削工		
前方部西	0面区	志摩山古墳期 不明埴輪	不明	1		1312	整備工事②⑦	図・写真なし	
	第2テラス面						埋込瓦敷掘削工		
	埋込瓦敷位置								
	竹藪赤土								
前方部西	前面	志摩山古墳期	不明	9		131006	整備工事②⑦	図・写真なし	
	埋込瓦敷遺土						埋込瓦敷遺土上		
前方部西	第2層前面	志摩山古墳期 形象埴輪	形象埴輪	テラス部	1	131018	整備工事②⑦	図・写真なし	
	埋込瓦敷遺土		円筒埴輪	テラス部	2		埋込瓦敷掘削工		
			不明	不明	13				
前方部西	くびれ部	志摩山古墳期 不明埴輪	不明	2		131011	整備工事②⑦	図・写真なし	
	第1テラス面		近代	小片	1		埋込瓦敷遺土上		
前方部西	くびれ部	志摩山古墳期 形象埴輪	嵌合	円筒小	1	130311	整備工事②⑦	図・写真なし	
	第2層前面		不明	不明	125		埋込瓦敷掘削工		
前方部西	第3層前面	志摩山古墳期 形象埴輪	形象埴輪小	テラス部	1	130126	整備工事②⑦	図・写真なし	
	№18 茅葺区		円筒埴輪	普通円筒小	1		埋蔵工に伴う調査		
前方部西	竹藪赤土	志摩山古墳期 不明埴輪	不明	2		130125	整備工事②⑦	図・写真なし	
	№15 茅葺区						埋蔵工に伴う調査		
前方部西	第3層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	2		130127	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土		不明	不明	4		埋蔵工に伴う調査		
前方部西	第3層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	1		130127	整備工事②⑦	図・写真なし	
	茅葺区		不明	不明	3		埋蔵工に伴う調査		
前方部西	第3層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	テラス部	3	130121	整備工事②⑦	図・写真なし	
	№13 茅葺区		基礎瓦	不明	2		埋蔵工に伴う調査		
	竹藪赤土		円筒埴輪	3					
		不明	不明	不明	13				
		近代	土製品	炊具人形小	1				
前方部西	第3層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	形象埴輪	テラス部	1	130127	整備工事②⑦	図・写真なし	
	№29 茅葺区西側		不明	不明	1		埋蔵工に伴う調査		
前方部西	第2層前面	志摩山古墳期 不明埴輪	円筒小?	1		130127	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土						埋蔵工に伴う調査		
前方部西	第3層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	基礎部	1	130127	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土						埋蔵工に伴う調査		
前方部西	第3層前面	志摩山古墳期 不明埴輪	普通円筒小	6		130130	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土						埋蔵工に伴う調査		
前方部西	第3層前面	志摩山古墳期 不明埴輪	普通円筒小	2		130118	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土						埋蔵工に伴う調査		
前方部西	第2テラス面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	テラス部	1	130126	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土		不明	不明	2		埋蔵工に伴う調査		
前方部西	第2テラス面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	テラス部	2	130304	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土		不明	不明	8		埋込瓦敷掘削工		
前方部西	第2-3層前面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	テラス部	2	130226	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土		不明	不明	1		埋込瓦敷掘削工		
			不明	不明	30	130311			
前方部西	第2テラス面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	テラス部	1	130220	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土		形象埴輪	嵌合	1	130304	埋込瓦敷掘削工		
			不明	不明	20	130305			
		鎌倉時代	常土土器	壺小	1	131102			
前方部西	第2テラス面	志摩山古墳期 不明埴輪	不明	9		130226	整備工事②⑦	図・写真なし	
	竹藪赤土						埋込瓦敷掘削工		
前方部西	第2テラス面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	テラス部	1	130305	整備工事②⑦	図・写真なし	
	葦干土		不明	不明	16	2個体	埋込瓦敷掘削工		
前方部西	第2テラス面	志摩山古墳期 不明埴輪	不明	不明	1	130226	整備工事②⑦	図・写真なし	
	葦干土						埋込瓦敷掘削工		
前方部西	第2テラス面	志摩山古墳期 円筒埴輪	普通円筒小	テラス部	1	130304	整備工事②⑦	図・写真なし	
	北部葦干		不明	不明	1		埋込瓦敷掘削工		
	竹藪赤土		不明	不明	17				



出土場所	地点・土層・整理番号	遺物時代 時期	遺物名	品	備考	取り上げ 年月日	工事名 工事の内容	実照・整理番号 図録・図録番号	
前方部西	第1クワス面 くびれ部 3号 北側倉庫内(土)	忠順山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か	クワ部 基底部	1 1	121211	整備工事その2 墳丘復元工	図・写真なし
			普通円筒か	クワ部 基底部	1 1				
前方部西	第3段前面 くびれ部 竹藪西土	忠順山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か	クワ部 基底部	1 1	130215	整備工事その2 墳丘復元工	図・写真なし
前方部西	第1段前面 西側溝倉区	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	不明	7	130211	整備工事その2 排水溝基礎掘削工	図・写真なし
前方部西	第1段前面 西側溝倉区 遺石基礎内	忠順山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か	円筒部	227	130210	整備工事その2 排水溝基礎掘削工	図・写真なし
			円筒埴輪	普通円筒か	円筒部	137			
			円筒埴輪	普通円筒か	円筒部	87			
			円筒埴輪	普通円筒か	円筒部	1			
前方部西	第1-3段前面 墳丘復元土	忠順山古墳期	彩釉埴輪	彩釉埴輪	筒部	1	130425	整備工事その2 墳丘復元工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	11				
前方部	墳丘復元土	忠順山古墳期	埴輪	不明	不明	1	130209	整備工事その2 墳丘復元工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	2				
墳丘部	墳丘復元土	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	1	130425		
			江戶時代	土師器	筒	1			
後円部	第1-3段前面 墳丘復元土	忠順山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か	クワ部	3	130209	整備工事その2 墳丘復元工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	2				
後円部北	第2段前面 加3 表層	忠順山古墳期	石瓦石材	磁石瓦	1	121206	整備工事その2 除根掘削工	図・写真なし	
後円部北	第2段前面 竹藪西土上G	忠順山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か	クワ部 基底部	15 12	130208	整備工事その2 除根掘削工	図・写真なし
後円部北	K6区 第2段前面 墳丘復元土	忠順山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か	クワ部 基底部	12 36	130418	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	1				
後円部北	K6区 第1-3段前面	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	1	130425		
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し復元土	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	3	130422	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し復元土	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	クワ部	9	121210	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	3			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し復元土	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	75	130422	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			江戶時代	土師器	筒	3			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し復元土	特別時期	金属製品	銭貨	筒部	1	130422	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	円筒埴輪	普通円筒か	クワ部	5	130419	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	10			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	土師器	筒	筒	6	130422		
			瓦器	瓦器	筒	2			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	10	130422	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	27			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	円筒埴輪	普通円筒埴輪	129	1-10併	130423	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	J453 図録 第564 30
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	3	130423	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	2			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	彩釉埴輪	彩釉埴輪	筒部	1	130423	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	1			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	8	130423	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	59			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	12	130423	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	18			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	75	130423	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	30			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	4	130422	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	2			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	14	130422	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	1			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	6	130423	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	24			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	8	130422	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	1			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	18	130423	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	30			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	68	130422	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	1			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	34	130422	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			不明埴輪	不明	筒部	1			
後円部北	K6区 第1クワス面 埋戻し付託	忠順山古墳期	不明埴輪	不明	筒部	1	121220	整備工事その2 墓室遺土の埋戻し工	図・写真なし
			江戶時代	瓦器	筒	1			
後円部北	第4トレンチ 群土	平安時代	磁器	筒	筒部	1	114世紀		
			磁器	筒	筒部	1			



出土位置	地点・土層・整理番号	遺物時代 時期	遺物名	品 目	備考	取り上げ 年月日	工事名 工事内容	実測・整理番号 検出・図版番号	
第四剖面 基壇造成地土		不明遺物	不明	基成部	1		基成部 重力量設置工事		
第四部北 K地区 第3剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 形象遺物	古く			1	130418	整備工事その2 重力量設置工事	実測なし 図版15-99	
第四部北 K地区 第2剖面	江戸時代 金属製品	銅水浦釜			1	新宝水	130419	整備工事その2 重力量設置工事	M2 図版20 5590F 48
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 石室石材	結晶片岩			6	130328	130418	整備工事その2 重力量設置工事	図・写真なし
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	基成部		1	130422	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明	タガ部		1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	鎌倉時代 土師器	皿			1	130425	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	タガ部		21	130418	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明	基成部		2		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	鎌倉時代 土師器	皿			1	130425	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	鎌倉時代 土師器	皿			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	鎌倉時代 土師器	皿			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	江戸時代 土師器	皿			3		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	近代 レンガ				4		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	明治末期 金属製品	鉄釘			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	タガ部		26	130417	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明	基成部		6		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	形象遺物	不明			90	130423	整備工事その2	図版041	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	鎌倉時代 土師器	皿			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	鎌倉時代 土師器	皿			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	鎌倉時代 土師器	皿			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	鎌倉時代 土師器	皿			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	鎌倉時代 土師器	皿			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	近代 瓦	軒瓦			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明	土師器		1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 形象遺物	筒形埴輪	体部		1	121226	整備工事その2	J-041 図版15 除根前造成土	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 形象遺物	筒形埴輪か? 何部か?	何部か?		5	130717	整備工事その2	J-041 図版14 除根前造成土	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	タガ部		1	130718	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明			8		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	タガ部		5	130722	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明	朝鮮形埴輪		2		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明			21		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 形象遺物	不明			2	130722	整備工事その2	実測なし 図版17-109	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	基成部		2	130865	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 形象遺物	家か?			1	130865	整備工事その2	実測なし 図版12-96	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 形象遺物	筒形埴輪か?	円筒部		1	130717	整備工事その2	実測なし 図版15-101	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 形象遺物	筒形埴輪			1	130717	整備工事その2	実測なし 図版13-98	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 形象遺物	家形埴輪か? 板瓦片			2	130717	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	円筒部		14	308体	130718	整備工事その2	実測なし 図版042
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	円筒部		1	130418	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明			2		水道管設置工事		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 形象遺物	筒形埴輪	体部		1	121226	整備工事その2	J-049 図版23 9570F 31	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	円筒部		1	130718	整備工事その2	実測なし 図版042	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	基成部		1	130718	整備工事その2	除根前造成土	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明			39		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	不明遺物	不明			1	16世紀	基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	室町時代か? 土師器	皿			1		基壇造成地土		
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	普通円筒か	タガ部		1	130109	整備工事その2	図・写真なし	
第四部北 K地区 第2剖面 基壇造成地土	忠順山古墳群 円筒埴輪	朝鮮形埴輪	皿部		1		除根前造成土		



## 70 出土遺物

出土状況	地点・土層・整理番号	遺物時代 時期	遺物名	品	備考	取り上げ 年月日	主要な 工事内容	実測・整理番号 積付・回収番号	
狭門部西	第1-第3段斜面 くびら部	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒埴輪	基底部	3	130000	整備工事その2 墳丘復元施工	実測なし 図・写真なし
狭門部西	第3段斜面 裾	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒小	基底部	2	130011	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	竹藪客土 GⅡ区	不明埴輪	不明	不明		5		墳丘復元施工	
狭門部西	第2段斜面 GⅡ区	志願山古墳期	形象埴輪	種別不明	1家形小?	121219	整備工事その2 除根工に伴う後面調査	J426 回収13 回収9 34	
狭門部西	第2段斜面 GⅡ区 ①② 表土	志願山古墳期	形象埴輪	盾形埴輪	横部	1	121230	整備工事その2	J426 回収13 回収9 34
狭門部西	第2段斜面 GⅡ区	志願山古墳期	形象埴輪	甲冑形埴輪	甲冑部	9	121230	整備工事その2 除根工に伴う後面調査	J425 回収13 回収9 45 J426 回収14 回収9 44
狭門部西	第2段斜面 GⅡ区 表土	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒埴輪	タテ部	10	121230	整備工事その2	図・写真なし
			不明埴輪	口縁部	1			除根工に伴う後面調査	
			不明埴輪	蓋形埴輪	高部	25	121227		
			形象埴輪	輪弁付部	1				
			形象埴輪	不明	飯沢編平	3家小?			
			不明埴輪	顔弁	8				
		江戸時代	土師器	皿	底部	1		27埋戻小	
		近代	磁器	磁器	1				
狭門部西	第3段斜面 GⅡ区 ①① GⅡ区 表土	志願山古墳期	石室石材	結晶片岩		6		整備工事その2	実測なし 回収18-114, 116, 127, 129, 133, 134, 回収9-135
				安山岩(ヒコ型)	1 輝緑岩小?	121230	除根工に伴う後面調査		
狭門部西	第3段斜面 GⅡ区 ①②	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒埴輪	タテ部	2	121219	整備工事その2	図・写真なし
			不明埴輪	不明	13 円筒小?			除根工に伴う後面調査	
		近代	煉瓦	顔弁	1				
狭門部西	第3段斜面 耳端区 表土	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒埴輪	タテ部	3	121221	整備工事その2	図・写真なし
		江戸時代	土師器	皿	5			除根工に伴う後面調査	
				皿	3 同一個体				
狭門部西	第3段斜面 耳端区②中心 表土	志願山古墳期	形象埴輪	不明	飯沢編平	2 家小?	121230	整備工事その2	図・写真なし
			不明埴輪	不明	8		130222	整備工事その2 除根工に伴う後面調査	図・写真なし
狭門部西	第1-第3段斜面 墳丘復元盛土	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒埴輪	タテ部	8	130222	整備工事その2	図・写真なし
			不明埴輪	基底部	1			墳丘復元工	
			形象埴輪	不明	飯沢編平	15			
			不明	不明	飯沢編平	1 編組			
		平安時代	磁器	壺	体部	1			
		不明	土師器	不明	1				
狭門部西	第1-第3段斜面 墳丘復元盛土	志願山古墳期	石室石材	結晶片岩		1	130222	整備工事その2	実測なし 回収18-117
狭門部西	第2段斜面 墳丘復元盛土	志願山古墳期	円筒埴輪	朝顔形埴輪	顔部	1	130425	整備工事その2	図・写真なし
			不明埴輪	不明	4			墳丘復元工	
狭門部西	第2段斜面 上層(竹藪客土)	志願山古墳期	形象埴輪	盾形埴輪小?	高部	1	130000	整備工事その2	J426 回収13 回収9 36
狭門部西	第2段斜面 ③④ 表層 ⑤⑥	志願山古墳期	形象埴輪	不明		1	121228	整備工事その2	実測なし 回収18-122
狭門部西	竹藪客土 GⅡ区	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	西くびら部第2テラス面 竹藪客土下層	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	西くびら部第2テラス面 竹藪客土下層	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	西くびら部第2テラス面 竹藪客土下層	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	西くびら部第2テラス面 竹藪客土下層	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	西くびら部第2テラス面 竹藪客土下層	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	西くびら部第2テラス面 竹藪客土下層	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	西くびら部第2テラス面 竹藪客土下層	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	西くびら部第2テラス面 竹藪客土下層	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
狭門部西	西くびら部第2テラス面 竹藪客土下層	志願山古墳期	形象埴輪	盾小	円筒部	1	130000	整備工事その2	図・写真なし
不明	不明 ①②	石室石材	砂岩			1	...	整備工事その2	実測なし 回収19-138
不明	不明 遺棄倉出土前黒遺石	志願山古墳期	石室・石棺	凝灰岩		1	130411	整備工事その2	S-02 回収19 回収9 50
不明	不明 現状表層	志願山古墳期	円筒埴輪	普通円筒小	タテ部	43	130228	整備工事その2	図・写真なし
			形象埴輪	基底部	9				
			不明埴輪	不明	1		130012		
		江戸時代	土師器	皿	1				
			陶器	皿	1				
		不明	不明	底部	1				
			不明	不明	7				
			土師土	不明	1				
						出土遺物簿合計	4832		
						志願山古墳期遺物出土量	4321		

## 第4節 調査成果

保存整備工事に伴う調査では、「長岡京市文化財調査報告書」第62冊「国史跡惠解山古墳の調査」に示された発掘調査成果を再確認または補足する内容であった。

墳丘構築土層の観察では山本輝雄氏が指摘しているように、墳丘西半部では、墳丘構築土をモッコ等を用いて小さな単位で運搬構築する工法の可能性があり、東半部では墳丘構築土が比較的大きな単位で運び込まれて構築する工法が再確認された。具体的には、整備工事に伴う調査のB地区とC地区の土層観察を比較すれば明らかである。

M地区の調査では、前南部東隅の位置が確定し、前南部幅を確定することができた。同時に、L地区で前南部東辺南部の墳丘裾の位置が明らかになったことにより、前南部西側辺と同様に、墳丘裾が前南部前端に向かって2か所の屈曲点があることが確認された。

前南部前面の墳丘裾については、前面1～6の調査により、西半部で前南部前面裾推定線より少し南へのふくらみがみられたが、ほぼ推定位置に合っていることが確認できた。

後円部裾については、K地区で第一傾斜面裾付近の墓石が後円部推定復元線より外側で検出されたが、他の箇所との関係から部分的な歪と考え、復元線を変える大きな要因とはしなかった。

周濠の形状については、N地区の調査によって周濠南西端が数メートル西に広がる可能性を見出した。

埴輪列については、K地区で後円部第一テラス面、O地区で前南部第二テラス面の埴輪列が検出され、いずれもほぼ推定復元位置からの検出であり、惠解山古墳の形状復元の正しさを立証するとともに、整備復元位置の正確さが再確認できた。

埴輪の出土傾向を概観すると、前南部C地区近掘り込から、円筒埴輪をほとんど含まずに鶏形埴輪の頭部のほか家形埴輪2個体以上がまとまった破片となって出土したこと、後円部G～F地区から甲冑形埴輪が出土することなどに特徴がみられ、形象埴輪樹立位置の大略を示している。特に、前南部前端近くで家形埴輪がまとまって出土したことは、前南部墳頂先端付近に何らかの形象埴輪配置区域があった可能性を示していると考えられ、興味深い。

惠解山古墳に関係する大きな成果は、以上のように集約できるが、今回の保存整備工事着工直前にいたる古墳の変形過程についても、各調査区の土層観察などから部分的に見ることができた。例えば、前南部前面の傾斜面から座棺と思われる近世墓が検出され、第7次調査の7-1調査区や第5次調査の5-1調査区第二テラス面埴輪列内で検出された円形平面の近世墓に加えて、前南部の広い範囲に散在的に近世墓が築かれている様相が明らかになった。長岡京市光林寺の長岡京跡右京第207次調査では、17世紀後半から18世紀初頭頃に座棺土葬墓から火葬墓への葬法変化が確認されている。第8次調査8-3調査区では、火葬骨片を包含する土層が前南部第二テラス面埴輪列を被覆していた。また現在の墓地にある墓碑は17世紀末から始まっている。これらのことから、江戸時代から現代にいたる墓地の移り変わりの一端がうかがえる。

このように、整備工事に伴う調査では、惠解山古墳に関する成果はもとより、近現代の地域史にかかわる成果も得ることができた。

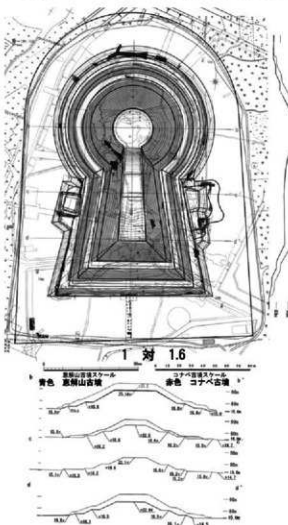
## 第5章 墳形復元の検討

### 第1節 大王墓との比較

恵解山古墳の墳形は、発掘調査の積み重ねにより、かなり明らかになってきた。そこで、今までの調査データから、単純に恵解山古墳の復元を試みた。墳丘復元拱扱となる重要な要素を列挙すると、墳丘輪郭は墳丘裾部の検出位置、第一テラス面は後円部と東くびれ部の埴輪列、第二テラス面は前方部東西の埴輪列、テラス面幅は西くびれ部第三傾斜面裾や前方部東側面第三傾斜面裾基底石の位置と傾斜面角度（傾斜角度は長岡京市文化財調査報告書第62冊—国史跡恵解山古墳の調査—掲載付表—3参照）から割り出した計測値などがある。これを基に復元すると、第2段以上の前方部先端位置や墳頂部テラス面などが不明であることがわかる。

これを補足するため、恵解山古墳と同形墳を参考に復元することとした。そこで、大王墓との比較検討を行った。岸本直文氏によると恵解山古墳は「誉田御廟山型の築造規格」とされ、石津丘古墳、コナベ古墳、墓山古墳、市野山古墳、太田茶臼山古墳、雲部車塚古墳などが相似墳としてあげられている。また同規格墳の中では、前方部高に年代差が表れているとされている。

この研究成果から同規格墳と比較検討し（第26図）、前方部先端と墳頂部形状は、コナベ古墳を例に復元した（第62図）。復元規模は、前記報告書付表—2に掲載した。墳頂の高さについては、第6章第4節に記した。



第61図 コナベ古墳との比較検討図



第62図 コナベ・墓山との墳形比較図

## 第2節 造り出しの検討

### 1 西造り出し

西造り出しの整備にあたって、整備に必要な内容を整理すると、以下のようになる。

西造り出しは、発掘調査成果から、南北幅約12m、東西幅8.5～9.6m、高さ約55cmの規模に復元できる。

西造り出し北辺の墳丘に取り付け部分には、前方形隅辺に平行する切り込みがある（第181図上）。その延長上には、埴輪列が検出されている（同図下）。

この情報をもとに計画された整備が、第63図1である。その立体的イメージとして同図2が考えられていた。

しかし、この整備では、造り出し北東角の入込と埴輪列の食い違い配置との関係が断たれてしまっている。また前方形隅辺で検出された埴輪列を北辺埴輪列から続くものとして捉え、埴輪列の食い違いが、前方形隅辺に取り付いた中央部に設計されており、他の古墳で検出されている配置と異なっている。

このような諸問題を解消するため、北辺東端の切込みに対応する位置に埴輪列の食い違いを設け、発掘調査で検出された埴輪列を南辺埴輪列から続く埴輪列として捉えた。また、東辺埴輪列の食い違いをその北半部に設定した（同図3）。また、残存埴輪列の樹立状況から、この造り出しの本来の高さを割り出すこととした。

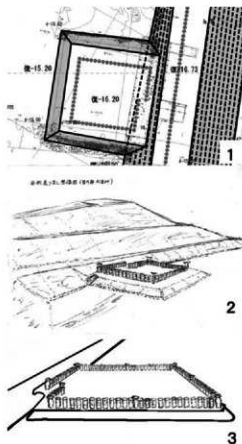
このように復元すると、兵庫県加古川市行者塚古墳などと極めて類似する。また、北東隅の切込みと埴輪列の食い違いに相互関係を見出すことができる整備表現となる。

埴輪列の復元では、円筒埴輪の間に壺形埴輪を配置することとした。その割合は、当造り出しの北側で実施された第6次調査6-1調査区周濠出土統計を参考にした。

上面は、排水処理を考慮して、中央から周縁部に向かってわずかに傾斜させ、真砂土固化舗装で被覆している。

造り出し各辺の斜面は、墳丘斜面と同様にコクマザサの植え込みとして処理した。

こうして整備した西造り出しは、第183図のように仕上がり、見学者に、恵解山古墳築造当時の造り出しの役割と死生観を思い描く空間を提供する場となっている。



第63図 西造り出し計画変更図

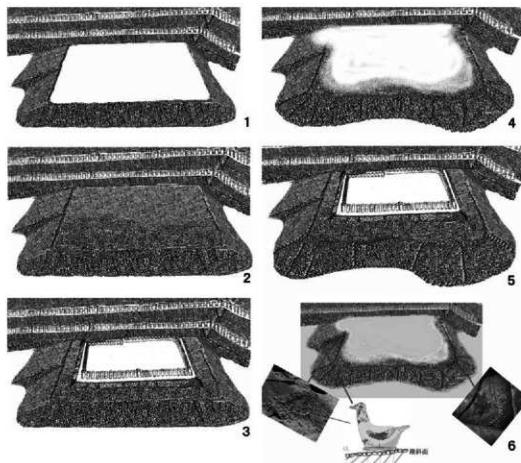


## 2 東造り出し

東造り出しは、発掘調査では形状を確定することができなかった。確実な情報を整理すると、以下のようなになる。

東造り出し北辺から東辺にかけては、第10次調査10-3地区の調査成果がある（第185図上）。ここでは、北辺上端に東西方向に直線的に並ぶ区画石列がある。これより外側は緩やかな傾斜面で周濠底に至り、傾斜面には礎敷きが広がる。区画石列より内側にも礎敷きが広がる。東辺には、明確な区画石列は検出されていないが、礎敷きの広がりは続く。南辺部では、第11次調査11-1地区の調査成果がある（第184図）。そこでは、南辺上端に東西方向の区画石列がある。この石列は前方部に取り付くところまで達せず、南に屈曲して伸び、前方部沿いに南への張り出しが想定できる。石列の外側には、緩やかな傾斜面で礎敷きが広がる。内側のテラス面にも礎敷きの広がりがみられる。両調査成果から、規模は、北・東・南の各辺とも2～3mと考えられる。

このような調査成果から、第64図1～5までの復元案を提示して検討した。その結果、本来5のイメージに近い構造であったかも知れないが、上部構造は不明として、復元整備では4のイメージを取り入れることとした。南辺張り出しについては、前方部墳丘取り付き部分から東西幅約8mで南に約4mの張り出しとした。緩やかな傾斜面の州浜状礎敷き部より上は、復元整備では、芝張りとした（第184図左中）。また上端の区画石列は、芝張の中に飛び石で表現した。



第64図 東造り出し検討資料

### 第3節 模型作製

#### 1 埴輪模型

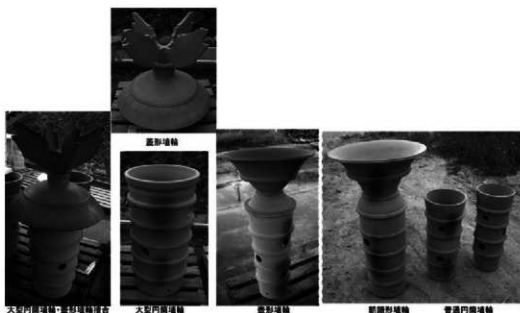
埴輪模型の素材候補には、金属、樹脂、陶磁器などがあり、それぞれに長所と短所がある。

それらに優劣をつけるのは困難であるが、恵解山古墳では、埴輪の素朴さと質感を表現することに重きを置き、見るからに型作りというイメージを極力抑え、出土遺物と同じように一物体ごとの個性が表現でき、耐久性がある素材で、破損しても割れ目が実物の埴輪と同じように器表面と同じ質感と色調に出来るものとして、せつ器質の焼き物を選択した(第65図)。

模型を作製する器種は、普通円筒埴輪3タイプ、朝顔形埴輪、壺形埴輪、盞形埴輪とその器台となる大型円筒埴輪とした。

作製にあたっては、恵解山古墳出土埴輪の各器形の特徴、大きさ、色調、調整手法などを観察して計画を検討した。製作技法や器壁の厚さなども重要な項目であるが、強度と耐久性の面から、これを忠実に生かすことは断念し、見た目に違和感が生じないように工夫を凝らして作成することとした。

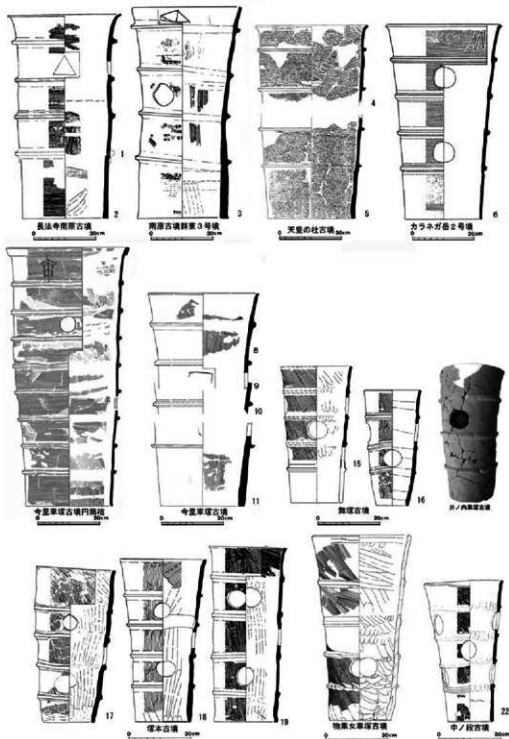
恵解山古墳出土埴輪には、完全な形に復元できた個体はなかった。普通円筒埴輪でさえ、基底部から口縁部まで揃ったものはなかった。そこで、普通円筒埴輪に関して、乙訓の首長墓系譜にあげられている古墳出土埴輪を概観し(第66図)、形や大きさなどの変遷を掌握して、これを参考に、恵解山古墳出土埴輪の特徴をいかして復元することとした。まずタガの本数および透かし孔の位置について見ると、首長墓系譜では4本タガ5段の普通円筒埴輪が作り続けられ、舞塚古墳で3本タガ4段埴輪が出現するものの、それ以後の代表的古墳では、従来の4本タガ5段が受け継がれており、井ノ内車塚古墳で、3本タガ4段が普遍的に使用されるようになったと考えられる。このことから、恵解山古墳の普通円筒埴輪は、4本タガ5段とした。



第65図 埴輪模型

この普通円筒埴輪の器形を基本に、朝顔形埴輪と壺形埴輪を復元した。朝顔形埴輪の透かし孔位置は、第5次調査5-1調査区前方部第二テラス面検出埴輪列12号埴輪を根拠にした。

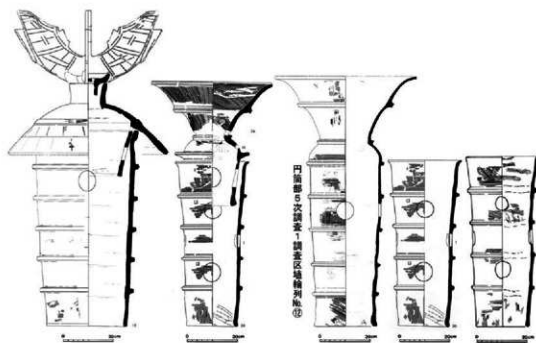
蓋形埴輪は、恵解山古墳出土破片各部位を組み合わせて、立飾りの意匠や各部位の大きさを復元した。これに乗せる円筒部は、口縁端部を肥厚させる凸帯が巡らされた大型円筒埴輪を採用した。口縁部が肥厚する大型円筒埴輪は、盾形埴輪の円筒部にも多用されていることから、この形態すべてが蓋形埴輪の器台に用いられたとは限らない。



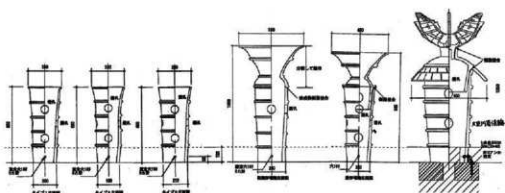
第66図 乙訓の埴輪 (1/12)

このように復元した各種埴輪が、第67図である。発掘調査で検出した埴輪列樹立埴輪は、第1段タガまで埋めて立て置かれていることが明らかになっていることから、模型埴輪でも、この部分を埋めおくものとした。そのため、最下段に埴輪列復元用のコンクリート基礎に取り付けるボルト穴を穿孔した(第68図)。また、強度を増すため、口縁部付近は実際の厚さで復元し、基底部に向かって器壁を厚くした。

器表面には、ハケメと黒斑を表現した。ハケメの表現は、すべて手書きで櫛目を付け、同じものが2つとないように仕上げた。黒斑表現は、位置や大きさのほか色の濃さも、個体ごとに変化をもたせた。タガは削り出し突帯の製作技法を採用したが、見た目に均一にならないよう、ヨコナダを施す際に多少の重みをもたせた。透かし穴も、穿孔面をヘラ削りして、それぞれに個性をもたせた。蓋形埴輪の立ち飾りの線刻も、すべて手書きで表現した。



第67図 恵解山古墳出土埴輪復元図(1/15)



第68図 埴輪模型設計図

## 2 古墳模型

惠解山古墳の墳丘模型は、前方部南面周濠の南端に、惠解山古墳構築当時の姿を80分の1縮尺模型で設置した。材質はGRCを母体として、埴輪列はFRP製とした。埴輪は、円筒埴輪と朝顔形および壺形埴輪と蓋形埴輪の3形態がわかるように表現することとした。

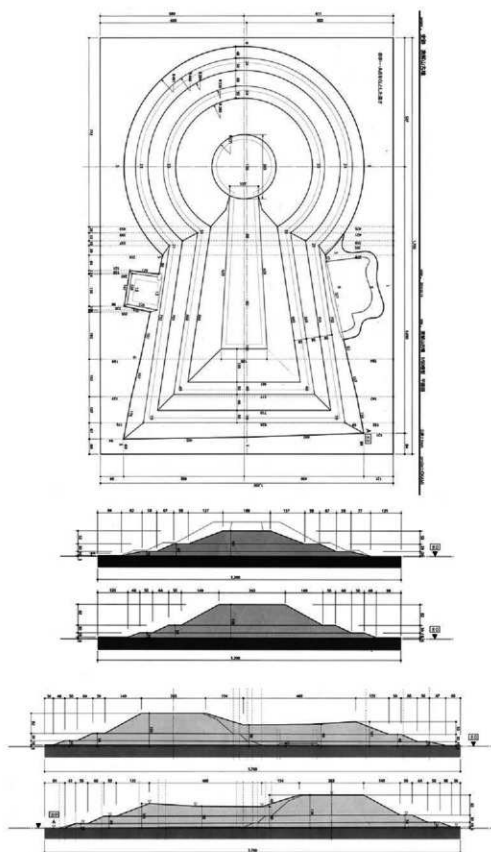
当初は、周濠も含めた模型を検討していたが、周濠の形状について十分な検討ができていないこともあり、墳丘部だけの模型とした。

墳丘模型を作製するにあたって、第5章第1節や第6章第4節で検討した内容で作成できるかどうか検証するために、紙粘土を用いて500分の1模型を自作してみた(第71図)。これを作成することにより、発掘調査成果を基に復元図を平面的に描き、部分的な断面を図化できていても、立体として理解しきれていない部分が各所にあることを体験することが出来た。例えば、傾斜角のわずかな差で、テラス面に確保できる幅が大きく変化する。これをなおざりにして作製すると、前方部と後円部を区切るくびれ部に影響してくる。修正しても、わずかな誤差で、平面図に描いたくびれ部の屈曲線のようには屈曲させられない。細かい個所では、くびれ部から造り出しにかけての造作は、困難を極めた。造り出しの高さや、造り出し各辺の斜面角度と前方部傾斜角の折り合い、またそれぞれの絡みが、十分な計画の上でないとすべて現場打ちのすり合わせとなってしまった。また逆に、復元図上の表現で具体的に浮かんでこなかったことが、体験を持って理解できたこともあった。例えば、西造り出しの前方部に平行に検出された埴輪列は、出土位置があまりにも前方部寄りで、具体的にイメージできなかったが、前方部の傾斜角を造り出し接合部分のみ急角度にすれば、埴輪列の検出位置に設置可能であることが理解できた。ただし、前方部の傾斜角を一部分変える場合、どのように変えるかという問題が持ち上がった。この傾斜角変化は、西造り出しが前方部に取り付け接合線にそって、造り出し下場から上場へ前方部裾が変化する部分で解消できた。また前方部南半部に見られる東西両側面の屈曲、つまり一度開いた後に先端部に向かって少し閉じる屈曲については、くびれ部から真っすぐに開かせた場合の前方部東西両側の先端角よりも鈍角にでき、構造的に壊れにくくするための工夫ではないかと思われた。このような実体験は、墳丘模型作製に活かされたとともに、保存整備工事における整備表現にも生かすことができた。

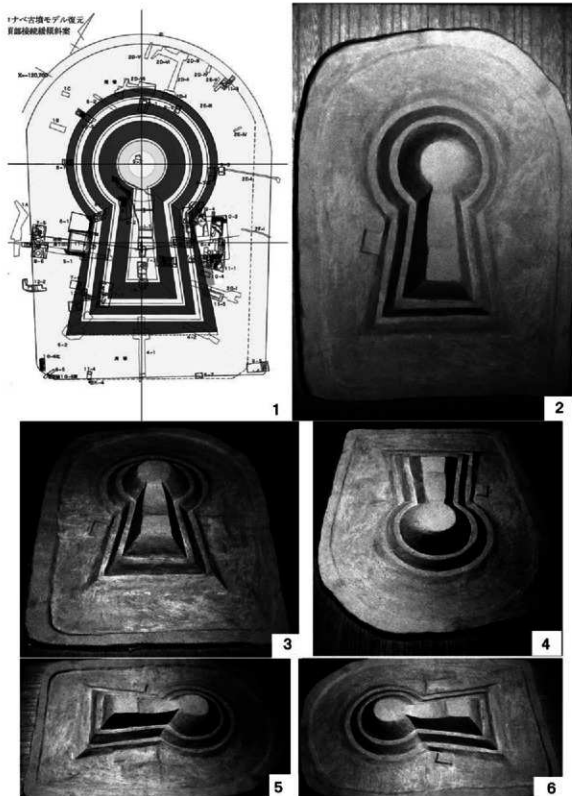
この体験を糧として、墳丘模型の作製においても、模型の設計図(第70図)を忠実に作製するだけでなく、製作者と検討しながら部分的な修正を加えた。作製工程は第72図に示した。



第69図 墳丘模型



第70図 墳丘模型計画図



第71図 紙粘土による墳形確認のための500分の1模型



第72図 墳丘復元模型作製工程



### 3 地形模型

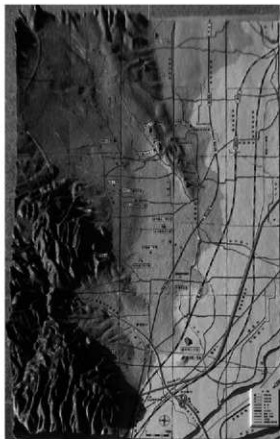
この模型は、基本構想から基本設計までの間は、近隣地にガイダンスおよび便施設を設ける前提であったことから、現地展示の計画はなかった。しかし、ガイダンス施設の用地確保が困難となったため、墳丘模型を設置した前方部南面のエントランス空間の相対する位置に設置した。そこは、屋外展示になるため、素材の選定から検討した。素材には、ポリウレタンなども候補に挙がったが、耐久性の不安から、陶板で作成することになった。

乙調の古墳群分布地形模型は、せっ器質の陶板で作成することとした。この模型は、恵解山古墳が乙調の古墳群のどういう位置にあり、所在地にどういう意味があるのか、またどういう立地にあるのかを観察できる4000分の1縮尺模型である。

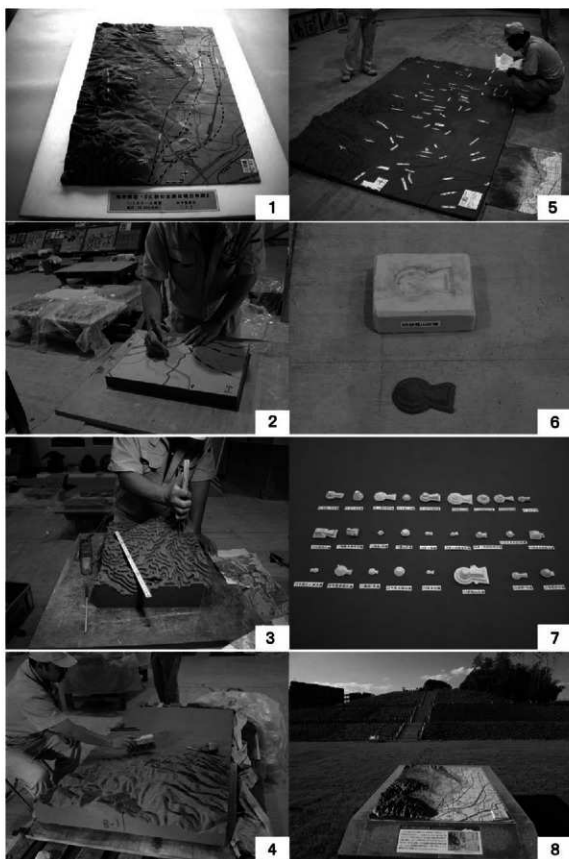
地形は、明治42年の大日本帝国陸地測量部20000分の1測図を利用し、広範な開発が及んでいなかった地形を再現した。表現範囲は、天皇の杜古墳以南で、天王山が表現でき、東は国道171号線が入る範囲、南北約9600m、東西約6000mとした。これを展示する大きさは、横150cm、縦240cmであるため、横5枚、縦6枚の計30ピースの部位で作成することになった。

模型の平面縮尺は4000分の1で、標高は平面1に対し1.5倍として強調した。古墳平面規模は、地形平面1に対し1.1の大きさに強調した。各古墳の水平垂直比は水平1に対し高さを3倍とした。また各古墳の墳形は、出来る限り正確に表現するため、発掘調査報告書や公表されている復元想定図を参考に1000分の1で復元図を作成し、これを基に4000分の1の1割増し平面（3600分の1）で、その3倍の高さ表現の各古墳の単体模型を作製し（第74図6・7）、地形模型にはめこんだ。その古墳の数は、恵解山古墳を含めて26基である。各古墳の表現は、墳丘形態や段築表現だけではなく、周濠も含めて模型内設置古墳すべてを再検討し、周濠部は1段下げて水色に着色した。このうち、天皇の杜古墳は、周濠を持たないとされているので、周濠痕跡の水田畦畔のように見える形状を線で表現した。今里大塚古墳については、円墳説と前方後円墳説があるので、不明確な前方部状の地割を周濠の掘り残しのような表現で作成した。

古墳以外の表現として、明治期の主要道路と河川流路、現在の鉄道と駅、国道、高速道路、市役所・町役場を加えた。また、小畑川は、明治期の流路に加えて、想定されている旧流路も表現した。川と道路は、一段掘り下げ、高速道路は一段高くして立体感を持たせた。



第73図 地形模型



第74図 地形模型作製工程

#### 4 埋納施設模型

副葬品埋納施設の展示位置は、前方部墳頂の中央部で、鉄製武器類埋納施設検出状況俯瞰写真を検出位置に陶板で設置することとした。版面が横115cm、縦640cmの大きさで、横11枚、縦2枚の22ピースで作成することとした。材質は、せっ器質である。

当施設の展示個所が、発掘調査で検出した位置であることから、土台基礎工事の掘削において慎重になったが、掘削深度が盛土内に収まっていることを確認した。

実大俯瞰写真の展示面は、前方部の墳頂整備面が先端に向かって上がる勾配の中に、出土状況に合わせてほぼ水平面としたため、展示施設南端に向かって下がっているように見える。また花崗岩の枠縁面との段差が、南に向か大きくなった（第75図）。実際には、実大写真展示面は、わずかに北に向かって低く、北から雨水を排水する構造になっている。

出土状況写真は、故 高橋猪之介氏撮影による4×5白黒俯瞰写真に、35mmリバーサルスケッチ写真の色彩を色補正した画像を参考に着色し、実物大に引き伸ばしたものを使用した。赤色顔料の付着範囲は、わずかに赤くして表現することとした。

これに付設する解説板には、鉄製武器類の出土状況から埋設当時の収納状況を復元し、鞘に納め、まとめ置かれた状況の図を掲載した（第76図）。この図を作成する際には、豊島直弘氏「古墳時代前期の刀装具」、岩本崇「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」、兵庫県立考古博物館「史跡茶すり山古墳」などを参考に作成した。



第75図 埋納施設設置状況



## 第6章 保存・整備工事

### 第1節 竹・樹木伐採除根と既存施設撤去

#### 1 竹木の伐採・除根

恵解山古墳の整備工事着手前の植生環境の変遷を竹林と樹木に限定して概観する。

恵解山古墳の墳丘部は、後円部に墓地があり、それ以外は明治時代以前からの竹林で覆われていた。昭和15年の航空写真（図版1（1））を見ると、後円部の中央とその北側に竹木の無い墓地があり、両墓地の境と縁辺に樹木が茂る以外、竹に覆われている様子がよくわかる。その後、少なくとも昭和36年以前に前方部南西域の竹藪が切り開かれ、昭和55年の武器埋納施設発見当時には、調査位置配置図（第4図）F地区以南が畑として利用されている。昭和61年頃には、E地区に栗の木が植えられて栗木林となった。また、墳丘縁辺や周濠外縁付近にある樹木は、昭和55年には見られず、それ以後の樹齢または植樹であることがわかる。長岡第八小学校サブグラウンド南辺の樹木や墓参道北端の出入口にある樹木、墓地への上り口にある桜などは、昭和61年においても見られない。

このように竹林や樹木の変遷を概観すると、竹林はおよそ130年以上の歴史を持つが、樹木は、墓地縁辺部には75年以上の樹齢を持つ樹木があるが、それ以外は、古い樹木でもおよそ30年の樹齢またはその頃の植樹であることが知られる。



1



3



2



4

第77図 保存整備工事その1 前方部の竹木伐採除根作業風景

保存整備工事では、100年以上の歴史を持つ竹林の一部を前方部東側面に残し、整備計画範囲の竹や樹木を伐採、除根した。墓地縁辺部の樹木は、管理者と協議して伐採することになった。

保存整備工事その1では、前方部の竹木の伐採と除根を実施した（第78図、図版2(2)）。この工事では、伐採を終えた範囲の視界が開け、墳丘の残存地形が把握しやすくなるとともに、B～F地区の崖面があらわになった。また崖面には、墳丘構築盛土の一部が露頭していることが明らかになった。このため、除根に伴い出土する遺物を採集するとともに、すべての崖面調査を実施した。

保存整備工事その2での竹木伐採除根は、後円部を中心に、計画範囲の全域において実施した（第79図、図版3）。竹木伐採時点で、恵解山古墳の墳丘全体の現況地形を肉眼視できるようになり、これを記録する全景写真撮影を行った。この写真は、恵解山古墳の現況に至る古墳構築以後の歴史が刻まれた記録として大きな意義をもつ。その一つには、恵解山古墳が、山崎の戦いの舞台となった可能性が指摘されていることがあげられる。恵解山古墳の現況地形の一部に、その時の造作痕が残っている可能性がある。後円部が墓地を中心として3段の棚田状になっていることなどは、その一つとして取り沙汰されている。現在墓地となっている部分はそのまま残されているが、保存整備対象区域のほとんどは墳丘復元盛土で埋まり、観察することが出来なくなった。また、竹藪内にあった各所にみられる崖面の多くは、当地域の名産となっているタケノコ生産の来歴を示し、そこに見られる客土の重なりには、タケノコ生産者の汗がにじんでいるに違いない。そのように思うと、一部に竹藪を残し、隣接する小学校の竹やタケノコを学習する体験学習の場とする意義もあながち否定できない。



1



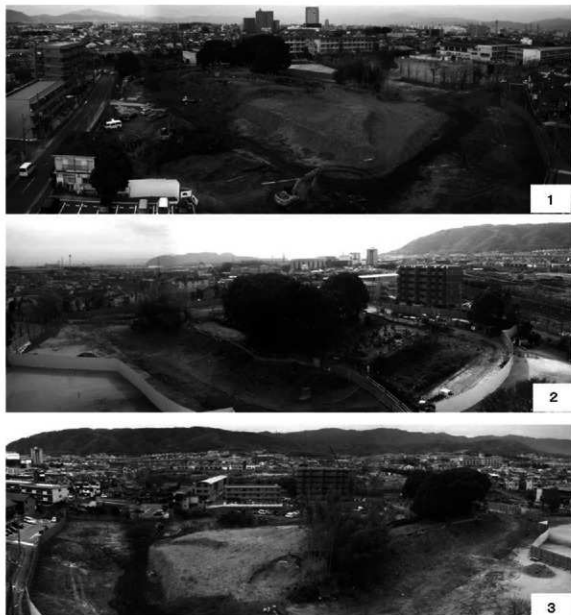
2

第78図 保存整備工事その1 前方部の竹木伐採除根工 1-施工前、2-施工後（南西から）

竹木伐採状況の記録後、除根工に伴い出土する遺物を採集するのと並行して、各屋面の調査を行った。

除根には重機を使用したが生、現地形を壊さないように注意を払い、樹木の除根の際には、深く掘り込まない工夫を凝らした。幸いにも、広い範囲に竹藪客土が厚く盛られており、墳丘構築土に達することはなかった。

後円部にある墓地縁辺の太い幹に育った樹木は、除根による墓地への影響を懸念して除根を断念した。



第79図 保存整備工事その2 竹木伐採除根工 (1南西から、2北東から 3南東から)

## 2 堤の撤去工

### A 西堤の撤去

西堤撤去工は、第4章第2節2の西堤撤去工に伴う調査に記したように、周濠南西部に築かれた堤である。この堤は、第12次調査で、古墳に関係しない堤で、旧水田面まで除去できることを確認していた。このため、周濠部の整備に伴い撤去することとした。撤去には重機を用いて、土層を確認しながら掘削した（第80図）。掘削土は、遺物だけでなく近・現代廃棄物を全く含まない土層で、小石の含有率も非常に少なかった。この堤の除去で得られた土は、流用土として墳丘復元盛土に利用した。

### B 東堤の撤去

東堤の撤去は、第4章第2節3の東堤撤去ともたれ擁壁撤去に伴う調査で記したように、周濠南東部の堤撤去工である（第81図）。この堤は、昭和11年には無く、昭和15年頃に整備された堤と考えられ（第5図）、古墳に関係しない構造物であるため、周濠部の復元整備に伴い撤去することとした。堤撤去に際し、北接する小学校サブグラウンド面とほぼ同じ面まで掘削した段階で、サブグラウンドを囲むようにコンクリート製のたれ擁壁が検出された（同図5）。この擁壁の東部が、周濠復元整備の障害となるため撤去した（同図6）。また、当堤の東端部は、小学校グラウンド南西隅の整備範囲であり、この部分の撤去工とグラウンドを囲むメッシュフェンスの復旧をおこなった（同図8）。



第80図 西堤撤去工 1・2 施工前 3着手 4撤去後  
(1-西から、2-南から、3-南西から、4-南から)





第81図 東堤撤去工

1～3着手前、4、工事着手、5・6埋没擁壁撤去工、7・8堤撤去後

### 3 その他

#### A 水路整備

水路の改修工事は、昭和29年の洪水被害を受けた地元にとって関心が高く、古墳整備に伴う整備が必要であった。

復元整備した墳丘裾には、排水溝を設けた。その内、後門部北縁の中学校サブグラウンド沿いの排水は、既存排水溝同様に、墓参道出入口の東に排水する構造とした。

新たに設置した後門部西辺から南と東造り出し南端から南の排水は、ベンチフリウムで前方部南面西半部に集水し、南周濠を横断してオリフィスに向かう排水とした（第82図）。

古墳西辺から南辺を通って久貝集落に向かう水路は、整備前までU型側溝で、周濠南辺から南に向かう部分では、排水機能がかなり低下している現状があった。

西側休憩広場を南北に通過する水路（現在の池の部分）はヒューム管渠として、広場の地下を通し、これ以南の古墳周濠西辺および南辺の側溝は自由勾配側溝縦断用で処理した。西辺の自由勾配側溝は、北半部が幅30cm、深さ70cmで、南半部は幅30cm、深さ80cmを用いた。改修前は、幅30cm、深さ30cmのU型側溝であった。周濠の南に沿う自由勾配側溝は、西端から周濠のオリフィスによる水量制限排水溝までを幅50cm、深さ40cmとし、南の久貝二丁目7からの排水溝までを幅50cm、深さ70cmとした。この部分の整備前は、幅36cm、深さ36cmのU型側溝であった。これより東の古墳周濠南辺沿いは、幅50cm、深さ80cmとした。整備前は、幅36cm、深さ36cmのU型側溝であった（第83図）。



第82図 墳丘掘水路設置工

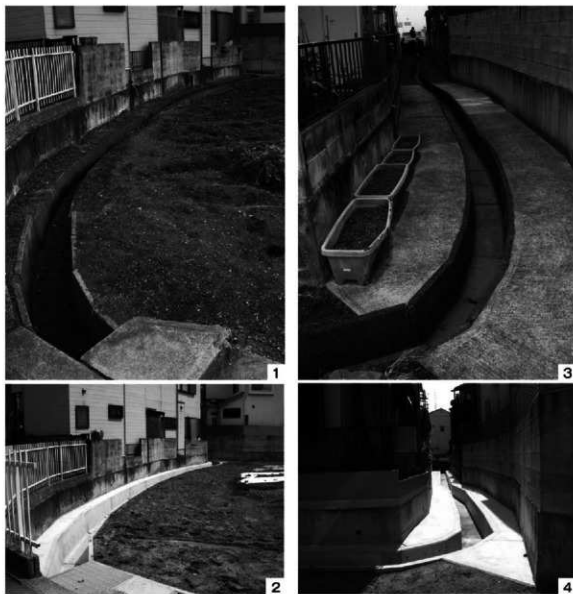


第83回 西辺・南辺排水路改修工

- 1・2 - 周濠西辺水路南半部整備前状況と整備状況（南から）  
 3・4・5 - 周濠西辺水路北半部整備前状況とヒューム管設置基礎掘削および設置状況（北から）  
 6・7・8 - 周濠南辺水路・農道整備前状況と整備状況（北から）

周濠南東部にある農道から南の集落内に向かう水路は、北半部がH Sフリーム（第84図1～2）、南半部が現場打ち水路（第84図3～4）で、幅60cm、深さ60cmとした。整備前は、幅36cm、深さ36cmのU型側溝であった。

このように、西辺の市道をくぐって北西から史跡地内に流れ込む水路は、周濠西辺を南流し、周濠南東隅部で南辺里道の側溝となって東に流れ、オアフィスから排水する整備区域内の雨水を受け、周濠南東の農道から南の集落内水路に排水する利水を整備した。



第84図 南排水溝改修工

- 1 - 久貝住宅地への水路北半部整備前状況（北から）      2 - 同北半部整備状況（北から）  
 3 - 久貝住宅地への水路南半部整備前状況（北西から）      4 - 同南半部整備状況（北西から）

## B 南東部周濠の整備

南東部は、長岡第八小学校のサブグラウンドであったが、そのグラウンドとしての機能も残しながら、周濠と東造り出しがわかるように、自由広場として整備することとした。そのため、サブグラウンドの面的な掘り下げをおこなった（第85図）。掘削に際しては、第4章第1節に記したように、掘削土を観察する調査を行った。この復元整備工事では、近現代の工作物を検出して記録したほか、出土遺物を採集した。整備工事に伴う掘削深度は、サブグラウンドのための造成盛土内に収まっていることを確認し、東造り出し範囲を除いて、自由広場としての真砂土整備を行った。



第85図 長岡第八小学校サブグラウンド掘り下げ

- 1 - 整備前状況（南東から）    2 - 整備前状況（南から）    3 - 整備前状況（南東から）  
 4 - 掘削風景（南東から）    5 - 板と丸太材検出状況（西から）    6 - 掘削状況（南東から）

## 第2節 墳丘復元整備

### 1 墳丘復元工

墳丘復元工では、西くびれ部から前方部の第二テラス面以上や、前方部西側面第二テラス面、前方部前面の第二テラス面から第三テラス面を中心とした切り土工や、後円部西側面や前方部西側面裾から第一テラス面、後円部東側裾から第一テラス面などで大規模な盛土工をおこなった。

切り土工部分については、土層を観察しながら慎重に掘削し、出土遺物の採集を行った。いずれの切り土工地区でも、墳丘復元推定通り、掘削深度は竹藪客土内におさまっていることを確認した。掘削深度は墳丘想定面には達していなかったが、埴輪列に樹立した残存状況の良い埴輪が検出される個所があった。

墳丘復元盛土工では、切り土工により産出した現地調達発生土の流用土（東西堤撤去や小学校サブグラウンド部分の周濠整備復元切り土及び墳丘復元切り土など）での盛土と、購入土での盛土により実施した。この盛土工を実施するにあたり、各調達土が適合資材かどうかと、どの程度の転圧が適しているかを検査し、これを基に施工した（第86図）。

転圧は、基本的に30cmごとに実施し、ランマー、プレート、振動ローラなどを用い、ブルドーザー敷き均しや、狭小面などのような場所によっては板転圧などの処理で工夫した（第87図）。

### 2 テラス面整備

西造り出し上面と三段築成の墳丘テラス面には、真砂土固化舗装を採用した。路盤には厚さ約10cmの碎石層を敷き、真砂土固化剤の厚さは、約4cmとした。真砂土固化舗装は、敷き均し、第一次ローラー転圧、刷毛引き表面整形、散水、第二次ローラー転圧の行程を経る。また、必要に応じて目地材で仕切った。

#### 購入土

盛土工-1（転圧機械：搭乗コンバイン3t～4t）

仕上がり厚(mm)	平均沈下量(mm)	施工撤き出し厚(mm)	転圧回数
300	52	350	6

盛土工-2（転圧機械：振動ローラ0.8t～1.1t）

仕上がり厚(mm)	平均沈下量(mm)	施工撤き出し厚(mm)	転圧回数
300	55	350	8

盛土工-3（転圧機械：タンク60kg～80kg）

仕上がり厚(mm)	平均沈下量(mm)	施工撤き出し厚(mm)	転圧回数
300	78	370	6

#### 流用土

盛土工-1（転圧機械：搭乗コンバイン3t～4t）

仕上がり厚(mm)	平均沈下量(mm)	施工撤き出し厚(mm)	転圧回数
300	75	370	6

盛土工-2（転圧機械：振動ローラ0.8t～1.1t）

仕上がり厚(mm)	平均沈下量(mm)	施工撤き出し厚(mm)	転圧回数
300	70	370	8

盛土工-3（転圧機械：タンク60kg～80kg）

仕上がり厚(mm)	平均沈下量(mm)	施工撤き出し厚(mm)	転圧回数
300	74	370	6

第86図 盛土撤き出し厚・転圧回数



第 87 図 墳丘復元工の転圧

- |                          |                             |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 - 後円部北縁の盛土 (北東から)      | 2 - 後円部西縁のブルドーザー敷き均し (南西から) |
| 3 - 前方部東側面の板転圧 (北から)     | 4 - 後円部西縁の振動ローラ転圧 (南東から)    |
| 5 - 西くびれ部の振動ローラ転圧 (南から)  | 6 - 西くびれ部のランマー転圧 (東から)      |
| 7 - 後円部北縁の振動ローラ転圧 (北西から) | 8 - 西くびれ部のランマー転圧 (北西から)     |

### 3 法面工法（ジオウエップとジオファイバー）

墳丘復元整備部分には、法面が、1:0.5の急勾配になる箇所、1:1.5前後の勾配になる箇所、これらより緩やかな勾配になる箇所がある。このうち1:1.5前後の勾配の箇所にはジオウエップ工法、それ以上の急勾配になる箇所にはジオファイバー工法を採用して整備することとした。他の部分は、自然土や盛土の削り押し整形のまま植栽施工とした。

#### A ジオウエップの工法

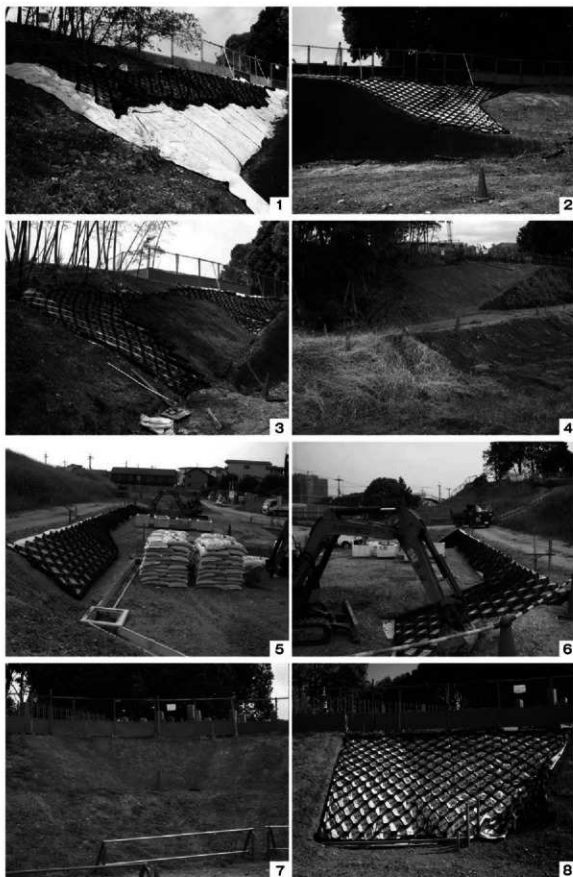
ジオウエップ工法は、急斜面の法面の侵食を防止する技術で、土の充填面積がジオウエップにより立体ハニカム構造で小さく区画され、法面の侵食防止効果を高める。また、ジオウエップの壁面には直径1cmの小孔が密集して穿たれている。この孔を通して水分が補給されるとともに、その孔に植物の根が絡み定着する仕組みになっている。ジオウエップは、高さ10cmで、ハニカム構造の区切りは、1辺約40cmの平面菱形弁である。側面には弁内充填土とジオウエップの摩擦を大きくするために、細かい凹凸が施されている。ジオウエップ素材は、高密度ポリエチレン製である。施工手順は、地山土法面整形の上に吸出し防止材を敷き、その上にジオウエップをアトラランカーで固定した。この上から土を埋め戻し、コクマザサで植栽することとした。

恵寿山古墳では、法面が1:1.5前後の法面成形部分でジオウエップ工法を採用した。具体的には、西くびれ部第三傾斜面の墓地とのすり合わせ部分（第88図7・8）、西造り出しが前方部西第一傾斜面に取り付け前方部第一傾斜面（同図5・6）、前方部東側面にあるジオファイバー施工部の南北両側である（同図1～4）。

このうち、西造り出しが取り付け前方部西側面の箇所は、西造り出し東垣輪列の検出位置と、それから割り出した西造り出し上面の高さ、また、そのすぐ上の前方部西側面第一テラス面の位置と高さから、くびれ部から前方部先端にかけて緩やかにねじれる傾斜角と同じ面には築けないところである。つまり、墳丘構築の際に、前方部を築き成形した後で造り出しを取り付けたものではなく、明らかに計画的に構築されたものであると言える。前方部の構築を終え、西造り出しを取り付けた後、取り付け部の前方部斜面を削って西造り出しの上面を前方部側に広げ、西造り出し東垣輪列設置位置を決めたのであったとしても、西造り出しと前方部西側第一傾斜面の葺石が、一連の作業工程で築かれていることから、前方後円墳本体の墳丘構築工程の中に組み込まれて、計画的に築かれたものと考えられる。これは、紙粘土による推測な墳丘復元体験から感じることができた。調査記録からは、垣輪列に浅い溝が伴うらしい。おそらく急斜面となった前方部側から下る雨水が、垣輪列設置用の布掘り部分の柔らかい埋め土を侵食して出来た溝ではないかと思われる。

他のジオウエップ法面工法部分は、古墳本来の傾斜面を再現した部分ではなく、既存施設とのすり合わせとして急斜面にせざるを得なかった部分である。



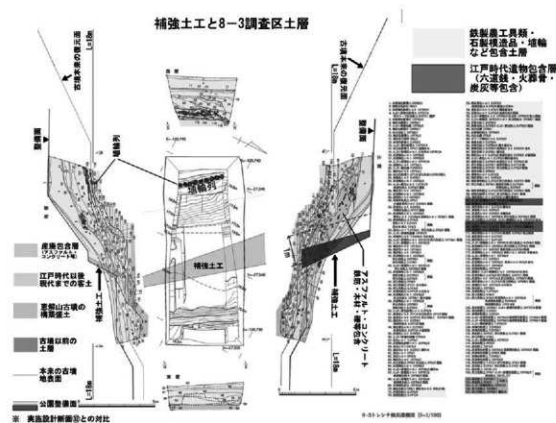


第88図 ジオウェブ施工

1～4 - 墓地東斜面での工事工程 5・6 - 西造り出し取り付き面 7・8 - 西くびれ部

## B ジオファイバーの工法

墓地の東側急斜面補強土工について、数多くある工法の中で、保存整備の「歴史とみどり」人の集う「史跡公園」というキャッチコピーに適合した工法と考えられるウッドブロック工法とジオファイバー工法について検討した。ウッドブロック工法は、傾斜面に木材が目立ち、古墳の保存整備にはふさわしくないと判断し、ジオファイバー工法で施工することとなった。この工法は、傾斜角度により2つのタイプに分けられている。法面保護タイプ（1:0.8程度の法面）の場合、植栽内容の幅が広がるが、恵解山古墳の場合擁壁形状タイプ（1:0.5のような急斜面に採用する工法）になる。この工法を採用するに当たり、まず、ジオファイバー工法で古墳残存面に影響が出ないかどうか、第8次調査データを中心に検討した。その結果、第89図のようにピンが打たれても古墳残存面に影響しないことが確認できた。また、ジオファイバー工法での緑化は、古墳復元面同様のコクマザサが植栽できないか、実験的植え付けも試しながら検討したが、法面が急であることなどから、コクマザサが根付かない可能性が懸念された。そこで、数ある候補の中から、在来種草本、なかでも種子が周辺に飛散して根付いても、処理に手を煩わす難易度が低いヨモギを選択した。また、その発芽率の少ない両端の狭い部分にコクマザサを第94図を基に植え込んだ。ジオファイバー施工部分は、古墳復元形状と異なる法面であり、墓地とのすり合わせにより整備する部分である。古墳本来の傾斜面を復元している部分と、ジオファイバー斜面になる部分との植栽を違えることは、墳丘形状を復元しているところでないという意味で、かえって誤解を生まない植栽表現と考えた。



第89図 ジオファイバー工法による遺跡残存面への影響を検討した図 (1/250)



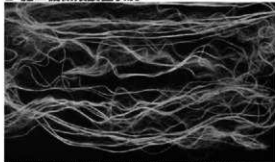
1 ジオファイバー施工風景（南東から）



2 施工機械類設置状況



3 ポピンケース格納スレッドフィーダー



5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5  
4 ポリエステル繊維



5 施工面成形掘削工



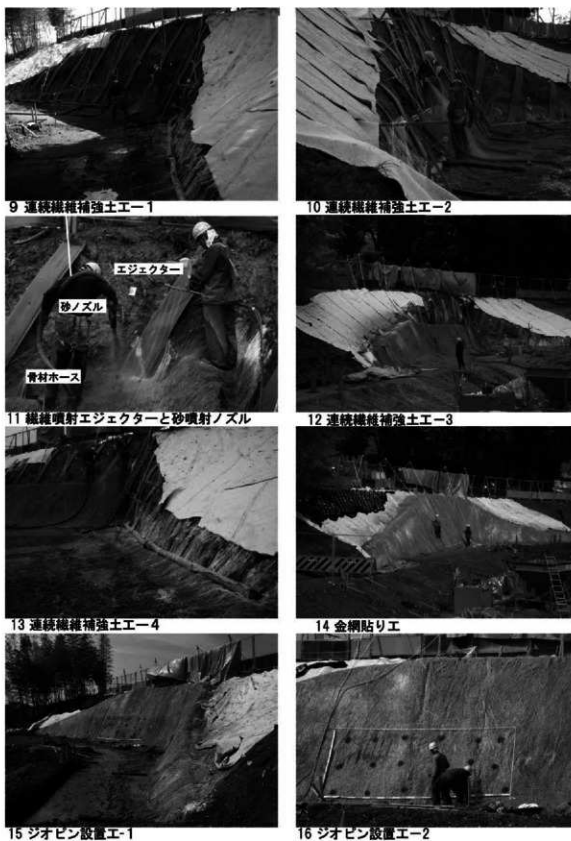
6 裏面排水施設設置工



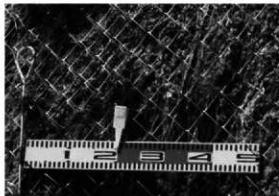
7 プレートアンカー設置工



8 プレートアンカー



第91図 ジオファイバー工法施工-2



17 ジオピンによる金網の固定



18 厚層素材吹き付けエー1



19 厚層素材吹き付けエー2



20 ジオファイバー工終了風景 (4月25日)



21 ヨモギ発芽状況 (5月14日)



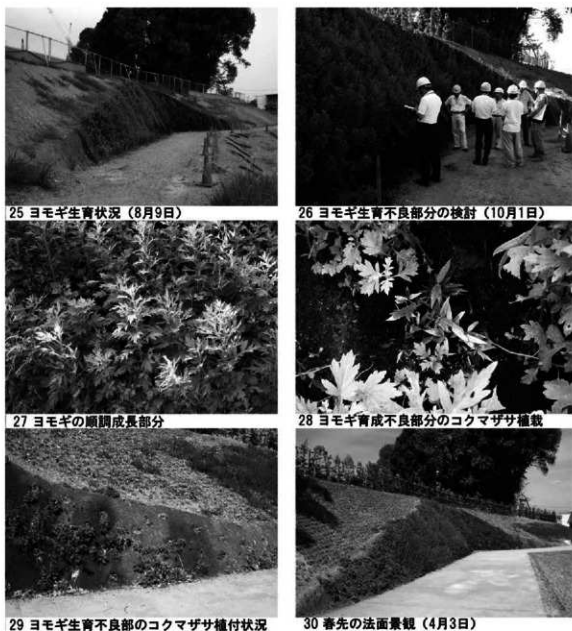
22 ヨモギ生育状況 (5月28日)



23 ヨモギ生育状況 (6月24日)

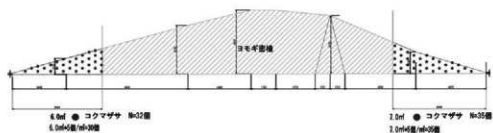


24 法面のヨモギ生育状況 (6月28日)



第93図 ジョオファイバー工法施工-4

コグマザサ植栽実施計画図



第94図 ジョオファイバー法面の植栽変更計画図

#### 4 バンパーバリアとスリムエッジの施工

竹藪保存区域には、バンパーバリアを設置した（第95図）。これは、竹の地下茎が竹藪保存区域外に広がるのを防ぎ、古墳の復元整備を施した周辺部を保護する目的である。

バンパーバリアは、幅1mの帯状製品で、幅約1m、深さ約1mの掘削溝に設置し、竹林保存区域を全周させた。掘削は、土層観察を行いながら進めた。掘削土内には、部分的に礫の集積箇所があったが、葦石として組み込まれた状態ではなく、葦石崩落礫または後世の集石廃棄跡と判断した。このほか、掘削底面に墳丘構築土と類似する土層を検出した部分もあったが、これを保護して進めた。注視する必要があったのはこの2か所で、他の部分では掘削深度が竹藪客土内に収まっていることを確認した。

スリムエッジは、東造り出し外縁部、前方面前中央部の葦石復元とコクマザサ植栽部の境、西くびれ部葦石復元斜面の南北両側辺に設置した（第96図）。東造り出し外縁部に設置したスリムエッジは、周濠部に整備した真砂土自由広場に東造り出しの芝が侵食していくを防ぐ目的がある。葦石復元とコクマザサ植栽の間に設置したスリムエッジは、コクマザサの地下茎が整備した葦石復元範囲に浸食し、葦石を浮かして壊さないようにする目的がある。



1 竹藪保存区域全景（東から）



2 バンパーバリア埋め込み溝掘削工



3 バンパーバリア埋め込み工



4 バンパーバリア設置完了状況



第96図 スリムエッジ設置工

### 第3節 計画施設の設置

#### 1 葺石復元施工

発掘調査などにより崩落していた出土葺石石材を集積保管していた（第104図4）ので、これを保存整備工事の葺石復元に利用した。復元石材の不足分は、新たに購入して補った（同図1）。調査では、石種は砂岩とチャートが相半ばして合わせて約90%で、他に頁岩～粘板岩、玢岩、緑色岩、フォルンフェルス、石灰岩などが少量あり、小泉川の中・下流の河床礫が使われたと考えられている。形状は、垂角礫の円磨度が使われており、不足分の調達石材も、出土石材とあまり違和感のないものを選定した。購入石材で、花崗岩など、恵解山古墳で使われていない石材は除去した（同図2・3）。葺石裏込め土は、真砂土に消石灰8%を配合した二和土とした。

石材の利用は、発掘調査成果を基に、大きさにより次に示す①基底石石材、②石列石材、③一般葺石石材の3つの用途に分け、発掘調査成果を基に作成した第97・168図の積み方を基本に構築した。

##### ①基底石石材

利用場所 前部葺石復元の各斜面法尻部に用いる。

東造り出し斜面法尻石列位置を、飛び石状に設置して表現する。

大きさ 12cm×12cm×15cm 以上

##### ②石列石材

利用場所 くびれ部屈曲線や約15mごとに観察された上下方向の石列を表現する。



基底石にも利用する。第3次調査と第8次調査8-2調査区のくびれ部の前方部側では、くびれ部石列から垂線を上げたような石列が約1mごとに観察されており、この特徴を表現するのにも利用する。

大きさ 10cm×12cm×15cm～12cm×15cm×20cm 程度

### ③葺石一般石材

利用場所 基底石より上の葺石に用いる。大きさにより(大)(中)(小)に分けられる。8-2調査区の成果から、約1m四方で(大)から(中)が多く用いられる部分や、(中)から(小)が多く用いられるような見え方があり、これを表現する。また、横方向や縦方向に並ぶ配置が観察されており、これを表現する。(大)の石材は、石列にも利用する。

大きさ (大) 7cm×10cm×20cm～8cm×15cm×12cm

(中) 7cm×11cm×17cm～5cm×8cm×12cm

(小) 3cm×4cm×5cm～6cm×9cm×12cm

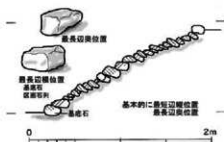
葺石復元位置は、前方部前面の中央階段西側と西くびれ部第一傾斜面で復元した。他の斜面にはコクマザサを植栽し、緑で覆うとともに崩落を防いでいる。

葺石の積み方は、大きな石を用いた石列で四角く区画し(区画石列)、その中を小さな石で、長軸を墳丘に突き刺す方向に向けて積み上げている。土木工事では「のりわりく工法」と呼ばれている工法に似ている。発掘調査成果を基本に、大阪府柏原市松岳山古墳や京都府鴨谷東1号墳などを参考に復元した。

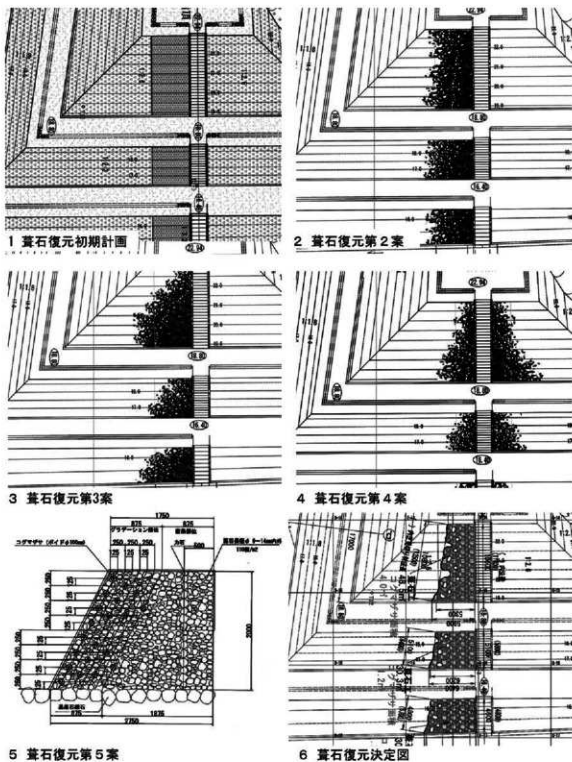
前方部前面の葺石復元は、第二傾斜面まで、発掘調査出土石材を利用した。また、葺石復元部の西辺は、次第にコクマザサ植栽域に溶け込むように見せるため、その境界を波打たせ、葺石復元域内西辺部付近にも植栽箇所を点的に配置した。第一斜面はすべて発掘出土石材、第二斜面は、区画石列だけ購入石、第三斜面はすべて購入石で復元した。購入石は、発掘調査で出土した石の種類・大きさ・円磨度に近い石材として、滋賀県安曇川産の石材を選択した。

西くびれ部の葺石復元は、残存状況が良かった西くびれ部第三斜面葺石の積み方を再現した。葺石石材は、区画石列を購入石、その中の葺石を発掘調査出土石材で復元した。発掘調査では、前方部側の葺石の裾に用いられた石(基底石)が、後門部の基底石よりかなり大きいという特徴があり、これを表現して復元した。

葺石の表現方法については、第98図の各案を検討した結果、各所の史跡整備で採用されているような帯状に直線的な側面(同図1)とはせず、側面に隣接する植栽に徐々に溶け込んでいくような復元(同図2～5)が出来ないか検討し、第5案(同図5)の試験工を実施した。しかし、コクマザサの生育が悪く(第99・100図)、最終的に第6案(第98図6)で施工することとした(第101～103図)。



第97図 葺石の積み方概念図



第98図 葦石復元範囲と表現方法の検討図



1 二和土作り（混合焼石灰の計量）



2 二和土作り（消石灰と砂の混合）



3 試験枠の設置



4 葦石復元（基礎石設置）



5 葦石復元（葦石裏込め二和土を敷く）



6 葦石復元（葦石敷き詰め作業）



7 葦石復元（植栽植え付けポイド配置）



8 葦石復元（葦石組み込み完成）



9 ボイドを抜き、コクマザサを播栽



10 コクマザサ植え付け完了 (5月21日)



11 植え付け段階のコクマザサ (5月21日)



12 コクマザサの成長を見守る (6月3日)



13 コクマザサの成長 (6月24日)



14 葦石復元試験の1m四方内の状況



15 コクマザサの育成不良 (9月10日)



16 コクマザサの育成不良 (10月2日)





1 前方部前面葦石復元工掘削-1



2 前方部葦石復元工掘削-2



3 基底石配置作業



4 葦石復元西辺境界の設定作業



5 葦石積み上げ作業-1



6 葦石積み上げ作業-2



7 葦石積み上げ作業-3



8 葦石積み上げ作業完了状況

第102図 前方部前面の葦石復元工



1 西くびれ部葦石復元工着手前



2 西くびれ部葦石復元工-1



3 西くびれ部葦石復元工-2



4 西くびれ部葦石復元工終了状況

第103図 西くびれ部の葦石復元工



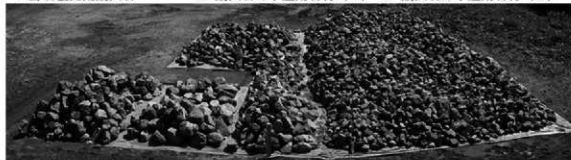
1 葦石復元用購入石



2 購入石の不適用石材(1)



3 購入石の不適用石材(2)



4 葦石復元用石材(発掘調査で出土した葦石崩落礫の保管)

第104図 葦石石材の選定

## 2 埴輪列復元施工

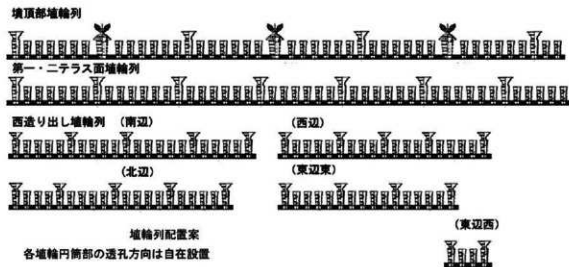
埴輪列の位置は、発掘調査成果を基に、幅約4mの各テラス面の外縁から約1.5m内側で、埴輪間隔は約40cmを基本として復元した。くびれ部の埴輪列が鋭く屈曲せず、なめらかに湾曲して復元しているのも、発掘調査で確認した状態を表現している。

当初計画では、普通円筒埴輪と朝顔形埴輪および壺形埴輪を各テラス面の南西部を中心に配置する計画であった。ところが、蓋形埴輪とこれと組み合わせる大型円筒埴輪が、出土品から復元が可能であることが明らかになり、この2種も模型を作り埴輪列に組み込むこととなった。このような経過から、第107図のように、埴輪模型作製数を変更した。

埴輪の樹立位置と数については、埴丘復元案を基に本来の埴輪樹立数を計算上求めた(第106図)。これはあくまで計算上であって、発掘調査で検出した埴輪列樹立埴輪の間隔は、厳密に等間隔ではなく、25cmから45cmまで様々である。

形態ごとの埴輪の樹立配置については、第6次発掘調査6-1調査区の統計を参考に検討し、第105図のように配置することとした。埴丘の各テラス面の埴輪列に並ぶ埴輪は、普通円筒埴輪を中心に、間に朝顔形埴輪が挟まる。埴頂部では、朝顔形埴輪と蓋形埴輪が普通円筒埴輪の間に交互に挟まる。蓋形埴輪は、貴人の所在位置や住まいなどをかざす筈と考えられることから、埴頂部にのみ配置した。西造り出しの埴輪列では、円筒埴輪の間に挟まれる器形を、朝顔形埴輪の祖形要素としての伝統が残された壺形埴輪の製作意図に特殊性を認めて、壺形埴輪とした。また埴輪列の配置は、兵庫県加古川市行者塚古墳などを参考に、埴丘側の北寄りで食い違いに配置して埴輪列を開口させた。

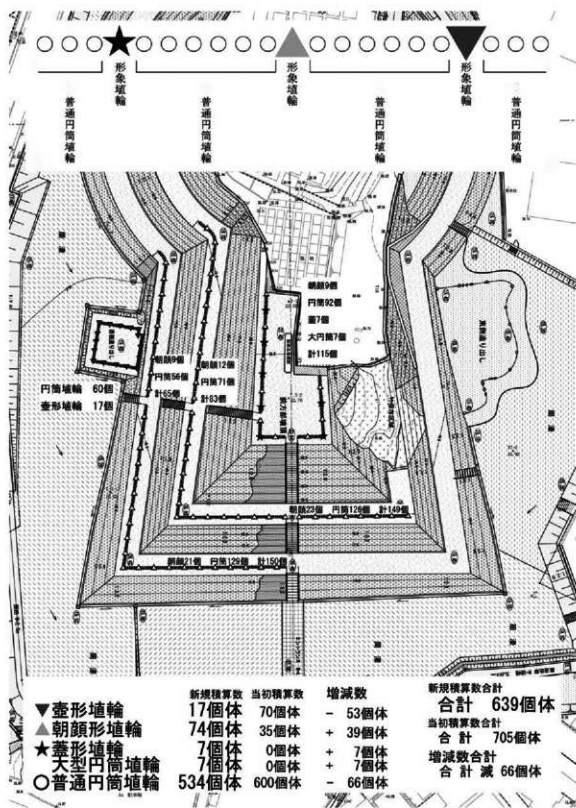
埴輪列復元工の工程や、設置状況については、第108図に示した。



第105図 埴輪列復元配置







第107図 復元埴輪列の範囲と樹立埴輪集計図



1 埴輪列基礎掘削工



2 埴輪列基礎型枠



3 埴輪列設置コンクリート基礎完成



4 埴輪模型運び込み



5 埴輪模型の設置



6 埴輪列復元完成風景



7 西遡り出し中央からの埴輪設置状況360度パノラマ

### 3 植栽

#### A 芝張り

芝張りの整備は、自由広場を除く周濠部、周濠部外縁斜面、東造り出し、後門部北東部の墓地境などで施工した（第109図）。前方部前面のエントランス補強土芝張部分はティフトン芝（同図5）、他の部分は野芝（同図6）とした。

#### B イスマキ植樹

墓地境と休憩広場南接の通路止めは、イスマキ生垣とした（第111図）。墓地境の生垣は、墓地から整備域が見え、古墳来訪者からは墓碑が隠れる高さで調整することとした。



1 芝張り工 周濠南東隅部-1



2 芝張り工 周濠南東隅部-2



3 前方部前面周濠の芝張り前の整地状況



4 前方部前面周濠の芝張り状況



5 エントランス芝生補強舗装の張り芝



6 周濠・外堤斜面などの張り芝

## C コクマザサ植栽工

コクマザサは、葦石復元整備部分、階段設置部分、ジオファイバー施工部分を除く墳丘復元整備斜面全面に植栽した。本格的な植え込みの前に、1m四方の試験植樹を行い、順調に成長することを確認した(第110図)。植えこみ作業では、植栽部分の表層に腐食土を混和して、植え付けた。

## D サツキツツジ

サツキツツジは、前方向墳頂の墓地域、周濠南辺堤、周濠南東部に植樹した。また、周濠南東部の農道北沿いにオンサイト調整池機能のために築いた堤には、これとは品種の異なるサツキツツジを植樹した。周濠南東部のサツキツツジは、周濠外縁部を密植し、周濠底南端を列植えして、周濠遺構の位置を表現した(第112図)。



1 コクマザサ植栽試験 (3月5日)



2 コクマザサ試験植栽状況



3 コクマザサ試験植栽生育状況 (5月30日)



4 コクマザサ植栽工 (植栽土壌改良)



5 コクマザサ植栽工



6 コクマザサ生育状況

第110図 コクマザサ植栽



1 植栽イヌマキ



2 イヌマキ植え付け



3 墓地東辺のイヌマキ生垣



4 墓地南辺のイヌマキ生垣

第111図 イヌマキ植栽



1 サツキツツジ



2 植栽土壌改良



3 植え込み作業



4 植え付け完了風景

第112図 サツキツツジ植栽

#### 4 オンサイト貯留式（現地貯留式）調整池とオリフィス

恵解山古墳前方部の東西周濠部に堤が築かれていた。これは、当古墳所在地域の集落が、昭和29年の豪雨洪水被害の経験から築いたものと伝わっている。この堤を今回の保存整備事業で撤去し、古墳の周濠を復元整備することになった。そこで、当古墳以南の集落を水害から守るため、古墳周濠南辺の農道に沿って50cm程度の土手を築いてオリフィスを配置し、復元整備する周濠部にオンサイト（現地貯留式）調整池としての機能を持たせることになった。これを計算上、10年確率の時間降雨強度約61.6mmで算出したデータを基に排水量を制限し、下流集落に影響が出ない構造とした。

周濠部貯水可能面積は、3,500㎡あり、許容量は、水深約30cmで最大約630㎡ある。

##### 【参考】

最大1時間降水量記録 千葉県香取観測所 1999年10月153mm

長崎県長浦岳観測所1982年7月153mm

京都 1時間降水量記録 1980年8月26日88.0mm

(以上、平成22年現在のデータ)

なお、平成26年8月24日の長岡京市期間降水量は70mmと測定されている（大阪管区気象台 [www.jam-net.go.jp/osaka/kikou/saigai/pdf/sokuhou/20140827a.pdf](http://www.jam-net.go.jp/osaka/kikou/saigai/pdf/sokuhou/20140827a.pdf)）。

また、平成26年の台風11号の影響について、長岡京市の場合、8月10日の日最大1時間降水量は48mm、統計期間1976年以後の8月の24時間降水量は146mm、同48時間降水量は8月8日9時～10日24時までの降水量と同じで272.5mmであったと発表されている「平成26年台風11号による大雨について（京都府気象速報平成26年8月12日12時現在気象速報京都地方気象台 [www.kouiki-kansai.jp/data\\_upload/1412209956.pdf](http://www.kouiki-kansai.jp/data_upload/1412209956.pdf)による。）。この時、恵解山古墳の周濠はしばらく池となり、オリフィスが正常に機能した（第114図）。



1 オリフィス設置状況（北西から）

2 墳丘裾からの排水構造（南西から）

第113図 オリフィス設置状況



1 前方面前面貯水状況（南東から）



2 模型土台付近の貯水状況（南西から）



3 東屋付近の貯水状況（東から）



4 東造り出し付近の貯水状況（南から）



5 前方面南東周濠の貯水状況（北西から）



6 前方面南東周濠の貯水状況（南西から）



7 オフィスの排水機能状況（南東から）



8 南側集落への排水状況（北西から）



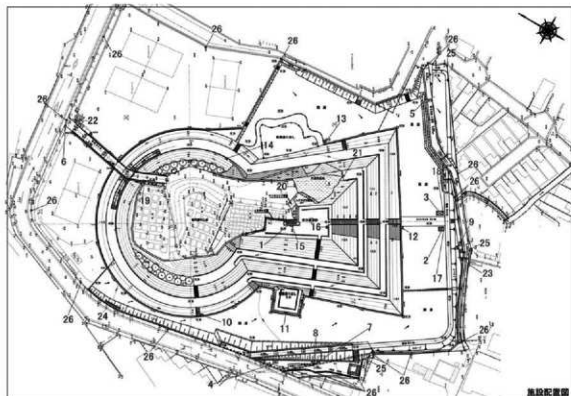
## 5 サイン施設

サイン施設には、模型3点、説明板1点、解説板11点、注意札5点、史跡名称板1点、標識1点、境界標3点、標柱2点、境界プレート28点などがある。これらは、ネットフェンスなどの囲いなどを含めて、史蹟名勝天然記念物標識等設置基準規則に基づき設置したものである。

サイン施設の配置は、第115図に示した。材質と大きさについては、第116図に示した。それぞれの構造図と設置状況および版面については第117図から第143図に示した。模型については、第5章第3節で詳細を記した。

このうち、模型（2）「恵解山古墳墳丘模型」と模型（3）「乙訓の古墳群地形模型」は、それぞれ解説板⑩「恵解山古墳の形状と特徴」と解説板⑪「乙訓の古墳群と恵解山古墳」の一体型の構造とした。

史跡の概要を表示した説明板「史跡 恵解山古墳」と恵解山古墳の概要を表示した解説板①・②「史跡 恵解山古墳の概要」には、日本語、英語、中国語、韓国語に要約した翻訳を掲載した。他の解説板には、表題のみ英語に翻訳して併記した。日本語文には基本的にすべての漢字にルビを付した。



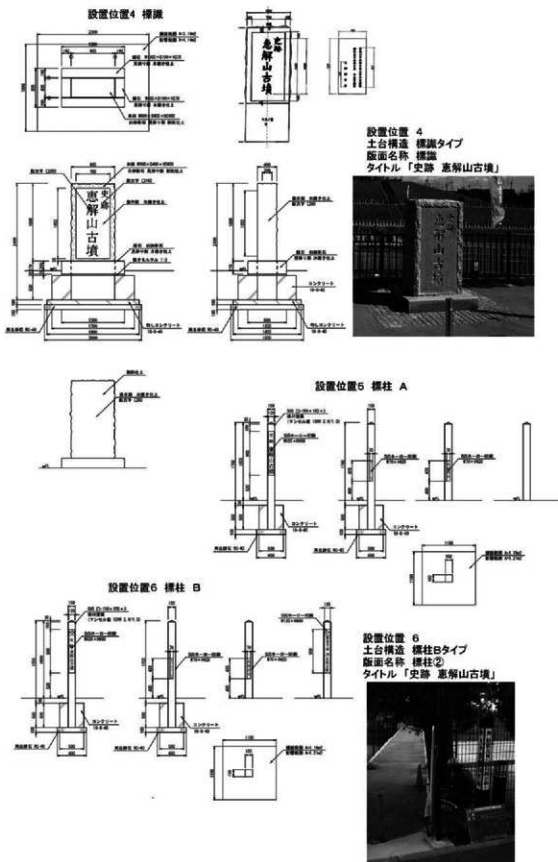
第115図 サイン施設設置位置図

## 標識・模型一覧表

番号	名称	タイプ	細目	
			本体 材質	台座 材質
1	模型(1)	模型(1)	W6400×D1150 陶板(写真印刷)	W6730×D1480×H100 礎石:御影石(白)
2	模型(2)	模型(2)	W1200×D1700 GRC	W1600×D2300×H300/600 石張り:御影石(白)
3	模型(3)	模型(3)	W1500×D2400 陶板(立体地形複製)	W1900×D3000×H300/600 石張り:御影石(白)

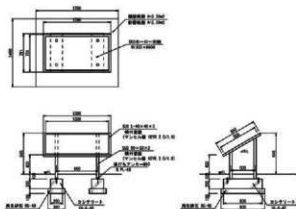
番号	名称	タイプ	細目	
			本体 材質	盤面 印刷タイプ
4	標識	標識	W900×D400×H1800 御影石(白)	W700×H1450 W150×H750 W200×H1350 彫り込み文字
5	標柱①	標柱A	W150×D150×H1600 ステンレス	W120×H900 :1枚 W70×H420 :2枚 ステンレスホーロー
6	標柱②	標柱B	W150×D150×H1600 ステンレス	W120×H900 :2枚 W70×H420 :2枚 ステンレスホーロー
7	説明板	説明板	W1390×D890×H845 ステンレス	W1300×H800 ステンレスホーロー
8	解説板①	解説板A	W1290×D890×H845 ステンレス	W1200×H800 ステンレスホーロー
9	解説板②			
10	解説板③			
11	解説板④			
12	解説板⑤			
13	解説板⑥			
14	解説板⑦			
15	解説板⑧	解説板C	W1400×D500×H488 石張り:御影石(白)	W1200×H400 ステンレスホーロー
16	解説板⑨	解説板D	W1090×D690×H745 ステンレス	W1000×H600 ステンレスホーロー
17	解説板⑩	模型(2)	-	W800×H300 ステンレスホーロー
18	解説板⑪	模型(3)	-	
19	注意札①	注意札A	W300×H1600 ステンレス	
20	注意札②			
21	注意札③			
22	注意札④			
23	注意札⑤			注意札B
24	史跡名称板	史跡名称板	W6000×H3000 スチール	W6000×H3000 カットインシート
25	境界標	境界標	W130×D130×H900 御影石(白)	-
26	境界プレート	境界プレート	W30×D30×t2 ステンレス	-

第116図 各種サイン施設一覧



第 117 図 各種サイン施設-1

設置位置7 説明板



設置位置 7  
土台構造 説明板  
版面名称 説明板  
タイトル「史跡 惠解山古墳」

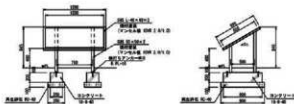
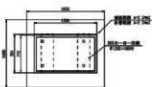


設置位置8 説明板Aタイプ 設置位置7 説明板  
版面名称 説明板①



設置位置8-9 解説板Aタイプ

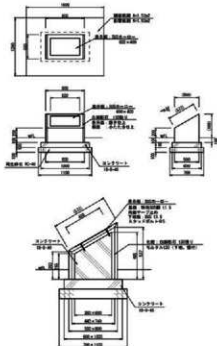
設置位置 8  
土台構造 解説板Aタイプ  
版面名称 解説板①  
タイトル「史跡 惠解山古墳の概要」



設置位置 9  
土台構造 解説板Aタイプ  
版面名称 解説板②  
タイトル「史跡 惠解山古墳の概要」



設置位置10～14 解説板Bタイプ



設置位置 10  
土台構造 解説板Bタイプ  
版面名称 解説板③  
タイトル「後円部」



設置位置 11  
土台構造 解説板Bタイプ  
版面名称 解説板④  
タイトル「西遣り出し」



設置位置 12  
土台構造 解説板Bタイプ  
版面名称 解説板⑤  
タイトル「前方部の基石」



設置位置 13  
土台構造 解説板Bタイプ  
版面名称 解説板⑥  
タイトル「東遣り出し」

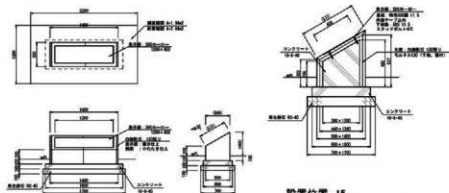


設置位置 14  
土台構造 解説板Bタイプ  
版面名称 解説板⑦  
タイトル「楕輪列」



第119図 各種サイン施設-3

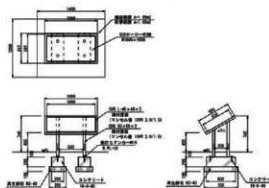
設置位置15 解説板Cタイプ



設置位置 15  
土台構造 解説板Cタイプ  
版面名称 解説板⑧  
タイトル「武器庫納施設」

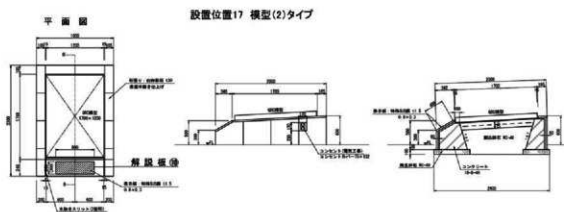


設置位置16 解説板Dタイプ



設置位置 16  
土台構造 解説板Dタイプ  
版面名称 解説板⑨  
タイトル「交通と惠解山古墳・山崎合戦」

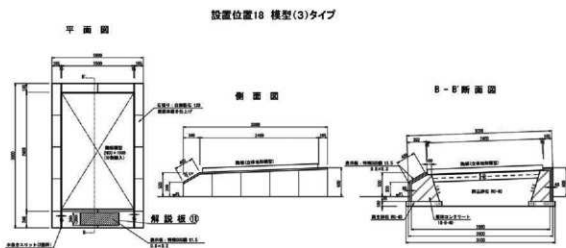




設置位置 17  
 土台構造 模型(2)タイプ  
 版面名称 解説板⑤  
 模型名称 模型(2)  
 タイトル「志保山古墳の形状と特徴」



第121図 各種サイン施設-5

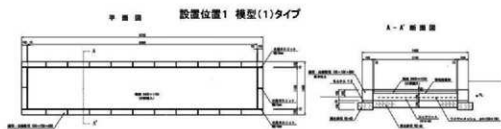


設置位置 18  
 土台構造 模型(3)タイプ  
 設置名称 解説板③  
 模型名称 模型(3)  
 タイトル 「乙訓の古墳群と恵寿山古墳」



第122図 各種サイン施設-6



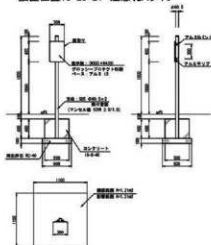


設置位置 1  
土台構造 模型(1)タイプ  
版面名称 解説版③  
模型名称 模型(1)  
タイトル「武器埋納施設」



第 123 図 各種サイン施設-7

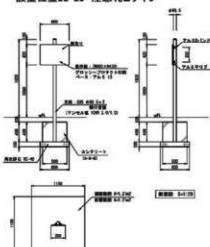
設置位置19-20-21 注意札Aタイプ



設置位置 19  
土台構造 注意札Aタイプ  
版面名称 注意札①  
タイトル「墓地関係者以外立ち入り禁止」



設置位置22-23 注意札Bタイプ



設置位置 20  
土台構造 注意札Aタイプ  
版面名称 注意札②  
タイトル「竹やぶ保存区域」

設置位置 21  
土台構造 注意札Aタイプ  
版面名称 注意札③  
タイトル「竹やぶ保存区域」



設置位置 22  
土台構造 注意札Bタイプ  
版面名称 注意札④  
タイトル「墓解山古墳の利用について」



設置位置 23  
土台構造 注意札Bタイプ  
版面名称 注意札⑤  
タイトル「墓解山古墳の利用について」





## サイン施設設置位置図番号 9(第112図) 説明板表示位置番号 7(第122図)

### 史跡 志解山古墳の概要

Overview of the Iganoyama Kofun (Tumulus)  
National Historical Site

Iganoyama Tumulus



志解山古墳は、古墳時代中期(4世紀末～5世紀末)に築造された全長約128mの乙部墳最大前方後円墳です。葎川古墳の墳高約16mの台地の縁に築られています。周壁には、幅約30mの周溝があり、周溝を囲めた古墳の全長は約180mに達します。古墳は3段に築かれ、斜面には砂葎やチャートの河原石がふかれ、各段と頂部平面層には埴輪が並べられています。後円部には、死者を埋葬した竈穴式石室があったとみられます。前方部の中央には刀剣などの鉄製武器約700点納められてあり、京都府では他に例がなく、全国的にも珍しいものです。志解山古墳は、その墳高や構造から5世紀前半頃に葎川古墳の乙部墳地帯全域を占めた支配層の墓と考えられます。

**Overview of the Iganoyama Kofun, National Historical Site**  
The Iganoyama Kofun (Tumulus) is the largest Jomon-period (Neolithic-shaped tumulus) in Chikuzen Region, approx. 128 meters long. It is located on the Mt. 16 m above the sea level. A moat of 30 m wide, surrounded 6.5 km 3.5 m barrow and 3 meters in height. The slope was covered with stones of shellfish. On each terrace, barrow (Jomon-style figure and cylindrical stone) in a line along its boundary. In the rear circular mound, there seems to be a stone burial chamber on the bottom of a shaft. In the center of the front square part, some 700 iron weapons such as sword, were found. It is only one case in Kyushu, and is rare even nationwide. Iganoyama Kofun supposed to be the tomb of a chieftain who ruled the right bank of Kikuzawa River during the first half of the 5th century.

#### 史迹 志解山古墳概要

志解山古墳全長約128m、乙部墳地帯最大の前方後円墳。葎川古墳の約16mの高台地縁に築かれ、周溝を囲めた古墳の全長は約180mに達します。周壁には、幅約30mの周溝があり、周溝を囲めた古墳の全長は約180mに達します。古墳は3段に築かれ、斜面には砂葎やチャートの河原石がふかれ、各段と頂部平面層には埴輪が並べられています。後円部には、死者を埋葬した竈穴式石室があったとみられます。前方部の中央には刀剣などの鉄製武器約700点納められてあり、京都府では他に例がなく、全国的にも珍しいものです。志解山古墳は、その墳高や構造から5世紀前半頃に葎川古墳の乙部墳地帯全域を占めた支配層の墓と考えられます。

시적 아케노야마 고분의 개요  
이케노야마 고분은 전경 128m에 이르는 乙部墳 지대의 최대의 전방후원분입니다. 해고 약 16m의 대지 기슭에 자리잡고 있습니다. 분방에는 폭이 30m에 달하는 외곽주. 고분은 3단으로 축조되었습니다. 사면에는 선돌이 줄지어 세워져 있습니다. 뒷원부 중앙에는 돌방무덤이 있는 것으로 추정됩니다. 전방부 중앙에는 도끼 등 철제 무기가 약 700점 가량 출토되었습니다. 이국 유일의 고분으로, 전국적으로도 드물게 볼 수 있는 예입니다. 이케노야마 고분은 그 구조나 분방 형태 등에서 전방후원분으로서 시적 아케노야마 분방지대의 지배자의 무덤으로 추정됩니다.

第127図 解説板②版面

## サイン施設設置位置図番号10(第112図) 説明板表示位置番号 3(第122図)

### 後円部 A rear circular mound

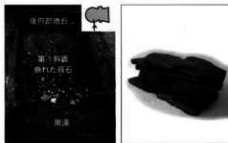
Iganoyama Tumulus

後円部は、直径約78.6m、高さは約10.4mと推定しています。頂部は、早くに大きく削られて、江戸時代から墓地として利用されてきました。墳頂部の中央には、周辺から出土した板状の石材から、死者を葬るための竈穴式石室があったと考えられます。

ここでは、後円部裾の葎石が検出されました。斜面に他より一回り大きい基底石が前方部裾にあり、後円部がないことが注目されます。西くびれ部最上段斜面の葎石の様子は、最下段斜面に復元的に再現しています。



後円部 3 斜面の葎石



後円部の葎石

竈穴式石室の石材

第128図 解説板③版面

## サイン施設設置位置図番号 11(第112図) 説明板表示位置番号 3(第122図)

## 西造り出し A western projected terrace

Igenoyama Tumulus

ここは、前方部西側に取りつく、東西約8.5m、南北約12mの四角い施設で、特別な葬儀が行われた場所とみられます。造り出し上面は、埴輪で囲われていました。その東辺の埴輪列は、北よりで食い違っており、そこから中へ入る仕組みになっていました。造り出しの取り付け部分には、そこを島に見立てた入江状の表現があり、当時の死生観を知るうえで興味深いものです。



第129図 解説板③版面

## サイン施設設置位置図番号12(第112図) 説明板表示位置番号 6(第122図)

## 前方部の葺石 Covered stones on the front square mound

Igenoyama Tumulus

ここでは、実際に使われていた石材を使って葺石を復元しました。裾部に人頭大の石を置き、縦や横方向にも大きめの石で区画しながら、その間を拳大の石を差し込むように積みあげています。

葺石は、古墳の南西側にある小泉川から採取した河原石で、砂岩とチャートがほとんどです。

葺石に覆われた古墳は、白く輝く石の山として、強烈な印象を与えたことでしょう。



第130図 解説板⑤版面

## サイン施設設置位置図番号13(第112図) 説明板表示位置番号 10(第122図)

## 東造り出し An eastern projected terrace

Igenoyama Tumulus

東造り出しは、東西約14.5m、南北約17.5mの広さがあります。西造り出しとは異なり、大きく不整形な姿をし、周りの緩やかな斜面には、小石を敷いて洲浜のようになっています。その上端には、人頭大の石が並べてあります。また、南西隅には南に延びる張り出しがあり、東斜面から水鳥形埴輪が出土しました。水辺に佇む水鳥を表現したのでしょう。

ここでは、小石で覆われていた範囲を芝で覆い、石列は、飛び石で表現しています。



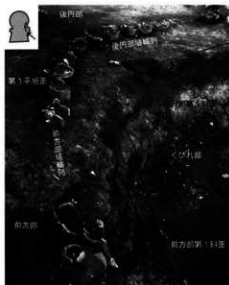
第131図 解説板⑥版面

## サイン施設設置位置図番号14(第112図) 説明板表示位置番号 11(第122図)

## 埴輪列 A row of haniwas (a terracotta cylinder)

Igenoyama Tumulus

ここは東くびれ部で、第1平坦面に並べられた埴輪が、長さ約12mにわたって見つかったところです。後円部を巡る埴輪列が、前方部へと、緩やかな曲線を描いて続いていました。これらは円筒埴輪と呼ばれる土管状の埴輪です。その多くは、土中に埋めていた底部が残っているだけでした。並べられた埴輪が、心々で約40cm間隔に立てられている状況から、恵解山古墳全体で約1800本以上の埴輪が使われたと推定できます。



東くびれ部第1平坦面の円筒埴輪列

第132図 解説板⑦版面



## サイン施設設置位置図番号16(第112図) 説明板表示位置番号 5(第122図)

交通と恵解山古墳・山崎合戦  
Traffic and the Igayoyama Kofun (Tomato)

Igayoyama Tumulus



## 交通と恵解山古墳

恵解山古墳は、西南から続く標高約16mの低い台地の端に築かれています。この古墳より東には、桂川右岸に広がる平野があり、南に藤やかり下りながら橋を架けています。この場所は、桂川、木津川、宇治川の三つの川が合流して淀川となる地点にも、近い位置です。京都から大阪平野に流れ込むこれらの川は、古代の水上交通上重要であり、この重要地点を押さえていた首領の権力の強さを、往來する人たちに知らしめ、見せつけていた事でしょう。

## 山崎合戦と恵解山古墳

織田信長が明智光秀に倒された本能寺の戦の後、羽柴(豊田)秀吉と光秀が衝突した山崎合戦は、あまりにも有名ですが、恵解山古墳も、この戦いの舞台ともなった可能性があります。

発掘調査で、当時の土器片とともに火縄銃の筋溝が出土しています。また、後円部にある現在の墓地在田状に3段になっていることや、前方部に大きな盛り込みがあることも、光秀方が恵解山古墳に墓を築いたさいの遺構である可能性があります。

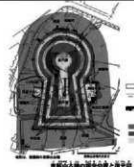


第134図 解説板⑥版面

## サイン施設設置位置図番号 17(第112図) 説明板表示位置番号 8(第122図)

恵解山古墳の形状と特徴  
The Shape and Features of Igayoyama Kofun (Tomato)

Igayoyama Tumulus



恵解山古墳は、乙訓地域最大の前方後円墳で、前方部は南東を向いています。規模は、全長約128m、後円部径約78.6m、後円部の高さ約10.4m、前方部幅約78.6m、前方部先端の高さ約7.6mに復元できます。墳丘は3段に築かれ、くびれ部に近い前方部の東西には、大きさや形の違う造り出しがあります。墳丘の周囲には、幅約30mの広く強い堀(周溝)が巡っています。古墳の形や造り出しのまつりなどは、当時の大王墓にならったもので、王権とのつながりの強さがうかがえます。

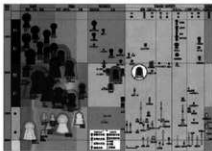
第135図 解説板⑧版面

## サイン施設設置位置図番号 18(第112図) 説明板表示位置番号 9(第122図)

乙訓の古墳群と恵解山古墳  
The Okunomiya Kofun Group (Tomato) and the Igayoyama Kofun (Tomato)

Igayoyama Tumulus

淀川の支流、桂川の西側にある乙訓地域(山城西南部)には、前方後円(方)墳を中心とする地域支配者(首長)の墓が数多く築かれました。古墳時代前期には、向日丘陵に古墳が築かれますが、中期に途絶え、かわって長岡京市域で大きな前方後円墳が造られ始めます。その時に登場したのが地域最大規模を誇る恵解山古墳です。これは、中央政権の墓域が奈良から大阪へ移動したことに関係する政治的再編を伝えるものと考えられています。



第136図 解説板⑨版面



サイン施設設置位置図番号19(第112図)  
説明板表示なし

第137図 注意札①版面

サイン施設設置位置図番号20・21(第112図)  
説明板表示なし

第138図 注意札②③版面

サイン施設設置位置図番号22(第112図) 説明板表示なし



第139図 注意札③版面

## サイン施設設置位置図番号22(第112図) 説明板表示なし

**▲ 憲解山古墳の利用について**

みなさんが気持ちよく利用できるよう、他の人の迷惑となる行為はやめましょう

- 自転車・バイク等を持ち入れるのはやめましょう。
- 古墳保護と植物育成のため、斜面を駆け登ったり、滑ったり、木に登ったりするのはやめましょう。
- たき火、火遊び、タバコのポイ捨てはやめましょう。
- ごみは、各自で持ち帰りましょう。
- 展示品を壊したり、地面を掘ったりするのはやめましょう。
- トイレや駐車場はありません。

トイレル駐車場のご利用案内  
憲は、鳥山天皇立派の有利経路立  
どをご利用ください。

憲解山古墳  
案内図

現在地

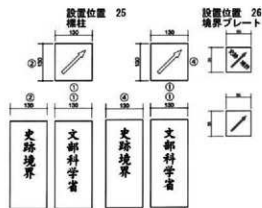
凡例 緑地 公園 公園

長岡京市教育委員会  
TEL: 075-954-3557

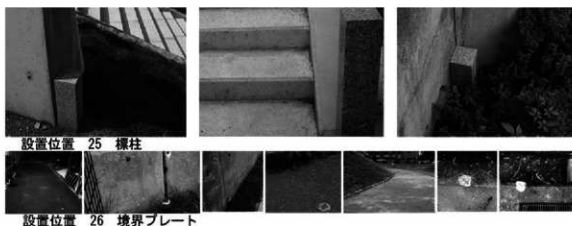
第140図 注意札5版面



第141図 史跡名称板設置状況(北西から)



第142図 史跡境界標と境界プレート



第143図 史跡境界に設置した標柱と境界プレート

## 6 電気・照明施設と水道栓

足下灯は、基本的に古墳の周濠輪郭を日暮れから21時まで点灯することとした。照明施設は、角型照明とLEDブロック（第144図）を用いた。角型照明は、周濠南半にある西辺から南辺にかけての園路沿い（第146図3～5）と、周濠北半部を巡る市道585号線沿いに設置した（第146図2）。LEDブロックは、墳丘南面中央の階段（第146図6・7）と、墓参道入り口から仮説木道スロープまでの間に設置した（同図）。角型照明は、史跡範囲を示し、LEDブロックは夕刻の来園者に退出路誘導する目的がある。

このほか、史跡名称板の版面を照らす照明も設置した。

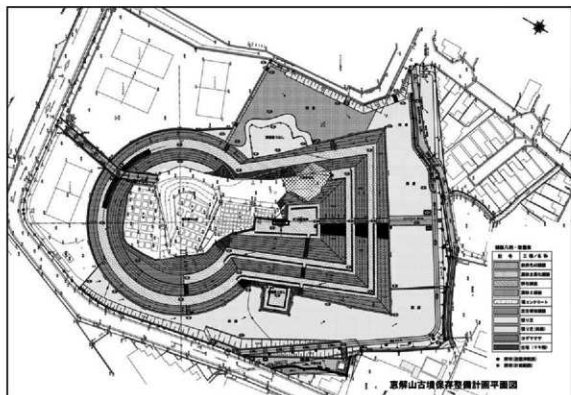
コンセントは、休憩広場昇降階段南西角近くと、前方部南周濠中央エントランスの墳丘模型土台東側面に設置した。

分電盤は、周濠南東部の市道5098号線西延長部南辺に設置した。

水道は、休憩広場昇降階段北西角近くと、前方部南周濠中央エントランスの墳丘模型南西角近くに、散水栓として設置した。



第144図 照明灯



第145図 照明施設配置図



第146図 分電盤と足下灯設置状況

## 7 園路

園路は、周濠西辺から南辺に沿って設置した。幅2mの周遊路で、自然色アスファルト舗装とした。北西端は、市道585号線と繋がり、史跡公園の中心的出入口となる。この出入口は、車いすのままの通行ができるように、スロープでつないでいる（第146図4）。

## 8 休憩広場と東屋、周濠南東部休憩施設

休憩広場は、市道585号線に面した当史跡公園への中心的導線入口位置に置いた。整備前は南北に長い池があった（第148図1）。これを埋め立てて盛土造成し（同図2）、自然色アスファルト舗装で整備した（同図4）。西辺から南辺は、民地であるため、擁壁柵を設置した。休憩広場内には、屋外ベンチ（同図8）と東屋を設置した。南端に配置した東屋の前には、休憩広場と園路を結ぶ昇降階段を設けた（同図6）。

東屋は木造で、東西1間、南北1間の3m四方で寄棟つくりである。桁までの高さは2.4m、各辺には壁を設けず開放し、南辺と西辺に木製格子の腰壁と木製座板のベンチを設置した。

屋外ベンチは、幅39cm、長さ1.8m、高さ40cmで、木製座板にサポートパイプを2基配置したもので、2脚を並べて設置した。

周濠南東部の農道南辺沿いには、自生していた雑木を防虫防腐加工したベンチ2脚を仮設した。



第147図 東屋、休憩広場整備状況（南東から）



1 整備着手前



2 盛土造成



3 東屋、階段設置状況



4 舗装整備状況



5 休憩広場完成状況



6 休憩広場、東屋完成状況



7 東屋内設置ベンチ



8 休憩広場 屋外ベンチ

## 9 階段・スロープの設置

石階段は、前方部前面中央階段（第149図）と休憩広場昇降階段（第150図8）に設置した。コンクリート階段は、東に隣接する長岡第八小学校のグラウンド昇降階段既存位置に整備した（第150図5・6・7）。擬木階段（第150図1～4）は、後門部西側面・前方部西側面・前方部東側面第一傾斜面・後門部東側面第一傾斜面の4か所に設置した。

木道仮設スロープは、墓参道から後門部第一テラス面に昇降できるように設定した（第151図）。この木道スロープは、車いすのままで墳丘第一テラス面を一巡見学するための施設である。



1 石階段基礎密削工



2 石階段裏面施工



3 石階段コンクリート基礎工



4 石階段取り付け工



5 石階段コンクリート基礎工



6 石階段完成状況

第149図 石階段設置工（前方部前面中央階段の施工）



1 擬木階段資材



2 擬木階段設置工



3 後円部西側設置の擬木階段



4 前円部西側の擬木階段



5 長岡第八小学校グラウンドに繋がる階段



6 同左階段の整備工



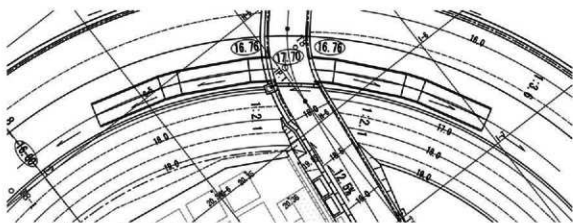
7 同上階段の整備状況



8 休憩広場昇降階段の整備状況

第150図 擬木階段、コンクリート階段・石階段の設置





1 木道スロープ設置計画図



2 木道スロープ基礎設置 (南東から)



3 東木道スロープ (東から)



4 西木道スロープ設置状況 (南西から)



5 東木道スロープ設置状況 (南から)



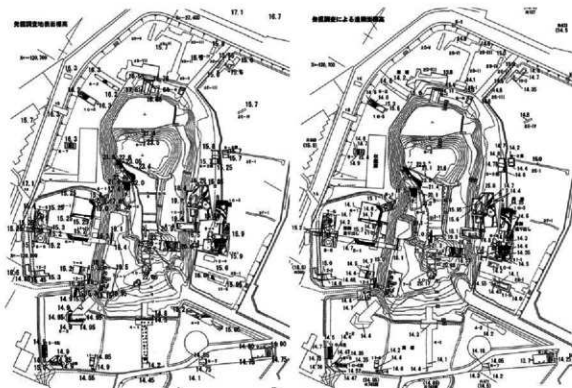
6 東木道スロープ設置状況 (北から)



7 西木道スロープ設置状況 (北から)

第151図 木道スロープ設置工





第153図 発掘調査時点での地表面標高と遺構残存面標高

- ① 平面形相似体のコナベ古墳をモデルとして復元。
- ② 福井県向山1号墳のように、副葬施設検出高とほぼ同じ高さが墳頂と仮定して復元。
- ③ 野中アリ山や西墓山古墳の副葬施設掘形の深さを参考にして復元。

## ① の場合

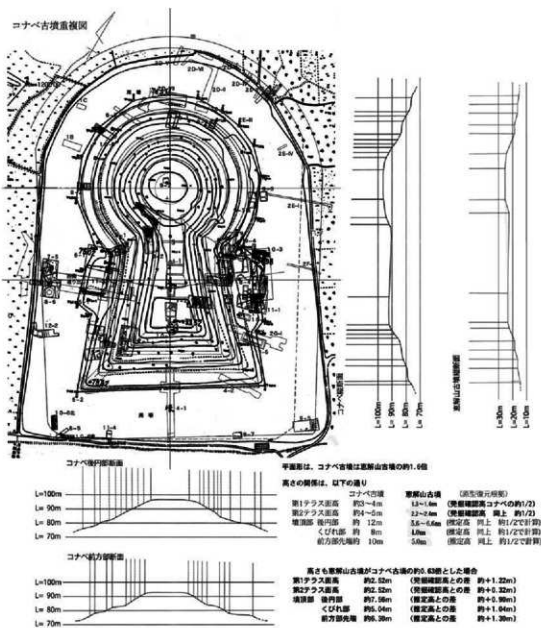
第154図は、恵解山古墳とコナベ古墳を重ねた平面図から、両者の断面をおこし、比較した図である。この図の右下には、各テラス面の高さや墳頂部の高さを算出した集計値を掲載した。コナベ古墳の各テラス面・墳頂部の比高は、等高線から計測した。恵解山古墳の復元高は、コナベ古墳の数値を参考に算出した。恵解山古墳の調査で計測できた基準数値の地点は、墳丘裾で10か所、第一テラス面で2か所、第二テラス面で3か所であった。この各個所で得られた数値は、コナベ古墳のおよそ1/2であることから、恵解山古墳で不明な各部位の高さをコナベ古墳の1/2と想定し、しかも後円部頂部の高さを第二テラス面の高さの3倍としたばあいの復元断面図をコナベ古墳の断面図と並べてみた。

右下の下段には、恵解山古墳の平面形がコナベ古墳の約0.63倍であることから、高さも同様に、コナベ古墳の各個所の高さの約0.63倍とした場合の数値と、恵解山古墳の発掘調査で明らかになっている数値やコナベ古墳の約1/2の復元高とした場合の差を示した。この復元の場合、調査で明らかな数値と大きな開きがあり、恵解山古墳の原型復元には不適合と考えられた。

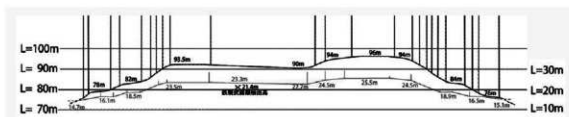
このようなことから、恵解山古墳の各部位の高さは、コナベ古墳の高さの約1/2であった可能性が指摘できる。ところが、この方法で復元した断面図に、恵解山古墳の鉄製武器類埋納施設の

検出高を書き加えてみると、第155図に示したように、前部墳頂面より約1.9mも深く埋納されたことになる。この深さは、竪穴式石室の中心主体部規模であり、現実的でないと思われる。

以上のことから、コナベ古墳をモデルにして、そのまま恵解山古墳を復元することはできないと考えられる。



第154図 コナベ古墳と恵解山古墳の比較図



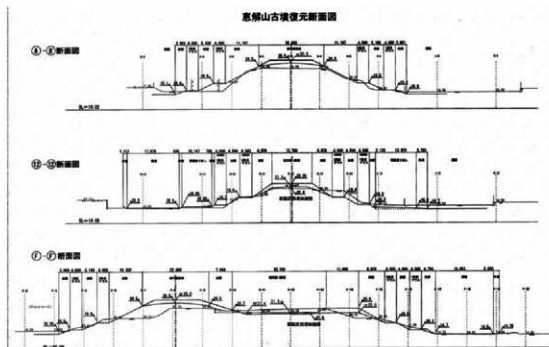
第155図 コナベ古墳を参考に恵解山古墳を復元した場合の縦断面と副葬施設位置

## ② の場合

向山1号墳では、最も深い所で深さ約35cmある鉄製品埋納施設の検出面と同一面から円筒埴輪が元位置を保ち、樹立状態で検出されている。このことから、鉄製品埋納施設検出面が大きく削平を受けているとは考えられない。

恵解山古墳では、深さ約22cmの鉄製武器類埋納施設検出面から元位置を保った埴輪の樹立は検出されていない。そこで、恵解山古墳も向山1号墳と同様に、鉄製武器類埋納施設検出面からさほど削平を受けていないとしても、少なくとも円筒埴輪の第1段タガまでの深さはあったと考えた場合、鉄製武器類埋納施設検出面から10～20cm程度は上に、本来の墳頂面があったと想定することが出来る。これを図化すると、第156図のようになると考えられる。

図のように復元した場合、後円部高と前方部高の比が1対0.5となり、コナベ古墳や墓山古墳の1対0.6に比べて、前方部が低くなる。また前方部第三傾斜面の勾配を緩やかにするか、前方部頂の幅を広くする必要がある。



第156図 向山1号墳参考復元

## ③ の場合

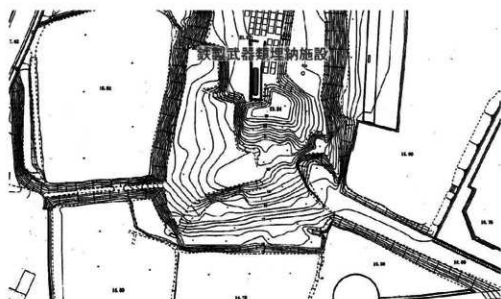
野中アリ山古墳では、地表面から約40cmの深さで鉄製品埋納北施設の掘形が検出されている。埋納施設の深さは約35cmある。西墓山古墳の場合、埋納施設の深さは約60cm程度のようなのである。

これらをもとに、恵解山古墳も鉄製武器類埋納施設の検出面は、少なくとも40cm程度埋まっていたと考えることが出来る。また現状地形では、鉄製武器類埋納施設検出地点の南は、約1mの高まりとなっている。

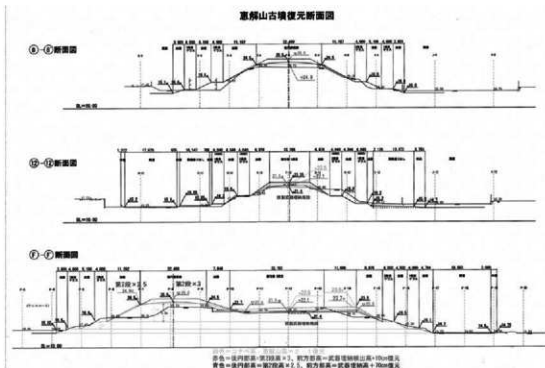
このような事例と現地地形からの推測で、恵解山古墳の鉄製武器類埋納施設の埋められた深さは、

40cmから1m前後の範囲内と推測することが出来る（第158図）。これに、①と②で問題とした前方部高と後門部高の比や、第三傾斜面の勾配、前方部の広さなどが大きな問題とならない程度の許容範囲として、鉄製武器類埋納施設所在地の前方部頂標高を埋納施設検出面から70cm上に想定した。

以上のような考察から、恵解山古墳の鉄製品埋納施設は、その検出面から約70cm上に前方部頂の平坦面があったと推定した。



第157図 恵解山古墳鉄製武器類埋納施設検出位置付近の地形



第158図 鉄製武器類埋納施設検出面より70cmから1m上を墳頂部とした場合の復元

## 第7章 発掘調査成果と保存整備完成状況

### 1 空からの景観

第159図は、勝龍寺城跡上空から天王山を望む景観である。

手前の森が、細川勝龍寺城北東部に残る土塁で、神足神社が鎮座する。手前中央から奥に向かって流れるのは小畑川である。右奥の手前の山が天王山。対する左の小山は八幡男山。その間で小畑川が合流する桂川と宇治川、木津川が合流し、淀川となって奥に見える大阪平野に向かう。



第159図 勝龍寺城上空から天王山を望む

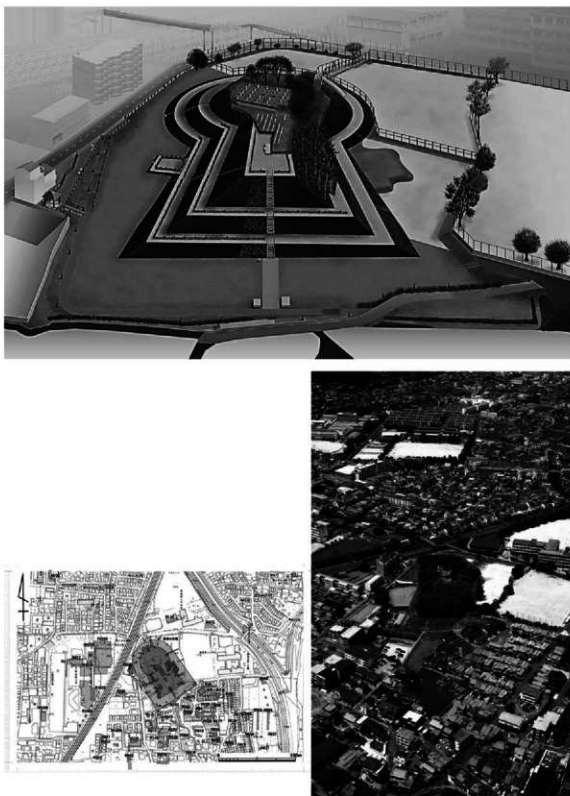
第160図は、天王山上空から京都盆地を見た景観である。

右側に桂川、宇治川、木津川の三川が合流する。



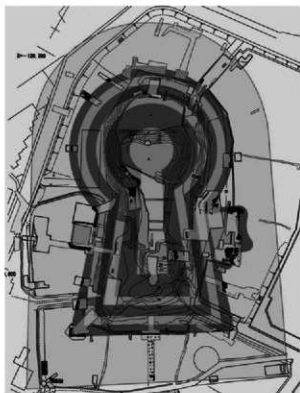
第160図 天王山から恵解山古墳を望む

## 2 主な発掘調査成果と整備前後の景観



第161図 保存・整備バースと恵解山古墳所在地付近の整備前景観  
上「歴史とみどり 人の集う 史跡公園」。下―古墳周辺の整備前景観と、周辺部の調査状況。





- 1.発掘調査以前
  - 2.工事に伴う調査
  - 3.範囲確認の調査
  - 4.保存整備に伴う調査
  - 5.整備工事に伴う調査
- 第1次～第3次  
第4次～第6次  
第7次～第12次

表1 発掘調査履歴

調査年度	調査内容	調査結果
昭和12年	梅原末治氏による発掘調査	...
昭和13年	...	...
昭和14年	...	...
昭和15年	...	...
昭和16年	...	...
昭和17年	...	...
昭和18年	...	...
昭和19年	...	...
昭和20年	...	...
昭和21年	...	...
昭和22年	...	...
昭和23年	...	...
昭和24年	...	...
昭和25年	...	...
昭和26年	...	...
昭和27年	...	...
昭和28年	...	...
昭和29年	...	...
昭和30年	...	...
昭和31年	...	...
昭和32年	...	...
昭和33年	...	...
昭和34年	...	...
昭和35年	...	...
昭和36年	...	...
昭和37年	...	...
昭和38年	...	...
昭和39年	...	...
昭和40年	...	...
昭和41年	...	...
昭和42年	...	...
昭和43年	...	...
昭和44年	...	...
昭和45年	...	...
昭和46年	...	...
昭和47年	...	...
昭和48年	...	...
昭和49年	...	...
昭和50年	...	...
昭和51年	...	...
昭和52年	...	...
昭和53年	...	...
昭和54年	...	...
昭和55年	...	...
昭和56年	...	...
昭和57年	...	...
昭和58年	...	...
昭和59年	...	...
昭和60年	...	...
昭和61年	...	...
昭和62年	...	...
昭和63年	...	...
昭和64年	...	...
昭和65年	...	...
昭和66年	...	...
昭和67年	...	...
昭和68年	...	...
昭和69年	...	...
昭和70年	...	...
昭和71年	...	...
昭和72年	...	...
昭和73年	...	...
昭和74年	...	...
昭和75年	...	...
昭和76年	...	...
昭和77年	...	...
昭和78年	...	...
昭和79年	...	...
昭和80年	...	...
昭和81年	...	...
昭和82年	...	...
昭和83年	...	...
昭和84年	...	...
昭和85年	...	...
昭和86年	...	...
昭和87年	...	...
昭和88年	...	...
昭和89年	...	...
昭和90年	...	...
昭和91年	...	...
昭和92年	...	...
昭和93年	...	...
昭和94年	...	...
昭和95年	...	...
昭和96年	...	...
昭和97年	...	...
昭和98年	...	...
昭和99年	...	...
平成元年	...	...
平成2年	...	...
平成3年	...	...
平成4年	...	...
平成5年	...	...
平成6年	...	...
平成7年	...	...
平成8年	...	...
平成9年	...	...
平成10年	...	...
平成11年	...	...
平成12年	...	...
平成13年	...	...
平成14年	...	...
平成15年	...	...
平成16年	...	...
平成17年	...	...
平成18年	...	...
平成19年	...	...
平成20年	...	...
平成21年	...	...
平成22年	...	...
平成23年	...	...
平成24年	...	...
平成25年	...	...
平成26年	...	...
平成27年	...	...
平成28年	...	...
平成29年	...	...
平成30年	...	...
平成31年	...	...
平成32年	...	...
平成33年	...	...
平成34年	...	...
平成35年	...	...
平成36年	...	...
平成37年	...	...
平成38年	...	...
平成39年	...	...
平成40年	...	...
平成41年	...	...
平成42年	...	...
平成43年	...	...
平成44年	...	...
平成45年	...	...
平成46年	...	...
平成47年	...	...
平成48年	...	...
平成49年	...	...
平成50年	...	...
平成51年	...	...
平成52年	...	...
平成53年	...	...
平成54年	...	...
平成55年	...	...
平成56年	...	...
平成57年	...	...
平成58年	...	...
平成59年	...	...
平成60年	...	...
平成61年	...	...
平成62年	...	...
平成63年	...	...
平成64年	...	...
平成65年	...	...
平成66年	...	...
平成67年	...	...
平成68年	...	...
平成69年	...	...
平成70年	...	...
平成71年	...	...
平成72年	...	...
平成73年	...	...
平成74年	...	...
平成75年	...	...
平成76年	...	...
平成77年	...	...
平成78年	...	...
平成79年	...	...
平成80年	...	...
平成81年	...	...
平成82年	...	...
平成83年	...	...
平成84年	...	...
平成85年	...	...
平成86年	...	...
平成87年	...	...
平成88年	...	...
平成89年	...	...
平成90年	...	...
平成91年	...	...
平成92年	...	...
平成93年	...	...
平成94年	...	...
平成95年	...	...
平成96年	...	...
平成97年	...	...
平成98年	...	...
平成99年	...	...
令和元年	...	...

### 梅原末治氏の報告

保存整備工事に伴う調査C地区出土  
家形埴輪の調査文

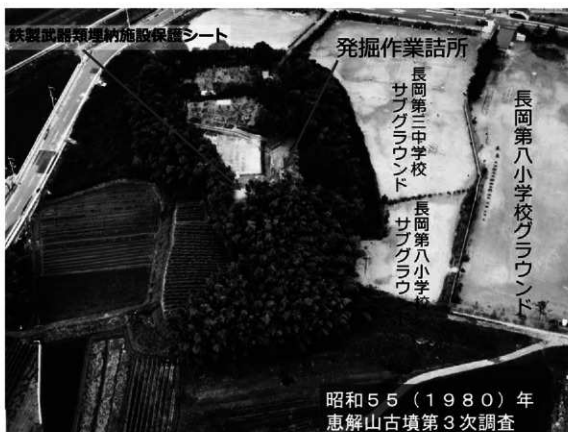


乙 調査  
第四 惠解山古墳

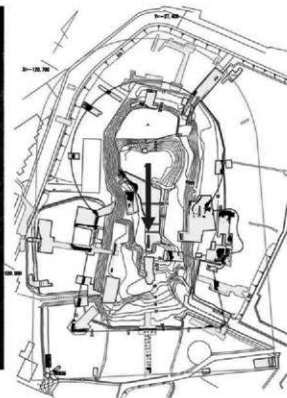
調査は、昭和12年、梅原末治氏による発掘調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。調査は、昭和13年から昭和15年まで続けられた。昭和16年から昭和18年までは、古墳の保存整備が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和19年から昭和21年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和22年から昭和24年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和25年から昭和27年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和28年から昭和30年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和31年から昭和33年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和34年から昭和36年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和37年から昭和39年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和40年から昭和42年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和43年から昭和45年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和46年から昭和48年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和49年から昭和51年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和52年から昭和54年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和55年から昭和57年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和58年から昭和60年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和61年から昭和63年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和64年から昭和66年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和67年から昭和69年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和70年から昭和72年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和73年から昭和75年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和76年から昭和78年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和79年から昭和81年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和82年から昭和84年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和85年から昭和87年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和88年から昭和90年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和91年から昭和93年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和94年から昭和96年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。昭和97年から昭和99年までは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。令和元年からは、古墳の調査が行われ、その結果、古墳の構造や出土品が明らかになった。

【京都府史蹟勝地調査会報告】第6冊（1925年）

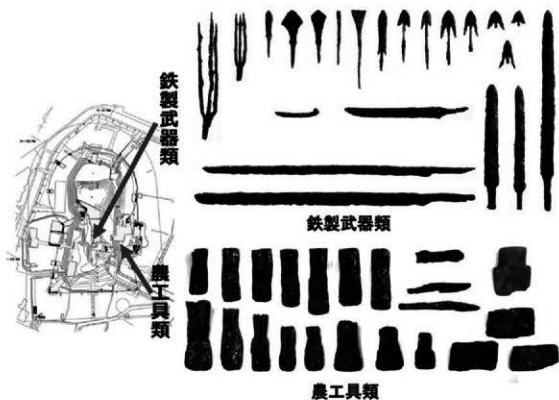
第162図 これまでの調査と発掘調査以前の様子  
上—惠解山古墳の発掘調査位置。下—踏査記録が初めて掲載された報告書。



第3次調査

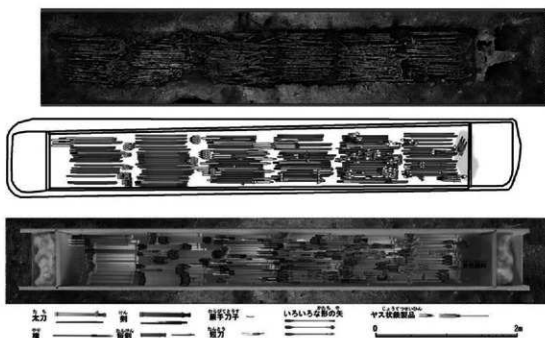


第163図 鉄製武器類埋納施設の調査  
上一発掘調査中の恵解山古墳の景観。下一史跡指定の契機となった鉄製武器類埋納施設検出状況。



第164図 鉄製品の種類と埋納施設検出地点の展示

上一鉄製農工具類や石製模造品がまとめて出土し、武器類埋納施設とは別の埋納施設があった可能性が高くなった。下一武器類埋納施設の検出地点展示状況。



【参考】豊島直博「古墳時代前期の刀装具」2007考古学研究54-1通巻213考古学研究会  
 岩本 崇「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」2006考古学雑誌第90巻第4号日本考古学会

### 1. 鉄製武器類埋納施設

武器類埋納施設	短刀	148	鉄器 A～M 合計 472以上	
	短刀	1		
	鉄剣	11		
	鉄鏃	57以上		
	鉄鏃	A		293以上
		B		12
		C		8
		D		26
		E		13
		F		12
		G		12
		H		4
		I		3
		J		7
K	10			
L	16			
M	28			
兼手刀子	10			
ヤス	5			
不明銅片				
合計	702以上			

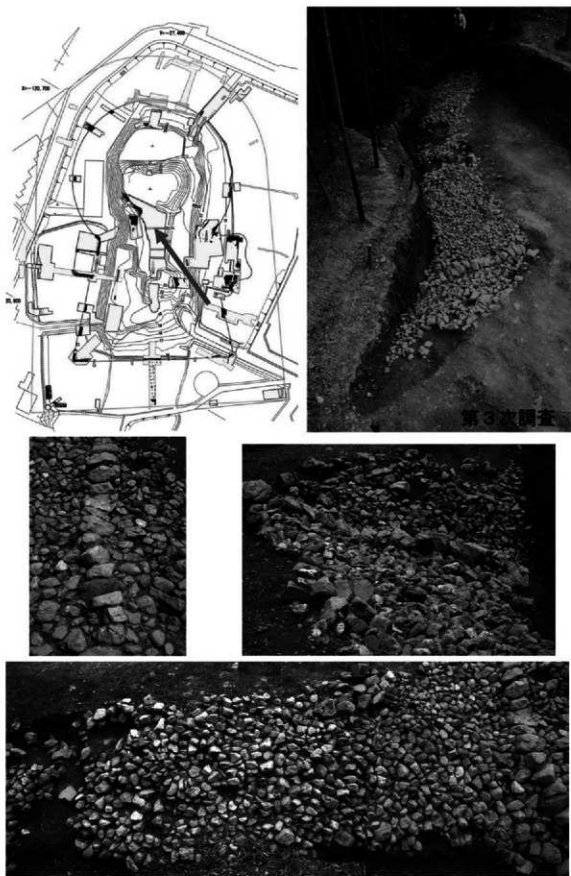
### 2. 農工具類埋納施設

農工具類埋納施設	鉄製品	鉄斧	34以上
		鋤先	10以上
		手鎌	1以上
		鉄鏃	5以上
		刀子	2以上
		鉄剣	4以上
		鉄鏃	1以上
		不明	
	石製品	斧形石製品	1
合計		60以上	

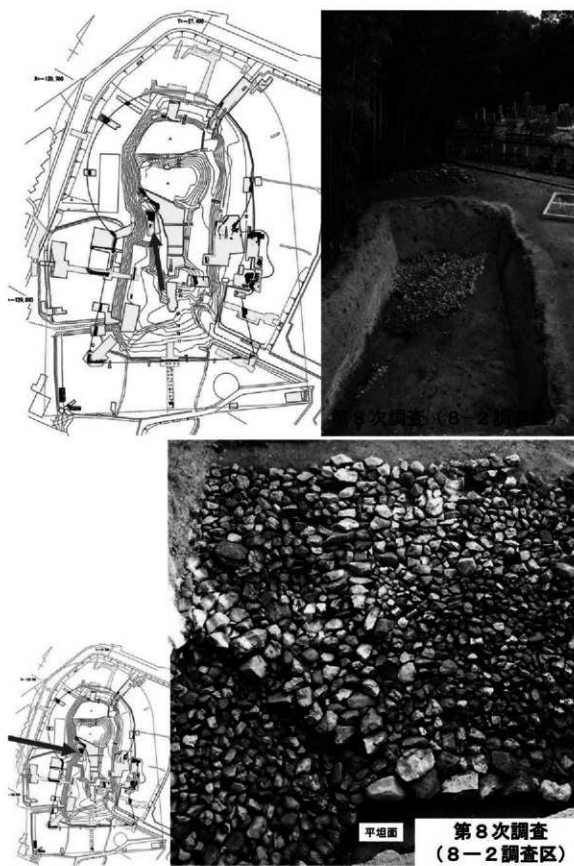
第165図 武器類埋納状況の復元と鉄製品石製品出土量

上一鉄製武器類埋納施設の出土状態から埋納状況を復元した。

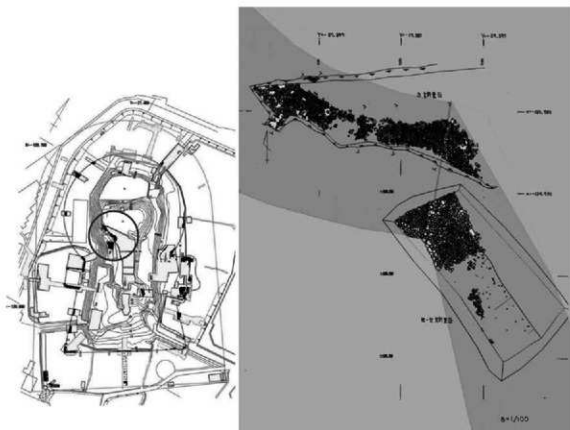
下一武器と農工具の出土地点別統計表。



第166図 西くびれ部第三傾斜面並石検出状況  
くびれ部に石列がきれいに並ぶ。また、後円部側には縦方向に並ぶ区画石列がみられる。



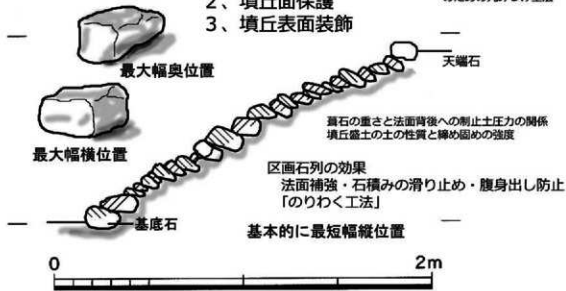
第167図 西くびれ部第三傾斜面裾部での葺石検出状況  
 前方部側の基底石は大きく明瞭で、後門部側には大きな石は見られない。



### 葺石施工目的は何か？

- 1、土留め擁壁
- 2、墳丘面保護
- 3、墳丘表面装飾

土木基準  
 平面 敷石  
 勾配1割5分以下 貼石  
 勾配1割以上 石積み  
 ラウンディング 法面保護  
 のための丸みづけ工法

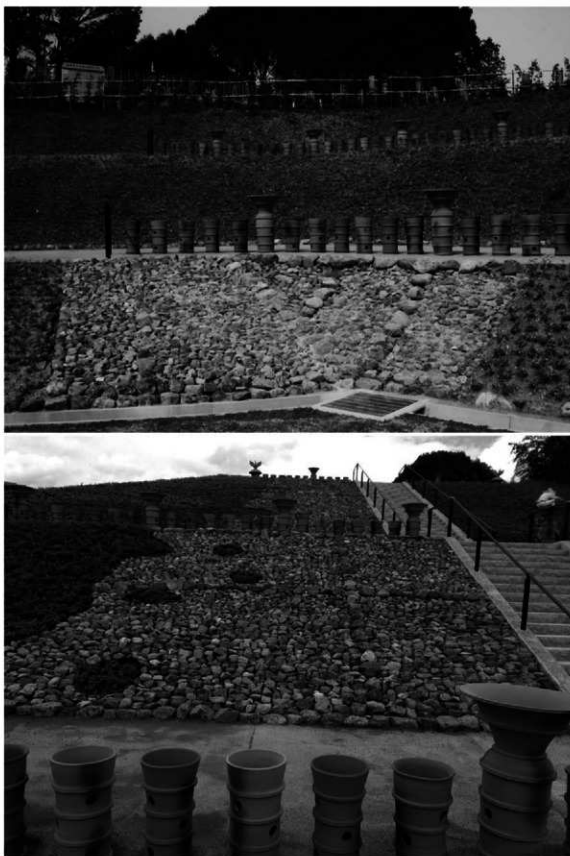


葺石の積み方基本概念図

古墳時代の研究7 古墳1 墳丘と内部構造  
 石塚久則「葺石」1992 雄山閣出版

第168図 くびれ部の葺石検出位置と施工法

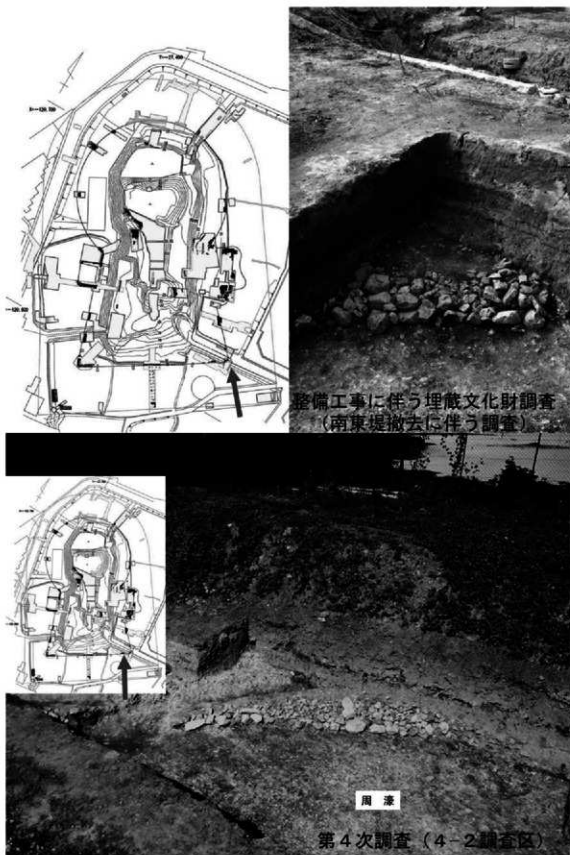
上一西くびれ部第三傾斜面の葺石検出範囲。  
 下一葺石の積み方の概念図。



第169回 葺石復元整備状況

西くびれ部第三傾斜面検出葺石をもとに、西くびれ部第一傾斜面（上）と前方部前面中央（下）で復元整備した様子。褐色の石は、発掘調査出土葺石崩落礫。灰色礫は購入石。

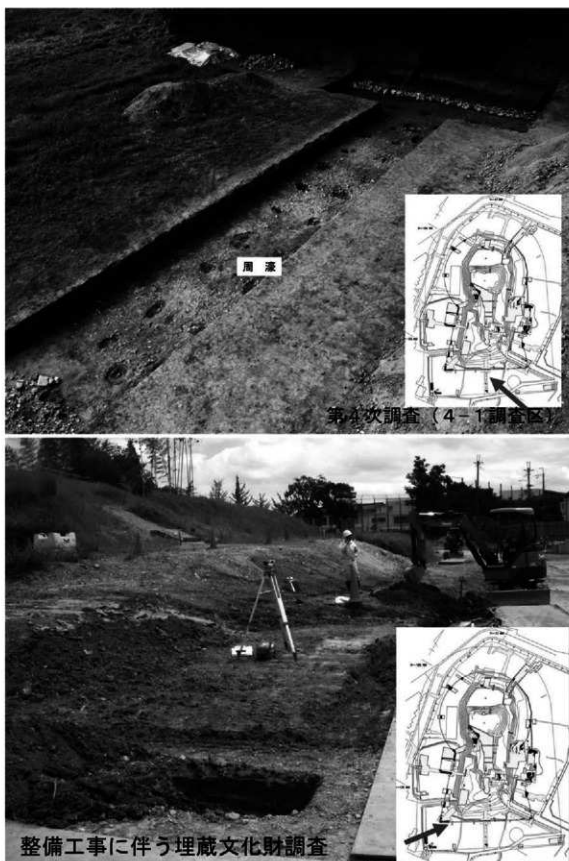




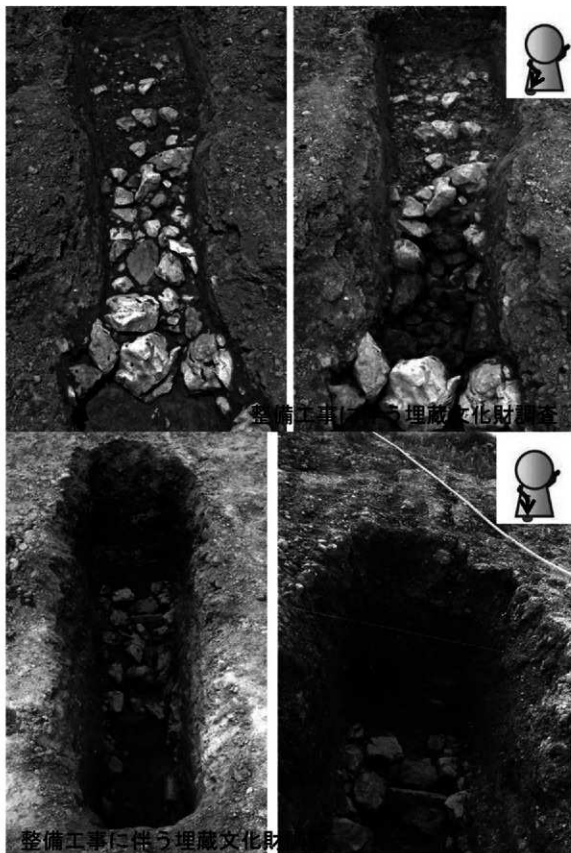
第170図 前方面南東裾部葺石

上一前方面南東隅の第一傾斜面葺石墳丘裾部。

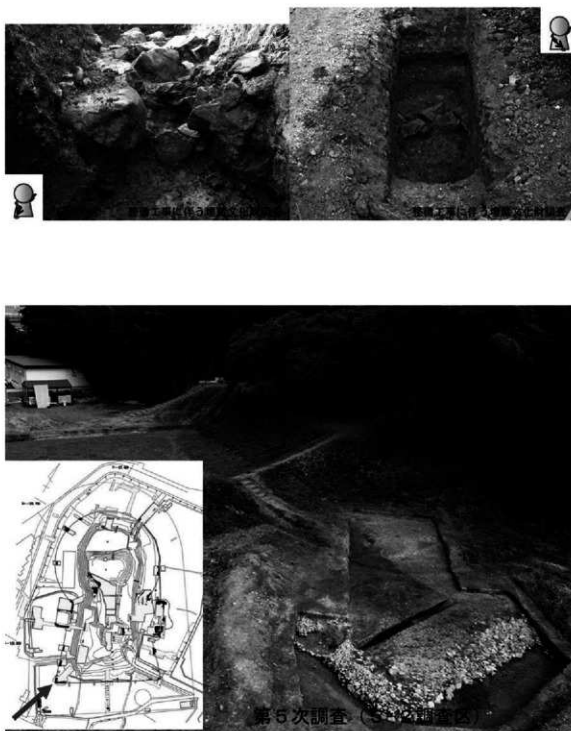
下一前方面南東隅から続く前方面の第一傾斜面葺石墳丘裾部。



第171図 前方部前面の掘削調査  
上一前方部前面中央の第一傾斜面葺石墳丘掘部。下一前方部前面の墳丘掘確認調査。

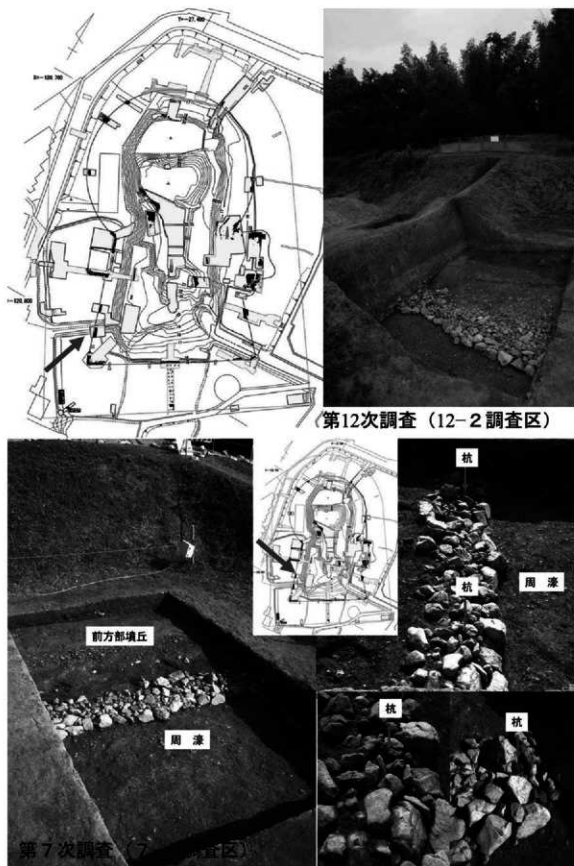


第 172 図 前方部前面墳丘裾の葺石  
 前方部前面の各所に残る第一傾斜面墳丘裾の葺石。



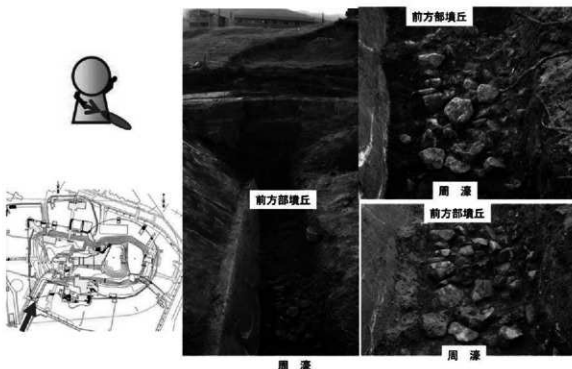
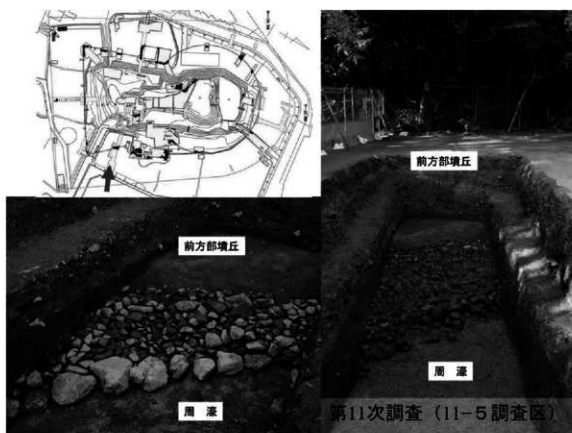
第173図 前方部南西部の墳丘掘葺石

上一前方部前面の各所に残る第一傾斜面墳丘掘葺石。下一前方部南西隅の墳丘掘葺石。



第12次調査 (12-2 調査区)

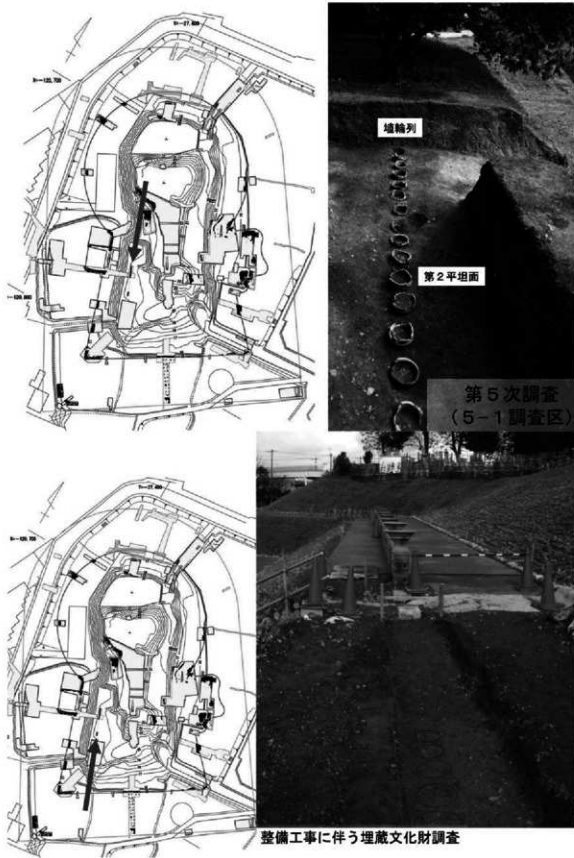
第174図 前方部西辺南半の墳丘裾葺石  
 前方部西側南半の第一傾斜面墳丘裾部の葺石。葺石の間に、杭が打たれていた。



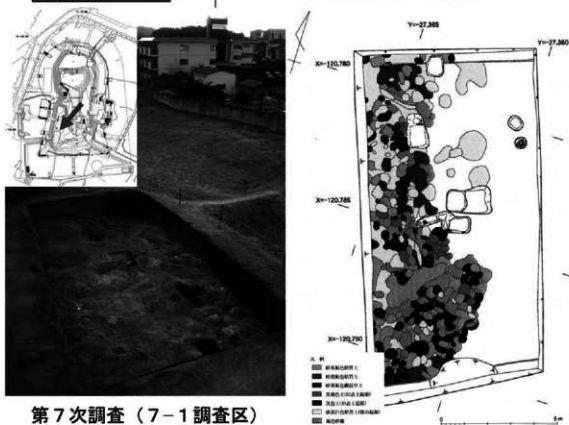
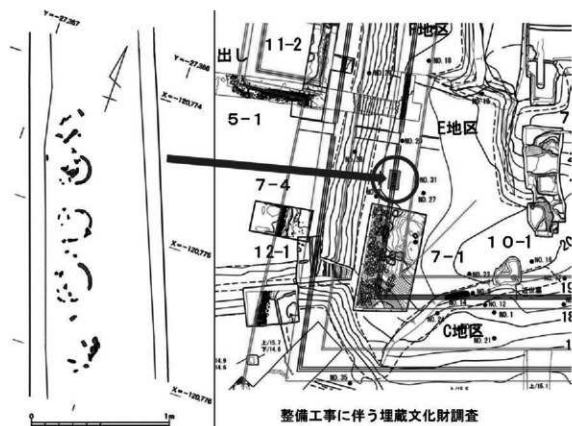
整備工事に伴う埋蔵文化財調査

第175図 前方部東辺南半の墳丘裾貫石

前方部東側南半の第一傾斜面墳丘裾部の貫石。



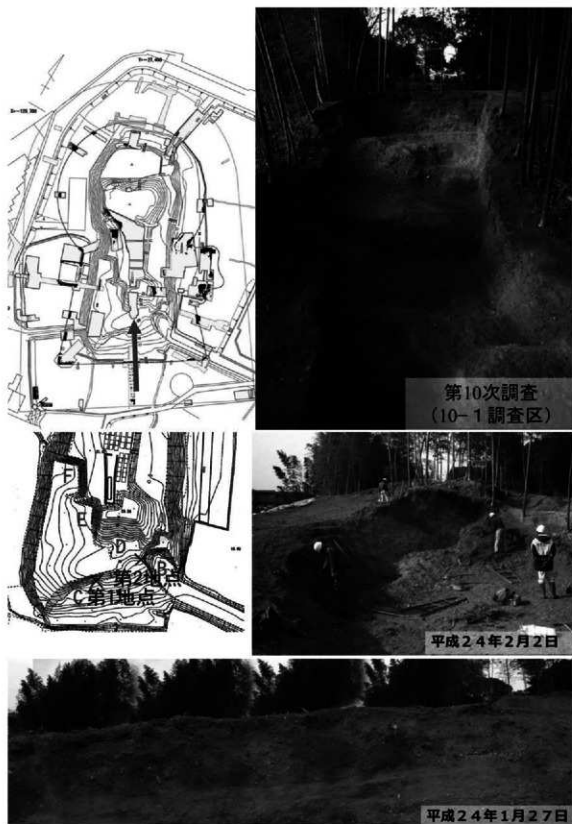
第176図 前方部西側面の埴輪列  
前方部西側第二テラス面の埴輪列検出状況。



第177図 前南部西側面の地輪列と古墳構築盛土工法

上一前南部西側第二テラス面地輪列実測図。下一前南部第二テラス面付近の調査では、墳丘が円形の土塊を積み重ねて築かれていて、工法的一端を知る手がかりを得た。

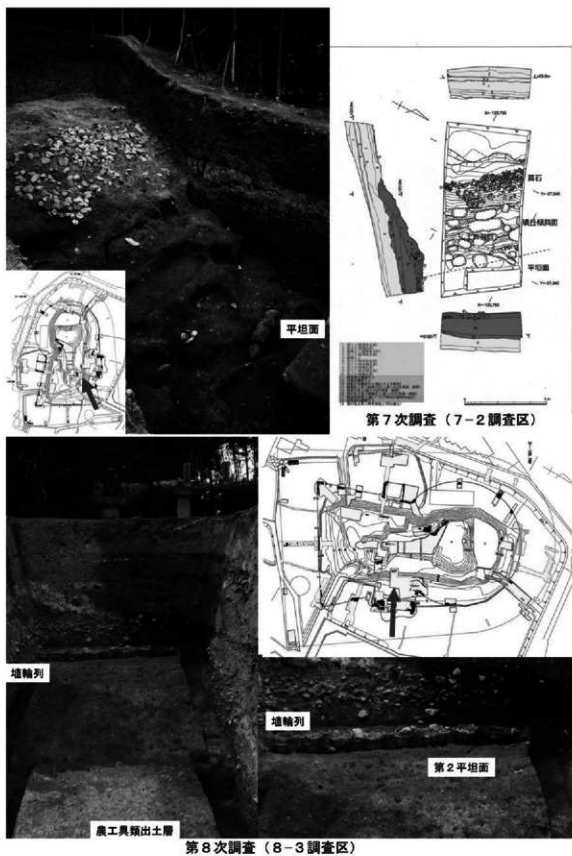




### 整備工事に伴う埋蔵文化財調査

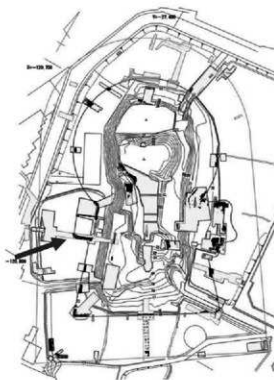
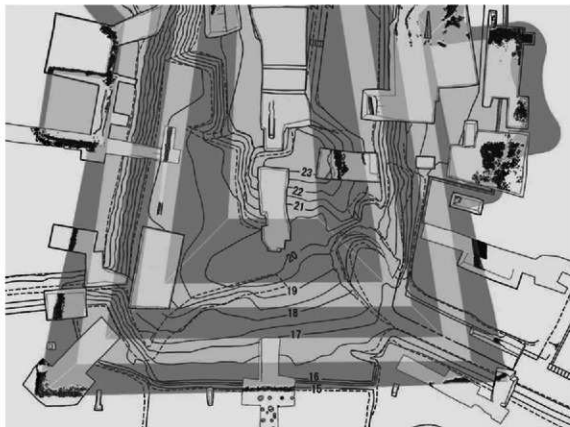
第178図 前方面墳頂部と土取り用崖面調査

上一前方面墳頂部では、後世の深い掘り込みが検出された。山崎の戦いにかかわる堀とする説がある。下一B地区では前方面前方から後円部方向に積み重ねられた墳丘構築土が検出された。



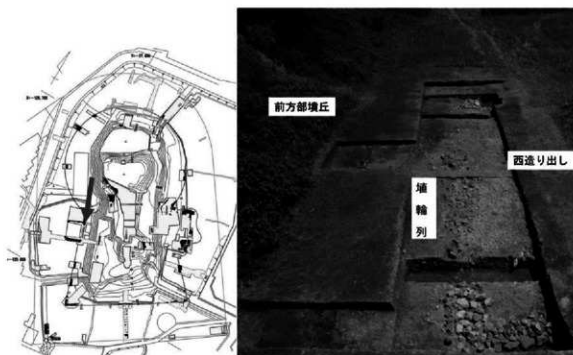
第179図 前方面東側面の竈石と墳輪列

上一前方面東側第三傾斜面に残る竈石。竈石崩落部分には、近世墓が密集している。下一前方面第二テラス面の墳輪列。傾斜面は残っていなかったが、大量の鉄製農工具が出土した。

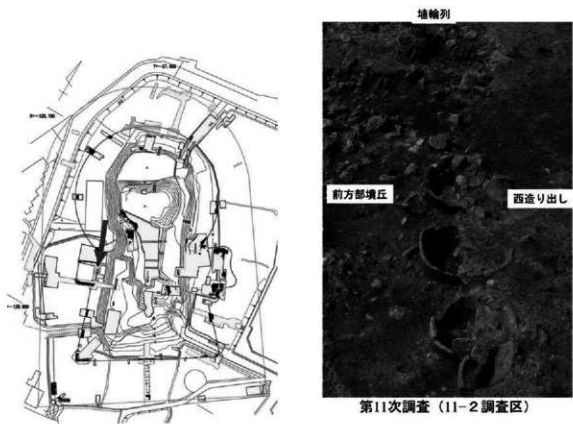


第180図 前方部の形状と西造り出し南辺

上一前方部の東西の境丘は、直線に前端に向かうのではなく、わずかに広がった後に幅を狭めている。下一西造り出しが検出された調査。



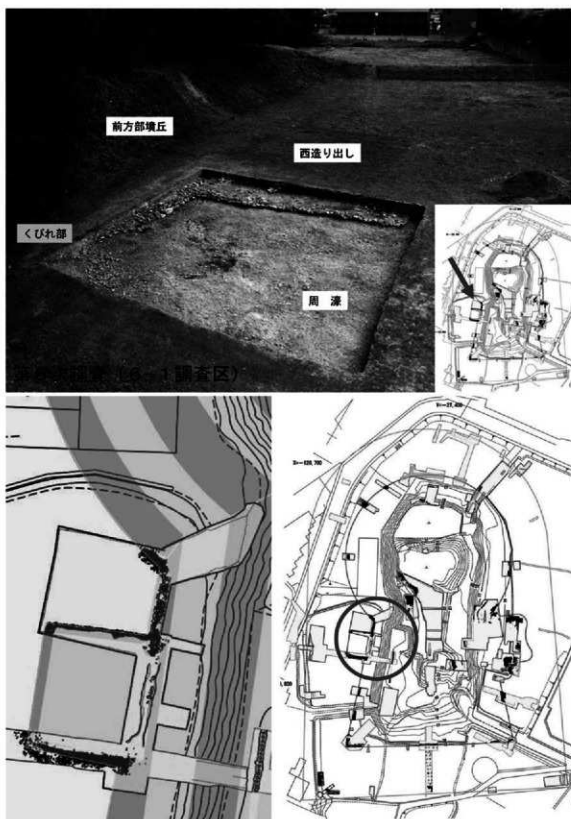
第11次調査（11-2調査区）



第11次調査（11-2調査区）

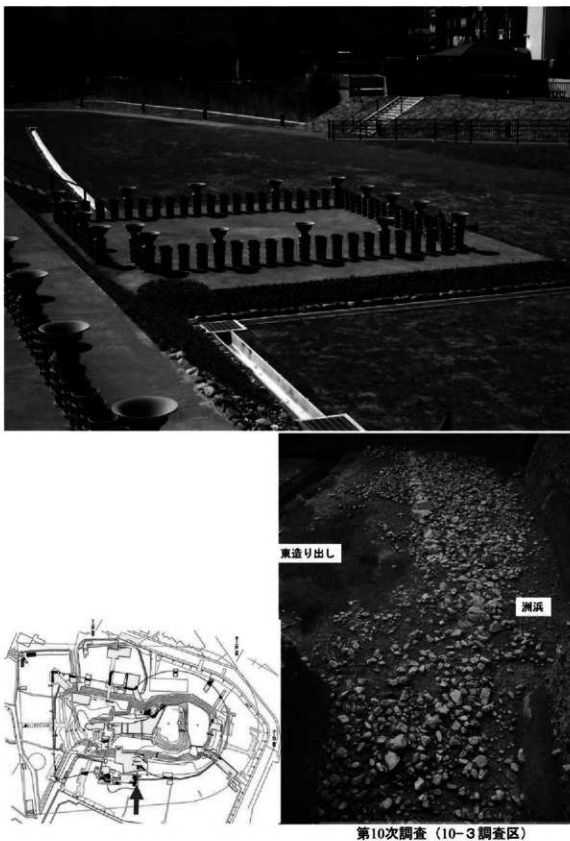
第181図 西造り出しの前方部取り付き部

西造り出しの前方部に取り付く部分で、入り江状遺構と埴輪列が検出された。入り江状遺構は造り出し北東角にあり、礫が集積していた。埴輪列は、前方部裾に平行して検出された。

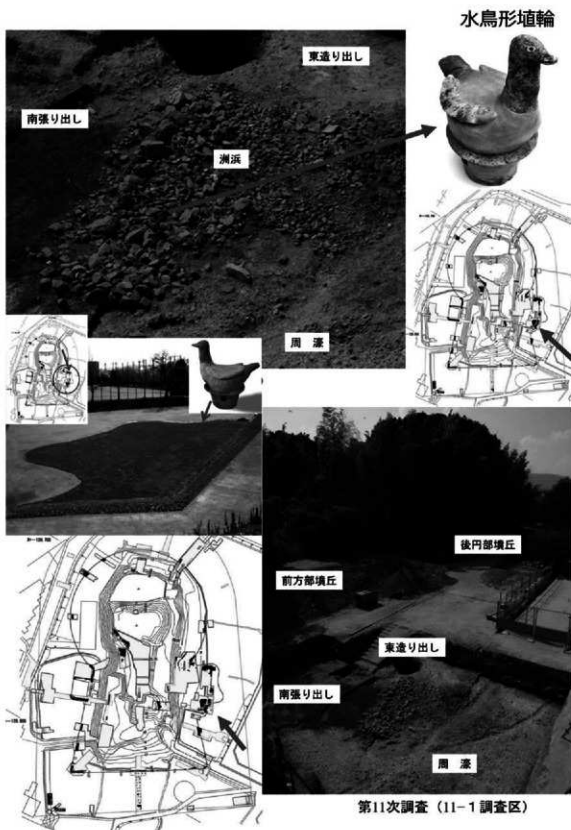


第182図 西造り出し北辺から後門部

後門部から西造り出し北辺部にかけての調査。この調査で、西造り出しの規模や形状が明確にできた。また  
 葺石基底石は、前方部側で明瞭で、後門部側では検出されなかった。



第183図 西造り出しの整備状況と東造り出しの発見  
上—西造り出しの整備状況。下—東造り出しの傾斜面には礫が敷かれ、州浜状をなす。

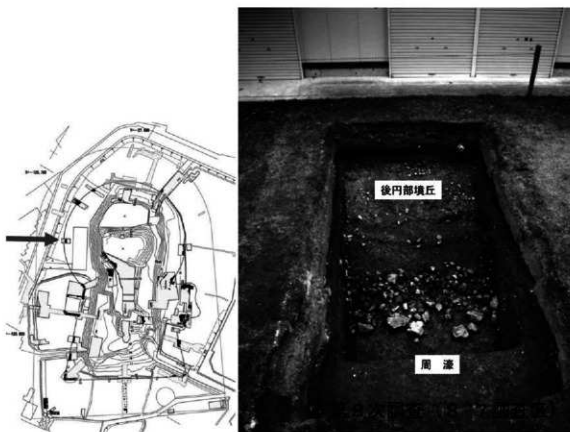


第184図 東造り出しの形状

上一東造り出しの水鳥形埴輪出土位置。中一造り出し範囲に芝を張り、調査で検出した石列は飛び石で表現。下一南辺には、墳丘寄り南への張り出しが検出され、斜面から水鳥形埴輪が出土した。



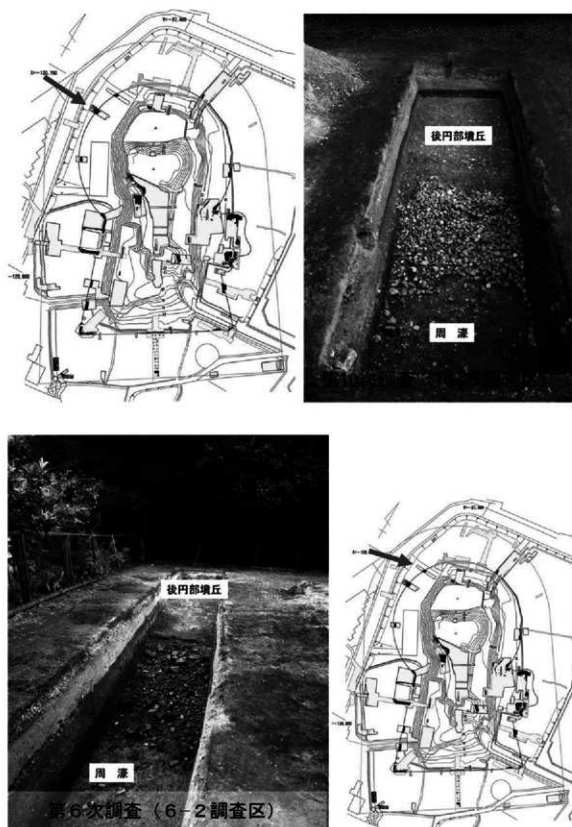
第10次調査（10-3調査区）



第185図 東造り出しの整備状況と後門部墳丘掘

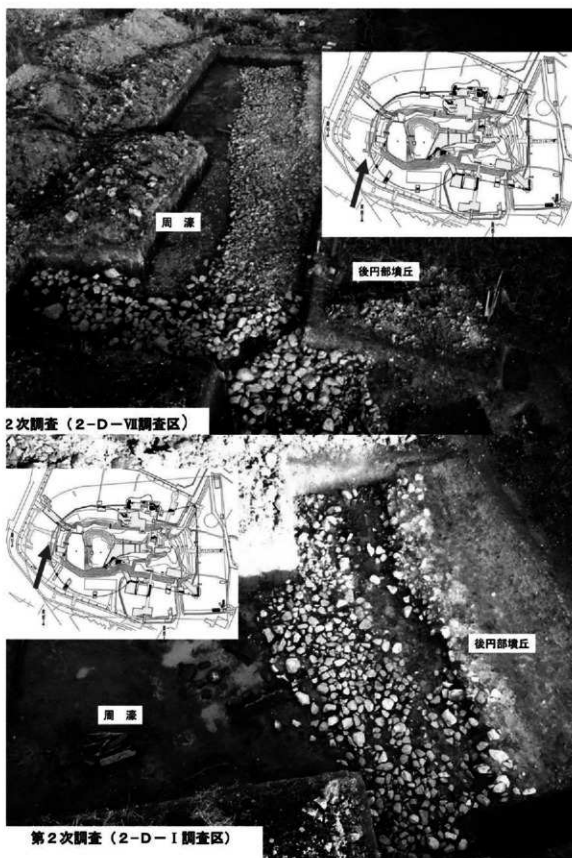
上一東造り出し北辺部。傾斜面には礫が敷かれ、上面には区画石が並べられている。下—後門部の墳丘掘部の調査。裾部に大きめの石が散在するもの、明確な基底石はなかった。





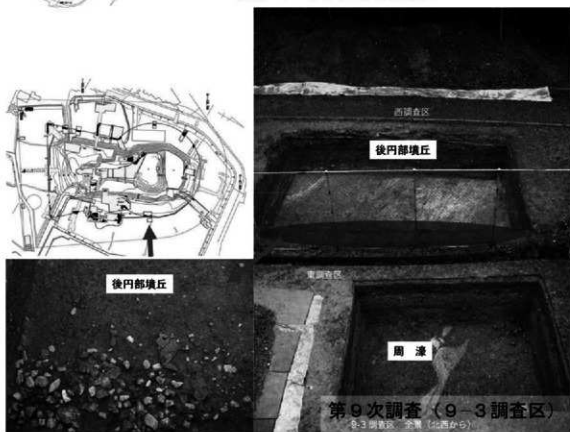
第186図 後門部墳丘西掘

ここでも、第一傾斜面や墳丘裾に大きめの石が散在するものの、明確な基底石はなかった



第187図 後円部北縁の墳丘裾部

墳丘裾部に崩落した葺石が広がっている。崩落葺石の一部が後円部周濠内に広がる部分が見られる(上)。出島状遺構のようなものがあるのかも知れない。(三上貞二氏撮影)

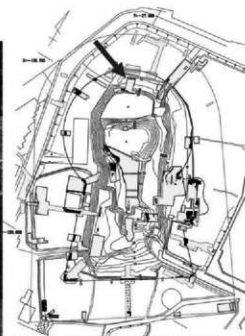


第188図 後門部東側の墳丘掘葬石

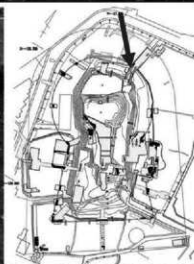
一部に残りの良い第一傾斜面葬石が検出された(上)が、ここでも明確な基底石は見つからなかった。下の調査区では、葬石や埴輪が崩落した状態で、明確な柁は確認できなかった。



第9次調査（9-1調査区）

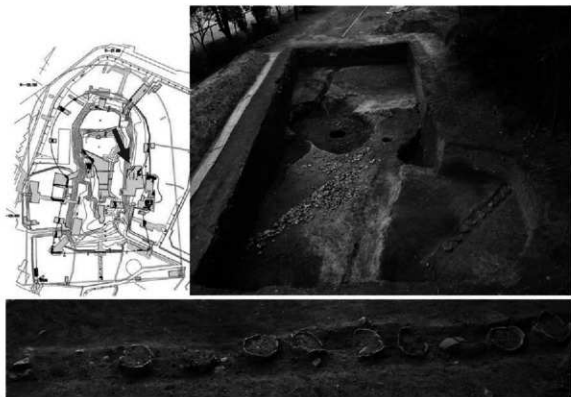


整備工事に伴う埋蔵文化財調査



第189図 後円部第一テラス面埴輪列

第一テラス面の埴輪列は、第1段タガ以下が良好な形で検出された。



第9次調査（9-4調査区）



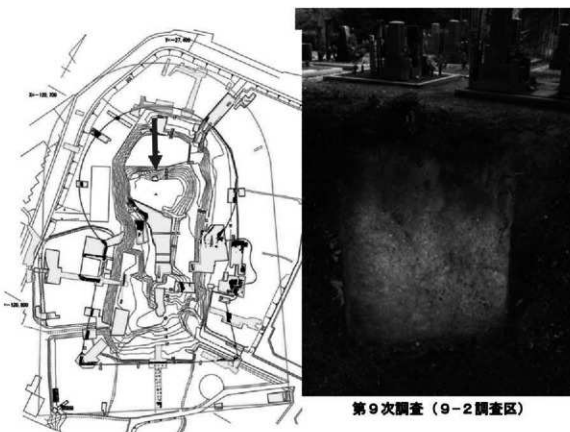
第10次調査（10-2調査区）

第190図 東くびれ部の埴輪列

東くびれ部第一段テラス面埴輪輪列は、後門部から前方部に緩やかに湾曲して並べられていた。



整備工事に伴う埋蔵文化財調査



第9次調査（9-2調査区）

第191図 後門部の墳丘盛土

前方部南東隅同様に、大阪層群と思われる白い粘土が厚く盛られ、その上に黄色系粘質土が積まれていた。後門部中央付近の調査（下）では、石室の検出を期待したが、見つからなかった。



- ・竜山石は、兵庫県中部の加古川下流域で産出する流紋岩質溶結凝灰岩の総称。
- ・古墳時代では、竪穴式石室の天井石をはじめ、長持形や家形などの石棺部材として使用される。特に、天井石に凝灰岩（竜山石）を用いる竪穴式石棺では、長持形石棺を安置する場合が少なくない。

### 凝灰岩

#### 竪穴式石室と結晶片岩

- ・結晶片岩は、前期から中期前半の竪穴式石室の構築材として使用されているが、特に淀川流域（摂津）に分布する前期古墳に多用されている。
- ・桂川流域（山城）では、悪解山古墳の段階で初めて採用された。

### 葺石石材

チャート・砂岩が主体。頁岩～粘板岩、緑色岩、玢岩、ホルンフェルス脈石英などが少量。＝小泉川中・下流の河床礫



第192図 出土石材

石室は検出されていないが、石室石材と考えられる結晶片岩や石英斑岩、凝灰岩が後円部周辺を中心に出土している。また、葺石石材は小泉川の中・下流から調達されたと考えられている。



- ・結晶片岩は、主に中央構造線上の紀ノ川（和歌山県）や吉野川（徳島県）流域に産出する変成岩。石英斑岩は、兵庫県と大阪府の間の猪名川流域の火山岩。
- ・古墳時代では竪穴式石室や横穴式石室、箱式石棺などの埋葬施設の構築材として使用される場合が多い。

### 結晶片岩・石英斑岩

#### 長持形石棺

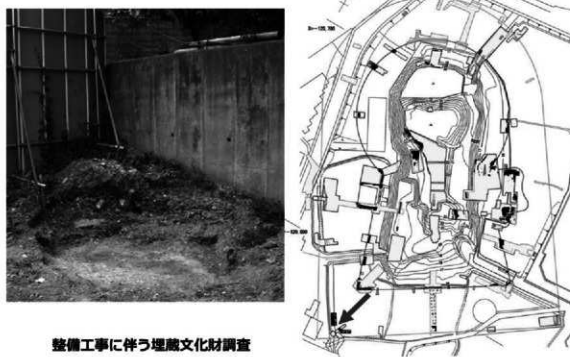
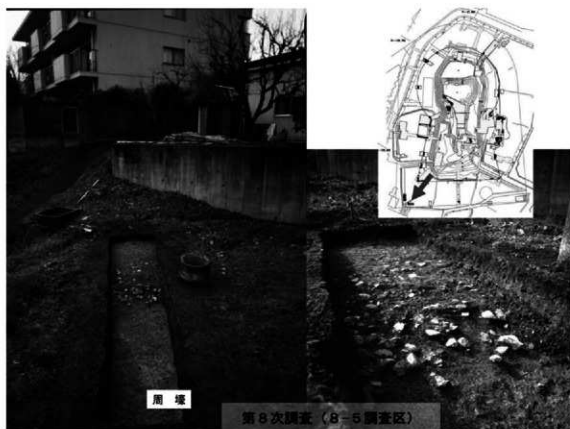
- ・形態は、蓋石1枚、底石1枚、長側石2枚、短側石2枚の計6枚の石材を組み合わせる。
- ・各部材に突起の付く例が多い。
- ・蓋の突起の付き方（数、場所）に型差が認められる。
- ・蓋に顕著に表れているように、古いものほど精巧で、新しくなるほど粗雑化。
- ・近畿地方を中心に分布。
- ・石材は竜山石が主体。
- ・「王者の棺」ともいわれるように、当時の最上位に位置する棺。



第193図 後門部の形状復元と外周部の調査

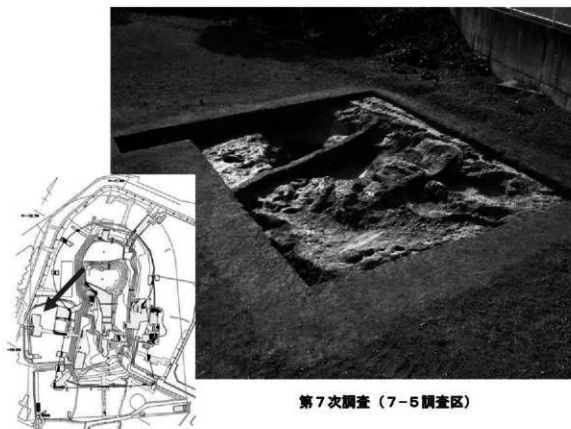
上一後門部は、第一テラス面地輪列と第二テラス面くびれ部を起点に復元した。  
下一周濠の形状をあきらかにするために設定した南東隅部の調査で、南東隅が推定可能になった。



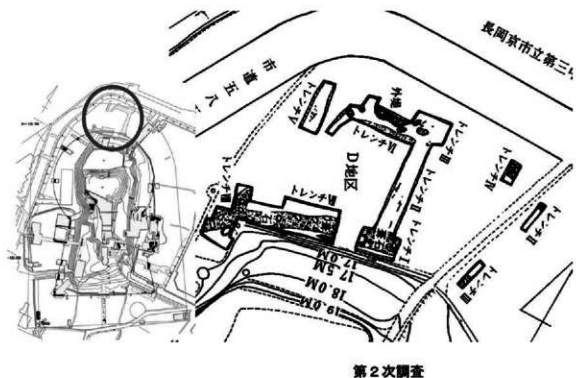


第194図 周濠南西隅部の調査

周濠外に向かってわずかに高くなっていく周濠底面を確認したが、周濠の輪郭を決定できなかった。最も南東隅での調査（下）でも、周濠の肩はさらに西にあった可能性が高くなった。



第7次調査（7-5調査区）

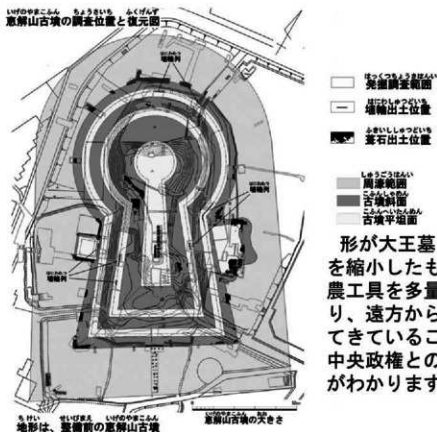


第2次調査

第195図 周濠西辺と北辺の調査

周濠西辺から北辺にかけての調査でも、周濠底のわずかな上がりは見られたが、決定するにはいたらなかった。

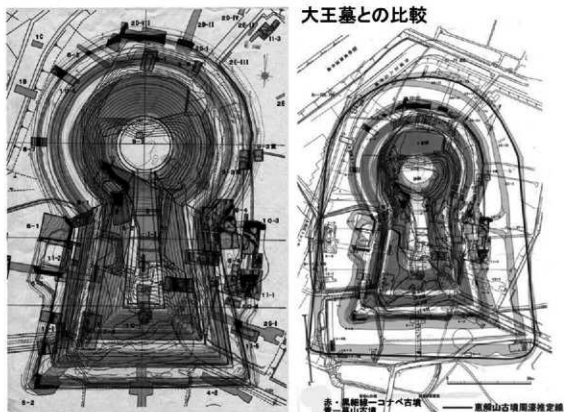
いげのやまごころん ちようきらい ふくげんす  
 恵解山古墳の調査位置と復元図



形が大王墓（巨大古墳）を縮小したもので、武器や農具を多量に埋納しており、遠方から材料が運ばれてきていることなどから、中央政権との強いつながりがわかります。

地形は、豊前前の恵解山古墳

恵解山古墳の大きさ



大王墓との比較

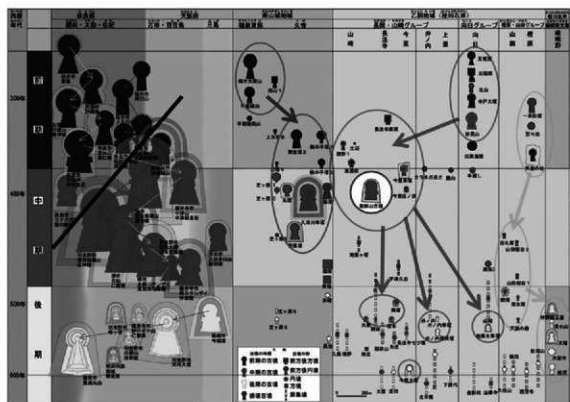
第196図 恵解山古墳と大王墓との比較検討

これらの調査成果を踏まえ、大王墓と比較検討（下）し、不確定要素に根拠を得て、恵解山古墳の墳形や周濠の形状を類推した（上）。



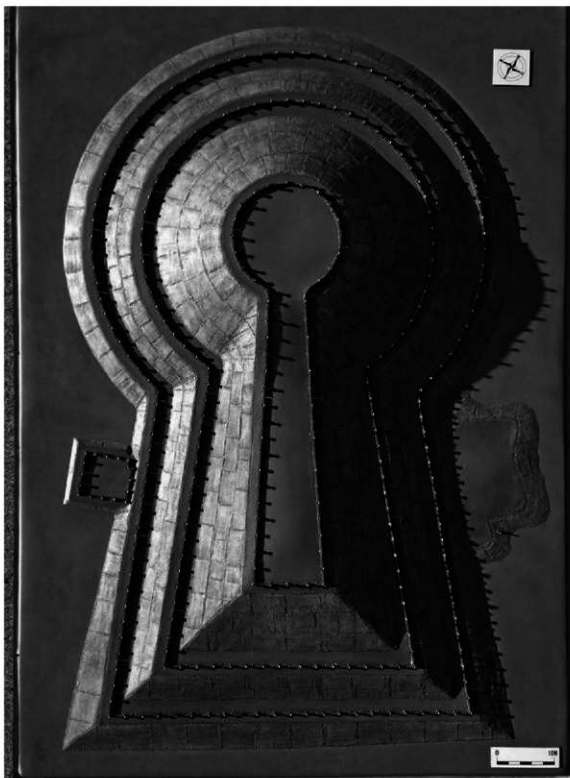
第197図 発掘調査成果と恵解山古墳の復元

発掘調査の成果をまとめ(下)、大王墓と比較検討して復元なった恵解山古墳を、航空写真に置いて見たのが、上の合成写真である。



第198図 乙調の古墳群と関連遺跡

明治40年の4000分の1の地図をもとに作成した模型に乙調の首長墓を配置した(上左)。各古墳の立地や位置関係がよくわかる。下の図は、古墳群を地域分けして各古墳の年代観を示した図である。上左の図は、古墳時代の集落遺跡の分布を示し、また、恵解山古墳の長岡京桑坊とのかかりを示している。



第199図 恵解山古墳墳丘模型

恵解山古墳の構築時を復元した模型。東造り出しの上部構造がよくわからなかったが、発掘調査の成果と大王墓との比較からここまで復元できた。現地で復元整備できなかった内容を、この80分の1の模型で立体的に表現している。



第200回 保存整備が完成した恵解山古墳

上—「歴史とみどり 人の集う 史跡公園」をモットーに保存・整備事業が完成した恵解山古墳。  
 下一前方部前面の景観。葺石と埴輪列の復元や模型などは、見どころの一つ。



第201図 休憩広場の整備

上一休憩広場整備前は段丘崖で、その裾に崖に沿って細長い池があった。(北東から)』  
下一整備された前方部墳頂から見た休憩広場。(北東から)





第202図 東屋

上一周濠から見上げた東屋（東から）、下一休憩広場の東屋と屋外ベンチ（北西から）



第203図 墳丘西辺の整備  
上一整備前の景観（北西から）、下一整備状況（北西から）



第 204 図 墳丘西斜面の墳丘復元  
上一後円部から見た墳丘西傾斜面（北から）、下一整備された墳丘西傾斜面（北から）



第205図 後円部

上—JR東海道線をまたぐ老々辻歩道橋から見た整備前の後円部（北西から）

下—JR東海道線をまたぐ老々辻歩道橋から見た後円部整備状況（北西から）



第 206 図 墳丘東側面

上一長岡第三中学校サブグラウンドから見た整備前。下一整備を終えた東側面景観（北東から）



第207図 東部の墳丘から周濠  
上一整備前の東部。左は東堤、右は墳丘裾仮整備状況。下一整備を終えた東辺部。



第208図 周濠南部の整備

上一周濠南部の整備前景観（東から）。下一周濠南部の整備状況（東から）





第209図 周濠南東隅の整備

上一整備前の様子（西から）下一整備状況。農道沿いに、現場調査材利用の仮設ベンチを設置した。またサツキツツジの植え込みで、周濠の輪郭を示した。





第210図 墓参道の整備

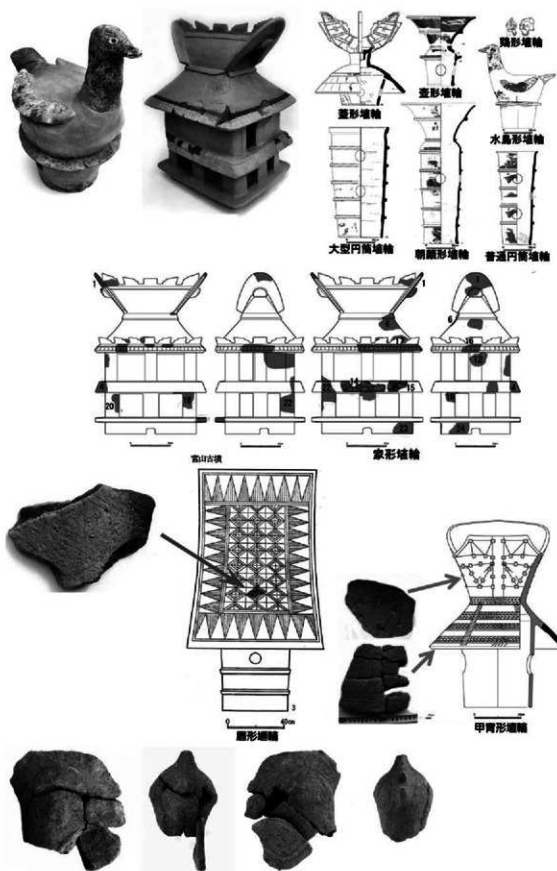
上一整備前の墓参道（北から）。

下一墓参道出入口付近は、古墳見学路を兼ねるため、傾斜を緩め、自然色舗装で整備した。



第211図 恵解山古墳と山崎の戦い

上一くびれ部西第三斜面出土火縄銃弾と前方部東斜面出土土師器皿、白磁皿  
中一南西から見た整備前地形。下一北から見た整備前地形。欄田状地形がよくわかる。



第 212 図 恵懸山古墳出土埴輪の復元



第 213 図 復元植輪模型の展示状況

各テラス面植輪列には普通円筒植輪と朝顔形植輪、墳頂部植輪列には、蓋形植輪を組み込んだ。

## 第8章 まとめ

最初に、史跡惠解山古墳保存整備事業の特徴について振り返っておきたい。

史跡惠解山古墳の保存整備事業は、基本理念として、「緑豊かな 人の集う 史跡公園」をうたった整備である。全体的な特徴には、後円部墳頂の墓地や、後円部北縁周濠の学校サブグラウンド、学習用竹林を現状維持して整備したことがあげられる。整備内容には、墳丘復元、埴輪列復元、葺石復元、模型や説明板・解説板などのサイン施設の設置などがある。特筆すべきものには、周濠にオンサイト貯留池の機能を持たせたこと、葺石復元部とコクマザサ植栽部の間が一線で分かれぬように波打たせ、自然に植栽に埋もれていく表現になるように葺石内に植栽箇所を散在させたことがある。細部にいたっては、葺石復元に、発掘調査出土の葺石崩落礫を広い面積で利用したこと、埴輪列復元模型埴輪に1個体ごとの個性を持たせたことなど、こだわりの整備内容が諸所にある。

次に、遺跡面保護層と整備掘削工について、整備工事に携わった印象をまとめておきたい。

惠解山古墳保存整備事業では、数多くの課題について検討し、一つ一つ形として具体化されて設計図が作られてきた。その間、地元の方々と共に考え、市民とともに進められてきた。計算しつくされた計画のもと、いざ保存整備工事が始まると、不安が走る。特に、復元整備のための掘削が予定されている部分については、本当に復元図が正しいのか、問い直す場面が幾度となくあった。3mを超える切土をした西くびれ部第二平坦面と、ジオファイバー施工切土をした東くびれ部付近などでは、幾度も掘削重機を止めて、土層を確認した。保護層は70cmと厚いはずである。しかし思わぬところで保護方法を即断することがあった。周濠南東部の埋没もたれ擁壁撤去工事と、前方形西第二平坦面埴輪列基礎掘削工事などがその例である。これらは、思わぬ掘削深度が必要になった場合と、遺跡面は保護される掘削計画でも、樹立埴輪のように、それより上に達する遺構や遺物がある場合である。保存整備工事での保護層が、知り得る範囲の遺跡面保護を前提としていると分かった。

埋蔵文化財調査が必要になった地点の成果は、第4章でまとめている。埴輪列については、後円部北縁第一テラス面の一部、前方形西側第二テラス面の一部で検出したが、いずれもほぼ推定位置からの検出であった。葺石については、後円部北縁第一傾斜面の一部、前方形南辺の第一傾斜面裾、前方形南東角の裾、前方形東側南半の第一傾斜面裾の各所で検出した。その検出位置は、後円部北縁と前方形南辺が少し膨らむ様相を示すが、ほぼ推定位置からの検出であった。言い換えれば、これらの調査成果は、検討を重ねて推定した埴輪復元図がほぼ正しいことを裏付けている。前方形南東隅の位置が確認できたことは、前方形の最大幅を確定的なものにした。出土遺物では、前方形南斜面から、鶏形埴輪頭部片とともに家形埴輪片がまとめて出土し、前方形墳頂南端に、形象埴輪をまとも置いた施設があった可能性について、考えさせられた。また、後円部周辺に甲冑形埴輪や石室石材が集中出土することなども興味深い成果と言える。

惠解山古墳の保存整備事業では、既存施設との共存整備を前提としており、またみどりを強調

していることから、本来の古墳構築期の姿に復元できない部分がある。保存整備対象から除外した部分とは、墓地、中学校サブグラウンド、竹藪などである。

まず墓地について見ることにする。この保存整備事業は、墓地の現状範囲を残した整備のため、墳丘復元に墓地とのすり合わせ処理を施す必要が生じた部分があり、また、東くびれ部第二傾斜面以上では急斜面になるため、特殊な処理を施す必要があった。しかし、墓地関係者との間に、古代の墓と江戸時代以後の墓地という共通点から、保存整備工事が進み墳輪が立ち並び始めるころには、史跡公園と墓地とを一体として捉え、維持管理の協調や美化意識の高揚という共通認識が生まれた。さらに、史跡内にある墓地ということに誇りを持つ人も出てきた。今後の史跡整備方針を熟慮していく必要があると思うが、これからも、たがいに理解しあい、協力関係を継続していくことが必要と思われる。

中学校サブグラウンドは、史跡公園整備の竹木の伐採除根により古墳からの見通しが良くなった。このことは、史跡公園来訪者の目による、生徒の安心・安全の面の見守り効果も期待できる。同時に、史跡公園の北接道路からの眺望がよくなり、墳丘東側面の様相が一望できる。また互いの美化意識高揚にもつながる。

竹林については、乙訓名産のタケノコについての小学校体験学習の場として活用されており、竹林へ入る前の歴史学習として、整備できた恵解山古墳を活用できる。さらに、保存整備前の景観の一部を残すことにも歴史的意義が見いだせる。つまり、整備前までの恵解山古墳が、100年近く、あるいはそれ以上の歴史を持つ竹林で覆われていたことを後世に伝えることができる。竹林保存区域周辺には、竹の根が整備区域に広がらないようにバンパーバリアを埋め込んでいる。一方で、今後の竹林の維持管理が課題でもある。他の課題には、見学者を受け入れるのに必要なガイダンス施設・便益施設や駐車場の確保、維持管理施設と体制の整備などがある。このような問題を抱えながらも、西山天王山駅やJR長岡京駅周辺に凝縮された遺跡や文化施設の有効活用を前提として、史跡公園として開園することが出来た。

ここに保存・整備の完成を見た史跡恵解山古墳公園は、保存整備工事期間の4年間で成り得たものではない。恵解山古墳は、昭和55年度に鉄製武器類埋納施設が発見され、翌年史跡の指定を受けた。続いて昭和56年度から平成14年度にかけて用地を購入し、平成14年度から平成23年度にかけて、地元住民の方々や市民とともに保存・整備を検討し、平成23年度から平成26年度にかけて保存整備工事を実施して、平成26年10月26日に史跡公園として開園することができた。鉄製武器類発見から約34年が経過した。その間、どれだけ多くの人たちが関わったことか。大正13年に梅原末治氏が中山長作氏の案内で恵解山古墳を訪れて、ちょうど90年目である。恵解山古墳の地形測量をされた高橋美久二氏は、遠い人となっている。最近では、水野正好氏が、平成27年1月27日に他界された。水野氏は、史跡恵解山古墳特別講演会で恵解山古墳の被葬者を河浜仲彦と推定された。また、乙訓の古墳群の地形模型を設計された岩尾磁器工業の古志忠雄氏は、模型の完成を見ずに逝去された。恵解山古墳の保存整備事業に力添えいただいたことを心から感謝して、冥福を祈りたい。

## 第9章 恵解山古墳公園の運営管理と活用

恵解山古墳公園の開園記念式典は、快晴に恵まれた平成26年（2014）10月26日（日）、午前10時から恵解山古墳公園内で開催され、小田市長の挨拶の後テープカット、長岡第八小学校の演舞、立命館中学校による鉄刀埋納セレモニー、長岡第三中学校吹奏楽部演奏が行われ、長岡市関係者や招待者、市民有志が参列した。午後は様々な開園イベントや見学会が催され、多数の市民の参加があった。

私も「国史跡恵解山古墳保存・整備委員会」の委員長として式典に参列し、テープカットに加わったが、平成15年度の基本構想の策定、平成17年度の基本計画の策定を経て今日の開園式を迎えるまでの保存・整備事業の経緯を思い起こして感無量であった。

恵解山古墳公園は、今後は長岡京市の「歴史とみどり、人の集う、史跡公園」として運営されることになるが、その運営管理と活用について私の考えるところをすこし述べてみたい。

### 1 恵解山古墳公園の運営管理

恵解山古墳の保存・整備に当たっては当初から市民との協働を基本とし、その保存・整備に関わる基本計画策定委員会も事務局を担当する長岡京市教育委員会と歴史・文化財及びその保存復元に関する学識経験者のほかに、後円部に所在する墓地进行管理する勝龍寺自治会と地元の久貝自治会代表に加えて市民から公募された委員4名が参加している点に大きな長所と特徴がある。平成17年度に「国史跡恵解山古墳基本計画」が策定された後もこの委員会が「国史跡恵解山古墳保存・整備委員会」に移行して恵解山古墳の復元整備に取り組むことになった。

今後の恵解山古墳公園の運営管理とその活用に対しても、行政だけではなく、できるだけ多くの市民が参加できる市民協働型の管理運営・活用体制を築くことが大切である。

そのための協議の場として「保存・整備委員会」と同様の行政・学識経験者・地元自治会・公募市民からなる「運営管理・活用委員会」を組織して活用することを助めたい。

長岡京市では恵解山古墳の保存・整備計画に市民の理解を得るためと将来の恵解山古墳公園の管理運営への協力や様々な活用活動の主体になる市民の団体として平成18年に「恵解山古墳を愛する人」への市民の入会を勧誘し、「恵解山古墳を愛する人だより」の発行や近郊の古墳整備状況の見学など様々なワークショップ活動を支援してきた。

長岡京市は恵解山古墳公園の開園を機会に改めて「恵解山古墳を愛する人」（平成26年度解散）に代わる組織への市民の入会を勧誘し、将来的には古墳公園の運営管理や活用を担う市民団体の中心として組織化を図るとともにその活動を支援していただきたい。新しい組織は「管理運営・活用委員会」の一員として、その総意を受けて長岡京市内外のさまざまな団体・サークルと協働・連携していく中心組織として活動することがその使命となる。

「国史跡恵解山古墳基本計画」では、復元整備された恵解山古墳の活用を図るために駐車場に隣接してトイレを備えたガイダンス施設を設置することが提案されていたが、用地難と地元の意

向もあって実現することが出来なかった。ガイドンス施設・トイレ・駐車場の問題は、恵解山古墳公園の運営管理とその活用の上で今後に残された大きな課題となって残っている。「運営管理・活用委員会」の中で円満な解決を図っていただきたい。

恵解山古墳の復元整備は、国史跡に指定された文化財の保存・活用の場として学術的に復元することがその目的であるが、後円部に墓地があることや、これまで古墳の周濠部を市民や学校のテニスコートやグラウンドゴルフ場として、また、墳丘の竹林は乙訓名産のタケノコ掘りの体験学習に利用されるなど近接する小・中学校の教育の場として利用されてきた経緯もあることから、それらの施設や用途を排除するのではなく、現代の土地利用との共存を図る方向で整備することを心がけた。したがって恵解山古墳公園は市民や生徒にとっては極めて身近な親しい存在になっている。これまでも中学生も参加するボランティア団体「いげのやま美化クラブ」は、恵解山古墳を中心とした周辺地域の美化活動に取り組んできている。

恵解山古墳の墳丘を覆っているコクマザサや周濠の芝生などの植生、円筒埴輪や数多くの解説サインや模型などの維持管理は、当然行政が担当することになるが、公園内の清掃や除草などについてはテニスやグラウンドゴルフを楽しむ市民や、恵解山古墳を歴史の教材や特産のタケノコ掘りの体験学習の場として活用する生徒たちが喜んで協力してくれると思う。恵解山古墳公園の様々な活用を通じて地域の人々の恵解山古墳への愛着心をいかに高めていくかが運営管理の上で大きな課題となるだろう。

## 2 恵解山古墳公園の活用遺跡—遺跡コンソーシアム（地域連携）—

遺跡や史跡を郷土の歴史学習・自然観察の場として活用したり、市民の憩いの場としての日常的な利用はもちろんのこと、地域を越えた交流の場・文化活動の舞台として積極的な活用が図られるようになった。

最近では各地の史跡等において、その史跡の価値や特徴を活かした各種のまつりや地域の伝統芸能・習俗と結びついた企画事業なども行われるようになり、地域の人々が相互の精神的つながりを確認する上でも大きな役割を果たしている。その中には「地域の顔」として定着し、知名度を上げている企画も多く、観光資源としての価値をも確実に備えつつある。また、史跡等の整備活用事業を核として、広く自然環境を保全し、まちづくり及び地域の活性化をも視野に入れて、他の事業と連携して事業を進めようとしている事例も増加してきている。

史跡等は、確実に保存し整備するだけではなく、積極的な活用を図ることによって、初めて国民生活に活かすことが出来るのである。

「考古学・古代史の情報が日常的に伝えられるようになってきた今日、遺跡はもはや一部の専門家や好事家の専有物ではなく、一般市民にとっての関心事であり、市民自身が遺跡の学術的な価値判断にすら参画するようになってきた。さらに、地域活性化・地域振興の資源としても評価されるようになってきている。

歴史遺産の一つである遺跡の利用・活用について、遺跡相互の連携、遺跡にかかわる市民組織・



自治体・管理団体等の一層の連携・協働（遺跡コンソーシアム）が必要となってきた。それは遺跡を取り巻く地域社会のネットワークでもあり、連携・協働には、市民相互、市民と自治体、自治体と自治体、省庁と省庁、国と国等がある」（注1）

恵解山古墳公園の利用・活用に当たっては先述の「運営・管理委員会」の場を通じて長岡京市の市民間の様々な連携を図るだけでなく、市域を越えて京都市・向日市・大山崎町など乙訓地域の行政体とも「遺跡コンソーシアム」の考えを取り入れ連携を図っていく必要がある。

恵解山古墳公園の正面エントランスには古墳の復元模型と並んで乙訓の主要古墳分布図の模型が設置され、乙訓の古墳群における恵解山古墳の位置づけが示されている。現在、文化庁は乙訓地域所在の大型古墳の保存と活用を図るため、その現状を把握するとともにその歴史的位置づけ明確にするために京都市・京都市・向日市・長岡京市・大山崎町の各教育委員会と協議を行っており、今後各地の古墳の調査・研究を経て史跡指定や環境整備が進められていくことになる。恵解山古墳公園もこうした構想の中に位置づけられており、今後乙訓各地の古墳との様々な連携活動が求められることになる。

さらに京都府域には京丹後市網野鏡子山古墳・神明山古墳、城陽市久津川古墳群、木津川市椿井大塚山古墳、与謝野町蛭子山古墳群、綾部市私市円山古墳など国史跡として整備されている古墳があり、地域でさまざまな保存整備・活用が試みられている。「蛭子山古墳保存会」・「私市円山古墳を守る会」・「椿井大塚山古墳を守る会」のような府下の古墳管理・保存団体や、さらには近府県や全国の整備された古墳との交流・連携も必要になってくる。

乙訓地域は遺跡や文化財が豊かで自然環境にも恵まれ、交通至便であることもあって、観光や遺跡探訪、ハイキングなどで訪れる人も多い。長岡京市は恵解山古墳の整備を市東部のまちづくりの一環として進めており、新設された阪急電車「西山天王山」駅からサントリービール京都工場、中山修一記念館、恵解山古墳公園、勝竜寺城公園、勝竜寺城土塁跡、JR長岡京駅にいたる史跡散策ルートの中で、恵解山古墳公園は一つの拠点として整備されている。こうした史跡散策ルートは乙訓の各行政体で独自の整備が試みられているが、そのルートは行政区域を越えて拡がり、つながっている例も多い。

大山崎町には天王山・山崎城跡、山崎合戦古戦場など豊臣秀吉ゆかりの史跡に富むほか千利休創設と伝える国宝の茶室待庵や大山崎山荘美術館などもあってハイキング客が多い。

山崎合戦の時の光秀の本陣「おんほう塚」の比定地として、サントリービール京都工場内に保存されている大山崎町の境界1号墳と恵解山古墳とが挙げられていた。ところが恵解山古墳の復元整備に伴う発掘調査によって、戦国期に恵解山古墳が曲輪状に改変されていることや火縄銃の玉が出土したこと、西側の立命館中学・高校敷地から時期は不明ながら南北方向の大きな堀の跡が出土したことなどから、恵解山古墳が「おんほう塚」である可能性が高まり、多くの人の関心を高めている。

JR山崎駅や阪急大山崎駅から天王山東麓一帯の史跡・美術館などを巡り、山崎院跡・国史跡大山崎瓦窯跡・観音寺（山崎聖天さん）から円明寺団地に抜ける道や西国街道を経て、長岡京市

の恵解山古墳公園や勝龍寺城公園を見学してJR長岡京駅にいたる散策コースは、戦国ファンにとって大変魅力あるコースになる。

大山崎町ふるさとガイドの会と長岡京市ふるさとガイドの会とが連携することによって、行政区域にとらわれないより魅力的な散策コースを生み出すことができる。散策ルートのデザインやサイン計画なども乙訓全体で統一すれば訪れる観光客にとっても喜ばれるのではなかろうか。

かつて、京都府社会教育委員会連絡協議会の総会で、「ふるさとの文化遺産と社会教育」と題して講演したことがあり、社会教育・生涯教育の場として故郷の文化遺産を活用する上で社会教育委員の果たす役割の大きいことを述べ、「遺跡コンソーシアム」における連携役としての社会教育委員の活動に期待したことがある。恵解山古墳の運営管理や活用に当たっても社会教育委員の積極的な参画を求めたい。

今後の恵解山古墳公園の運営管理と活用にあたっては、行政の責任と役割は大きいですが、それに依存するだけでなく、「遺跡コンソーシアム」の考えをもとに、地域住民の主体的・積極的な管理運営への協力や活用事業の展開を期待している。

#### 「運営管理・活用委員会」



注1. 高島忠平「遺跡コンソーシアムの提案」『遺跡学研究』第5号、日本遺跡学会、2008年  
参考文献：乙訓の歴史を学ぶ会「京都おとくに 歴史を歩く」かもがわ出版、2006年

(中尾芳治)

## 【参考文献】

- 長岡京市史資料編—1991年  
 長岡京市史本文編—1995年  
 梅原未治「乙訓郡 第四 惠解山古墳」京都府「京都府史蹟勝地調査會報告」第六冊1925年  
 堤圭三郎、高橋美久二「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」京都府教育委員会「埋蔵文化財発掘調査概報」1968年  
 山本輝雄ほか「惠解山古墳第3次発掘調査概要」長岡京市教育委員会「長岡京市文化財調査報告書」第8冊1980年  
 山本輝雄ほか「国史跡惠解山古墳の調査」長岡京市教育委員会「長岡京市文化財調査報告書」第62冊 2012年  
 三上真二「惠解山古墳周濠調査概報」長岡京市教育委員会「長岡京市文化財調査報告」第2冊1975年  
 三上真二「惠解山古墳周濠第二次調査概報」長岡京市教育委員会「長岡京市文化財調査報告」第3冊1977年  
 久保哲正「長岡京跡右京第15次発掘調査報告」長岡京跡発掘調査研究所「長岡京跡発掘調査研究所調査報告書」第1集1979年  
 白川成明、原秀樹、岩崎誠「長岡京跡右京第39次調査概要」長岡京市教育委員会「長岡京市文化財調査報告書」第11冊1983年  
 岩崎誠「長岡京跡右京第94次調査概要」長岡京市文化財調査報告書」第11冊1983年  
 岩崎誠「右京第126次調査概報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」昭和58年度1984年  
 山本輝雄「右京第648次調査概報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」平成11年度2001年  
 中島智夫「右京第560次調査概報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」平成8年度1998年  
 山本輝雄「右京第137次調査概報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」昭和58年度1984年  
 岩崎誠「右京第473次調査概報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」平成6年度1996年  
 木村泰彦「右京第419次調査概報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」平成4年度1994年  
 木村泰彦「右京第217次調査略報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」昭和60年度1987年  
 岩崎誠、稲畑航平「右京第955次調査略報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」平成20年度2010年  
 木村泰彦「右京第1019次調査概報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」平成23年度2013年  
 木村泰彦「右京第1049次調査概報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」平成24年度2014年  
 岩崎誠「長岡京跡右京第121次調査概要」長岡京市埋蔵文化財センター報告書」第1集1984年  
 小田桐淳「右京第272次調査略報」長岡京市埋蔵文化財センター年報」昭和62年度1989年  
 木村泰彦、近澤豊明「長岡京跡右京第139次調査概要」長岡京市埋蔵文化財センター報告書」第2集1985年  
 原秀樹「長岡京跡右京第530次調査概要」長岡京市埋蔵文化財センター報告書」第13集1999年  
 木村泰彦ほか「長岡京跡右京第1019次発掘調査報告」長岡京市埋蔵文化財センター報告書」第56集2013年  
 渡辺博ほか「物集女車塚古墳保全整備事業報告」向日市埋蔵文化財調査報告書」第40集1995年  
 梅本康広、笹栗拓、原田昌浩、渡井彩乃「物集女車塚古墳第4次発掘調査報告」向日市埋蔵文化財調査報告書」第88集2011年  
 向日市文化資料館「向日丘陵の前期古墳」開館20周年記念特別展示図録」2004年  
 古閑正浩「鳥居前古墳第4次調査報告」大山崎町教育委員会「大山崎町埋蔵文化財調査報告書」第42集2011年  
 西谷眞治「元稲荷古墳」西谷眞治先生還暦祝賀会1985年  
 梅本康広ほか「元稲荷古墳」向日市埋蔵文化財調査報告書」第101集2014年

「長岡京右京北辺四条四坊八町跡・上里北ノ町遺跡」公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告」2013-13 2014年

宇野隆志「芝1号墳」京都市文化市民局「京都市内遺跡詳細分布調査報告」平成25年度2014年

宇野隆志ほか「Ⅺ 寺戸大塚古墳」京都市文化市民局「京都市内遺跡発掘調査報告」平成25年度 2014年

向日市教育委員会「五塚原古墳第6次調査 現地説明会資料」2014年

立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻「五塚原古墳第5次発掘調査 現地説明会資料」2014年

「京都の首長墓-発表資料集-4. 山城①(乙調)」『第8回京都府埋蔵文化財研究会集』京都府埋蔵文化財研究会2000年

「京都の首長墓-発表資料集-5. 山城②(嵯峨野)」『第8回京都府埋蔵文化財研究会集』京都府埋蔵文化財研究会2000年

「京都の首長墓-発表資料集-6. 山城③(南山城)」『第8回京都府埋蔵文化財研究会集』京都府埋蔵文化財研究会2000年

山本輝雄「乙調地域の首長墓の動向」『第8回京都府埋蔵文化財研究会集』京都の首長墓-発表資料集- 京都府埋蔵文化財研究会2000年

「平安京以前-古墳が造られた時代-」『京都市文化財ボックス』第26集 2012年

佐藤純一、清水邦彦、関真一、辻川哲朗、松田茂「井辺八幡山古墳の再検討-造り出し墳輪郭の配置復元を中心に-」『同志社大学歴史資料館報』第10号 2006年

梅本康広「桂川流域の墳輪片粘と地域性」財団法人向日市埋蔵文化財センター「年報 都城」6 1995年

「史跡黒塚古墳整備事業報告書」天理市教育委員会 2005年

「史跡経子山・作山古墳整備事業報告書」加悦町教育委員会「加悦町文化財調査報告」第15集 1992年

綾部市教育委員会「史跡 私市円山古墳 整備事業報告」1994年

大阪大学大学院文学研究科「野中古墳と「倭の五王」の時代」2014年

神戸市教育委員会文化財課「史蹟五色塚古墳 小窓古墳 発掘調査・復元整備報告書」2006年

神戸市教育委員会「史跡 五色塚古墳復元・整備事業概要」1987年

兵庫県教育委員会「史跡 茶すり山古墳」『一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-Ⅶ』2010年

兵庫県立考古博物館「特別展 茶すり山古墳-巨大円墳に眠る但馬の王-」2010年

東広島市教育委員会「史跡 三ツ城古墳-発掘調査と整備の記録-」1995年

橋本博文、山内紀嗣「4 墳輪の配列」雄山閣「古墳時代の研究」9古墳Ⅲ 墳輪1992年

天野未喜、松村隆文「2墳輪の種類と編年 E近畿」雄山閣「古墳時代の研究」9古墳Ⅲ 墳輪1992年

高橋克壽「2器墳輪」雄山閣「古墳時代の研究」9古墳Ⅲ 墳輪1992年

高橋克壽「器墳輪の編年と古墳祭祀」『史林』71-2 1988年

川西宏幸「円筒墳輪総論」日本考古学会「考古学雑誌」第64巻第2号 1978年

都出比呂志、真鍋昌宏「2古墳の墳丘」雄山閣「古墳時代の研究」7古墳Ⅰ 墳丘と内部構造1992年

一瀬和夫「3外部施設 1周濠」雄山閣「古墳時代の研究」7古墳Ⅰ 墳丘と内部構造1992年

石塚久則「3外部施設 2葺石」雄山閣「古墳時代の研究」7古墳Ⅰ 墳丘と内部構造1992年

泉森峻「3外部施設 3墳輪・土器・木製品」雄山閣「古墳時代の研究」7古墳Ⅰ 墳丘と内部構造1992年

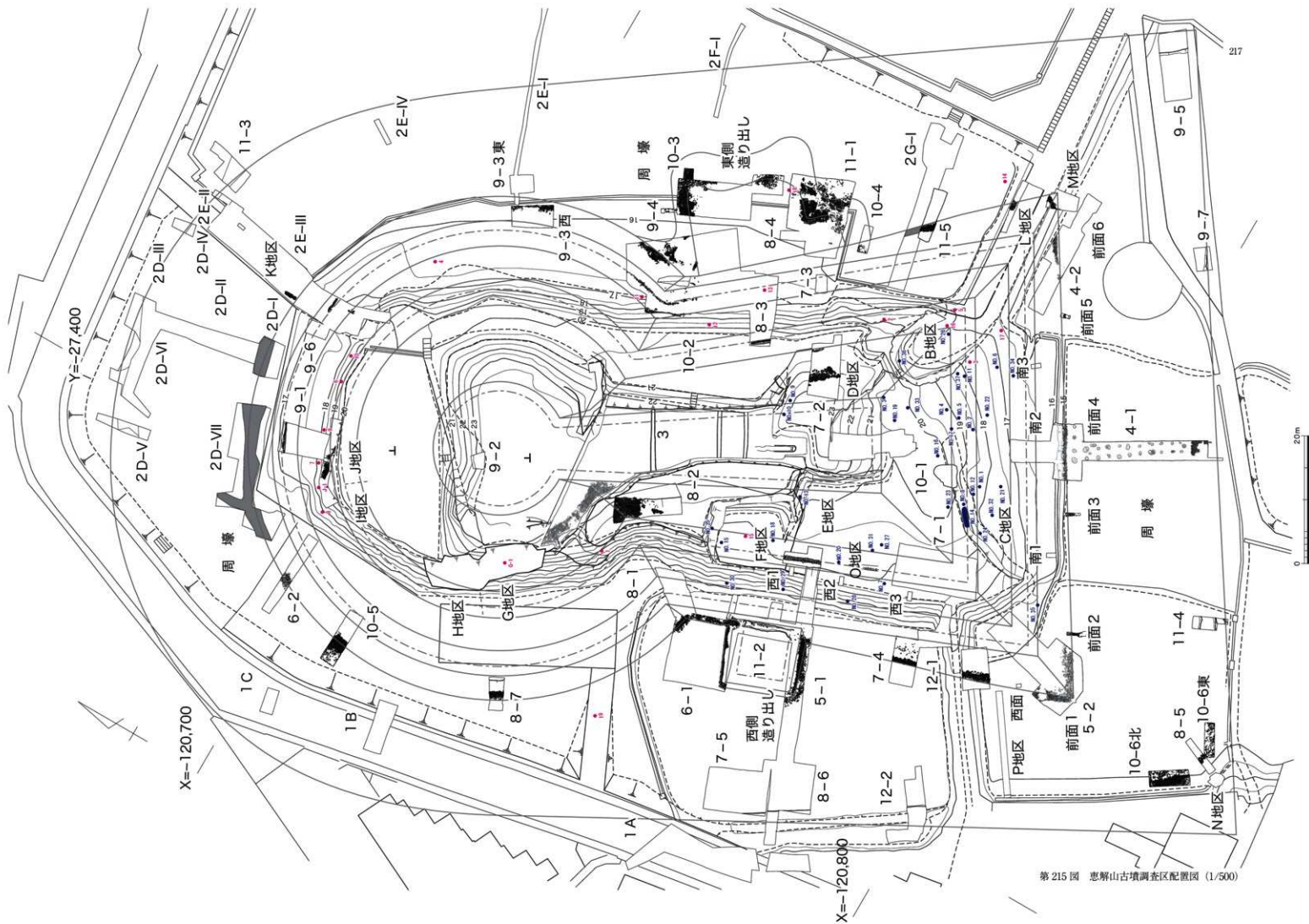
平良泰夫「6近畿 C京都南部」雄山閣「古墳時代の研究」10地域の古墳Ⅰ 西日本 1992年

前方後円墳研究会「前方後円墳集」近畿編 山川出版社1992年

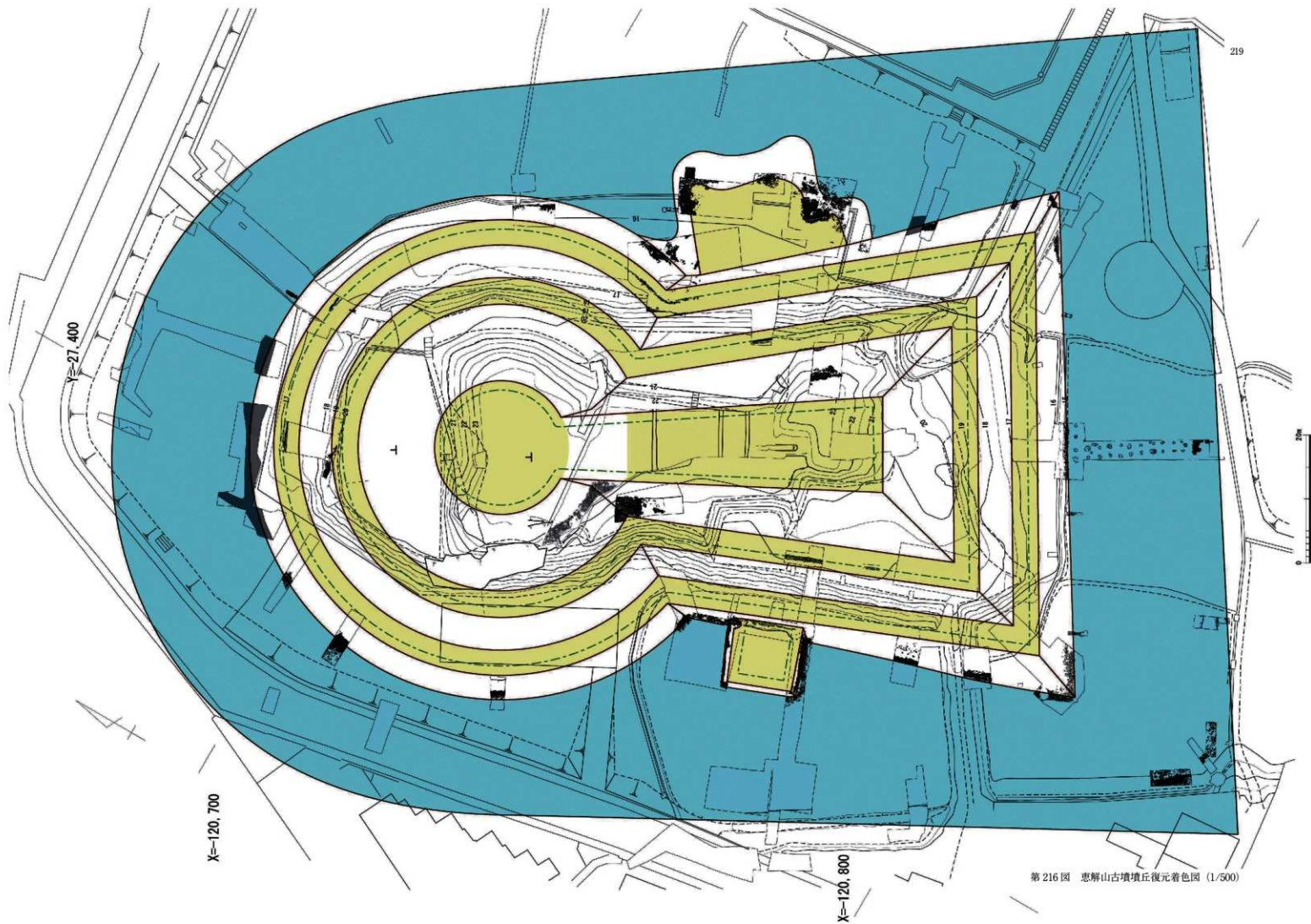
- 岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」考古学研究会「考古学研究」第39巻第2号通巻154 1992年  
都出比呂志「前方後円墳と社会」塙書房
- 豊島直博「古墳時代前期の刀装具」考古学研究会「考古学研究」第54巻第1号通巻213 2007年  
豊島直博「古墳時代前期の刀装具」独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所「奈良文化財研究所学報」第83冊 研究論集16鉄製武器の流通と初期国家形成2010年
- 岩本崇「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」日本考古学会「考古学雑誌」第90巻第4号2006年
- 沼澤豊「前方後円墳の墳丘規格に関する研究」(上)・(中)・(下)日本考古学会「考古学雑誌」第89巻第2～4号2005年
- 上田宏範「前方後円墳」学生社1969年
- 和田晴五「古墳時代の葬制と他界観」吉川弘文館2014年
- 杉本宏「庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」宇治市教育委員会「宇治市埋蔵文化財発掘調査概要」第15集1990年
- 「平成21年度 陵墓関係調査報告 小奈辺陵墓参考地 墳墓裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」宮内庁書陵部「書陵部紀要」第62号(陵墓篇)2010年
- 日本考古学協会2010年度兵庫大会実行委員会「日本考古学協会5010年度兵庫大会研究発表資料集」
- 馬部隆弘「勝龍寺城近隣の堀跡について」城郭談話会「城郭談話会30周年記念誌」城郭研究の軌跡と展望Ⅲ 2014年
- 水野正好「完成した継体天皇「いまして大王の杜」一今、見直される継体天皇の事跡一」近畿日本鉄道近畿文化会「近畿文化」749 2012年
- 末永雅雄ほか「河内黒郡山古墳の研究」1953年「大阪府文化財調査報告書」第1輯
- 堺市博物館「堺市博物館報」第22号2003年







第 215 図 惠寿山古墳調査区配置図 (1/500)



第216图 惠解山古墳墳丘復元着色图 (1/500)



## 付 載

### UAV（無人航空機）を利用した恵解山古墳公園上空撮影

上島 涼太（株式会社かんこう）

#### 1. UAVによる空撮

##### 1-1. UAVとは

はじめに、UAVは操縦士が搭乗せず、遠隔操作で飛行する航空機の事である。従来の開発目的は軍事目的であったが、昨今は一般家庭でも購入可能なホビーレベルのものから、映像に特化したもの、測量に特化したものまで、様々な方面での利活用が行われている。

##### 1-2. 撮影の目的と課題

今回、公園として整備された恵解山古墳公園の最新状況を記録する事を目的とした。その中で、地上からの撮影では被写体が大きく、全体像が分かりづらいという課題があった。また、航空機を利用した写真撮影は、広範囲の撮影が行えるが、コストの面で課題があった。

##### 1-3. UAVを利用する事による課題の解消

これらの問題を解消する撮影手法として、UAVを利用した撮影がある。UAVは最大250mまで飛行が可能で、被写体が最適なサイズで収まる撮影が可能である。また撮影機材がコンパクトな為、天候不順でも現地待機し、天候回復時に即座に撮影する様な対応も可能であり、従来の航空機を利用した撮影と比較して、非常に安価（機体及び人費）である。これらの理由から、UAVを利用した撮影を実施するに至った。

#### 2. UAVの仕様

##### 2-1. 安全性を保つ姿勢安定制御システム

使用したUAV（図1）は、「姿勢安定制御システム」を搭載している。これは、GPSを使用した補助機能の1つで、飛行中に操作しない場合は、自動的にホバリングを行う。また、風の影響による急な傾きには、位置を保つよう自動制御がかかる等、非常に安定した飛行が行える。



（図1）使用したUAV

また、GPSを利用した「自動操縦システム」により、指定範囲内、指定位置での撮影が可能であり、これらの機能から、計画通りに安全に飛行する事ができ、周辺に住宅地や学校施設が存在する、恵解山古墳公園での撮影に適した機体である。

## 2-2. 操縦

機体は(図2)の操縦桿のレバー操作により、上昇下降、前後左右、左右旋回が行える他、機体下部に搭載したカメラの角度調整が可能となっている。また、カメラの映像は中央のモニターで常に確認でき、上空からの恵解山古墳公園撮影時には、被写体を確認しながら操縦が行えた。



(図2) 操縦桿-プロポ

## 2-3. 使用カメラ

搭載するカメラは、SONY製のNEX-7である。このカメラは有効画素数が約2,430万画素の高解像度でありながら、重量は約400gと軽量な仕様である。

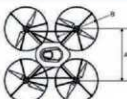
機体下部のジンバル(図3)に搭載する事で、水平方向から真下まで自由に角度が調整可能である。



(図3) 機体下部

## 2-4. その他の仕様

その他の機体の主な仕様は(表1)のとおりである。

Martin S-1 機体仕様・性能	
	飛行時間 15分～ 最高飛行速度 60km/時間 最大飛行高度 3,000m 最大対気速度 120km/時間 上昇限界高度 海抜4,000m ※気温・気圧・湿度等の気象条件で異なります。
全長・全幅 1,203mm 全高 413mm モーター-駆動装置距離 (A) 563mm プロペラガード直径 (B) 475mm プロペラ寸法 440mm	姿勢安定制御システム すべてのレバーを戻すと、上下左右とGPSで制御され、その場でホバリングする設計。 フォールセーフシステム 電圧の安否が検出された場合、その場でホバリング、一定時間が過ぎると自動着陸モードに入る設計。
重量 標準構成重量 約 3,500g バattery 1,000g	機体可動半限 安全に飛行させるために操縦者の視界(約500m)の範囲内で飛行させます。
電源(リチウム単1マナー) 2.2V モーター 600W(0.816馬力) 回転数(ホバリング時) 4,000rpm	飛行高度 規定まで高度250mまでと決まっているが、安全に飛行するために150mで飛行させます。

(表1) 機体仕様

### 3. 撮影

#### 3-1. UAVによる撮影概要

当日の撮影状況は天候、風速共に問題はなかった。なお安全のため、公園への立ち入り制限を周辺住民に事前通知した。

(表2)のとおり、作業は約2時間で終了し、その間に自動飛行で高度50m、100mの2回静止画撮影を行った。また、手動飛行で恵解山古墳を中心に捉えた周回飛行を1回、補充撮影として前方側で旋回撮影1回、後円側で旋回撮影1回の3回の動画撮影を行い、計5回の撮影を行った。

#### 3-2. 自動飛行

自動飛行ではカメラを真下に向け、恵解山古墳公園上空を(図4)の赤線のとおりに飛行し、等間隔で静止画(図5)を撮影した。

#### 3-3. 手動飛行

手動飛行では(図1)の青線のルート上を、カメラの角度、機体の向き、高度を被写体に合わせながら動画撮影を行った。また、上空ではUAVの特徴を活かし、旋回して撮影する事で、古墳最上段からは確認できない、天王山付近の三川合流地点の撮影が行えた。(図6)(図7)

#### 3-4. 成果確認

機動性の高いUAVの利点を活かし、撮影後データを取り出し、その場で映像を確認する事で、撮影の欠損や画角のチェックが行え、再度撮影が必要か、その場での判断が行えた。



(図6) 地上からの撮影

撮影状況	
撮影日	2014年11月19日(水)
天候	晴れ
地上風速	0~1.0m/s
撮影開始時刻	午前9時15分
撮影終了時刻	午前11時05分
撮影回数	自動飛行(静止画) 2回 手動飛行(動画) 3回

(表2) 撮影状況



(図4) 飛行ルート



(図5) 高度50m真下撮影

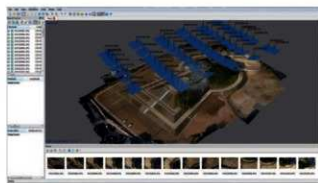


(図7) 高度100m撮影

## 4. 撮影成果

### 4-1. オルソフォトデータ

恵解山古墳を上空から1枚の静止画で写る様に撮影する場合、高度約150mの高さからの撮影が必要であった。しかし、カメラはレンズの特性から、対象から離れるほど、歪みが生じた静止画が撮影されることとなる。それを防ぐために、今回撮影した静止画は、高高度から1枚撮影する代わりに、低高度から複数枚の写真で恵解山古墳公園全体をカバーするように撮影した。これらの写真は1枚では部分的な静止画であるが、UAVに搭載したGPSの撮影位置情報と、撮影静止画を使って解析(図8)する事で、恵解山古墳公園全体の3次元データが作成できた。この3次元データから恵解山古墳公園全体がカバーできる垂直写真として、オルソフォトデータ(図9)を作成した。



(図8) 3次元解析



(図9) オルソフォトデータ

### 4-2. 紹介動画

手動操縦で撮影した動画からは、離発着時の不要な部分や、レイアウトを編集し、約4分間の解山古墳公園紹介動画(図10)を作成した。



(図10) 紹介動画

## 5. 撮影を終えて

### 5-1. 今回の撮影について

UAVを利用する事で、容易に、かつ利便性の高い画像データを取得する事ができた。また弊社においても、紹介動画を作成するといった目的から、新しい目線で工夫や技術を取り入れる事ができ、垂直撮影成果以外にも貴重な経験を積ませていただいた。

### 5-2. 今後のUAVの利用について

最近空撮の知識のない方でもUAVが購入できる為、利用者が増加し、活用の幅が日々広がっている。しかしその反面、無理な飛行を行い、墜落や、航空法の違反等が問題になっている。弊社では、今回の撮影で実施した周辺住民への事前通知や、撮影中の公園入り口への人員配置等、安心安全を第一に考えた撮影を、今後も継続していきます。

※なお、本撮影による成果は、本書末尾の付録内に収録している。

版 圖



(1) 昭和15年京都府都市計画航空測量写真「長岡」「新神足」合成 (京都府総合資料館所蔵)



(2) 平成26年 保存・整備完成状況 (南西から)



(1) 平成 21 (2009) 年第 10 次調査中の整備工事前恵解山古墳全景 (南西から)



(2) 平成 24 (2012) 年整備工事その 1 完了状況 (南東から)



(1) 平成 24 年恵解山古墳保存整備工事その 2 竹樹木伐採状況全景 (南西から)



(2) 平成 24 年恵解山古墳保存整備工事その 2 竹樹木伐採状況全景 (南東から)



(3) 平成 24 年恵解山古墳保存整備工事その 2 竹樹木伐採状況全景 (北から)





(1) 墳丘西辺の保存整備完成状況（南西から）



(2) 墳丘東辺の保存整備完成状況（南東から）



(1) 保存整備工事その1 B地区調査全景(南東から)



(2) 保存整備工事その1 C地区調査全景(南東から)



(1) 保存整備工事その2 K地区 埴輪列検出状況 (南東から)



(2) 保存整備工事その2 K地区 埴輪列検出状況 (南西から)



(1) 保存整備工事その2 L地区前方面東辺墳丘裾葺石検出状況(東から)



(2) 保存整備工事その2 M地区前方面南東隅葺石検出状況(東から)



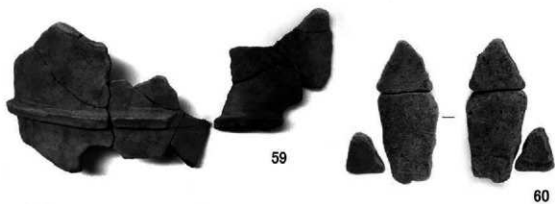
(1) 水鳥形埴輪 (東造り出し出土)



(2) 家形埴輪 (前方部前面出土)



30



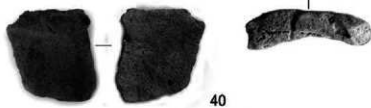
59

60



61

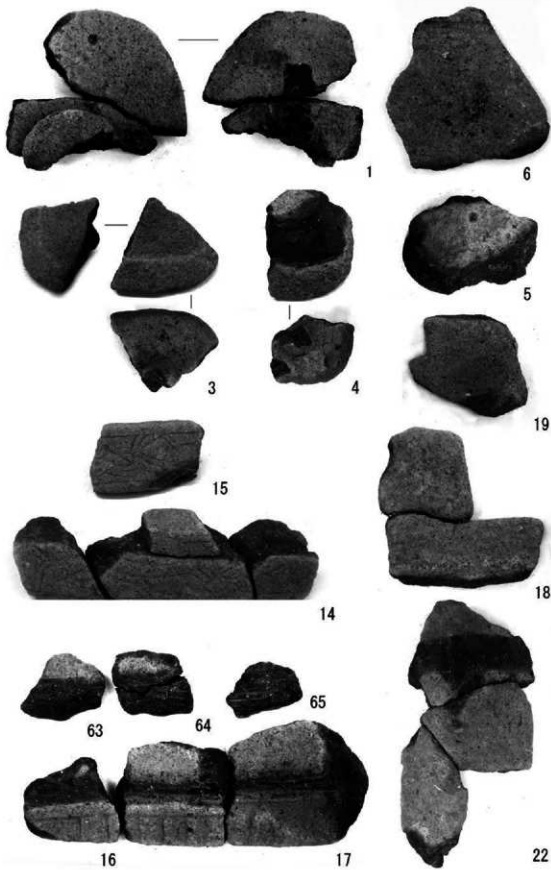
29



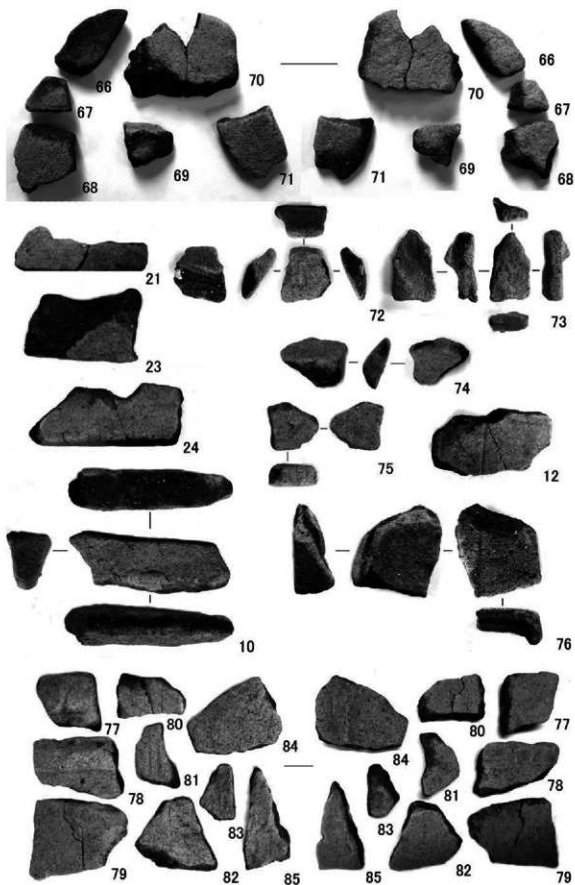
40



62

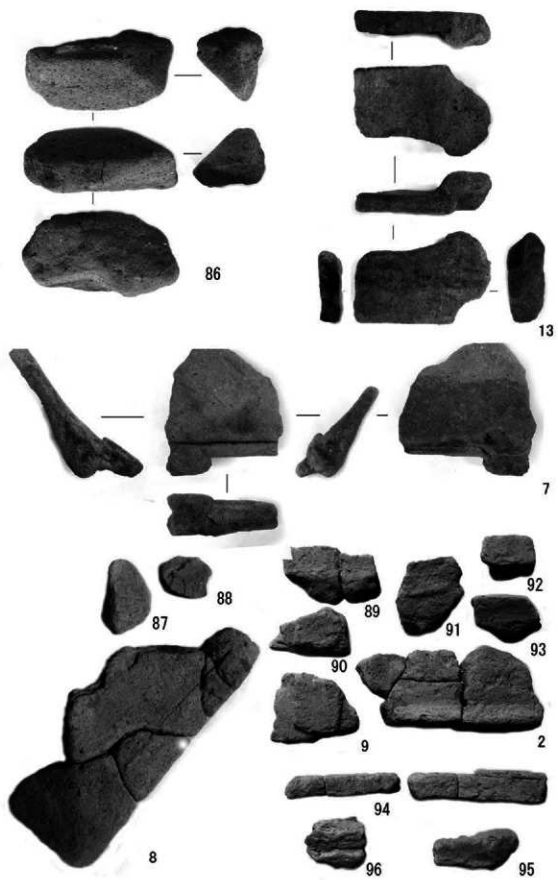


輪埴形家

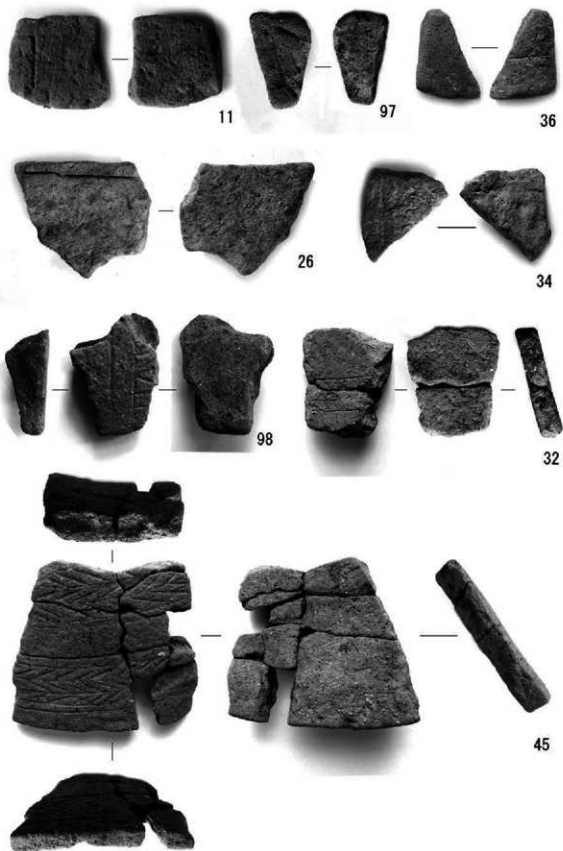


家形埴輪など

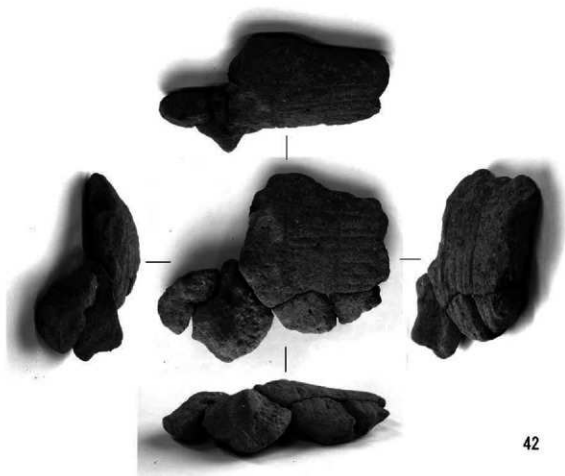




家形埴輪



甲冑形埴輪など



42

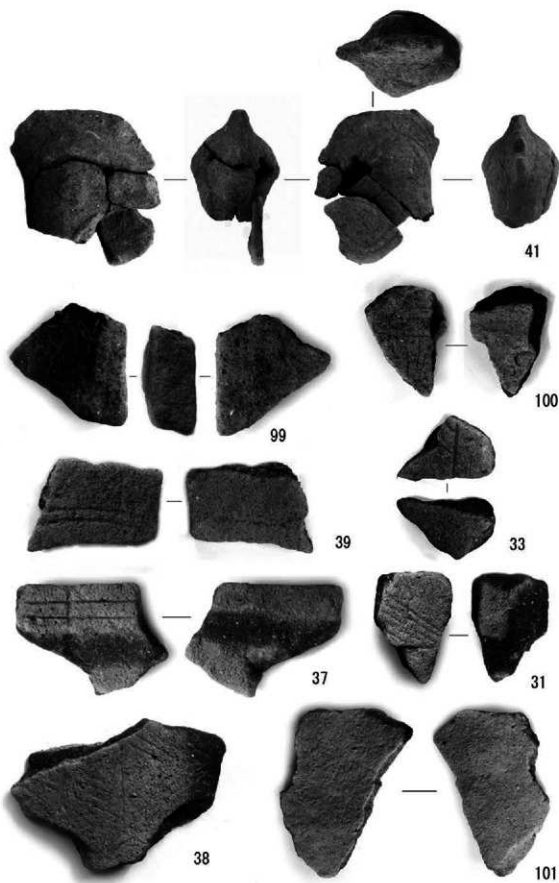


43

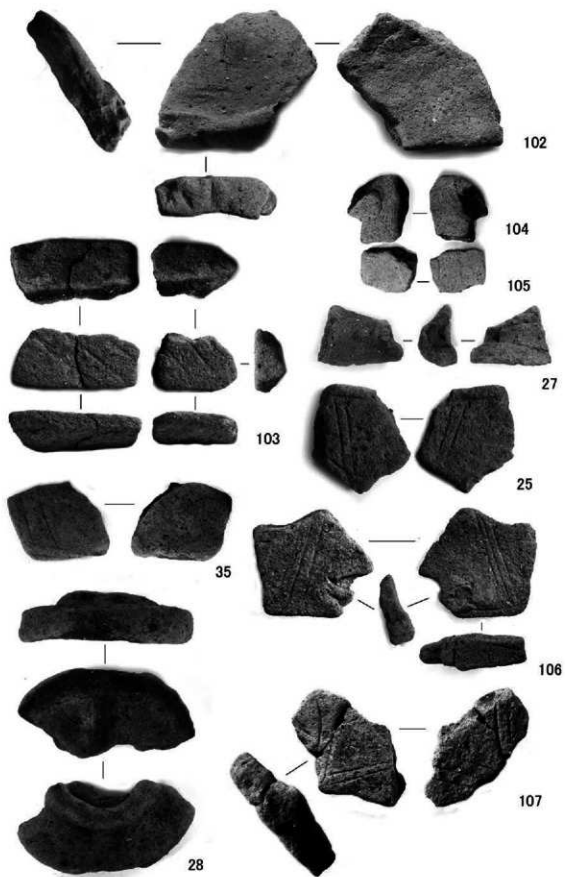


44

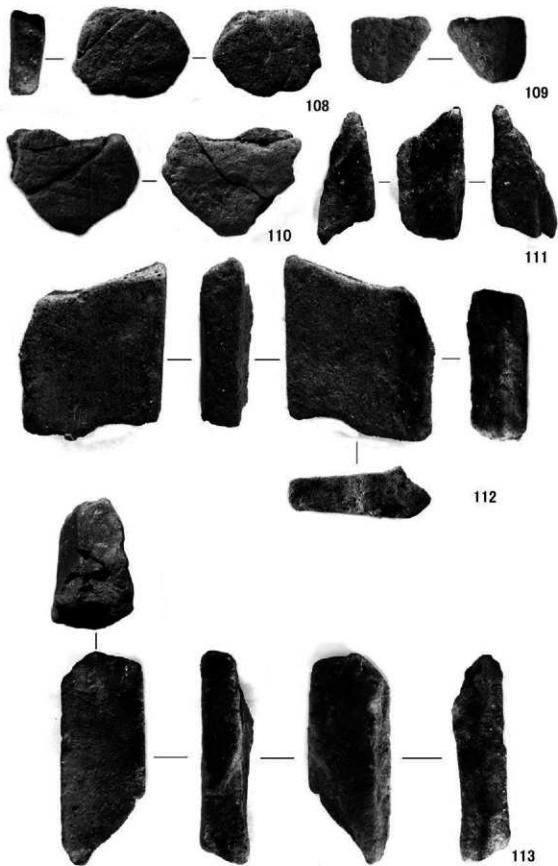
甲冑形埴輪



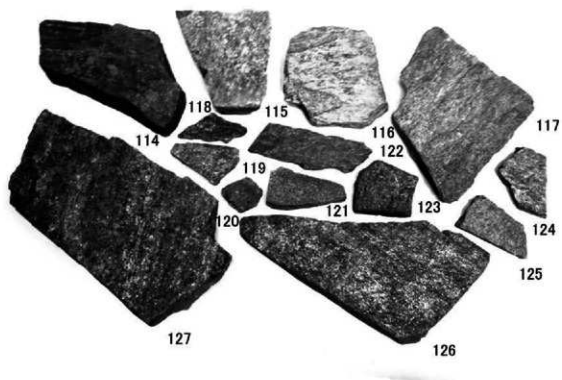
鶏形埴輪、盾形埴輪など



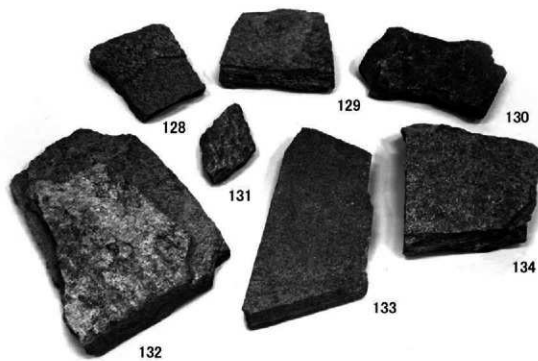
蓋形埴輪など



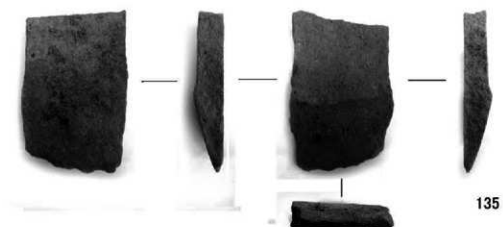
形象埴輪



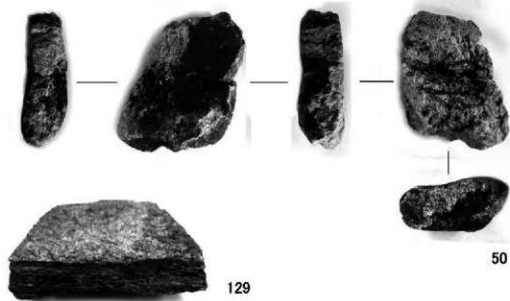
(1) 結晶片岩 (青色系)



(2) 結晶片岩 (少し赤味があるもの)

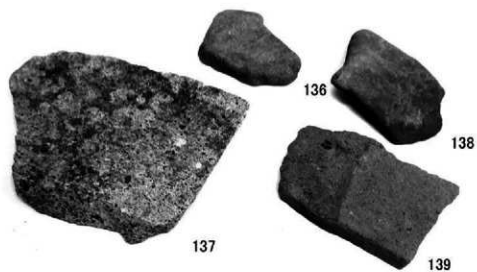


135



129

50



136

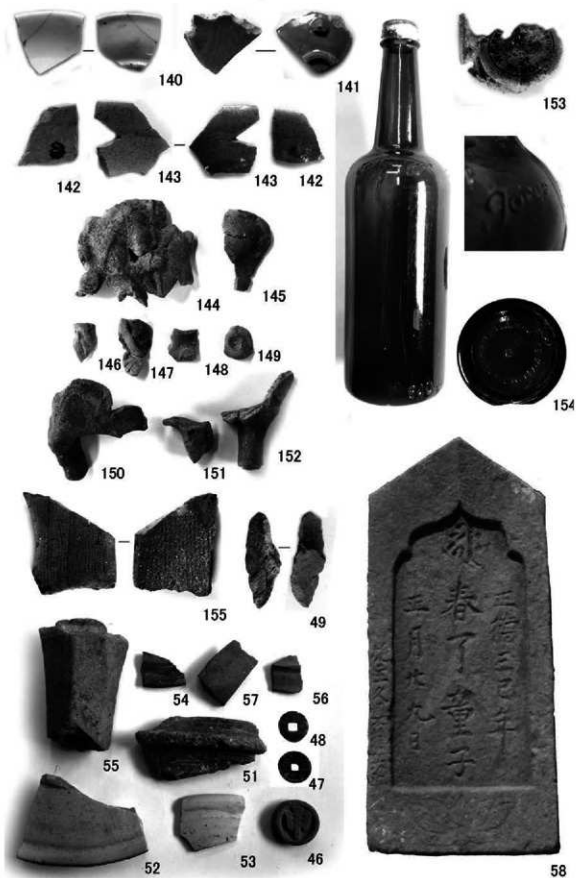
138

137

139

凝灰岩、石英斑岩、砂岩など





惠解山古墳後の遺物

付表-8 報告書抄録

ふりがな	ながおかしょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	史跡 恵解山古墳保存・整備事業報告書
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第67冊
編著者名	岩崎 誠
編集機関	長岡京市教育委員会
所在地	長岡京市間田一丁目1-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
恵解山古墳 長岡京跡 南栗ヶ塚遺跡	長岡京市 勝竜寺、久貝 二丁目	26209	200 107 103	34° 54' 52"	135° 41' 52"	2012/001 ～ 2016/03/31	19496㎡	保存整備

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恵解山古墳 長岡京跡 南栗ヶ塚遺跡	古墳 都城 集落	古墳時代 長岡京期 旧石器～江戸時代	墓石 埴輪列	普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪、家形埴輪、甲冑形埴輪、盾形埴輪、鳥形埴輪、結晶片岩、石英斑岩、凝灰岩、サヌカイト調片、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器、瓦、銭貨	恵解山古墳第13次調査 前方部墳丘南東隅が確認でき、前方部最大幅が確定できた。

**長岡京市文化財調査報告書 第 67 冊**

平成 27 (2015) 年 3 月 25 日 発行

発 行 長岡京市教育委員会  
〒 617-0851 京都府長岡京市開田一丁目 1 番 1 号  
電話 075-954-3557 FAX 075-954-8500

編集・印刷 ヨシダ印刷株式会社  
〒 604-8277 京都府京都市中京区西洞院通り御池下ル  
三坊西洞院町 572  
電話 075-252-5421 FAX 075-252-5423

